大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第10集

豊　後　府　内　5

中世大友府内町跡第31次調査区（瑞光寺周辺）

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

2006

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊　後　府　内　5

中世大友府内町跡第31次調査区（瑞光寺周辺）

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

大分市空撮

中世の府内想像図

調査区全景

14世紀の溝状遺構から見つかった推定長3mのクロマグロである。

SD3出土京都製土師器

SE1出土漆器椀

序　　文

本書は、大分県教育委員会が大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施したJR久大本線高架化事業に伴う、大分市の中世大友府内町跡第31次発掘調査の報告書です。

大分市は、古代以来豊後国の国府が置かれ政治経済の中心地として栄えました。また、中世には、豊後国の守護であった大友氏の本拠地となり南蛮貿易やキリスト教布教により国際都市として発展しました。

今回調査した大友府内町跡第31次調査区は、大分川下流域左岸にあり大分駅の東約1キロメートルに位置し、国衙跡が推定される上野丘陵の北東斜面部に立地しています。中世においては大友城下町の南端部にあたり、鎌倉時代の「一遍上人年譜略」によれば、この付近に一遍上人が訪れた瑞光寺があったと伝えられています。

発掘調査の結果、中世の柱穴・溝状遺構等をはじめ多量の瓦や中国製青磁花瓶等を発見し、寺院に関係すると思われる貴重な歴史資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成１８年３月３１日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所 長

渋　谷　忠　章

例　　言

1　本書は大分市六坊南町に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査はＪＲ久大本線高架化事業に伴い、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所から依頼され、大分県教育委員会が実施した。

3　発掘調査は平成１５年５月２７日から平成１５年９月３０日まで行った。

4　現地での遺構の実測・写真撮影は大分県教育委員会文化課の職員が担当した。（当時）

5　遺物の整理作業・実測・製図等は教育庁埋蔵文化財センターにおいて行った。

6　動物遺体の分析は国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授が行った。

7　出土遺物ならびに図面・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市中判田１９７７番地）で保管している。

8　本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は２００２年４月１日改正以前の座標値を使用している。

9　本書の編集・執筆は高橋信武が担当した。

目　　次

第１章　はじめに

１．調査の経緯 ……1
　（１）調査に至る経過 ……1
　（２）調査の経過 ……1
　（３）調査の体制 ……1
２．遺跡の立地と環境 ……1
　（１）地理的環境 ……1
　（２）歴史的環境 ……3

第２章　調査の成果

１．調査の概要 ……5
　（１）遺構面の重複について ……5
２．最上層の撹乱 ……10
　（１）分布状態 ……10
３．１区上層の遺構と遺物 ……10
　（１）分布 ……10
　（２）遺構と遺物 ……10
４．１区中層（新）の遺構と遺物 ……19
　（１）分布状態 ……19
５．１区中層（古）の遺構と遺物 ……38
　（１）分布状態 ……38
　（２）遺構と遺物 ……38
６．１区下層の遺構と遺物 ……47
　（１）分布状態 ……47
　（２）遺構と遺物 ……47
７．１区の掘立柱建物跡 ……68
８．１区包含層の遺物 ……68
９．１区その他の遺構 ……77
10．２区の調査 ……80
　（１）分布状態 ……80
11．２区上層の遺構と遺物 ……80
　（１）分布状態 ……80
　（２）遺構と遺物 ……81
12．２区包含層の遺物 ……88
13．３区の調査 ……89
　（１）層序 ……89
　（２）遺構と遺物 ……89

第３章　中世大友府内町跡第３１次調査区出土の動物遺体

第４章　まとめ

観察表 ……101
写真図版 ……117

挿　図　目　次

第１図　調査区の位置（明治３４年　1/5万地図）……2
第２図　調査区付近の地図（1/10,000図）……4
第３図　府内古図と街路名称の設定……5
第４図　調査区周辺の拡大図……6
第５図　攪乱・トレンチ分布図……7
第６図　１区南西壁層序図……8
第７図　１区北東壁層序図……9
第８図　１区近世初頭遺構分布図……11
第９図　SD１・SD２・SX１遺構実測図……12
第10図　SK5出土遺物実測図……13
第11図　SD３・SD８遺構実測図……14
第12図　SD1・SD2・SX1出土遺物実測図……15
第13図　SD3出土遺物実測図……15
第14図　SD7・SD８出土遺物実測図……15
第15図　SD16・SD17・18遺構実測図……16
第16図　SD16・SD17・18出土遺物実測図……16
第17図　SD16・SD17・18出土遺物実測図……16
第18図　中層（新段階）遺構分布図……17
第19図　SD12・SD13・SD14・SD15遺構実測図……18
第20図　SD15出土遺物実測図……19
第21図　SK11出土遺構実測図……20
第22図　SK11出土遺物実測図……20
第23図　SD19・SD23付近南壁実測図……20
第24図　SD19・SD23遺構実測図……21
第25図　SD19出土遺物実測図……22
第26図　SD19出土遺物実測図……23
第27図　SD19出土備前焼他実測図……24
第28図　SD19出土遺物実測図……25
第29図　SD19出土木製品（漆器椀・折敷・下駄）実測図……26
第30図　SD23出土遺物実測図……27
第31図　SE１遺構実測図……28
第32図　SE１出土遺物実測図……29
第33図　SE１出土遺物実測図……30
第34図　SE１出土備前焼他実測図……31
第35図　SE１出土石臼実測図……32
第36図　SE１出土石臼実測図……33
第37図　SE１出土五輪塔部材実測図……34
第38図　SD26遺構実測図……35
第39図　SD26出土遺物実測図……35
第40図　SX2遺構実測図……36
第41図　SX2出土青花実測図……36
第42図　SX2出土瓦実測図……36
第43図　SX2出土瓦・塼実測図……37
第44図　中層（古）分布図……39
第45図　SP69遺構出土遺物実測図……40
第46図　SK14遺構実測図……40
第47図　SK14出土遺物実測図……40
第48図　SD10遺構実測図……41

第49図　SD10出土遺物実測図 ……42
第50図　SD10出土遺物実測図 ……43
第51図　SD11遺構実測図 ……44
第52図　SD11出土遺物実測図 ……45
第53図　SK12遺構実測図 ……46
第54図　SK12出土遺物実測図 ……46
第55図　SK17遺構実測図 ……46
第56図　SK17出土遺物実測図 ……46
第57図　SP45遺構実測図 ……46
第58図　SP45出土遺物実測図 ……46
第59図　SP78遺構実測図 ……47
第60図　SP78出土遺物実測図 ……47
第61図　SP35出土遺物実測図 ……47
第62図　下層遺構分布図 ……48
第63図　SD９検出面遺物分布図 ……49
第64図　SD９上部・５層出土遺物実測図 ……50
第65図　SD９出土遺物実測図 ……50
第66図　SD９出土銭実測図 ……50
第67図　SD９下層遺物出土状況実測図 ……51
第68図　SD９出土遺物実測図 ……52
第69図　SD９出土遺物実測図 ……53
第70図　SD９下層遺物分布図 ……54
第71図　SD９下層出土木製品実測図 ……55
第72図　SD９下層出土木製品・燧石実測図 ……56
第73図　SD９出土木製品実測図 ……57
第74図　SD９出土弥生式土器実測図 ……57
第75図　SX３遺構実測図 ……58
第76図　SX３出土遺物実測図 ……58
第77図　SX３出土石臼実測図 ……60
第78図　SK13・SD24遺構実測図 ……60
第79図　SK13出土遺物実測図 ……61
第80図　SD20・SD21・SK16・SK18遺構実測図 ……62
第81図　SD20・SD21・SK16・SK18遺物分布図 ……63
第82図　SD20・SK18出土遺物実測図 ……64
第83図　SD20・SD21・SK16・SK18出土遺物実測図 ……65
第84図　SD24の位置と出土遺物実測図 ……66
第85図　１区掘立柱建物跡・柱穴群位置図 ……67
第86図　SH１遺構実測図 ……68
第87図　１区柱穴出土の木柱 ……69
第88図　SH２遺構実測図 ……70
第89図　１区柱穴出土の木柱 ……71
第90図　１区柱穴断面実測図集成 ……72
第91図　１区包含層出土遺物実測図 ……73
第92図　１区包含層出土遺物実測図 ……73
第93図　１区包含層出土遺物実測図 ……74
第94図　１区包含層出土遺物実測図 ……75
第95図　１区包含層出土遺物実測図 ……75
第96図　１区包含層出土遺物実測図 ……77
第97図　１区包含層出土遺物分布図 ……78
第98図　SK20遺構実測図 ……79

第99図　SK15遺構実測図 ……80
第100図　SD22遺構実測図 ……80
第101図　SK49遺構実測図 ……80
第102図　1区時期不詳遺構出土遺物実測図 ……81
第103図　２区遺構全体図 ……82
第104図　２区層序実測図 ……83
第105図　SX４遺構実測図 ……84
第106図　SX4出土遺物実測図 ……84
第107図　SX4出土瓦実測図 ……85
第108図　SX4出土塼瓦・瓦実測図 ……86
第110図　SX4出土塼瓦・鬼瓦実測図 ……87
第111図　２区包含層出土遺物実測図 ……88
第112図　３区東北壁実測図 ……90
第113図　SD25遺構実測図 ……91
第114図　SD25出土遺物実測図 ……91
第115図　３区出土遺物実測図 ……92
第116図　３区出土遺物実測図 ……93
第117図　調査区周辺の地籍図 ……97

表　目　次

第１表　遺構一覧表① ……103
第２表　遺構一覧表② ……104
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器①） ……105
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器②） ……106
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器③） ……107
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器④） ……108
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑤） ……109
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑥） ……110
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑦） ……111
31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑧） ……112
31次調査区遺物観察表（土製品） ……112
31次調査区遺物観察表（石製品） ……113
31次調査区遺物観察表（金属製品） ……113
31次調査区遺物観察表（瓦・塼石）① ……114
31次調査区遺物観察表（瓦・塼石）② ……115
31次調査区遺物観察表（その他） ……115
31次調査区遺物観察表（銅銭） ……116
31次調査区遺物観察表（木製品） ……116

写真図版目次

巻頭図版1　大分市空撮
中世の府内想像図
巻頭図版2　調査区全景
巻頭図版3　14世紀の溝状遺構から見つかった推定長3mのクロマグロ
巻頭図版4　SD3出土京都製土師器
SE1出土漆器椀
写真図版1　1区東北壁
近世初め頃の溝状遺構（SD3周辺）
写真図版2　SE1の推積層
写真図版3　SD23東北壁付近の完掘状態
漆器椀出土状態
写真図版4　SD9南北層序
写真図版5　SD9遺物出土状態
瓦集中部（SX2）
写真図版6　古代の土師器(1区包含層)
越州窯青磁（SD7）
SK11　Ⅳ14区　（SD23）　（Ⅳ14区）
（SK13）　（SD23）
写真図版7　大内系土器（SD11）
（F7区）　（SD9）　（SK13）
（SK18）　（SX3）　（SD24）
(SD9)土師器皿類　京都性ヘソ皿（SD9）
写真図版8　青花（中国製染付）
写真図版9　青花（中国製染付）
写真図版10　SE1青磁器台片
写真図版11　タイ製ハンネラ土器(SE1）燧石
（左：SD11　右：SD9）SE1出土砥石
写真図版12　軒平瓦（3区包含層）鬼瓦（SX4）
砥石（G10区　C5区　G9区　SP73）
写真図版13　折敷（SD9）
写真図版14　折敷（SD9）
写真図版15　折敷（SD9）
写真図版16　木柱（SP68・SP62・SP32）
木製容器（SD9）
円盤状木製品（SD20・SD9）
折敷（SD9）
写真図版17　調査風景（1区）1区西端　同左低地部
写真図版18　1区　1区上層部調査状況
写真図版19　1区SD3　近世初め頃の溝状遺構
写真図版20　SD4周辺
近世初め頃の溝状遺構（SD12～15）
写真図版21　その調査状況（左）　SD17周辺（右）
SD12～15
写真図版22　3区
写真図版23　SD9検出状態
写真図版24　SD10完堀状況
写真図版25　SD11土層
写真図版26　SD11上部（上）　SE1　SD9調査状況
写真図版27　SX2出土状態　SK13・SD24完堀状態
写真図版28　1区東部　SD24西側柱穴群
写真図版29　SD24　SK20
写真図版30　SD9全景　折敷（SD9）
写真図版31　SK18周辺
写真図版32　遺物出土状況　1区東部から2区・3区を見る
写真図版33　SX4（2区）
写真図版34　SX4　2区柱穴
写真図版35　3区礫出土状況　3区調査状況
写真図版36　青花（中国製染付）
写真図版37　青花（中国製染付）
写真図版38　白磁・青花・青磁
写真図版39　青磁（1区包含層）　青磁（S41-78）
青磁（S50-6）　青磁（P-16一括）
青磁（SE1）　白磁（SD10）
白磁（SD10付近）　白磁（SX3）
白磁（SD19）
写真図版40　青磁（1区包含層）青花
写真図版41　白磁（S72）　白磁（SD23）
福釉陶器（SD23）　福釉陶器（SE1）
福釉陶器（上:表採　SK14）
鉄製品（SE1）
写真図版42　瓦質土器火鉢（SD23）
瓦質土器火鉢（SD19）
備前焼（SE1）　備前焼壷（3区包含層）
備前焼擂鉢（SE1）　青磁（1区包含層）
写真図版43　鍋　火鉢　鍋E8-12　鍋M14-8（SK16）
鍋(SD9)　瓦質土器
写真図版44　鬼瓦(SD15)（3区）（SK13）
軒平瓦（SX2）

第１章　はじめに

１．調査の経緯

（１）調査に至る経過

本書に収録した中世大友府内町跡第31次調査区は、中世豊後の守護大名であった大友氏の行政・経済の中心地である府内町跡の南端部に位置し、大分駅周辺総合整備事業に伴う試掘・確認調査によって発見・確認されたものである。大分駅周辺総合整備事業は国・大分県・大分市が進めている大分駅周辺地域の再開発事業であり、今回の調査の契機となったのは、現在地上を走っているＪＲの日豊本線・豊肥本線・久大本線を高架化する「大分駅付近連続立体交差事業」のうち、久大本線高架化事業である。

この事業は大分駅東側で大分川下流までの地域において大部分、中世大友氏の遺跡と重なるものである。大分県教育員会では、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、1998（平成10）年より大分駅周辺総合整備事業対象地域における埋蔵文化財の有無に関する試掘・確認調査と遺跡の発掘調査を継続し現在に至っている。これまで高架化に伴って本発掘調査を行ったのは、久大本線関連では大分市上野町１番地所在の上野町遺跡と日豊本線関連では大分市大字大分字顕徳寺所在の顕徳寺遺跡、中世大友府内町跡第５次・７次・８次･10次・40次調査がある。

（２）調査の経過

ＪＲ久大本線高架化予定地のうち、2002（平成14）年9月に行ったＪＲ久大本線北側地区を対象にした試掘・確認調査によって明らかとなった範囲を、今回報告する中世大友府内町跡第31次調査として2003（平成15）年５月から10月にかけて発掘調査した。なお、遺跡名は館跡である大友氏遺跡と府内町跡を総合して中世大友城下町跡と呼んでいる。

（３）調査の体制

大分駅付近連続立体交差事業の発掘調査は、大分県教育委員会と大分市教育委員会とがそれぞれの工事事業担当が県か市かによって別個に対応して調査している。しかし、国指定史跡となった大友氏館跡をはじめとして関連する重要な遺跡が正確な位置が不詳のまま散在しているため、文化庁の指導のもと、大分県教育委員会と大分市教育委員会が共同で調査指導者会を年間二回開催し、その指導を受けながら調査を実施してきた。

中世大友府内町跡第31次調査は、以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

大分県教育委員会教育長	深田　秀生
文化課長	今永　一成
参事兼課長補佐	麻生　祐治
参事兼課長補佐	清水　宗昭
大型県事業担当主幹	高橋　信武
嘱　託	細川　　愛
嘱　託	安井由加里
嘱　託	生野　令子

２．遺跡の立地と環境

（１）地理的環境

九州の北東部に位置する大分県は、県南部を東北から西南に横断する臼杵八代構造線によって地質的に二分される。南部は石灰岩や砂岩・チャートその他の古い地層が構造線に平行に走る山地帯である。九州本島最高峰の祖母山や傾山等はこの範囲にある。平野部は山地を浸食してできた河川流域の狭い河岸段丘かリアス式海岸部に限られる。

一方、大分市を含む北部は火山起源の地形であり、国東半島・鶴見岳・由布岳・久住連山から阿蘇山に連なり、火山と火山灰台地、海岸段丘地形が分布する。このように大分県の南北共に山

第１図　調査区の位置（明治34年 1/5万地図）

が多く、地形は分断され、比較的大きな平野は県北部の旧豊前国である宇佐や中津に求めるしかない。中世大友城下町跡は大分川下流域の左岸沖積地にあり、別府湾に面している。瀬戸内海・豊後水道を介して広く国内外との交流が可能である。しかし、現在の大分市は河川から流入する土砂によって中世段階よりも海に向かって広がっていて、中世段階の大分平野はもっと狭かった。

（2）歴史的環境

大分市の市街地の南側には東西方向に延びる上野丘陵が東側の大分川にむかって突き出ているが、ここからは旧石器時代の石器（約２万年前）、縄紋時代晩期（約3,000年前）、弥生時代後期（約1,800年前）の竪穴住居跡、古墳時代（約1,600年前）の遺跡が確認されている。

丘陵の北側裾部では最近の発掘調査によって弥生時代の遺物が発見されており（若宮八幡宮遺跡）、2,000年くらい前には丘陵寄りの低地でも生活できたらしい。約1,500年前の古墳時代の集落が丘陵と低地との中間に立地する上野中学校運動場で発掘されている。この時期の古墳としては上野丘陵の東端にある大臣塚前方後円墳がある。

古代（奈良・平安時代）の掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）が大友第７次調査で出土しており、遺物も中世大友城下町跡で散見される。1997年、大分芸術文化短期大学の構内南部での発掘調査によって上野丘陵で初めて飛鳥時代・奈良時代・平安時代の各時期の役所的遺構群が確認されて以来、古代豊後の国府及び周辺官衛群は上野丘陵上に想定されるようになったが、低地部の中世城下町跡地域における古代の様相・性格を判断するには現状はまだ全く資料不足である。今回の調査でも古代の遺物が少量出土した。

国府

本格的に低地部が日常生活の中心になったのは中世からである。中世大友城下町跡がいつ成立したのか不詳だが、13世紀中頃、大友氏三代目であり最初に豊後国の守護として赴任した頼泰の守護所が上野丘陵周辺のどこかにつくられたらしい。最近の発掘調査でも14世紀初め（1306年）、万寿寺が大分川左岸にできた頃から遺構が登場する傾向にある。

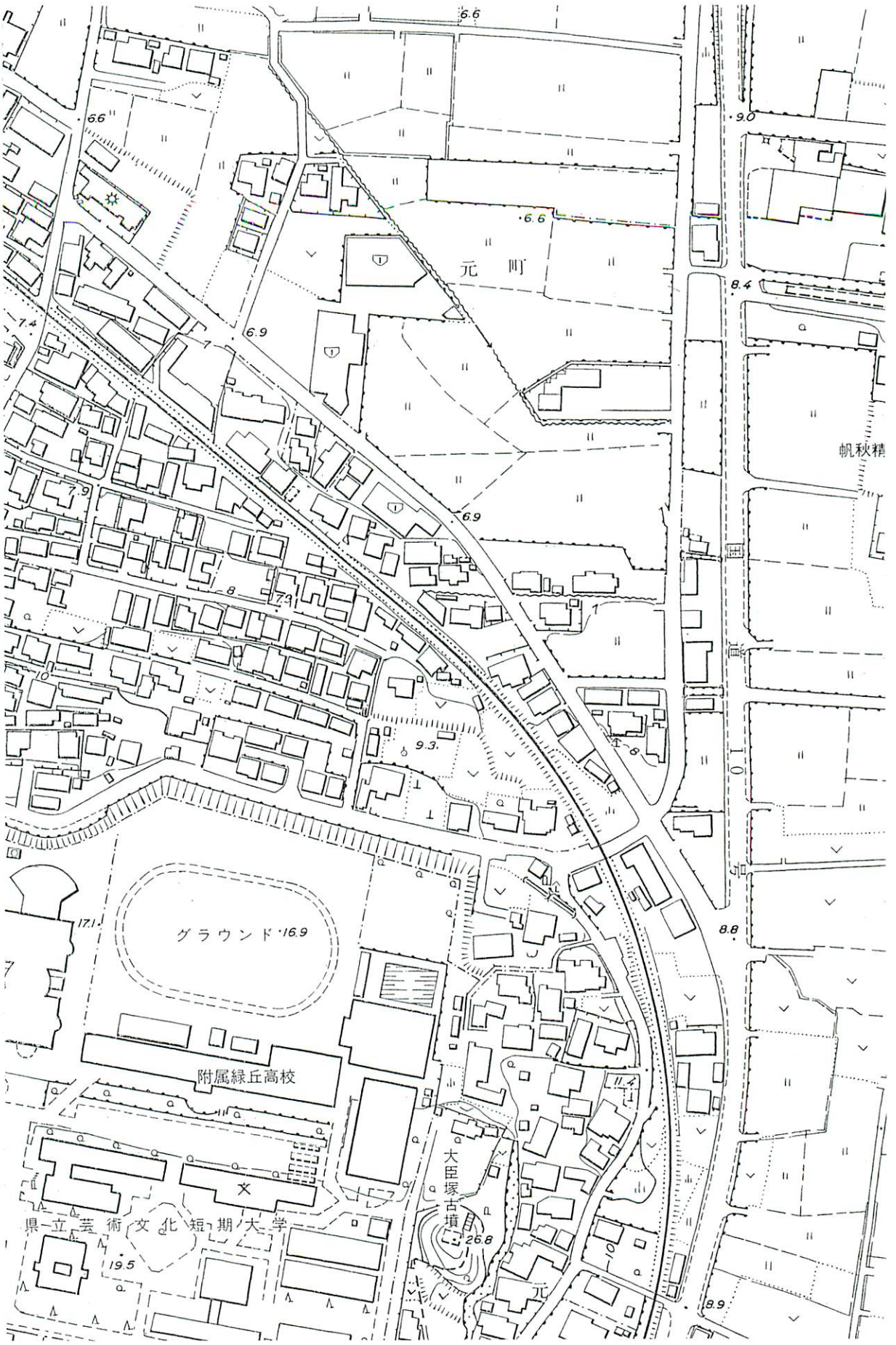
1586年、島津氏の豊後侵攻の際に大友氏は配下のいる県北部に逃れ、大友城下町は放火され消滅した。大友氏の豊後除国後、新たに入ってきた近世大名により海岸線沿いに城下町の移動があったため、中世大友城下町跡は近年に至るまで郊外の農耕地であった。

中世に描かれた大友城下町の地図は存在しない。地図の中でもっとも古く、中世の様子を描いたものとされるのは「府内古図」であるが、江戸初期（1634年）よりも遡らないとされている。今回の調査地は「府内古図」では城下町南部に位置し、御蔵場の南方にあたり、万寿寺西側道路の西側にあり、若宮八幡社よりも東にあり、城下南部に四つ並んだ寺（北から瑞光寺・真花寺・比丘尼寺・極楽寺）の北端の瑞光寺周辺に該当する。「府内古図」はもちろん、きわめて大雑把な地図であり、大友館や御蔵場等の中心部ほどには信頼をおけない。

府内古図

以上のように豊後の中心である大分の中心部、城下町は古代、中世、近世と新しくなるにつれて、大分川の上流から下流へと位置を移してきた。

高橋信武「大分県大分市上野遺跡群竜王畑遺跡」『日本考古学協会年報50』



第２図　調査区付近の地図（1/10,000図）

第２章　調査の成果

１．調査の概要

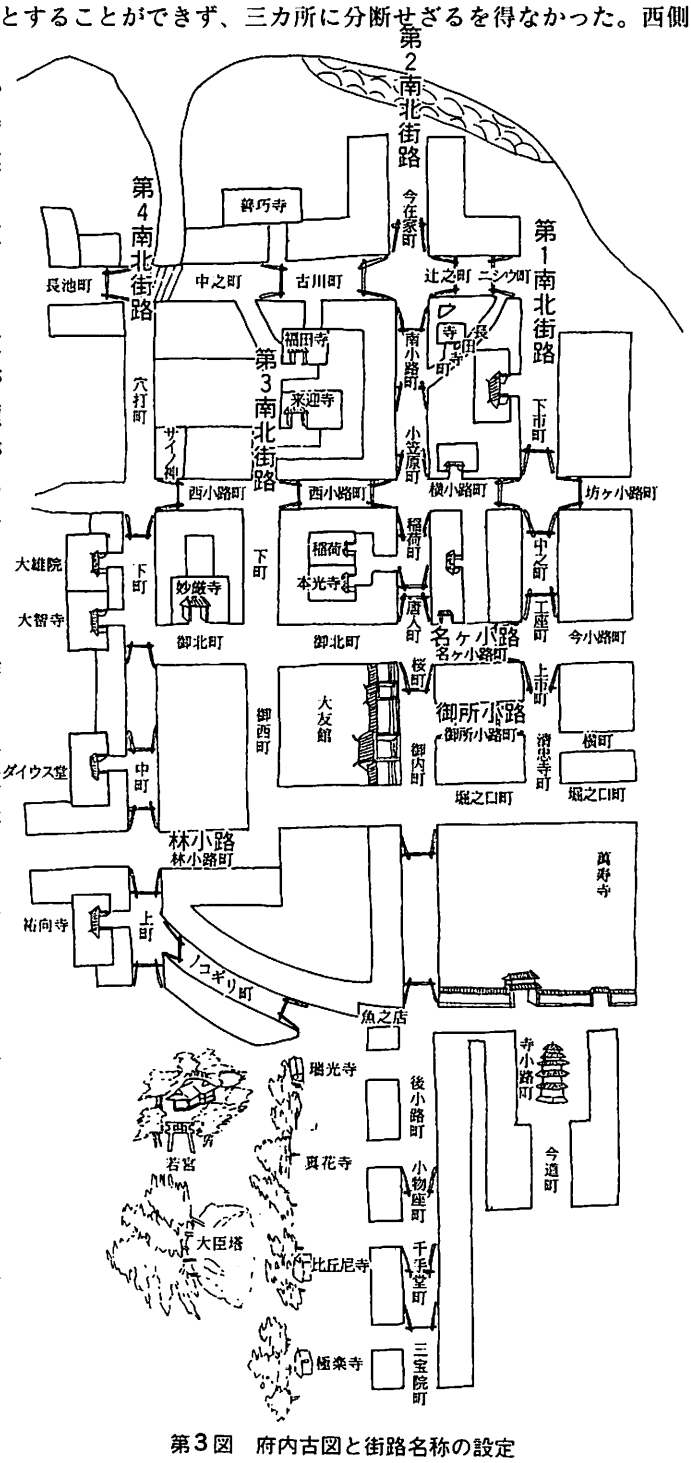
（１）遺構面の重複について

5mm方眼

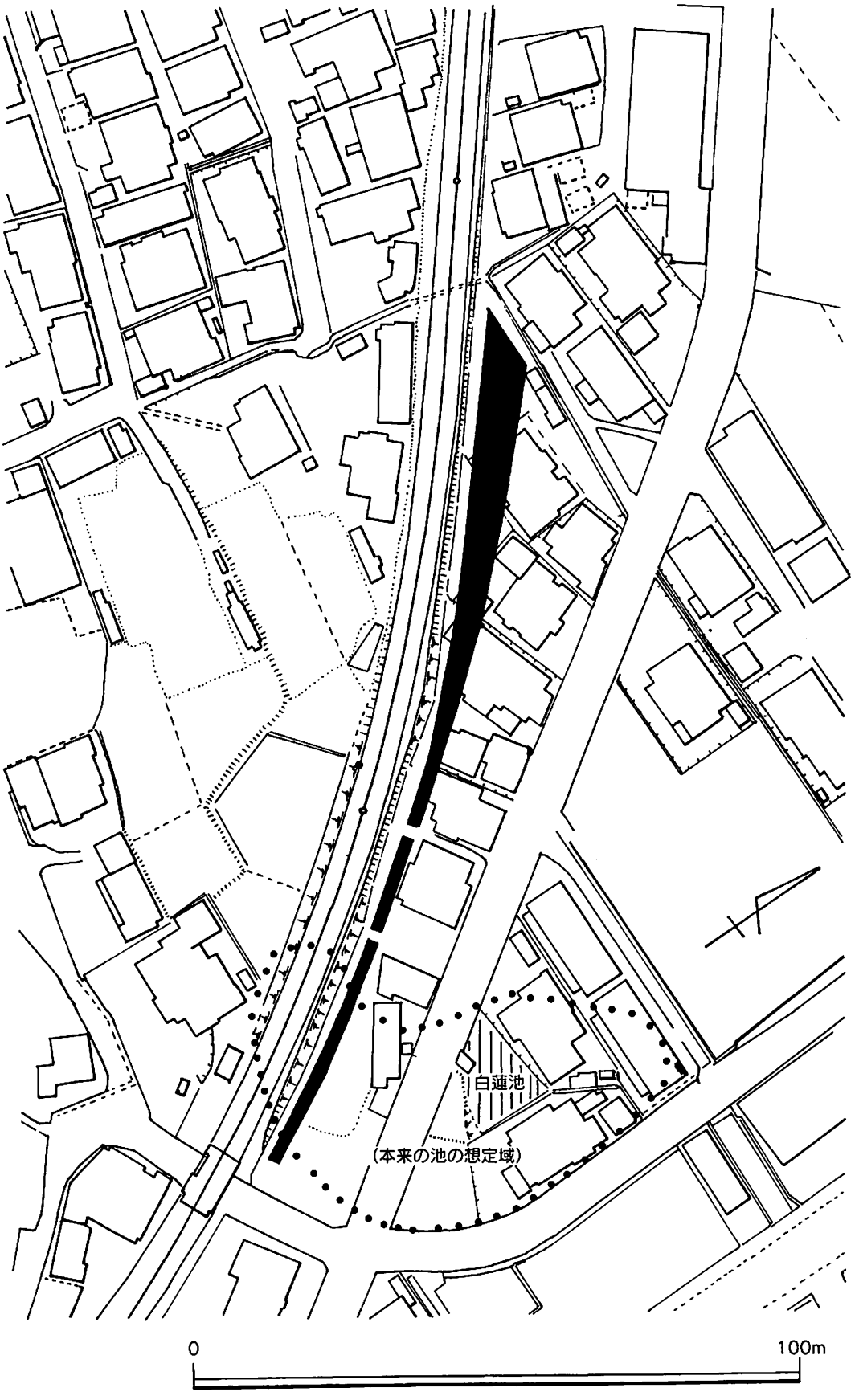
中世大友城下町跡大31次調査区では、調査区では国土座標軸による方眼に合わせて５ｍ方眼を設定し、それぞれの小区画を西から東へ１～18、北から南へＡ～Ｑの番号を付し、数字とアルファベットの組合わせで、各々の区画を呼称することにした（例えば７Ｆ区など）。また、諸般の事情で調査区全体を連続した発掘区とすることができず、三カ所に分断せざるを得なかった。西側からそれぞれ１区・２区・３区と呼ぶことにした。複数の層に分かれて古代から中世末期に至る各時期の遺物が出土しているが、確実な遺構の時期は中世14世紀初頭から16世紀後葉の鎌倉時代末から室町末期である。

１区　調査以前は住宅地であったため、コンクリートで固めた穴やＵ字溝を埋めた溝、ガラス瓶が廃棄された直径30cm前後の土坑類等、中世の層にまで達した攪乱が１区西半分を中心に分布していた。重機で行った試掘調査のトレンチも１区に三カ所、２区に一カ所あって、遺構を破壊していた。調査では重機を使って耕作土層を剥ぎ取り、後は人力で遺構検出作業を行っていった。１区においては、現代の攪乱直前のものは１区の８Ｆ区を中心に分布した溝状遺構数条と１区東部で検出した４条の細い溝状遺構である。これらは焼土の入った遺構を切っており、遺構としてはもっとも新しいと判断した。近世初めの可能性がある。１区西部のＡ区は青灰色の粘土層が分布し、それ以東のような地山が分布しない範囲である。試掘調査の結果、これらの青灰色粘土層がない部分を調査対象とした。Ｂ区に東西方向に二段差があるのは水田の拡張痕をしめすものと考えた。

２区　２区では土管をつないだ配水施設を南北方向に検出した。地元の人に聞いたところでは、大正９年に久大本線が部分開通したとき、南側の上野丘陵側から水田用の水を線路の下を通して持ってくるために線路工事前に埋設した



第３図　府内古図と街路名称の設定
（「豊後府内１」より）

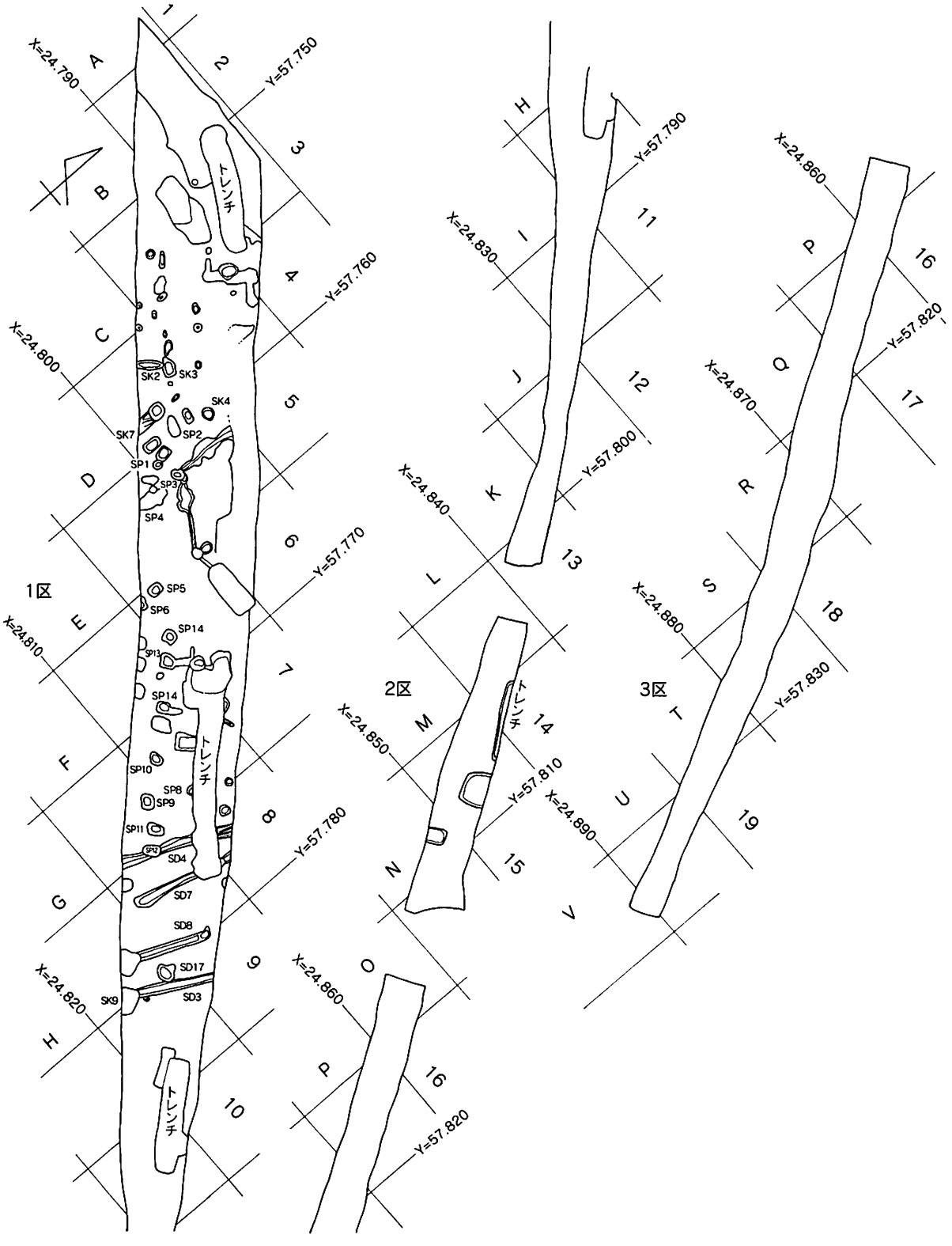


第４図　調査区周辺の拡大図

ものだとのことであった。

３区　３区は調査区の幅が狭い割に、地山まで深く、しかも客土が厚かった。常時水が湧き出るので排水ポンプが欠かせなかった。

発掘調査で検出した攪乱穴から出土した遺物を区別するため、攪乱の穴にも遺構番号を付した。



第５図　攪乱・トレンチ分布図

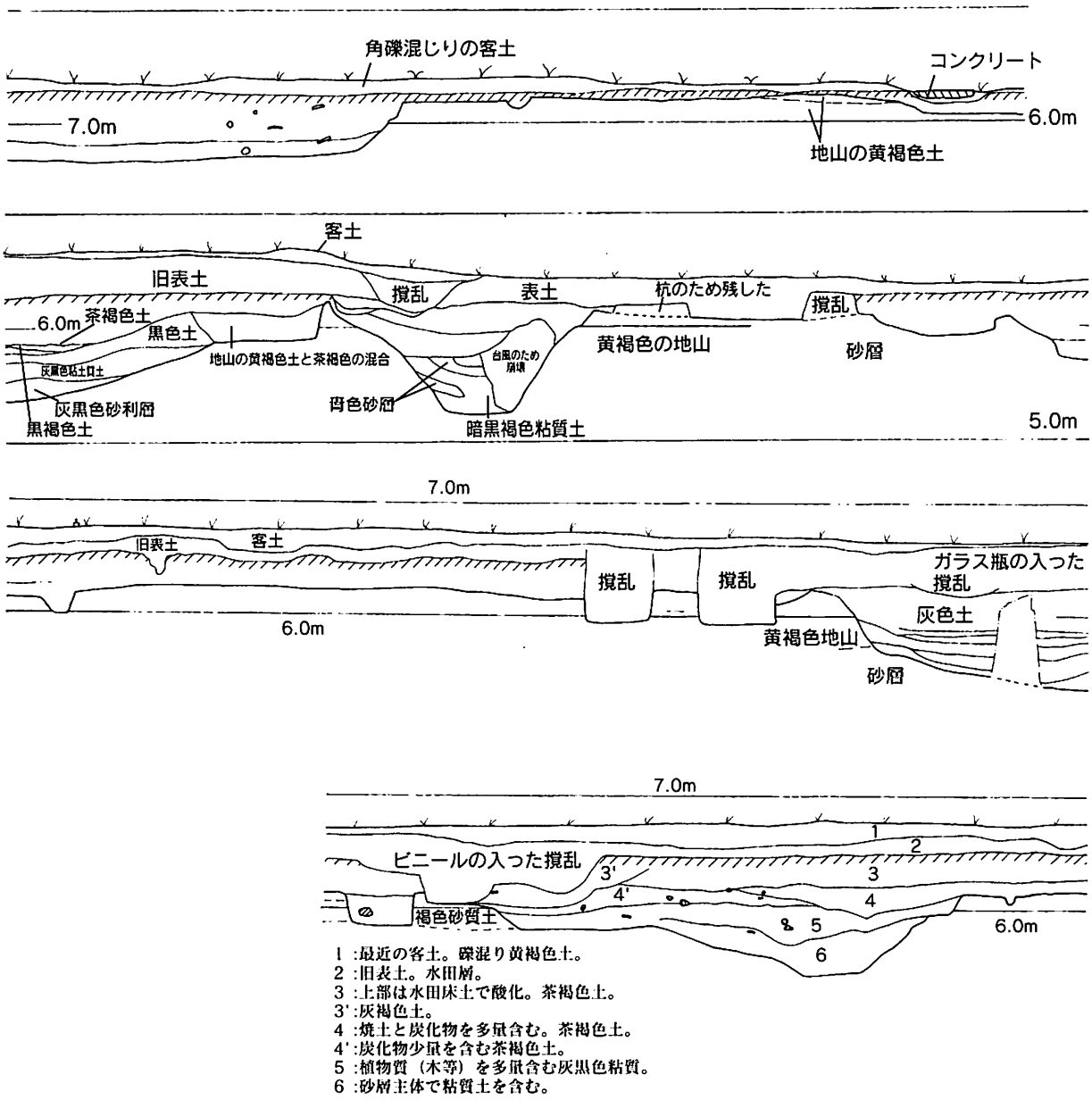
現地調査時点では、すべての遺構・攪乱には頭にＳを付けることにした。報告書作成段階になって遺構の性格ごとに土坑（ＳＫ）・柱穴類（ＳＰ）・井戸（ＳＥ）・溝状遺構（ＳＤ）・掘立柱建物跡（ＳＨ）とし、それぞれ１から番号をつけた。旧称との対比は巻末の遺構一覧表に記した。本文中では、図示すべき遺物の出土しなかった柱穴等について説明を省く場合がある。

調査区が細長かったため、同一時期の遺構面だけを複数回検出する、という理想的な調査はできなかった。従って、西の方で古い遺構を掘り下げている時に、東の方でそれより新しい遺構を掘っている可能性があるという状況だった。報告に当たり、遺物時期の検討結果を参考に、最上層・上層・中層・下層に分けて説明する。上記の各時期は、最上層が現代の攪乱である。

層の区分

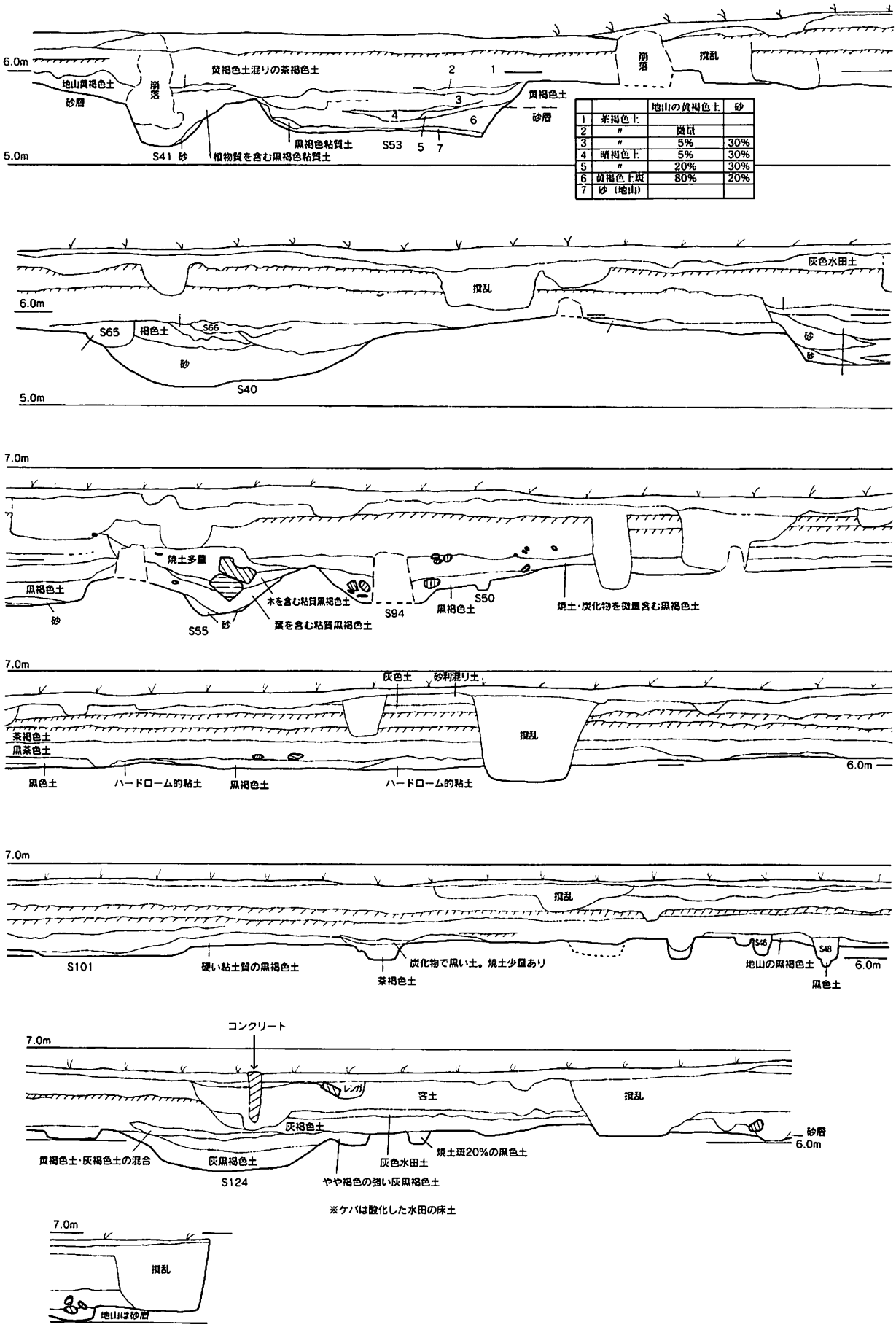
上層は1600年前後以降、18世紀位までで、中層は15世紀末葉から16世紀後葉で、京都系土師器の時期のもの。その新段階は京都系土師器だけの時期で16世紀中頃から後葉である。古段階は京都系土師器と内面に段状ナデを残す在地系土師器皿が伴う15世紀末葉から16世紀前葉の時期。

下層は在地系土師器の内面に段状なで調整痕が残らない段階である。１２世紀中頃から15世紀後葉までと時間は長い。



1 :最近の客土。礫混り黄褐色土。
2 :旧表土。水田層。
3 :上部は水田床土で酸化。茶褐色土。
3' :灰褐色土。
4 :焼土と炭化物を多量含む。茶褐色土。
4' :炭化物少量を含む茶褐色土。
5 :植物質（木等）を多量含む灰黒色粘質。
6 :砂層主体で粘質土を含む。

第６図　1区南西壁層序図



		地山の黄褐色土	砂
1	茶褐色土		
2	〃	微量	
3	〃	5%	30%
4	暗褐色土	5%	30%
5	〃	20%	30%
6	黄褐色土斑	80%	20%
7	砂（地山）		

第７図　1区北東壁層序図

（2）層序

本調査区では旧表土上に客土された最近の砂利層が覆っている。用地買収後、既存の建物を撤去し、地面を均したためである。この造成層の下位、標高6,7mほどに旧地表面があり、１区を中心に多数の穴が掘り込まれ、遺跡を攪乱していた。

旧表土の下位には全域に水田層が存在した。水田の水のために酸化して錆色に変色し硬化した面が基本的に二面重なっていた。その水田床土の標高は上位のもので約6,6m、下位は約6,4mである。本調査区でそれ以下に遺跡のない地山面は１区東部で標高6,2m、中央部で6,1m、西部は少し低く5,8mである。上位では黄褐色土、それが失われている場所ではその下にある砂層であった。

２区も１区東部と同じく、地山の黄褐色土が標高6,2mに存在した。３区は標高6,2mに一枚だけ水田床土があり、１区・２区よりも明らかに低い場所に水田を作っている。

３区中央部から東では、一枚ある水田床土の下は中近世の常時水分を帯びた遺物包含層が0,7mほどの厚さで堆積し、その下は標高5,4m前後で地山となる。言い換えれば、３区のこの部分では他より一段低い位置に水田があり、地山も他より0,6m程度低いわけである。調査区の北側にある白蓮池の続きだったと考えられる。

白蓮池

２．最上層の攪乱

（1） 分布状態

１区の北西半分を中心に分布するＳ１～Ｓ２８は攪乱である。N14区のＳ６８も新しそうな砂利が上から下まで入っていた。１区の長軸と平行に穴が並んでいるが、以前にあった住宅に関連する攪乱である。調査区内には北東部に偏っていくつか試掘トレンチが溝状にある。３Ａ区・５Ｃ区～６Ｃ区・７Ｄ区～８Ｆ区・９Ｇ区～10Ｇ区・14Ｌ区～14Ｍ区の溝状のものがトレンチである。

２区の西部を調査区に直交するように土管４個が繋がって出土した。大正９年の鉄道敷設直前に埋設したものである。

３区は西部を除き中世の遺構はなく、大部分は浅い池状態であり、それがある程度埋まった段階で五輪の塔の部材５個を含んだ石列が16P区に東西方向に並んでいた。列の西部を造成したものらしい。石の上面標高は6,06m～5,9mであった。

攪乱部の穴からは現代のゴミに加えて、中世の遺物が出土した（第10図１・２）。１は軒丸瓦で、外縁部に珠紋が並んでいる。２は中国銭。

３　１区の上層の遺構と遺物

（1） 分布

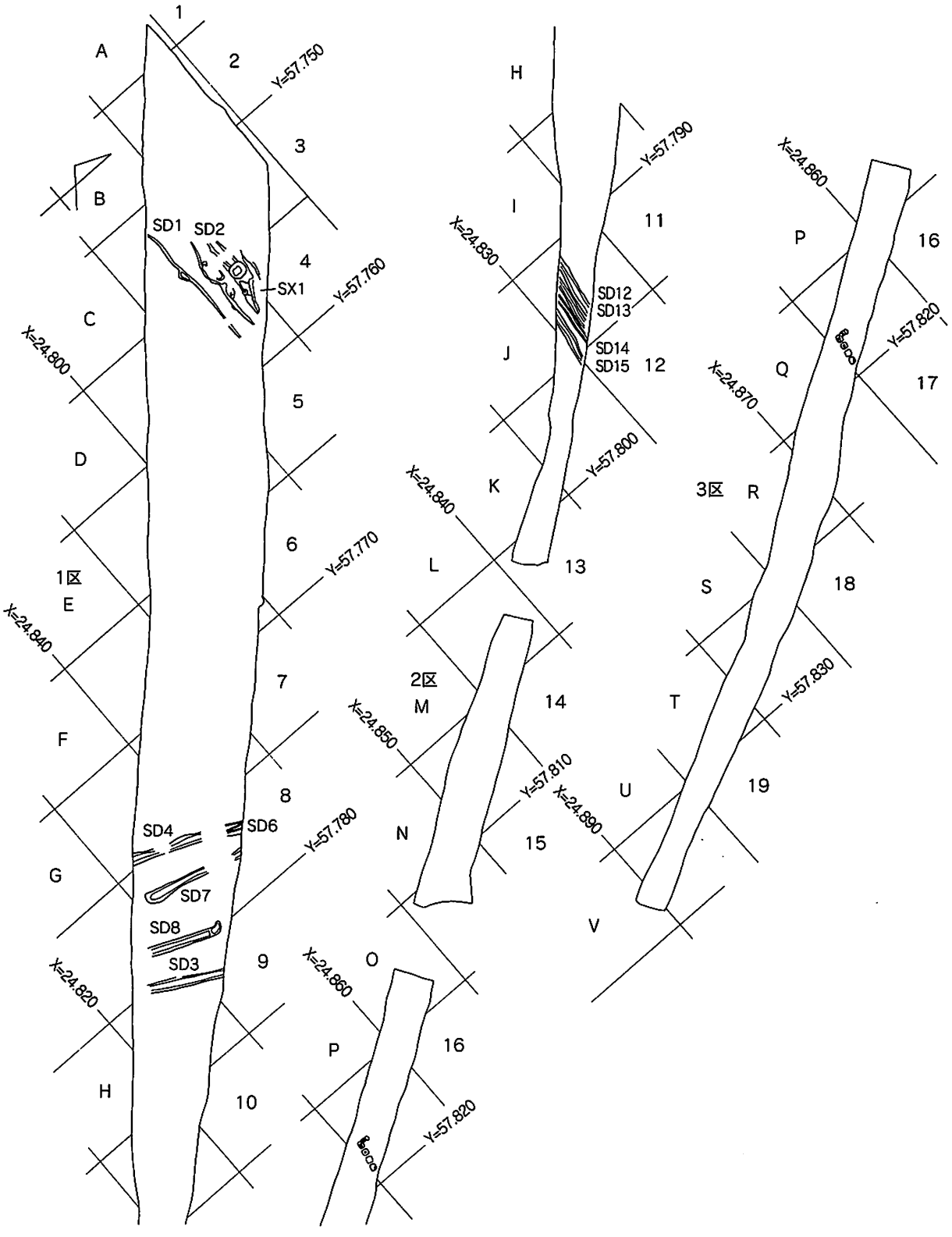
１区北西端の３Ｂ区・４Ｂ区に東西方向の段差をもつ遺構の重複著しい部分はすべて中世以後の遺構である。水田床土の高さで１区中央部に細い溝状遺構を並列して検出し（Ｓ３２～３７）、10cm程度の比高差をもってもう一段下位でほぼ同じ位置、同じ走行の溝状遺構を検出した（Ｓ５０～５２）。これらは１区に二枚ある水田床土の中位から上の位置で検出した。

水田床土

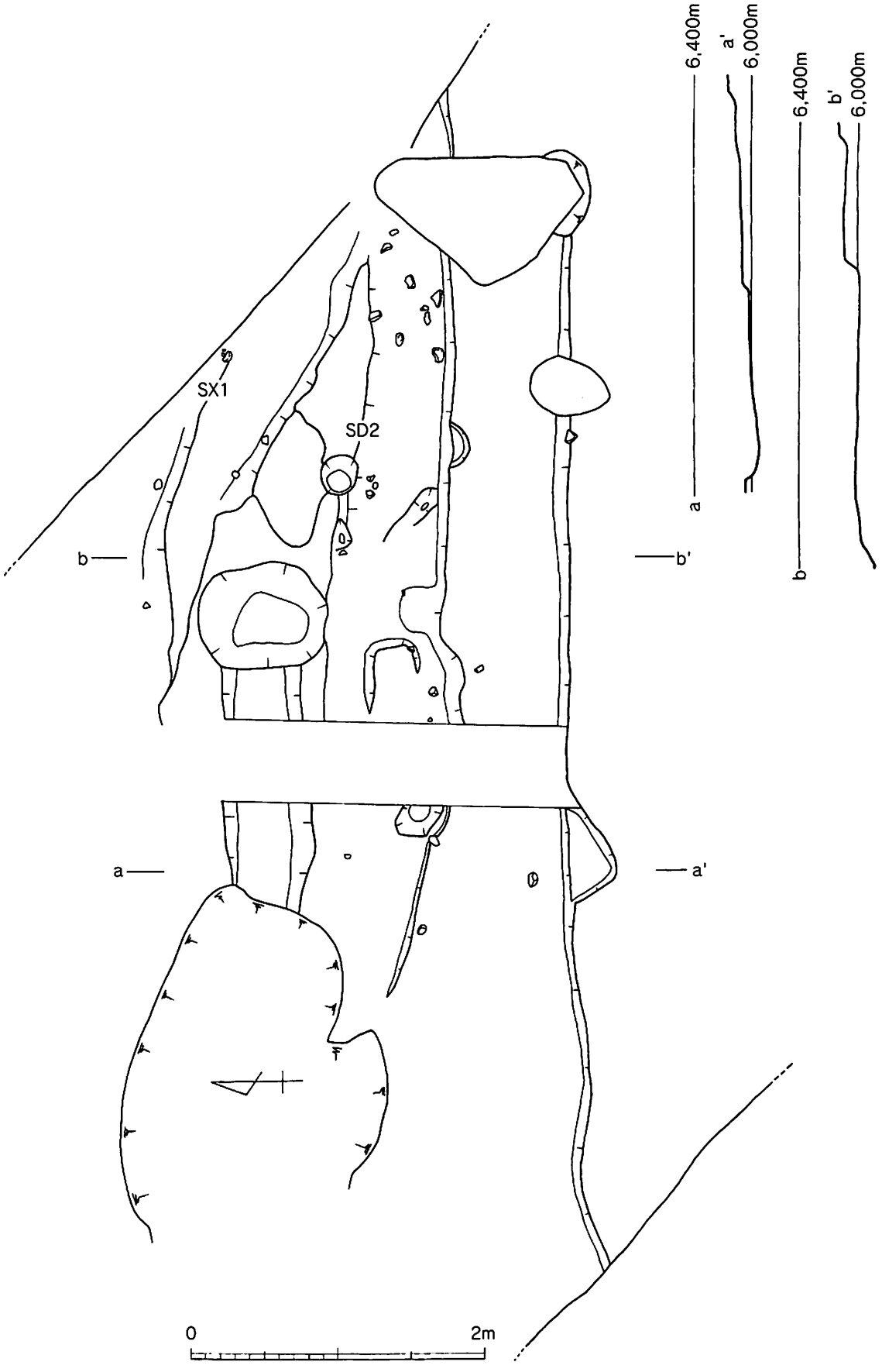
（2）遺構と遺物

１区西部では硬い地山面が下り斜面となってその上に水田耕作土のような水分を帯びた土層が堆積する。この部分では地山の縁に沿うような形で近世の遺構を検出した（第９図）。

地山側のＳＸ５は段差６cm～８cmの浅い平坦面である。東部には三角形のコンクリート塊が重なる。瓦質土器鉢片が１点出土している。（第9図1）ＳＸ５の性格は水田の縁辺部である可能性を考えている。１は内面調整が刷毛目、その他なで調整した鍋である。



第８図　1区近世初頭遺構分布図



第9図　SD1・SD2・SX1遺構実測図（S=1/40）

ＳＤ２はＳＸ５の北西側にあり、平行に走る最大幅80cm程度の部分である。北東部では溝状をなし、北西部では平坦である。肥前系染付け（第12図３）と備前擂鉢（同４）が出土している。ＳＤ２とＳＸ１に挟まれた部分は幅70cm、深さ８cmの溝状を呈する。小礫が１点出土した。

ＳＸ１は最下段にあり、深さ５cm。肥前系染付けが出土した。

１区中央部にあるＳＤ３・ＳＤ４・ＳＤ５・ＳＤ６・ＳＤ７・ＳＤ８は類似した規模で、ほぼ等間隔に南南西～北北東に走る溝状遺構であり、同時期であろう。暗渠らしいＳＤ８からみてこれらは水田に伴う排水路か。これらが地山としている層は上位の水田床土中（1586年の島津侵攻に伴う焼土粒と思われるものを混入する）であり、16世紀末以降の可能性がある。

これらの調査後、ほぼ同じ場所に同じ走行の溝状遺構ＳＤ１６・ＳＤ１７・ＳＤ１８を検出した。比高差は10cm弱であり、前者とは若干時間差があるが、きわめて近接した時期に作られたと考えられる。

ＳＤ３（第９図）

９Ｇ区にある幅44cm、深さ40cmの溝状遺構で内部の中位以下に円礫がぎっしり詰まっている。暗渠であろう。床面標高は5,8mで南北とも同じ高さであった。

出土遺物（第１３図１～４）　３は中国製青磁碗で淡緑色の釉がかかる。

ＳＤ４（第８図）

８Ｇ区にある幅cm、深さcmの溝状遺構である攪乱のＳＰ１２に切られる。トレンチの北側にある細いＳＤ６は分岐したものか。

ＳＤ７（第８図）

８Ｆ区にある溝状遺構で、攪乱（試掘トレンチ）を挟んで北側にも続いている。北部はＳＤ７として遺物を採り上げたが同一の遺構であろう。

出土遺物（第１４図１）　９世紀の越州窯青磁碗の底部である。底部外面は蛇の目高台になっている。内外面とも全面に淡い緑黄色釉がかかる。底径7,2cm。

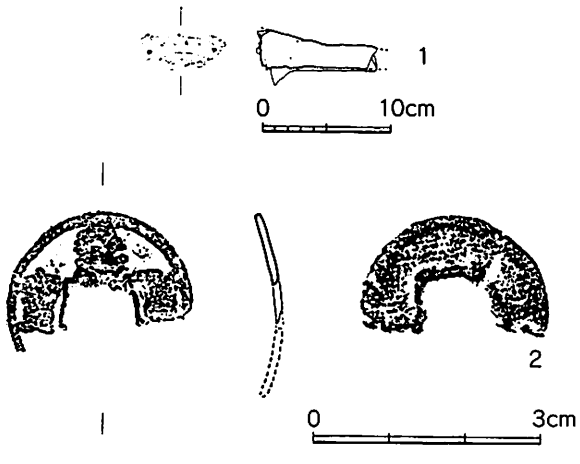
ＳＤ８（第１０図）

四条のうち、東から二番目の溝状遺構である。検出標高は約6,2mである。ＳＤ８からは第１４図に示す様な中世の遺物が出土したが、下層の遺物が混入したものであろう。

出土遺物（第１４図２～４）２は瓦質土器で口縁部が強く折れた鍋である。３は瓦質土器で器面はなで調整。４は中国製褐釉陶器甕である。両面とも施釉している。

ＳＤ１６（第１５図）

Ｆ７区にあり、北北東に走る溝状遺構である。



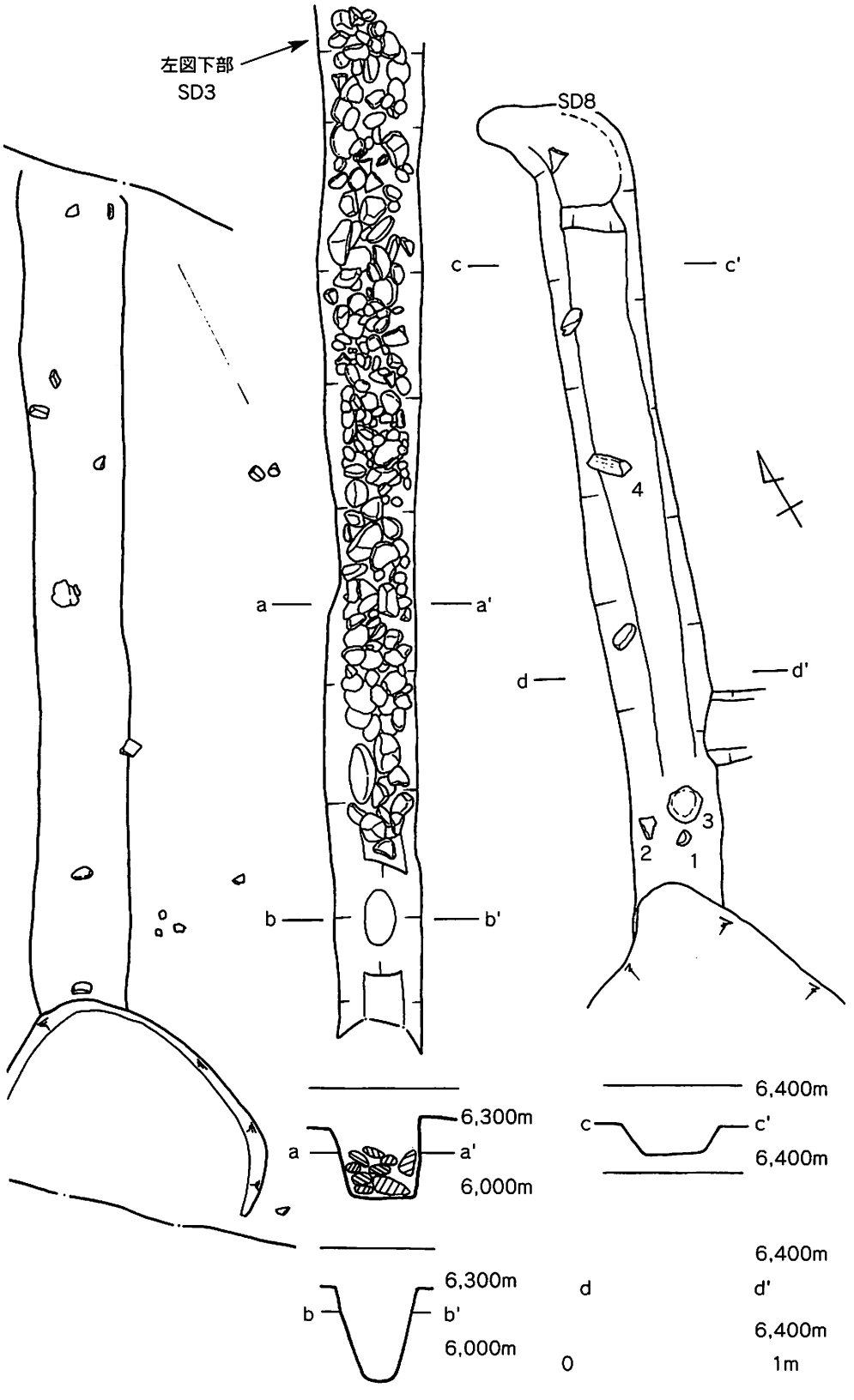
第10図　SK5出土遺物実測図（瓦 S=1/6　銭 S=1/1）

出土遺物（第１６図２・３）

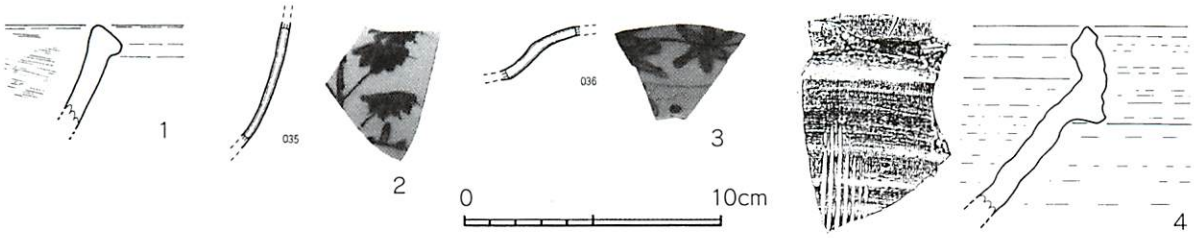
２は中国製白磁碗で口縁部は玉縁、全面に施釉している。１２世紀代に比定する。２は外面に帯状の沈線４条が廻る。青磁香炉である。

ＳＤ１７（第１５図）

Ｆ７区にある。東側には同じ走向でＳＤ１６、西側にも細い溝が走る。これらは直前に掘り上げたＳＤ３・ＳＤ４・ＳＤ７・ＳＤ８と同一方向である。検出面が水田床土の少し下であり、水田に伴う水路と考えられる。



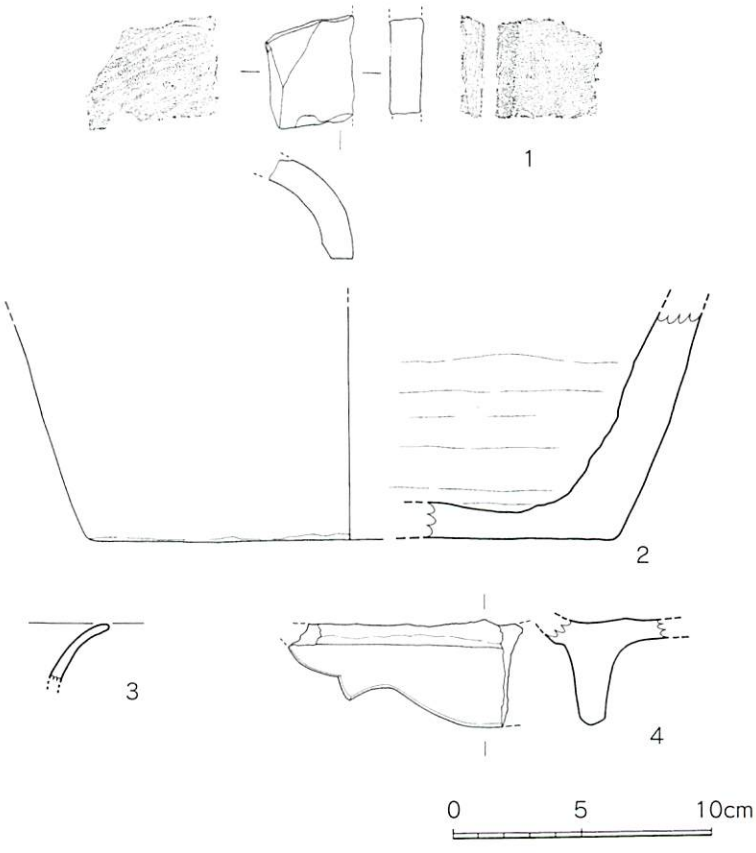
第11図　SD3・SD8遺構実測図（S=1/30）



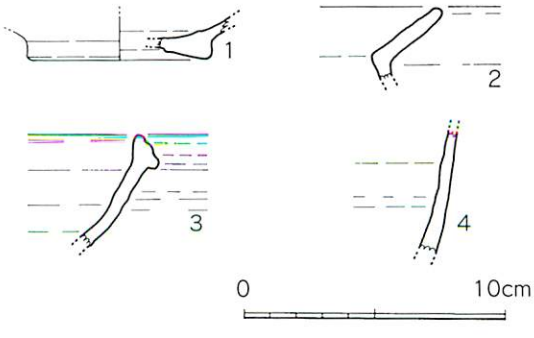
第12図　SD1･SD2･SX1　出土遺物実測図（S=1/3）

出土遺物（第１６図１～３・第１７図１・２）

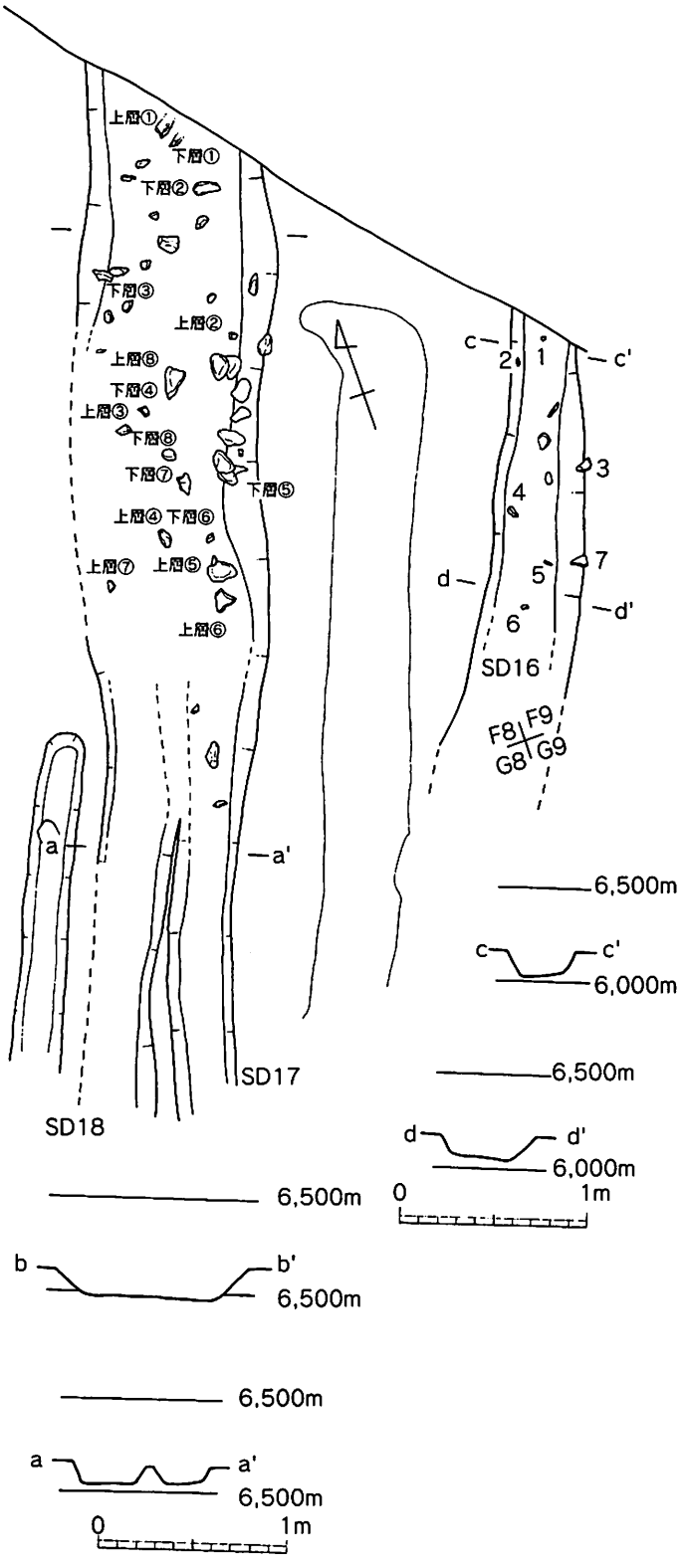
１は青花碗。２は白磁碗。３は青磁香炉である。４は段状なで調整痕の残る在地系土師器皿。５・６は京都系土師器皿で、外面上部を横なで調整している。第１７図１は元祐通宝（北宋：初鋳年1086年）である。２は煙管の雁首である。筒部と皿部は別材で、接合している。筒から皿までの間が長く、緩やかに湾曲しており、江戸初期のものである。



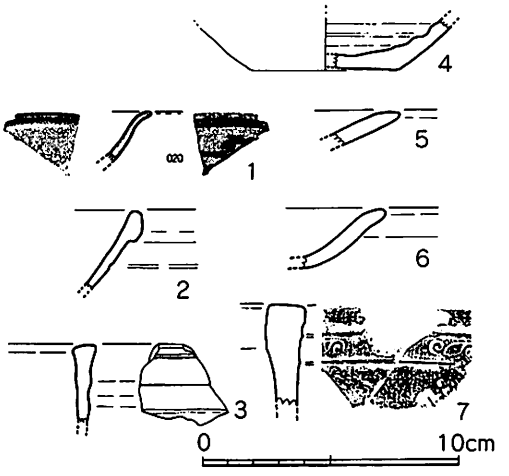
第13図　SD3出土遺物実測図（S=1/3）



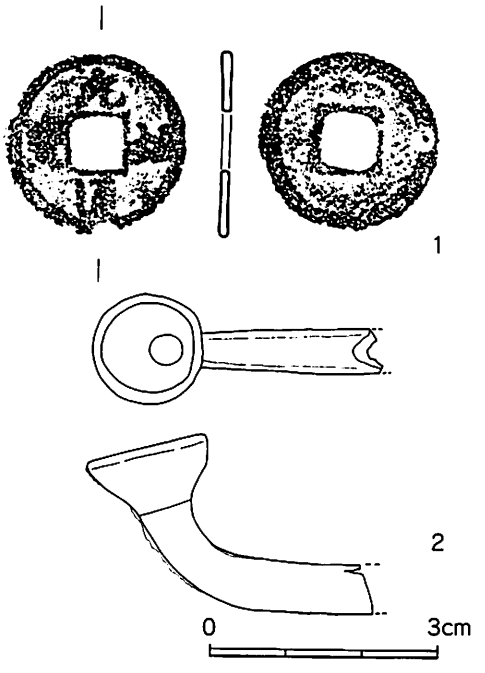
第14図　SD7・SD8出土遺物実測図（S=1/3）



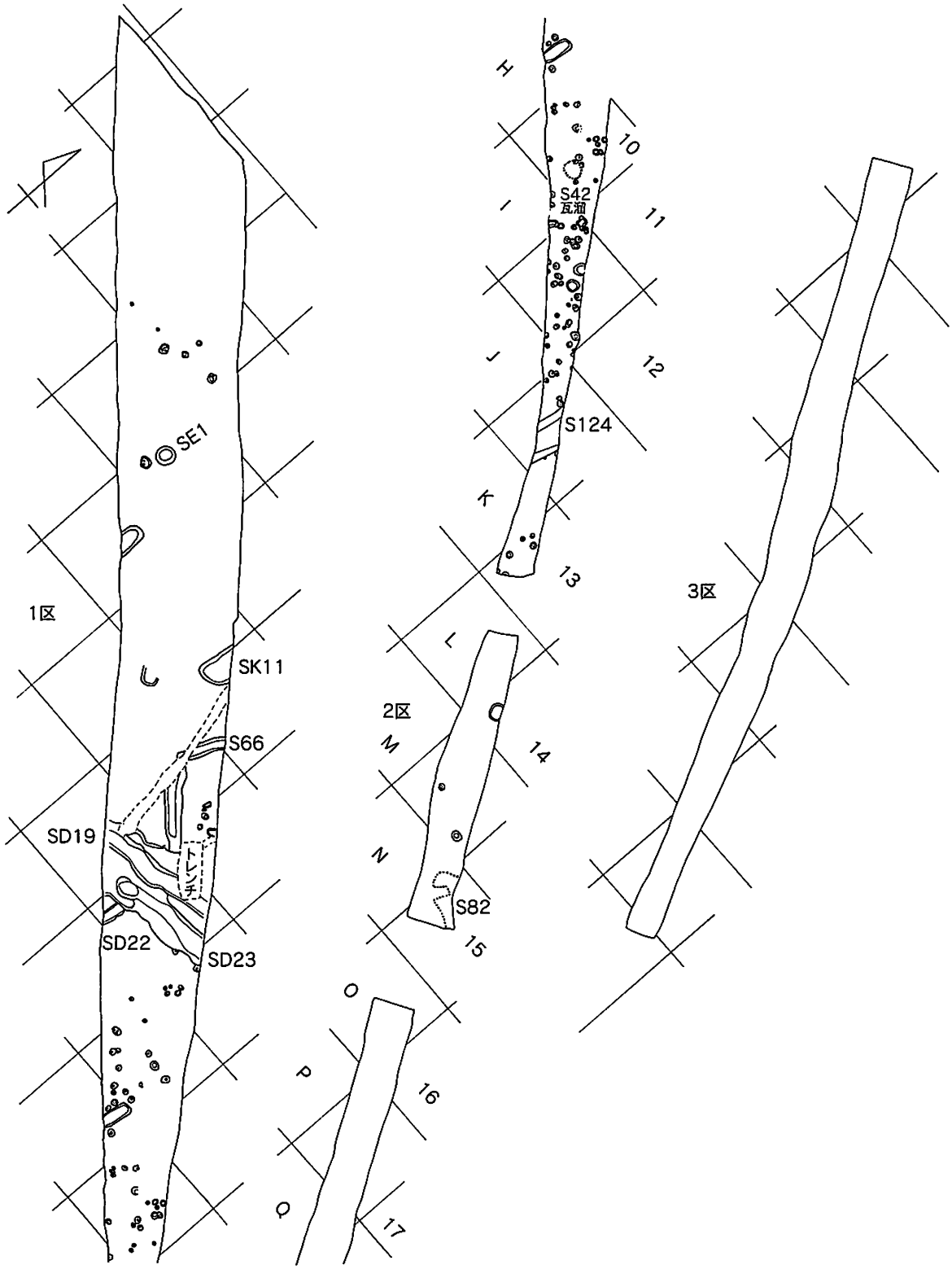
第15図　SD16・SD17・SD18遺構実測図（S=1/40）



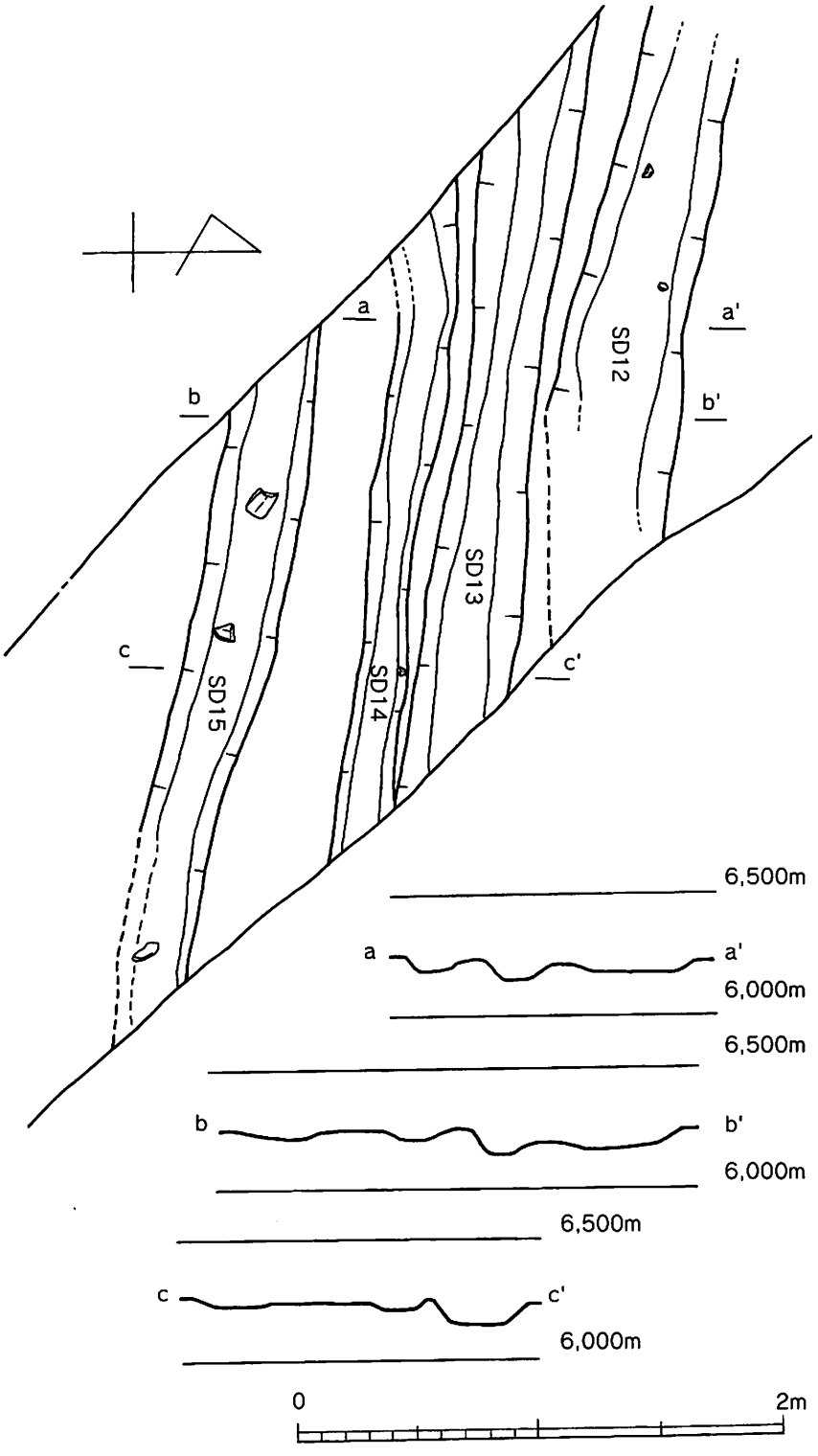
第16図　SD16･SD17･SD18出土遺物実測図（S=1/3）



第17図　SD16･SD17･SD18出土遺物実測図（S=1/1）



第18図　中層（新段階）遺構分布図



第19図　SD12･SD13･SD14･SD15遺構実測図（S=1/30）

４．１区中層（新）の遺構と遺物

（１）分布状態　撹乱を除去して最初に検出した遺構である。

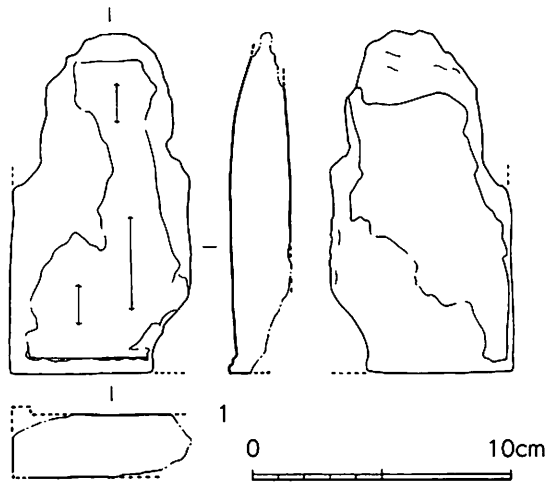
ＳＰ２０（第９０図）　Ｃ５区にあり、周辺に京都系土師器が散布するので、この時期か。検出標高は6.07ｍ。平面は58cm×49cmで小さい穴が二つある。埋土は灰色粘質土で、マンガンを多く含む。ＳＰ２０の検出面と同じ高さで外側に溝状遺構ＳＤ１１を検出した。出土遺物はない。

ＳＤ１２～ＳＤ１５（第１９図）

Ｉ2I区にある東西方向に走る４条の溝状遺構である。それぞれの規模はＳＤ１２が幅40cm、深さ８cm、ＳＤ１３が幅30cm～40cm、ＳＤ１４が幅20cm～25cm、ＳＤ１５が幅28cm～35cmである。あり方から見てほとんど同時期か連続的に使われた溝であろう。検出標高は6,25ｍ前後である。ＳＤ３・４・７・８の延長部と南側の調査区外で直交して接続するような関係にあり、近世初め頃の可能性があるが北側土層を比較した場合、二枚ある水田床土の下位よりも下に位置すること、出土遺物は少ないが新しいものが見られないことから別の時期のものと考える。

ＳＤ１５からすずり（第２０図１）が出土しただけで、時期を示す遺物は見られなかったが、検出順序から１６世紀後葉位と推定する。

出土遺物（第２０図１）黒褐色の石製の砥石である。水を溜める海の方が欠失している。現存長は13,3cm、幅も不明で7,1cm以上、厚さは陸部分で2,4cmである。



第20図　SD15出土遺物実測図

ＳＫ１１（第２１図）

ＳＤ９の北部を切って掘り込まれた浅い土坑である。ＳＤ９を切ることを確認した段階で把握した。検出標高は南部で5,93ｍ、北部で5,95ｍである。埋土は黒色土で、規模は長さ4,3ｍ、幅2,5ｍ、深さ10cm。ＳＫ１１は出土遺物からみて１６世紀後葉に属す。

出土遺物（第２２図１～４）

１～３は手捏ねによる京都系土師器皿（塩地編年３期）で、三点共同寸大である。分布図に示すように同時に捨てられた状況で出土した。２は一カ所口縁部内面に煤が付着し、灯明皿として使われたことが分かる。３は口径9,0cm。６は土錘。

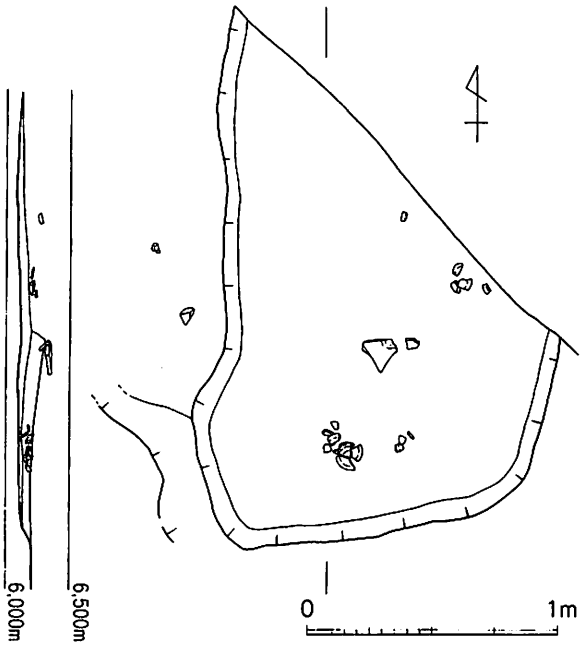
ＳＤ１９－旧番号Ｓ55－（第２４図）

ＳＤ１９は掘り下げ当初は焼土混じりの溝状遺構と認識して進めたが、焼土除去後も溝の壁が現れなかった。最終的な掘下げの結果、遺構上面の幅は当初よりも東側に拡大し、下底では溝が二条に分かれてしまったので、下部で検出した東南部の溝上部をＳＤ２３（旧番号Ｓ９４）とした。

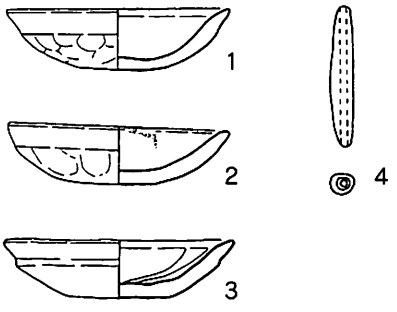
以上の調査経過でもＳＤ１９の方が新しいとわかるが、土層の検討結果も、ＳＤ２３の方が古いことを示す。第２３図の西側層序にある第４層が焼土混じりの部分で、当初これを溝状遺構として調査した。ＳＤ１９は上部の焼土混じりの部分とその下層とは遺物面で時間差が相当認められるので、上下は別個の遺構とすべきだった。

ＳＤ１９（Ｓ５５）とＳＤ２３（Ｓ９４）の遺物は両者を区別して採り上げる事ができず、ただ、ＳＤ１９の遺物出土状態図に示すもの（漆器椀の全てとその他若干）、焼土混じりの層が無くなった後から出土したもの（採上げ時にＳ５５Ｌとした－第２５図９・２７・２８・３０、第２８図６）、最終的に東部下部の溝状遺構から出土した（採上げ時にＳ９４とした）ものと区別した。

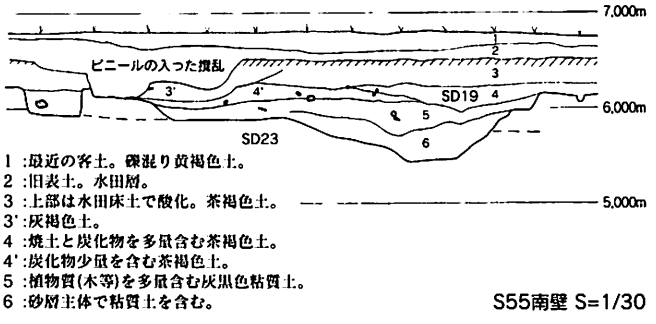
以下一部の報告内容には遺構を混同している可能性がある。ＳＤ１９は出土遺物、遺構の重複



第21図　SK11出土遺構実測図（S=1/30）



第22図　SK11出土遺物実測図(S=1/3)



第23図　SD19･SD23付近南壁実測図

関係から１６世紀後葉と思われる。

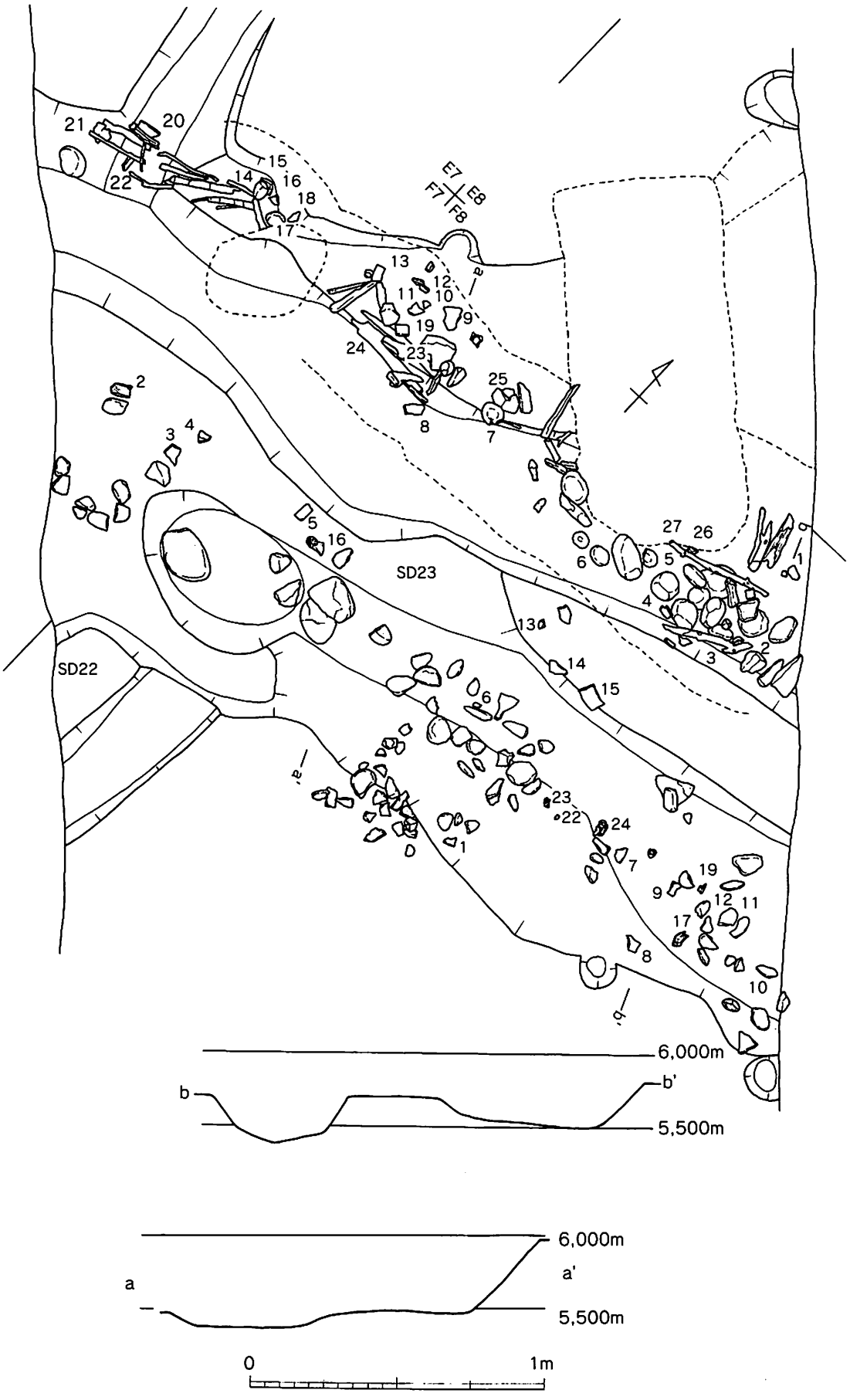
第２４図に示すＳＤ１９遺物出土状態は、上部の焼土混じりの層中の状況である。焼けた木材・壁土・礫とともに漆器椀や下駄・京都系土師器・陶磁器類が出土した。火事場の後片付けの廃棄場所として、当時埋まりきらなかった状態のこの溝状遺構が利用されたらしい。

出土遺物（第２５図１～３２・第２６図１～２６・第２７図１～５・第２８図１～11・第２９図１～７・第３０図１～８）

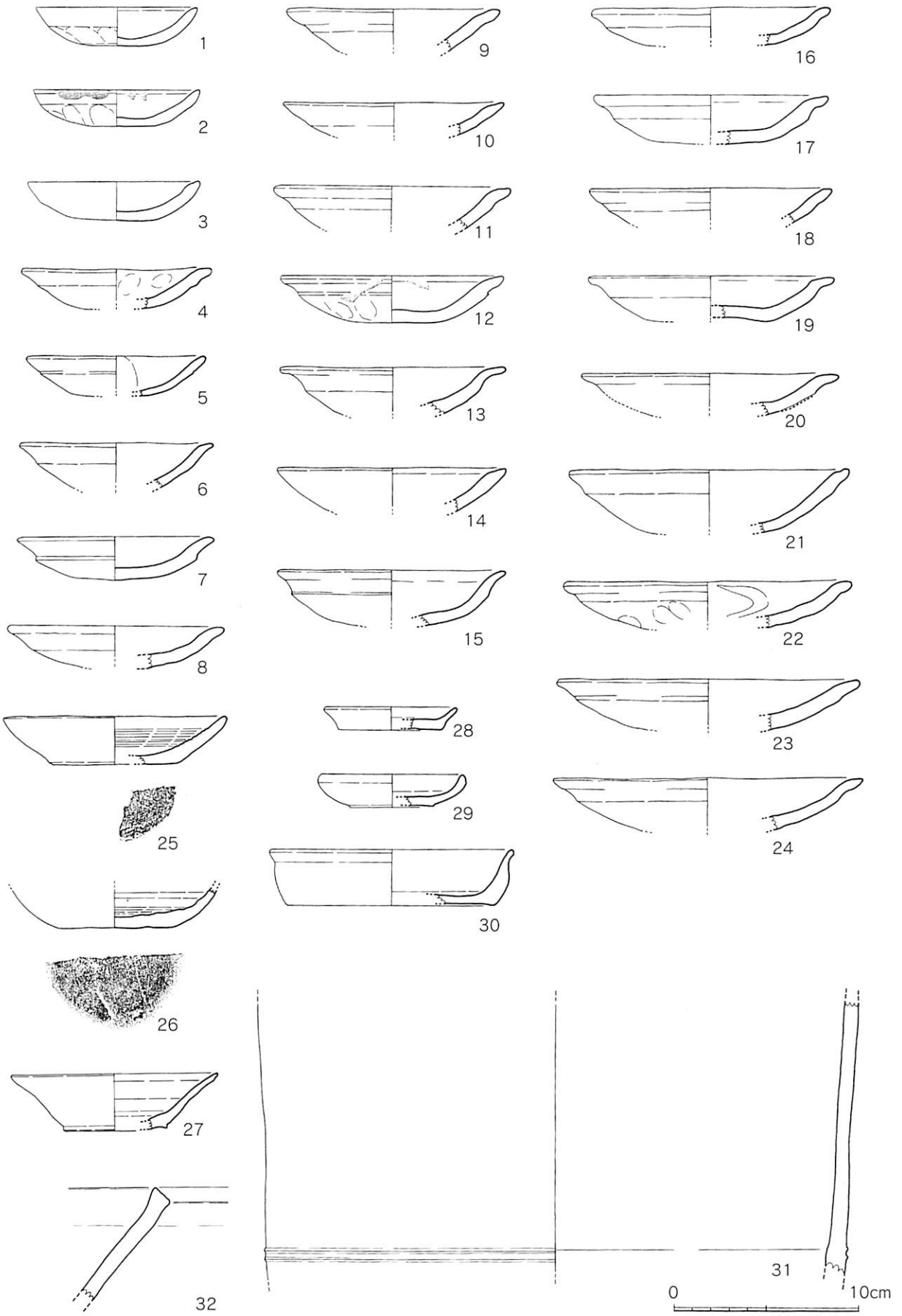
第２５図１～３０は土師器皿及び小皿である。１～２４は京都系土師器である。４は口径10,2cm。５は外面上部から内面を横なで調整し、口径9,6cm。６は口径10,4cm。９は上部の焼土層より下で出土し、下層として採り上げた。口径11,6cm。１０は外面下1/3以外を横なで調整している。口径12,0cm。１３は口径12,3cm。１４は外面を一様になでており、口縁部と体部を区別しない。口径12,4cm。１５は口径12,4cm。１６は口径12,8cm。１８は５と同様で口径13,0cm。２０も５等と同様で口径13,8cm。２１は口径15,0cm。２２は切り離した粘土板の接合痕が残り、口径15,4cm。２３は口径16,2cm。２４は口径16,5cm。２５～３０は在地系土師器である。そのうち２７・２８・３０は焼土混じりの上層ではなく、その下から出土しており、明らかに上層の焼土混じりの層と下層の遺構との間には時間的隔たりがある。２５・２６は糸切り底で内面に段状のなで調整痕を残す１６世紀初頭前後のもの。２５は口径11,9cm。２７は淡黄褐色で長く薄い体部が外湾する。口径11,0cm。２８は底部が厚く、体部は外湾する。

口径7,2cm。２９は板状圧痕があり、体部は内湾する。口径8,0cm。３０は底面に板状圧痕がある。口径13,2cm。完全な形の1/5程度の破片であり、古い遺物の混入であろう。３１は瓦質土器火鉢で、外面には帯状に器表面の残りの良い部分がある。竹製のたがか何かを巻いていたのだろう。最大径32,6cm。３２は瓦質土器の鉢である。

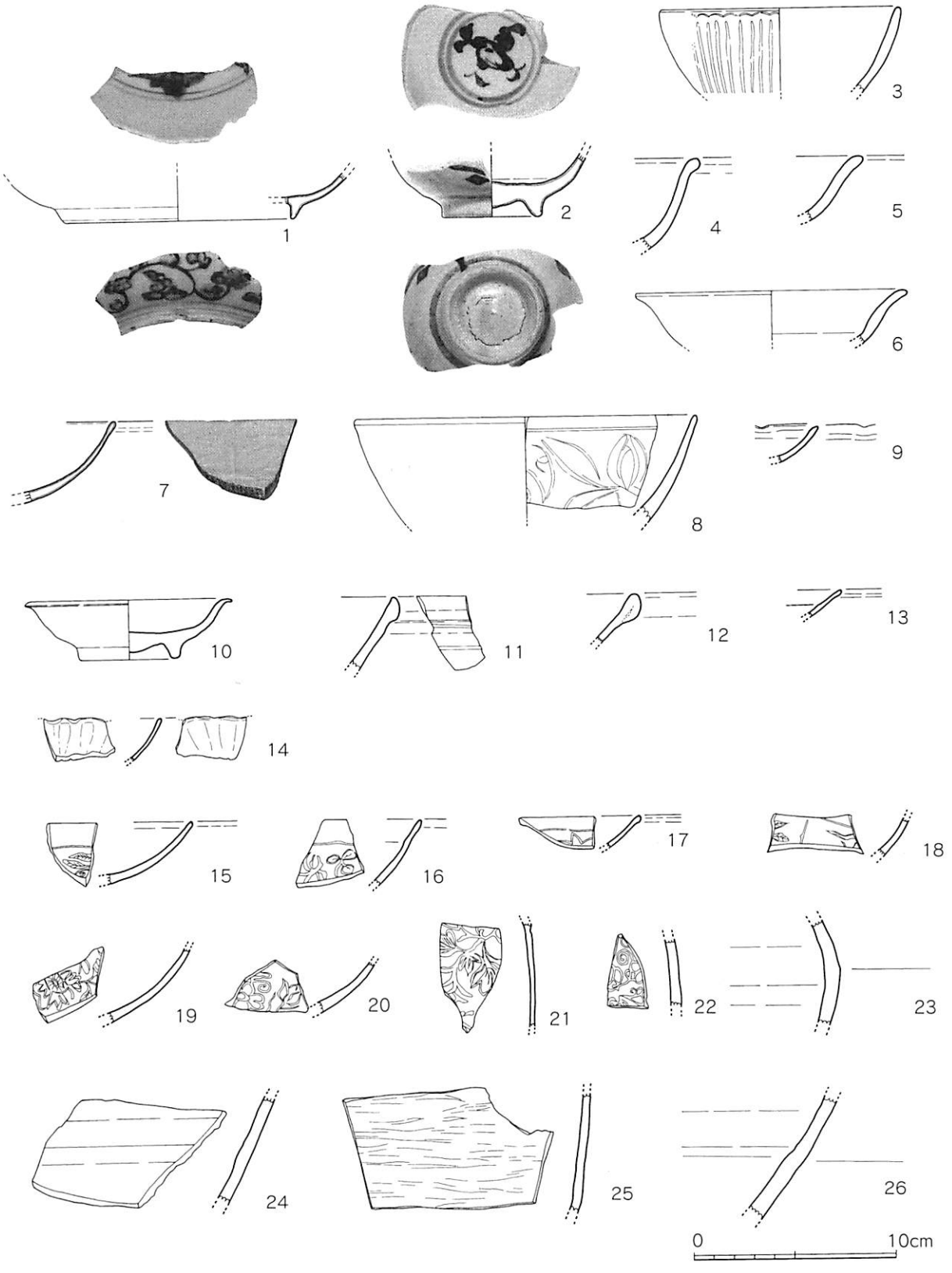
第２６図１は中国景徳鎮窯系青花皿である。外面に唐草紋を描く。小野分類のＢ1群、１６世紀代の製品である。２は青花碗である。３～９は青磁。３は口径11,8cm、外面に沈線で蓮弁紋を描



第24図　SD19・SD23遺構実測図（S1/40）



第25図　SD19出土遺物実測図（S=1/3）

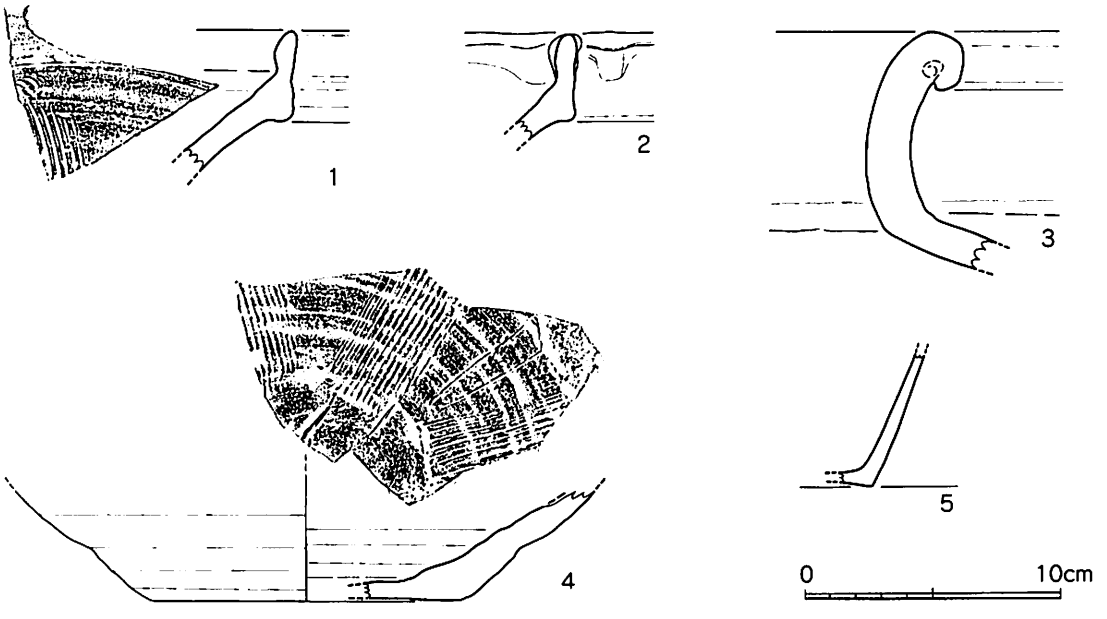


第26図　SD19出土遺物実測図（S=1/3）

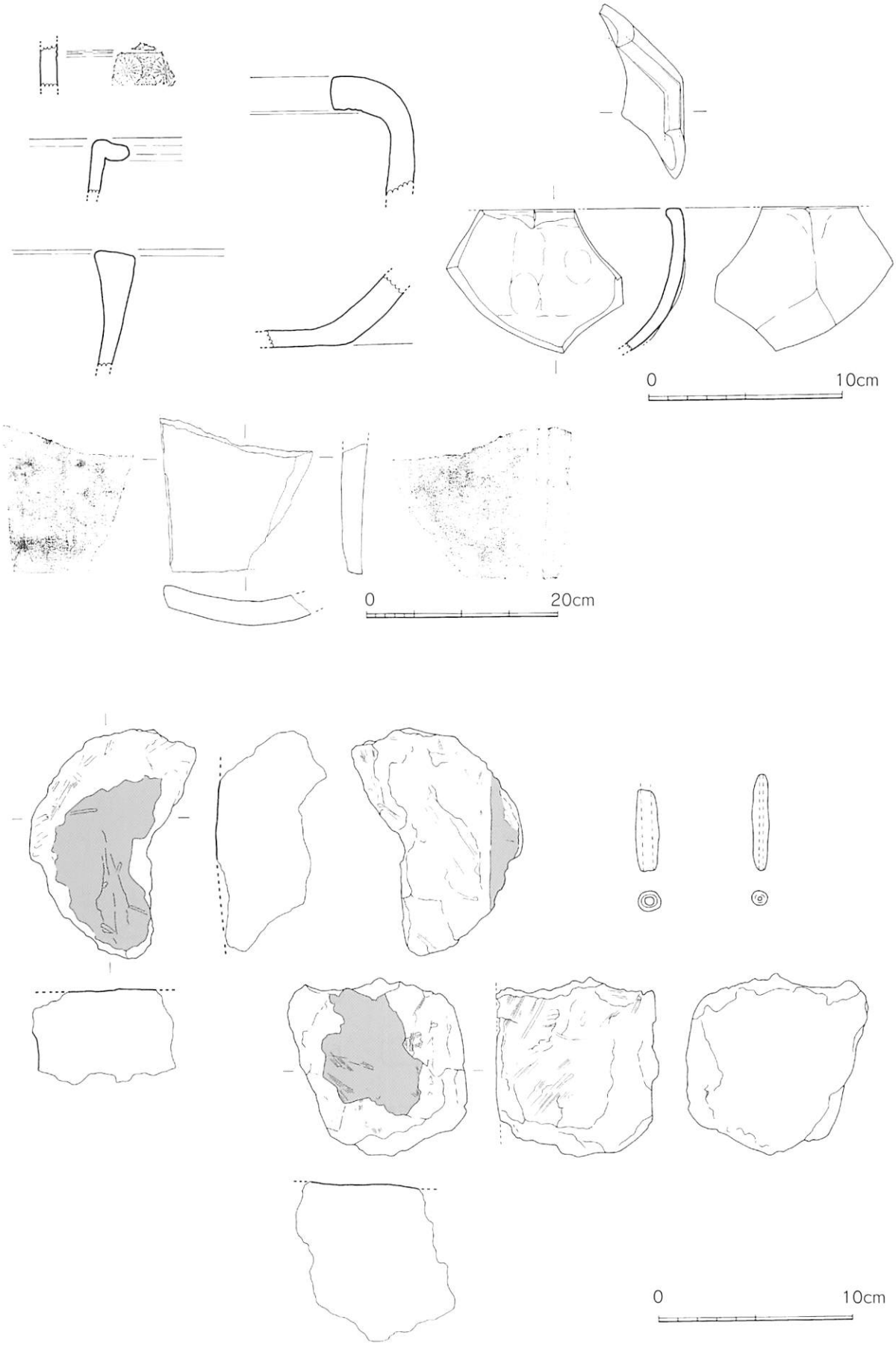
く小野分類の青磁蓮弁紋碗Ｃ群で、１６世紀前半。４は中国龍泉窯系青磁碗。灰青色の釉がかかる。５は皿。６は口径13,2cmの皿。８の外面は無紋で、内面に片肉彫りによる紋様をもつ１２世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁碗。９は青磁稜花皿。１０は中国製の白磁皿で端反り口縁部で、１６世紀。１１・１２は口縁部上端外面が玉縁状をなす１１世紀後半から１２世紀後半の白磁碗である。１４は中国製白磁で菊花紋をもつ。１５～２２は外面無紋で、内面には型押しによる浮き出た紋様をもつ１３世紀中頃から１４世紀初頭前後の白磁碗である。薄手の作りで、口縁部は2,5mm、体部下部で３～４mmである。２３～２６は褐釉陶器の壺で、１６世紀中国南部製である。

第２７図１～４は備前焼で、１・２・３は擂鉢、４は玉縁口縁の大甕である。玉縁の形状、頸部が垂直に立つ点から１３世紀中頃（伊藤晃他2004）に比定できる。５は朝鮮陶器の舟徳利底部である。第２８図１～６は瓦質土器で、１は火鉢で、二条の沈線が巡らされた下位に菊花紋の刻印が並ぶ。２は土鍋。３～５は風炉である。表面は磨かれて光沢がある。７は平瓦、８・９は壁土である。片面に壁の表の面が残り、藁・竹の圧痕がある。１０・１１は土錘である。

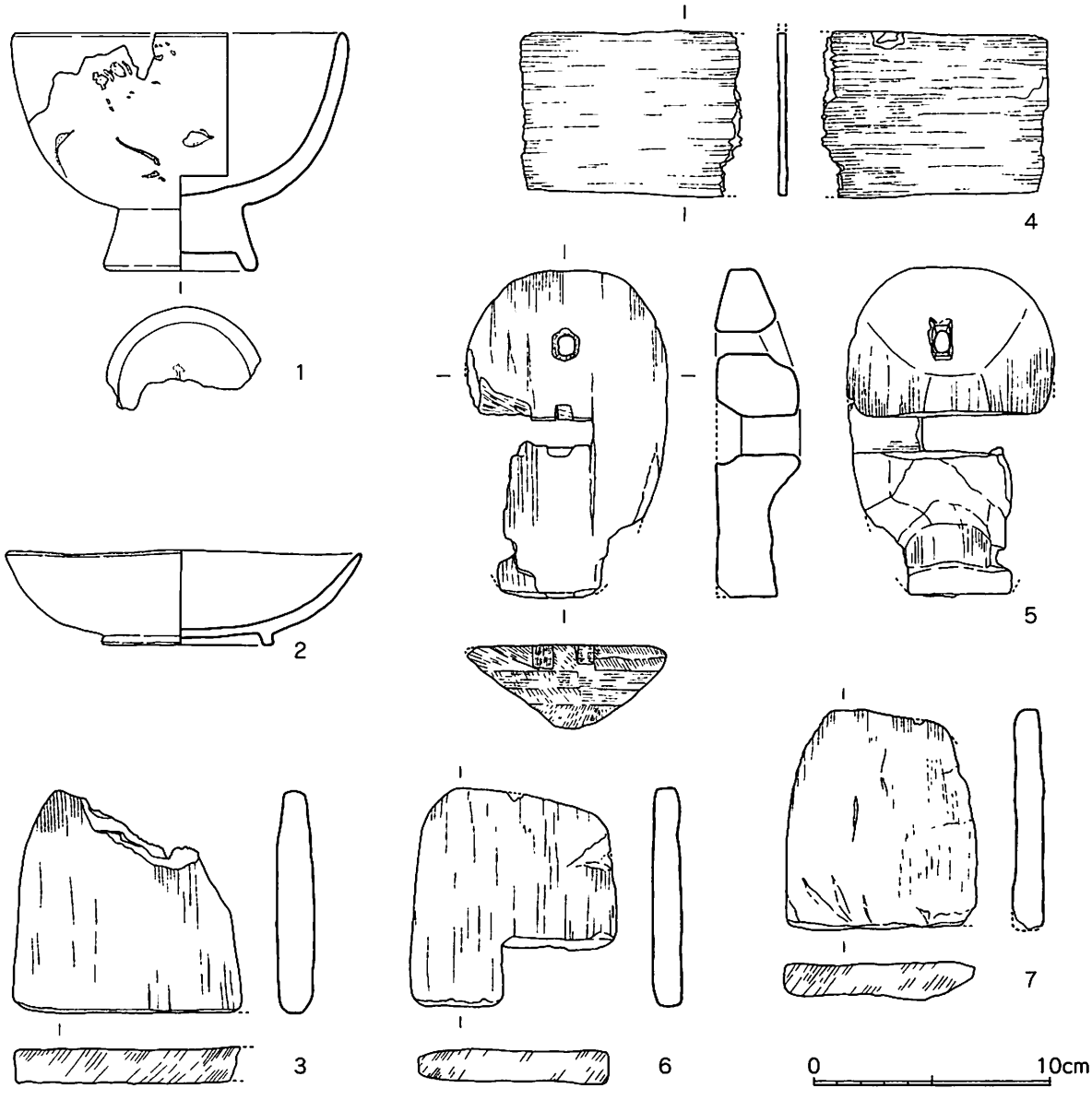
第２９図１～７は木製品である。１は漆器椀で高台部が厚く、内外面とも黒漆地で外面と外底面には赤色の紋様があるが、剥離が著しく紋様は不詳。２は漆器皿で、内外面は黒である。口縁部最大径は15,0cm、器高4,0cm、高台の最大径は7,7cm。３は折敷か。４～７は下駄である。４は踵部分が欠けており、全長は不明である。現状で長さ14,0cm、幅8,7cm、高さ3,5cmである。差し込み式の足を二つ必要とする型である。先端部は丸みを帯び、山状に盛り上がる。先端側の斜面に鼻緒を通す一孔があく。前方の足の差し込み部はほぼ残る（幅1,5cm差込みの深さ2,4cm）が、後方の差し込み部は片面（前方側の面）しか残ってない。足と足との中間にも彫り込み加工を施しており、この部分で前方から来た鼻緒紐を結ぶようにしている。５～７は差込み用の足部である。下底は真っ直ぐで、設置部は丸みを帯びる。５の場合、厚さ1,4cm、高さ9,5cm、幅9,6cm。６は厚さ1,2cm、高さ9,3cm、幅8,6cm。７は厚さ1,3cm、高さ9,4cm、幅8,0（＋α）cm。足部はすり減っているが、現状の高さ9,5cmのものを差し込むとすると、下駄本来の高さは10,5cmである。



第27図　SD19出土備前焼他実測図（S=1/30）



第28図　SD19出土遺物実測図（S=1/3　瓦 S=1/6）



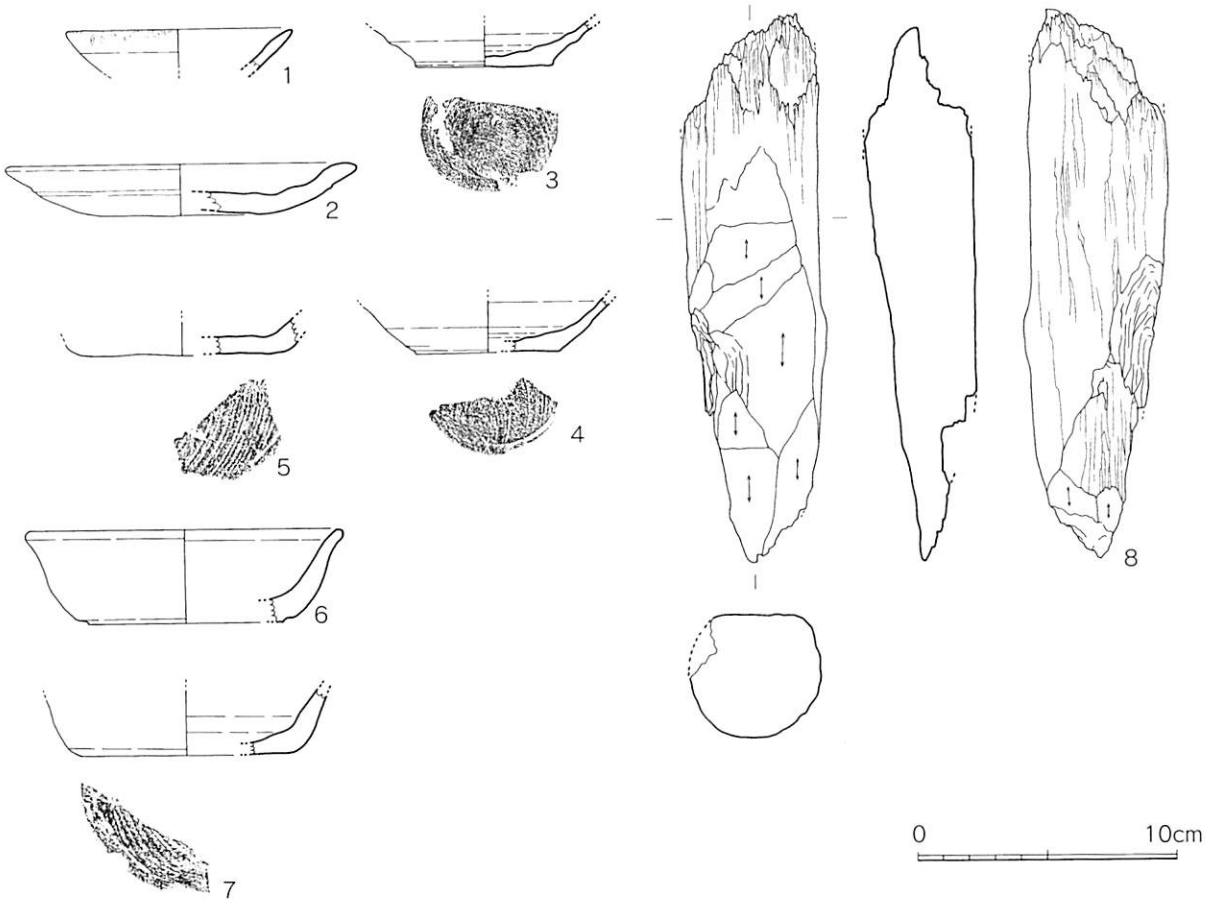
第29図　SD19出土木製品（漆器椀・折敷・下駄）実測図（S=1/3）

ＳＤ２３（第２４図）

初め、ＳＤ１９を下部で焼土混じりの溝として掘り下げた結果、遺構の規模が拡大し、下部において二条に分かれたため、東南部をＳＤ２３として区別したものである。ＳＤ１９を加え、下部で確認した溝状遺構の幅は約3,2ｍ、深さは最大４５㎝である。

出土遺物（第３０図１～７）

１・２とも京都系土師器で、２の口縁部外面のなでは板状具を用いている。３～５は内面に段状のなで整形痕を残す在地系土師器皿。４は口径12,4cm、６・７は在地系土師器皿で、体部下部は厚く口縁部先端に向かって薄くなるもの。内面は段状のなで調整を残す。８は焼け残った杭である。下端は斧によってか尖らされ、上部は燃えている。長さ21,4cm、径5,2cm。

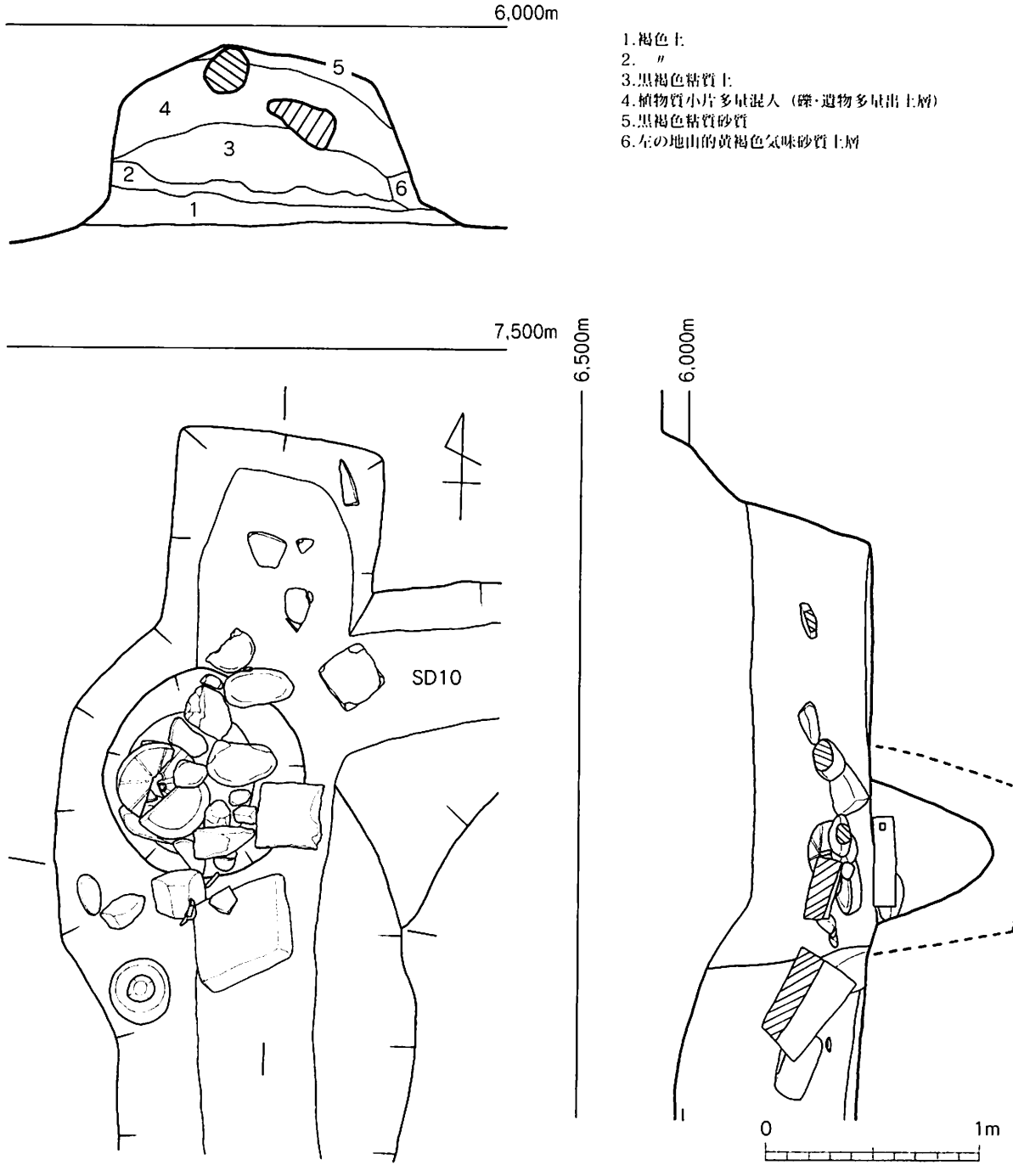


第30図　SD23出土遺物実測図（S=1/3）

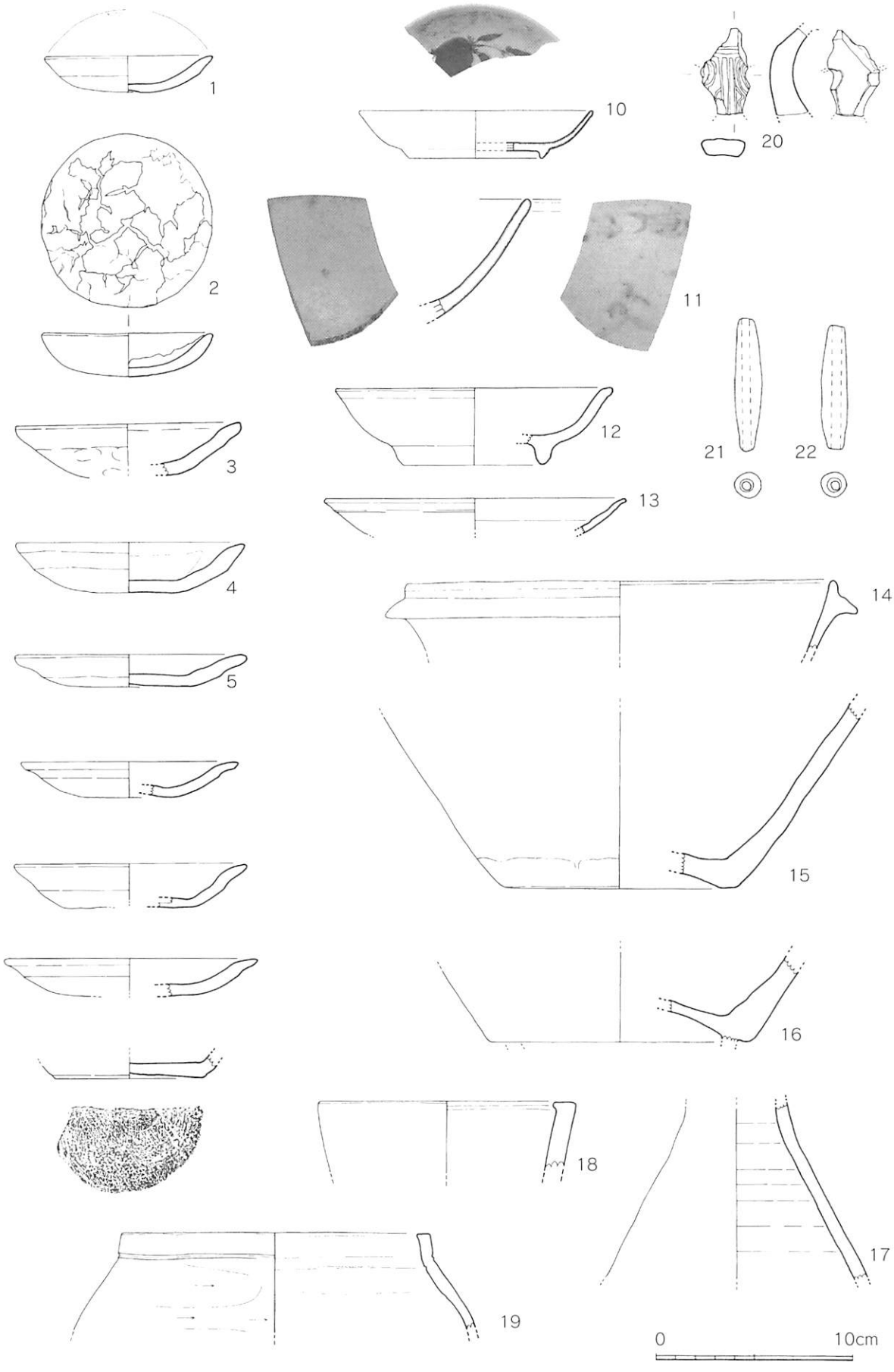
ＳＥ１（第３１図）

４Ｃ区と５Ｃ区の境界に位置し、ＳＤ１０・ＳＤ１１を切って掘り込まれた井戸である。出土遺物から16世紀後葉に位置づけられる。床面は砂層で湧水層（標高4,95m）となっており、調査の際も水中ポンプで排出しながら掘り下げた。井戸枠等は存在しない。検出面の平面形は不明だが、ＳＤ１０・ＳＤ１１に切り込んだ形は円形である。土層断面図（第３１図）を作成した位置は中心から外れていたが、埋土に焼土はなかった。南北方向の断面図でも分かるとおり、最終段階には井戸底面よりも上面は広がっていたようで、多量の遺物が投げ込まれた状態で出土した。

出土遺物（第３２図１～２２・第３３図１～５・第３４図１～１３・第３５図１～５・第３６図１・第３７図１～６）



第31図　SE1遺構実測図（S=1/30）



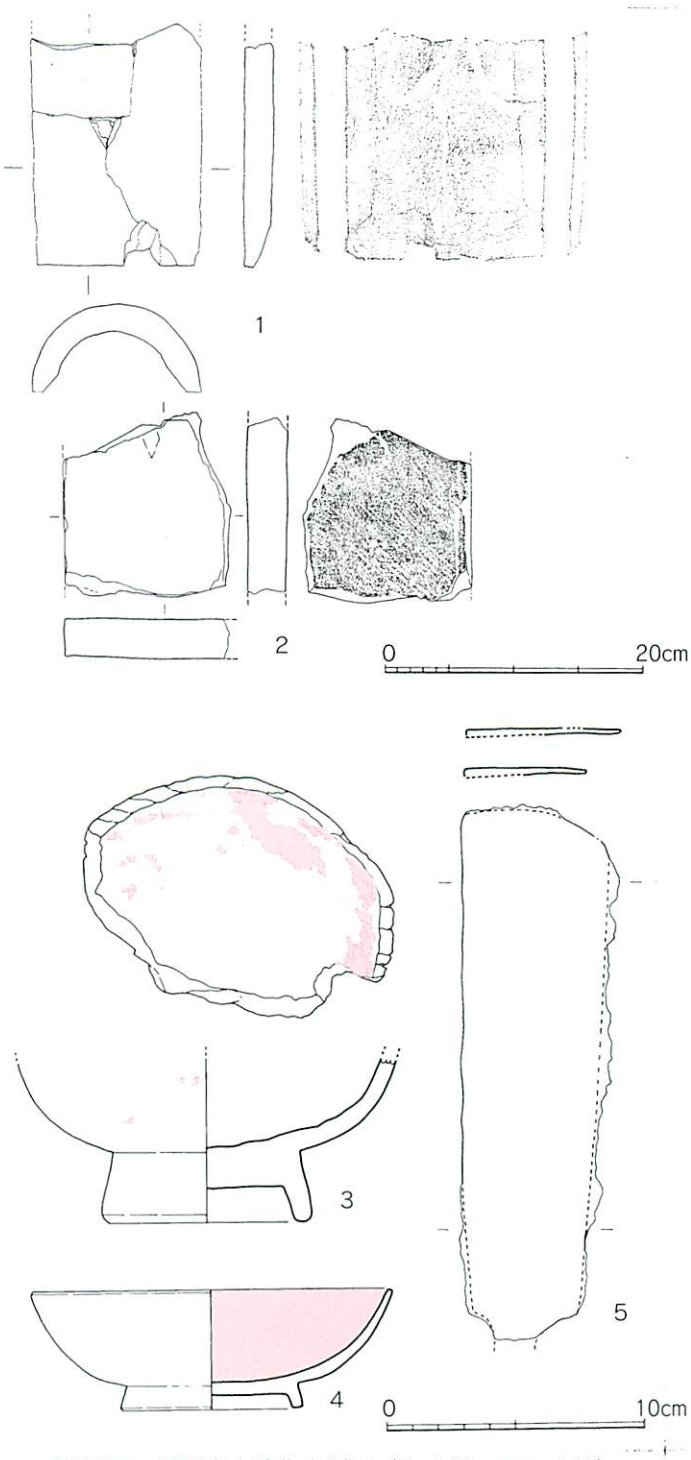
第32図　SE1出土遺物実測図（S=1/3）

第３２図１～８は京都系土師器皿である。１の口縁部内面には煤が付着し灯明皿として使われたことが分かる。２の内部には褐色の糊状の固着物が貼り付いている。３は口径11,6㎝。５～８は京都系土師器皿で２期の特徴を示す。９は在地系土師器皿で外底面に糸切り後の板状圧痕を残す。１０はＥ群の景徳鎮窯系青花で16世紀後葉。１１は漳洲窯青花。１２は龍泉窯系青磁碗。口径14,2㎝。１３は白磁皿で口径15,5㎝、厚さは４㎜未満と薄い。１２世紀代のものか。１４は暗褐色の瓦質土器鍋。突帯の最大径は24,1㎝。器面調整はすべて横方向のなでである。１５・１６は褐釉陶器壺。１７は備前焼陶器壺である。表面は茶色を呈する。１８・１９は瓦質土器。１８は口径13,3㎝、体部は直線的に開き、口縁部内面上端は内側に突出している。灰色を呈する。１９は鉢で、口縁部内外面及び胴部内面は横方向のなで調整、胴部外面は横方向のへら削り調整している。器体は淡橙褐色を呈する。２０は元代の青磁器台である。四足の上にこの破片に該当する門飾りが付く。透かし状の窪みが二つ側面につく。外面には凸線による如意紋が描かれている。胎土は灰白色。全面に緑灰色の釉がかかる。類例が中国青田県鶴白鎮の穴蔵から出土している（P128写真参照）。２１・２２は土錘である。

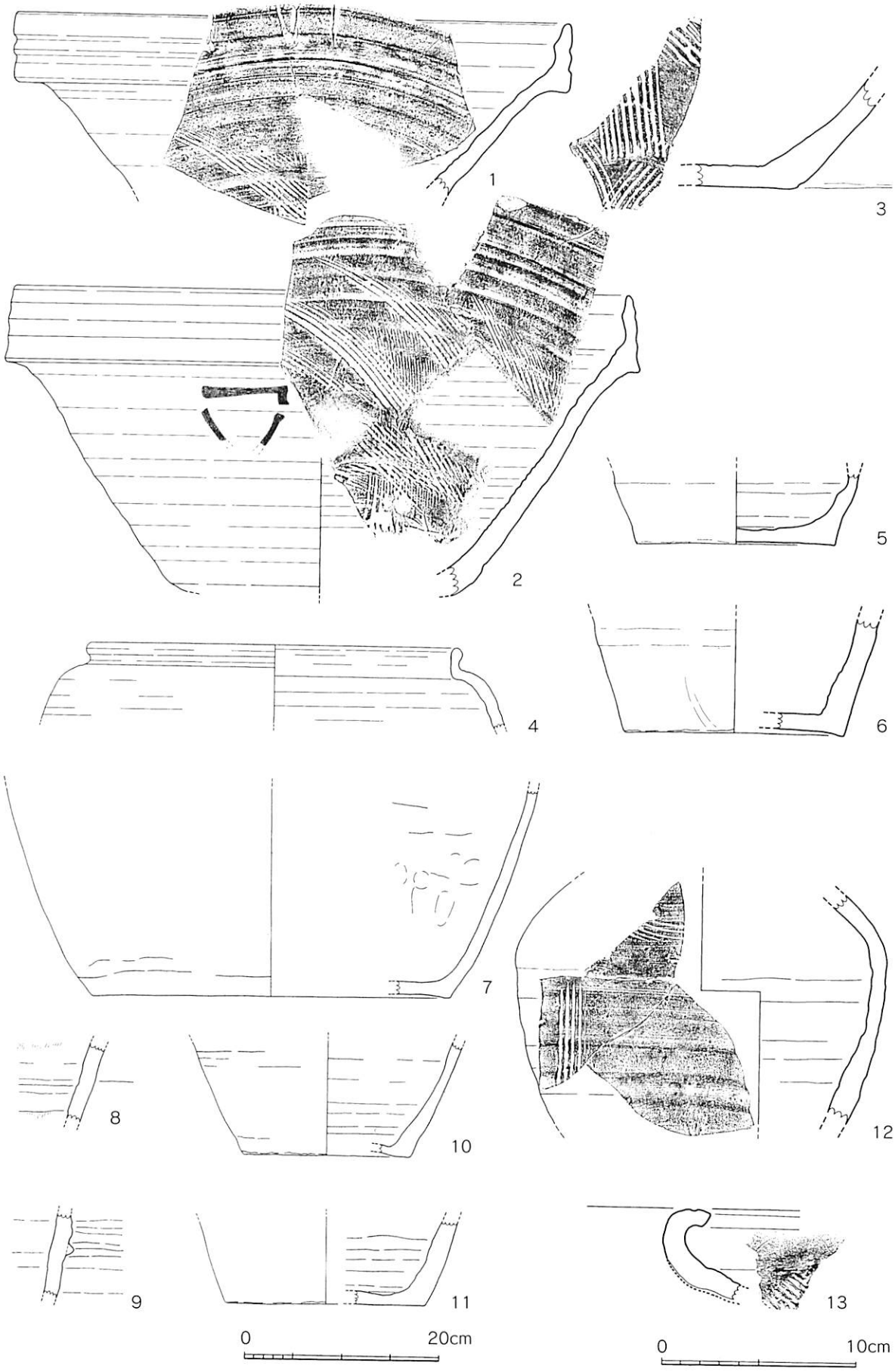
青磁器台

第３３図１は丸瓦、２は塼瓦。３は漆器椀で、内面には黒漆の上に部分的に赤漆が残存している。外面には黒漆の上に赤漆で何かを描いているが不詳。現状の最大径は14,8㎝、高台上部の径は7,4㎝、高台最大径は8,2㎝、高台の高さは2,8㎝である。４は漆器皿で、外面はすべて黒漆塗りで内面は赤漆塗り、口縁部最大径は14,1㎝である。５は鉄製板状製品である。図の下端に柄状の部分があり、包丁の可能性がある。

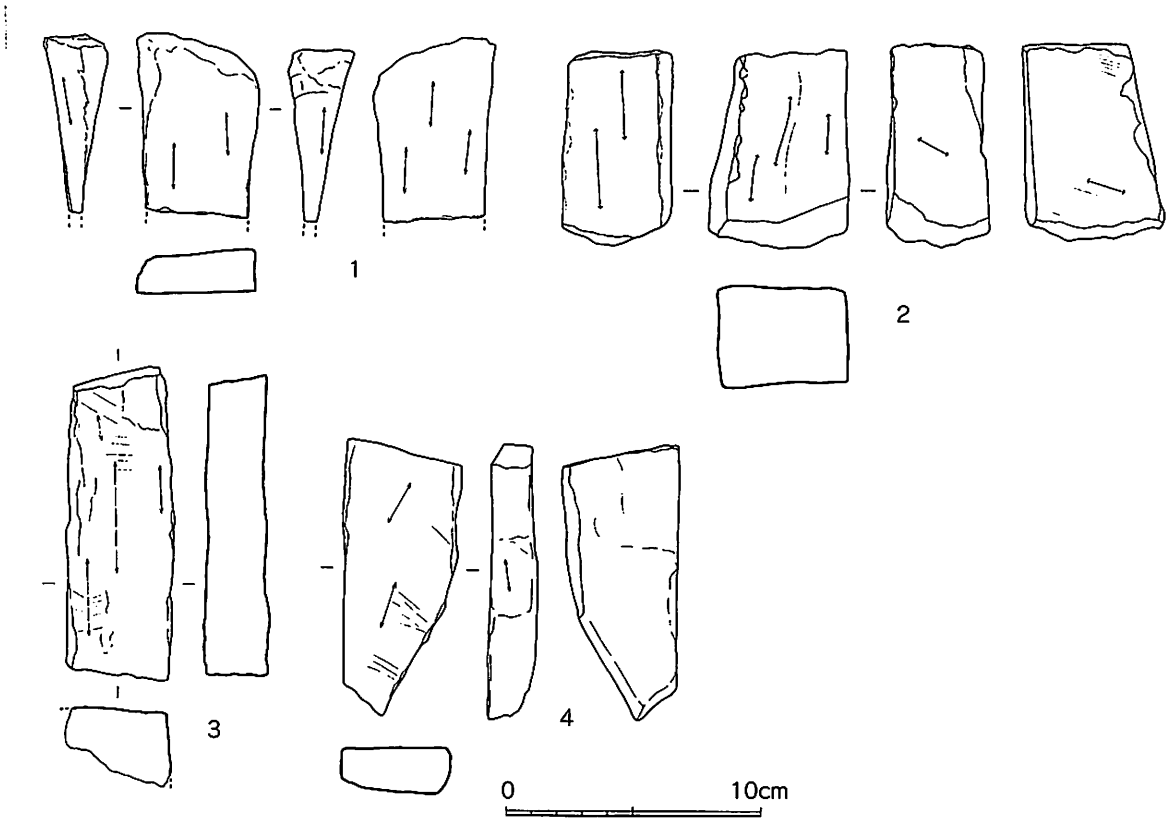
第３４図１～１２は備前焼である。３は擂鉢の体部下部から底部の破片で、１０本からなる櫛状工具をつかってカキ目を入れている。４は復元口径38,8㎝の甕で、頸部は短く、口縁部はやや丸みをもつ。７は甕の胴下部から底部である。５・６・１０～１２は焼締陶器壺。１２は櫛状工具に



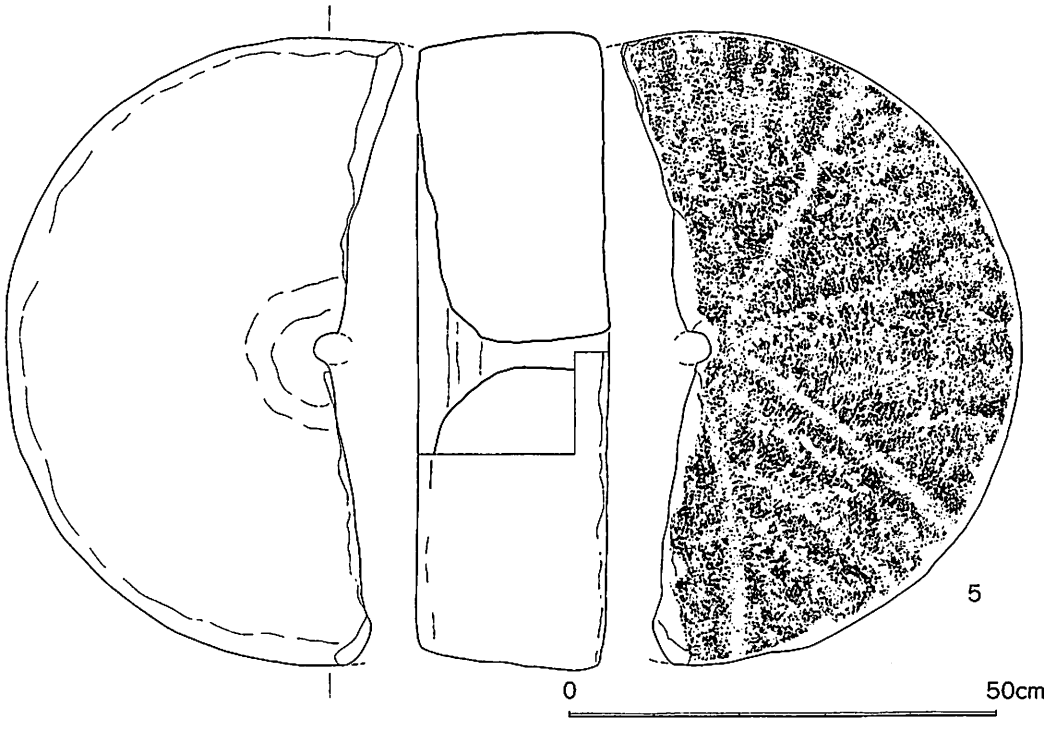
第33図　SE1出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



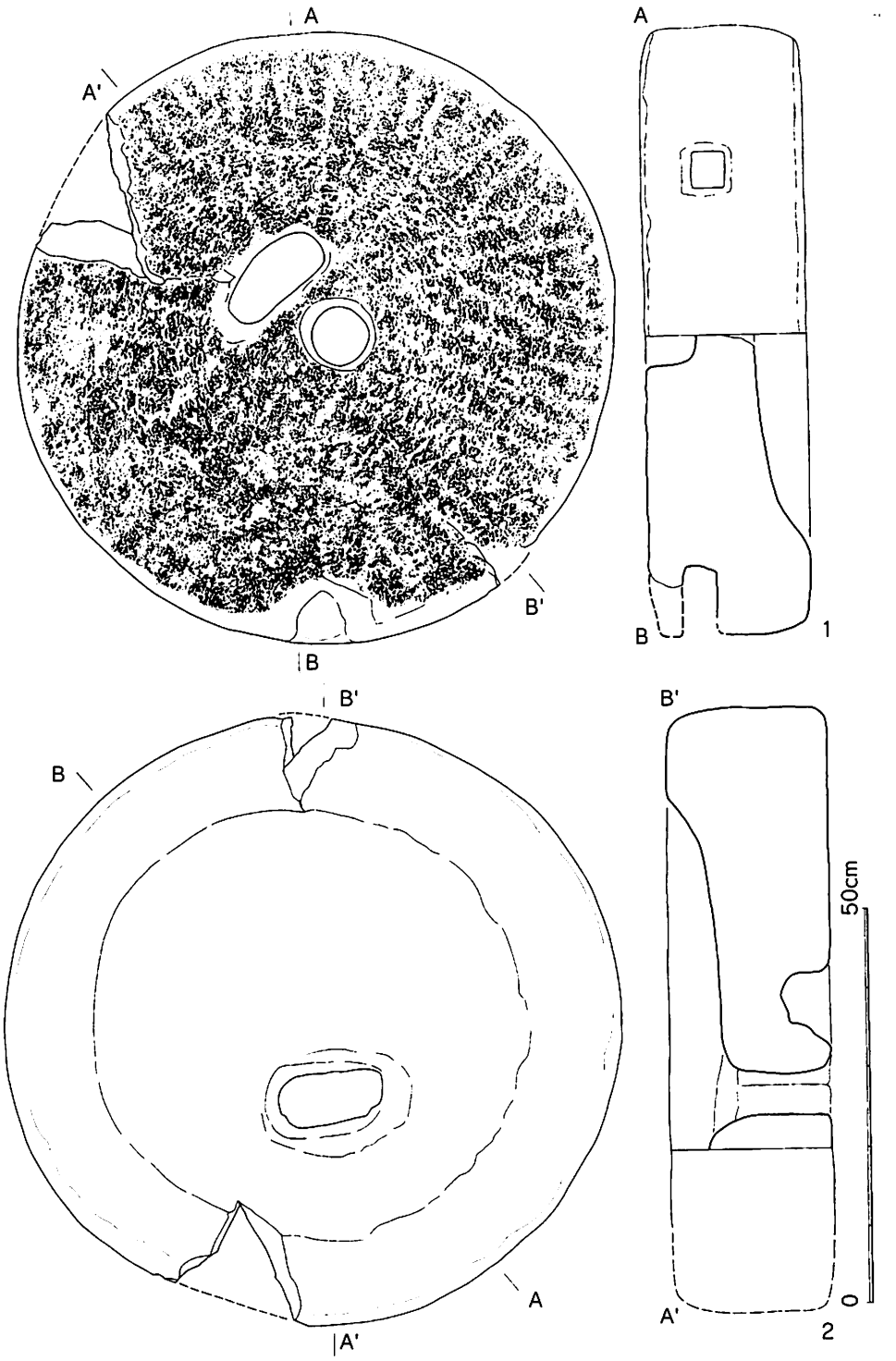
第34図　SE1出土備前焼他実測図（S=1/3　4,7～11 S=1/6）



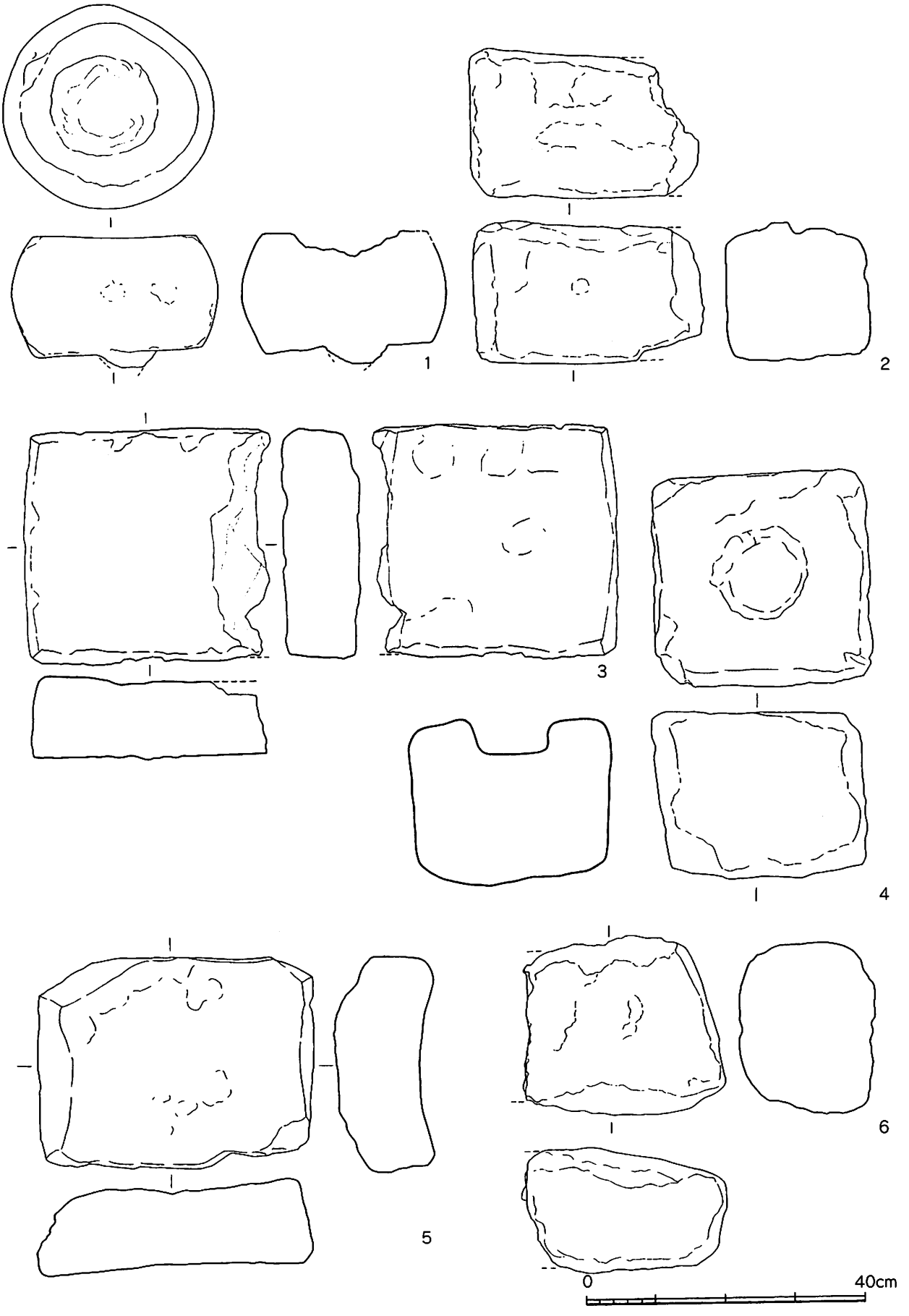
第35図　SE1出土石臼実測図（砥石S=1/3 石臼S=1/9）



第35図　SE1出土石臼実測図（S=1/9）



第36図　SE1出土石臼実測図（S=1/9）



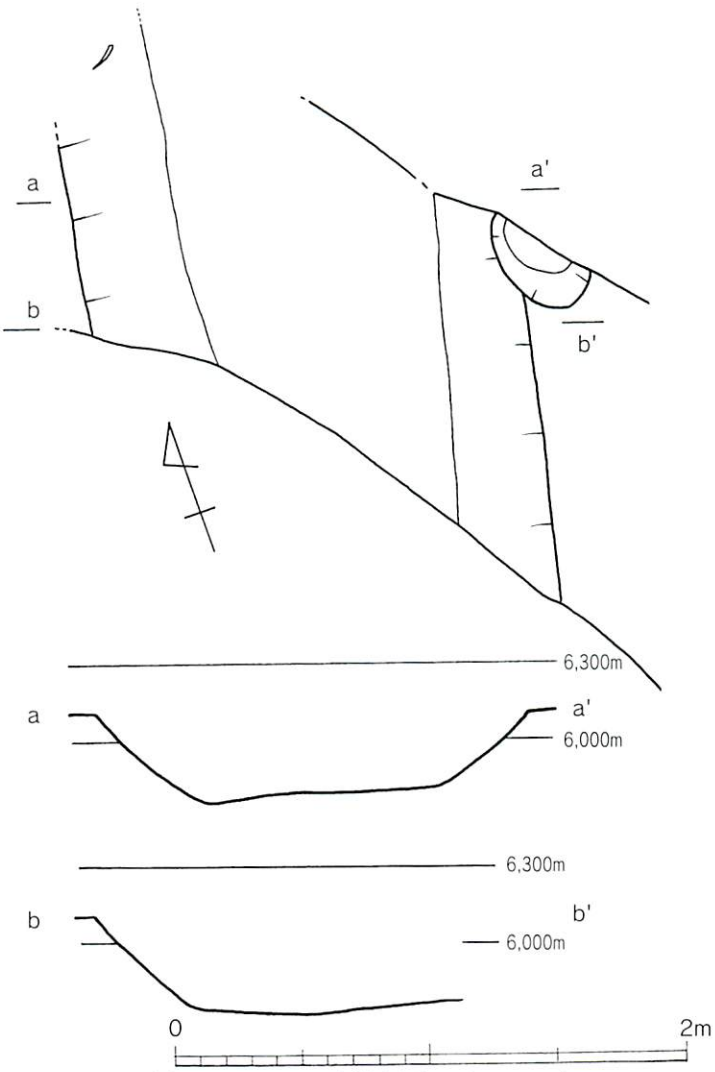
第37図　SE1出土五輪塔部材実測図（S=1/8）

ハンネラ　より波状紋を肩部に、胴部に縦方向の紋様をいれている。１３はタイ製土器ハンネラで、口縁部上面に一段、沈線が廻り、肩部には叩き痕がある。胎土に砂粒が多い。

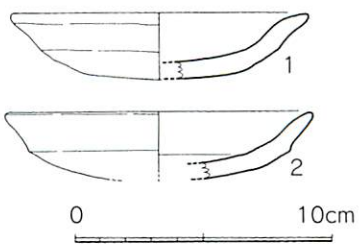
第３５図１～４は砥石で、１は立方体の四面を使用するが、半切している。２も四面を使用するもので、両端を欠失する。３は大型の砥石らしく、割れのため研磨面が直角関係の二面しか残らない。４は扁平な砥石である。５は石臼。

第３６図１・２は同一個体である石臼の上臼の上下両面の実測図である。直径は38,8cm。

第３７図１～６は五輪塔部材。すべて凝灰岩製。



第38図　SD26遺構実測図（S=1/30）



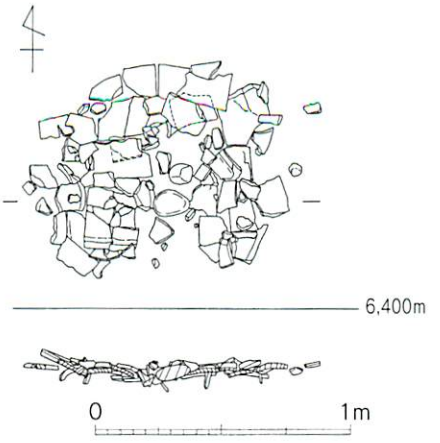
第39図　SD26出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＤ２６（第３８図）

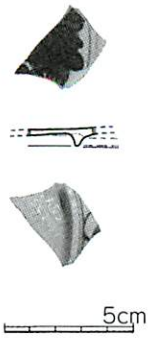
Ｊ１２区にあり、北北東から南南西に走る溝状遺構か。遺構を確認したのは地山面であったが、埋土上部がレンズ状に堆積しているので掘込み面は土層図によればやや上位のようである。幅1,7ｍ、深さは最大３５㎝である。京都系土師器が出土している。

出土遺物（第３９図１・２）

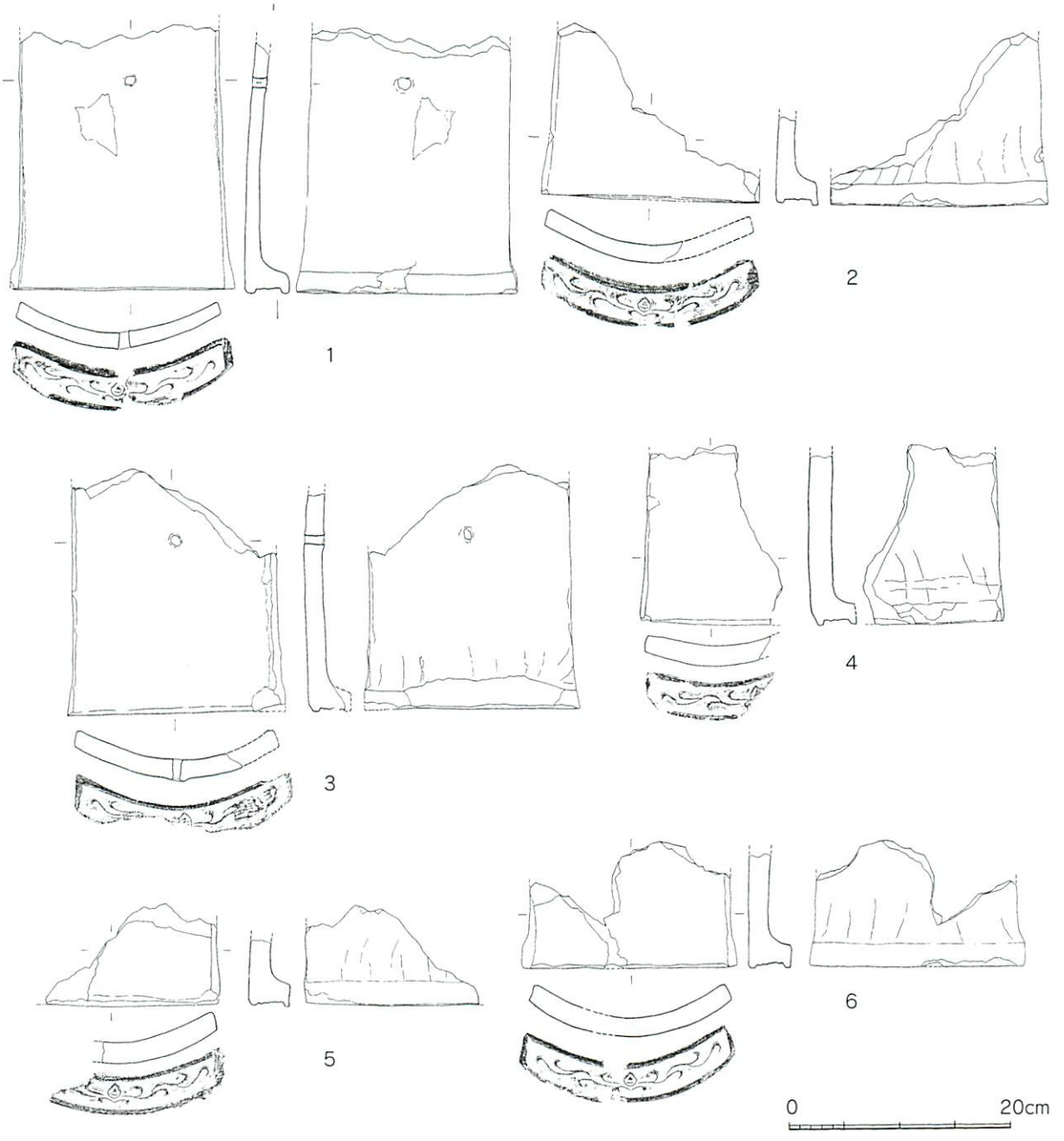
１・２とも京都系土師器で、１６世紀後半頃か。



第40図　SX2遺構実測図（S=1/30）



第41図 SX2出土青花実測図(S=1/3)



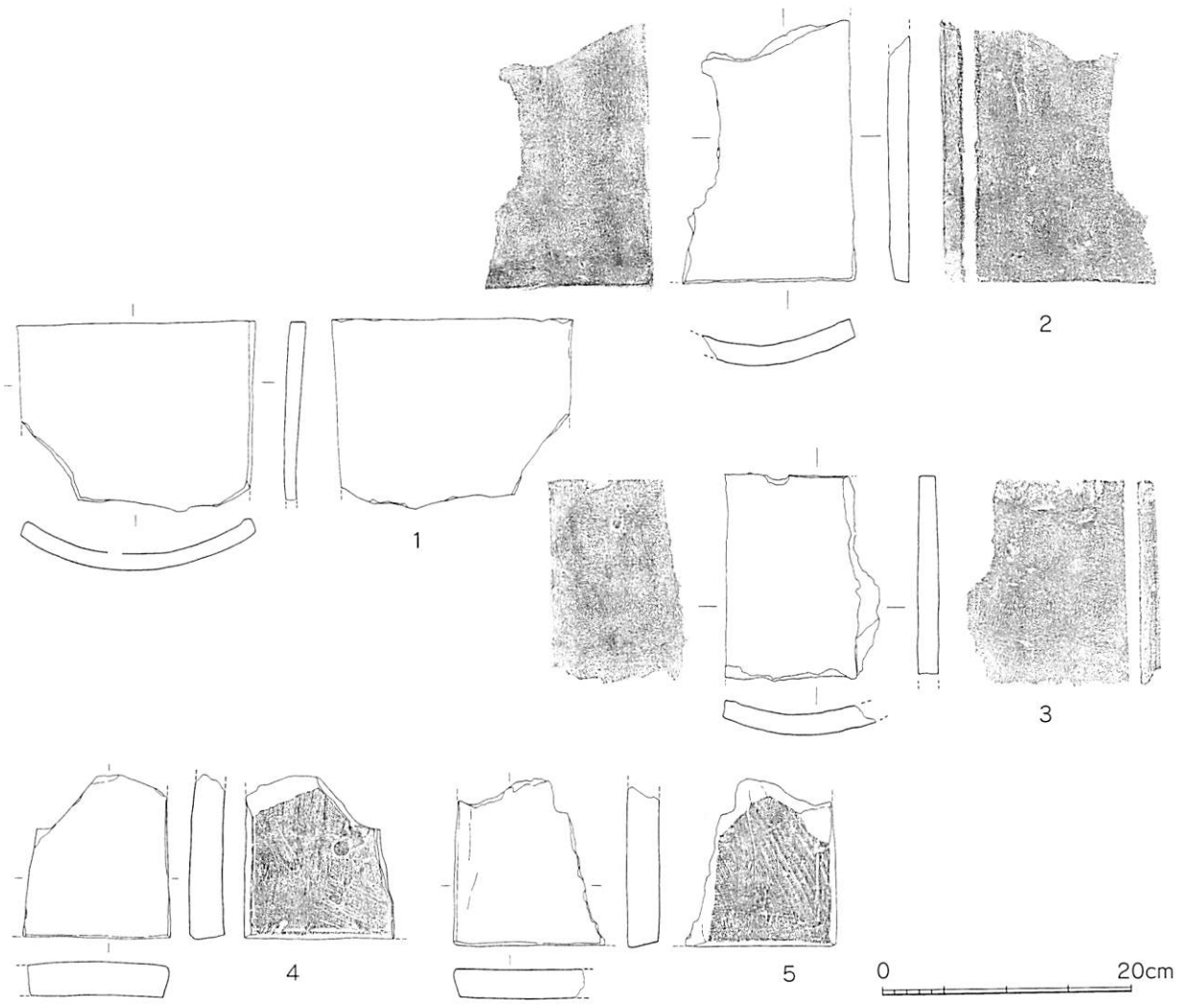
第42図　SX2出土瓦実測図（S=1/6）

ＳＸ２（第４０図）

１区東部の10Ｈ区東部で検出した瓦溜まりである。平面円形状態で薄く散布していたので、浅い土坑に入っていたものか。標高約6,1ｍ～6,2ｍに検出した。詳しい時期は分からないが、地山直上の包含層を下げて検出したので、ここで紹介しておく。

出土遺物（第４１図１・第４２図１～６・第４３図１～５）

瓦礫以外の遺物は青花皿１点（第４１図１）だけである。ＳＸ２の瓦は６点の軒先瓦と他にも平瓦はあるが平瓦３点、塼瓦２点を図示した。紋様は中心飾りに向かって右側に上向き唐草が二つ、下向き唐草が三つある。左端二つの唐草が接近しているのに対し、右端の二つは離れている。また、中心脇の上向き唐草と外側の下向き唐草の関係に差がある。すなわち右の方は接触しているのに、左のは相互に離れている。これらの点から見ると、ＳＸ２から出土した軒平瓦は全て同一の型を用いて制作されていることが分かる。



第43図　SX2出土瓦・塼実測図（S=1/6）

5．1区中層（古）の遺構と遺物

（1）分布状態　１６世紀前葉前後のもの。1区では浅い溝状遺構(SD10）とそれに重複する溝状遺構（SD11)、土杭（SK12・SK14・SK17）を検出した。多数の柱穴を1区東部で検出したが、所属時期不詳のため、第85図に一括したことを付記しておく。

（2）遺構と遺物

ＳＫ１４（第４６図）

近世の溝状遺構ＳＤ３２に切られ、ＳＫ１２を切る形で９Ｆ区に位置する土坑である。検出標高は6,0ｍで床面は5,8ｍである。調査区外に延びており全体の形は不明。出土遺物には若干時期差が認められるので、あるいは上層に含めるべきかも知れない。

出土遺物（第４７図１～１０）

１～４は京都系土師器の小皿と杯である。５は在地系土師器皿で、体部は上に向かって尖り、「S」字に屈曲する。糸切り底である。体部下部が厚く、口縁端部に向かって細くなり、１４世紀中葉から後半の特徴をもつ。６は中国南部製の褐釉陶器である。胴部最大径は14,0㎝。表面採集した７は同一個体である。畳付きから外面に褐色の釉がかけられている。８は瓦質の火鉢である。三角突帯の間に双頭蕨手流雲紋を連続的に押捺するもので、暗灰色を呈する。器面は丁寧にへら磨きしている。９は青花碗である。１０は糸切りの底部から直線的に体部が開くもので、１５世紀後葉から１６世紀前葉のもの。

ＳＤ１０（第４８図）

１区西部の４Ｃ区から５Ｃ区に東西方向に走る幅2,6ｍから３ｍ強の溝状遺構である。深さは西部で３０㎝、東部では別の溝状遺構と重複している。ＳＤ１０との新旧関係を平面的につかむことはできなかった。４Ｃ区と５Ｃ区との境界に北側に下がる段差があるが、これはＳＤ１０上部の自然崩壊過程で上部が広がったものであろう。

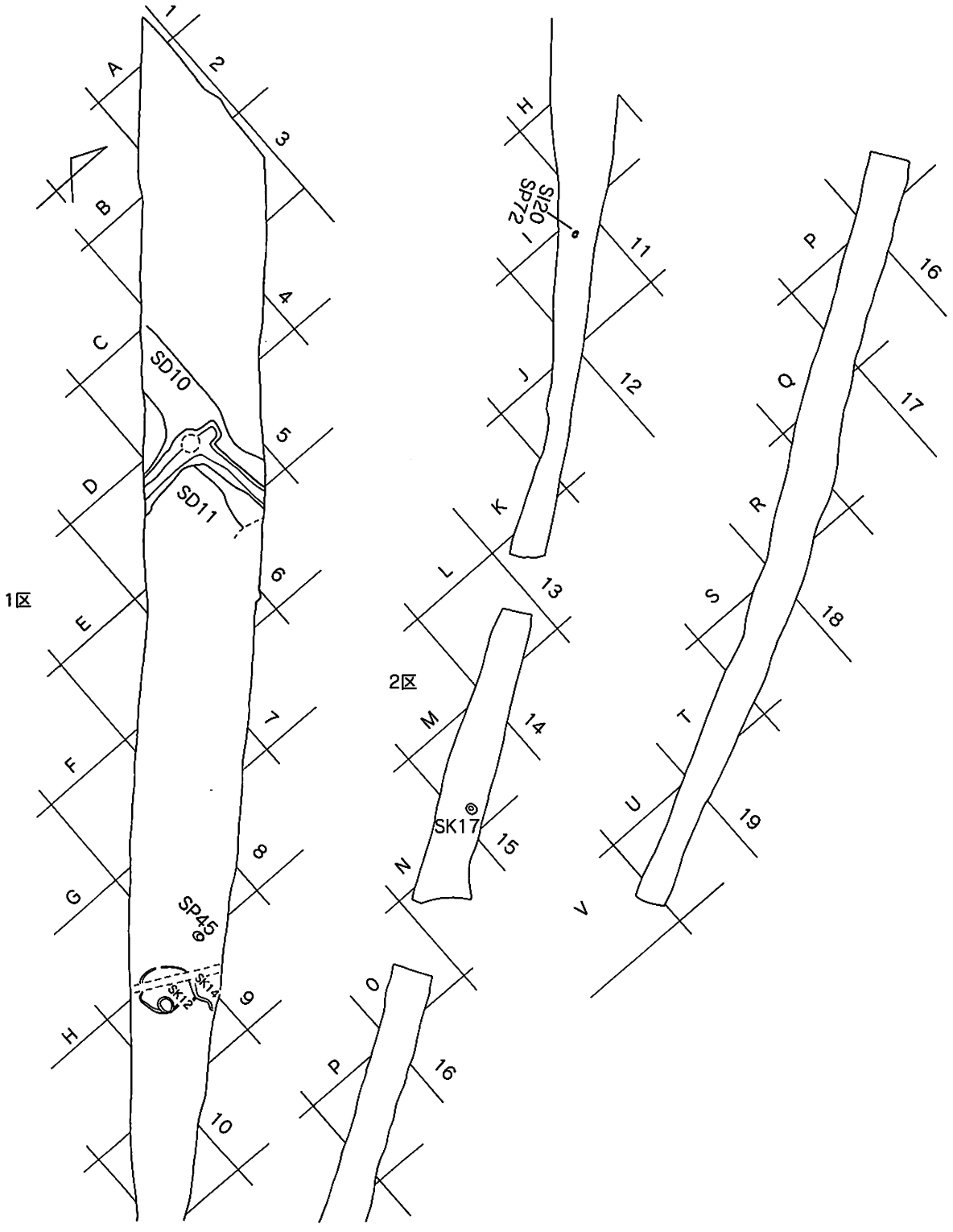
出土遺物（第４９図１～１３・第５０図１～２５）

第４９図１～４は埼瓦である。５・６は京都系土師器、７～１２は在地系土師器である。１１は内面に段状のなで調整痕が残り、胎土に石英を含む。１２は糸切り１３は灰白色の色調で底部は３㎜、体部で４㎜以下と薄手である。外底面には糸切り後の板状圧痕が付く。大内系土師器の搬入品であろう。

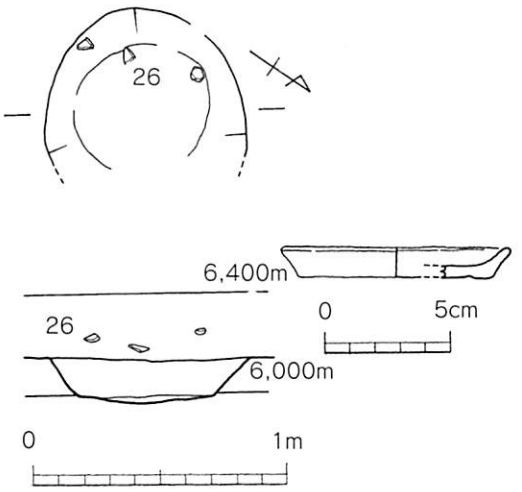
第５０図１～４は青花。１は鉢。２はいわゆる饅頭心碗で、１６世紀後葉。５・６・８・９は青磁。５は鎬蓮弁紋の龍泉窯の碗、６は櫛描き紋のある同安窯系碗。７・１０～１２は白磁。７は内面に雷紋と葉紋を型押しし、口縁部上端を釉剥ぎした後、茶色に施紋している。厚さ３㎜弱の薄い作りである。類例がＳＥ１で出土しているが、茶色施紋の有無で相違点がある。１３は瓦質土器。突帯を貼り付けた下位に菊花紋を連続的に刻印している。１７は朝鮮陶器の舟徳利。１８は備前焼壺。１９は大型の葉紋を刻印した瓦質土器の火鉢。２２～２５は瓦。

ＳＤ１１（第５１図）

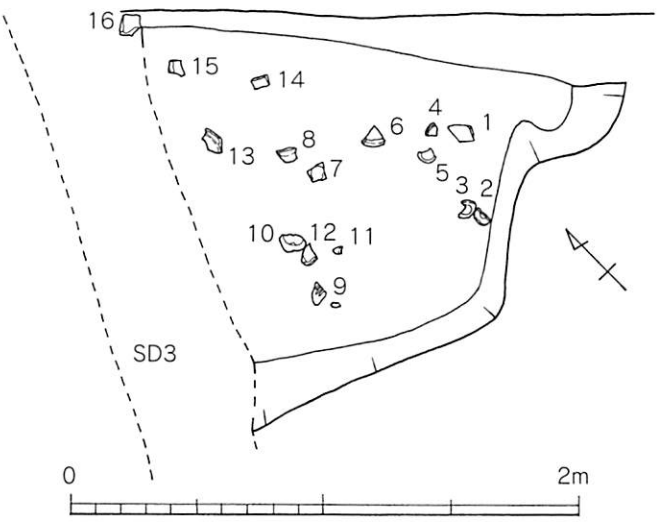
１区の西部、Ｃ５区・Ｄ５区に位置し、ＳＤ１０とＳＥ１と重複した状態で検出した。検出面で前後関係は把握できなかったが、出土遺物の年代観からみてＳＤ１０を切るらしい。ＳＥ１に切られていることはその内部に投げ込まれた遺物の状態から判断できる。ＳＤ１１は平面的には南北方向の溝が東西方向の溝の交点よりも飛び出ており、二つの遺構が重複した結果とも思える。交差する部分にSE1が掘り込まれているため、前後関係及びその有無を確認できなかった。


1区
2区
SD10
SD11
SP45
SK12
SK14
SK17
SP72
SP20
A
B
C
D
E
F
G
H
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19

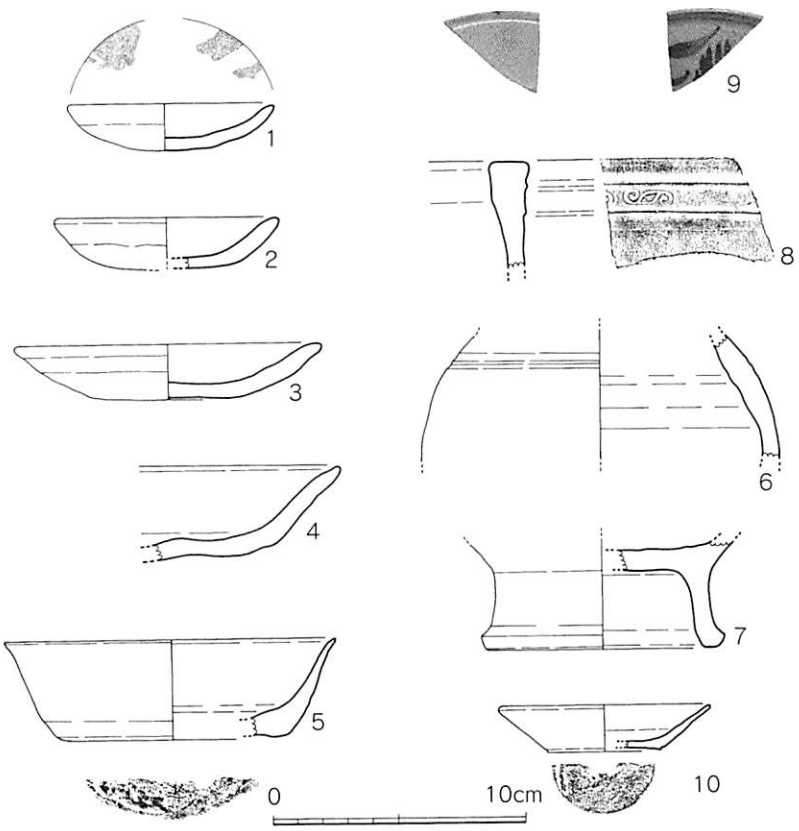
第44図　中層（古）分布図



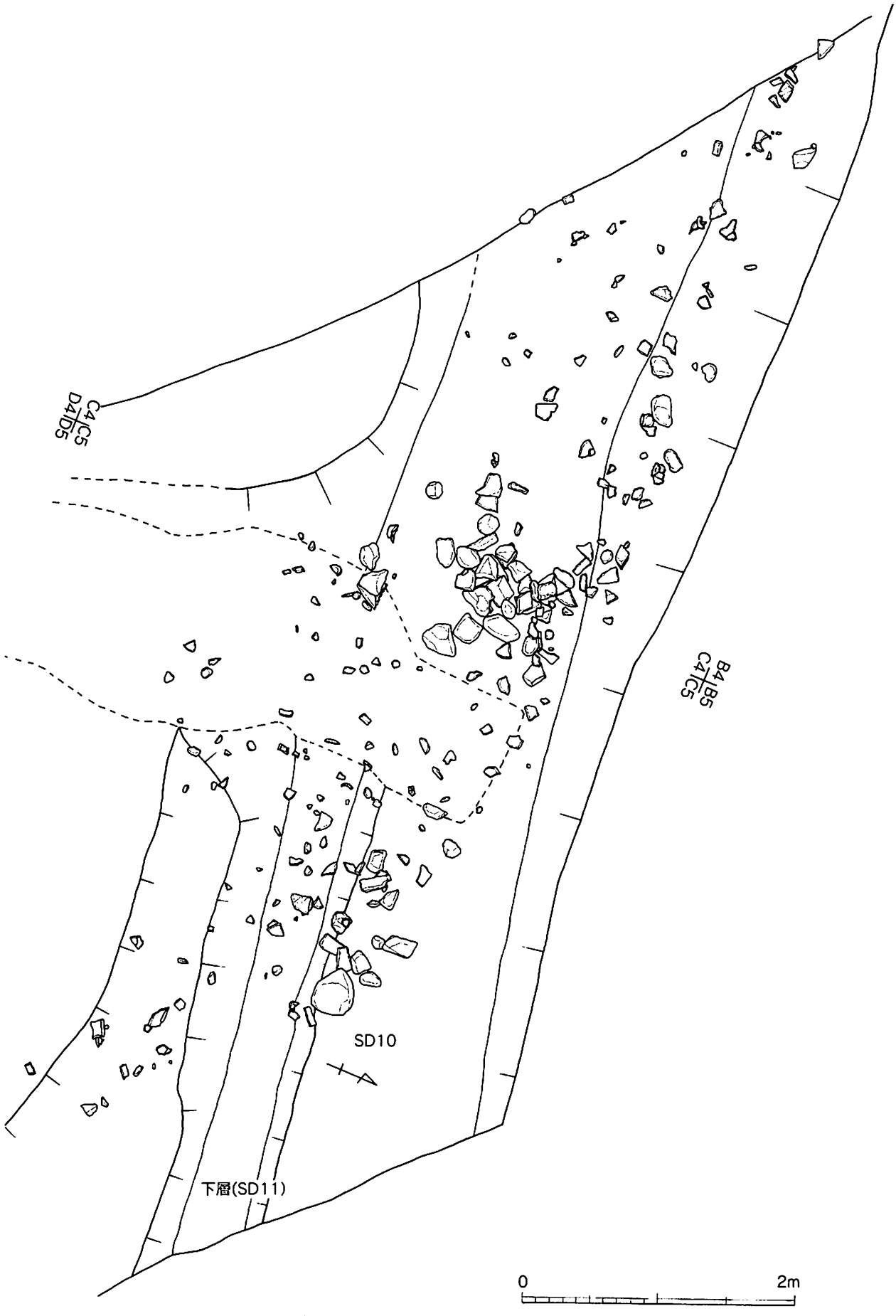
第45図　SP69遺構出土遺物実測図（遺構S=1/30,遺物S=1/3）



第46図　SK14遺構実測図（S=1/30）



第47図　SK14出土遺物実測図（S=1/3）

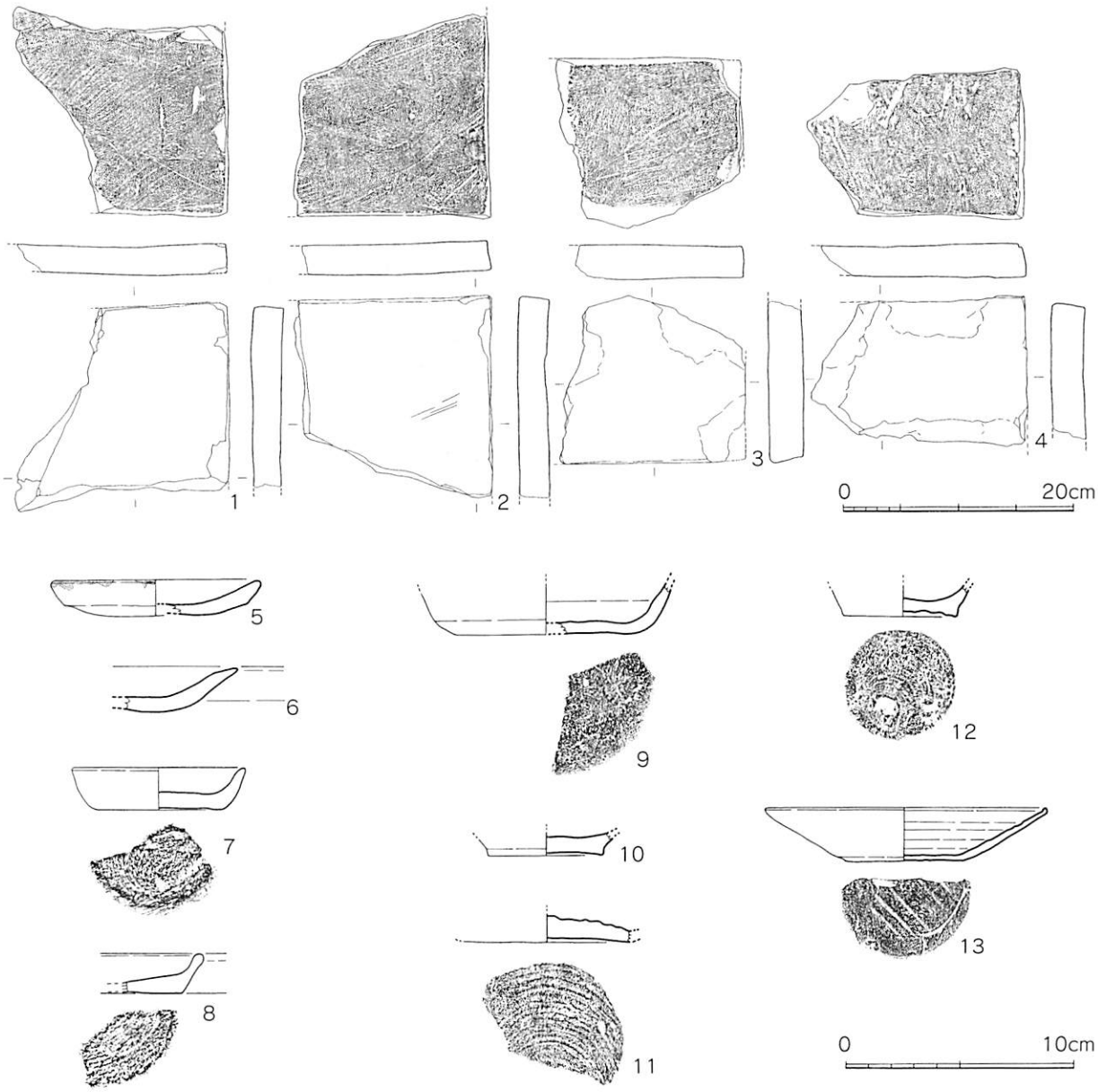


第48図　SD10遺構実測図（S=1/40）

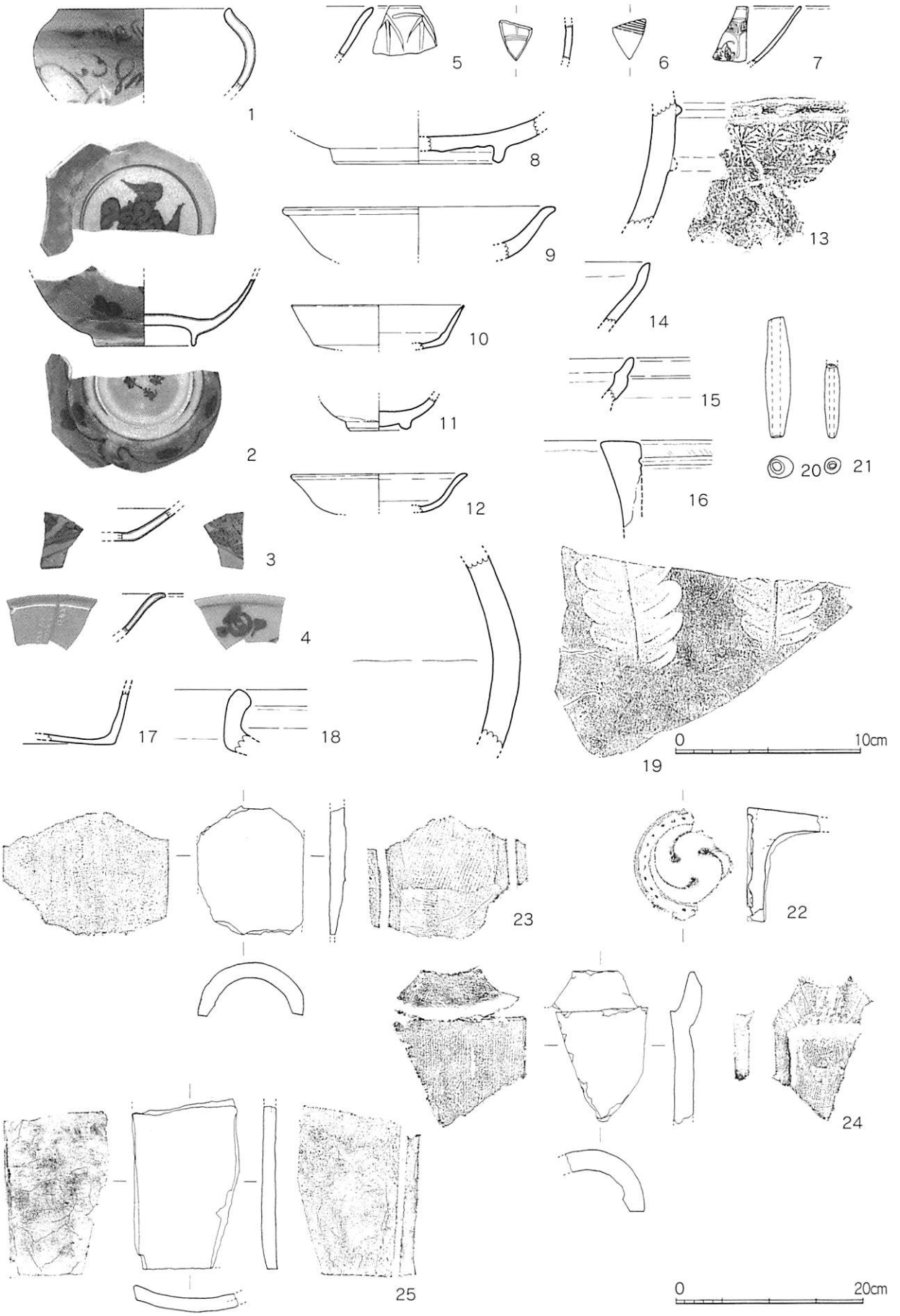
出土遺物（第５２図１～１６）

１～７は土師器皿で、１は内面に段状のなで調整があり、糸切り離し底部であろう。口径8,6cm。２は糸切り離しの底部で、口唇部に煤が付着しており、灯明皿として利用したものである。口径7,5cm。３～７は京都系土師器。４は内外面に部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。５は口径15,8cm。６は側面に羊歯の圧痕が付く。口径16,2cm。７は部分的に煤が付着しており、灯明皿として使われている。口径12,3cm。８・９は青花碗で、どちらも口縁部内面上部に紋様帯をもつ。９の内面には四方襷紋、外面には草花紋を描く。１０は龍泉窯系青磁碗で外面に沈線紋をもつ。二次的に焼かれたのか、内面に煤が付着し外面に気泡が認められる。１１は中国製褐釉陶器で、両面全体に釉薬がかかる。１２は土製の錘。１３は両端を欠損した砥石で両面と側面の一つに研ぎ面がある。１４は塼瓦で、右図に示す裏面には紐を利用した切り離し痕跡（コビキ痕）がある。その後、板状具によって不定方向になで調整を加えている。１

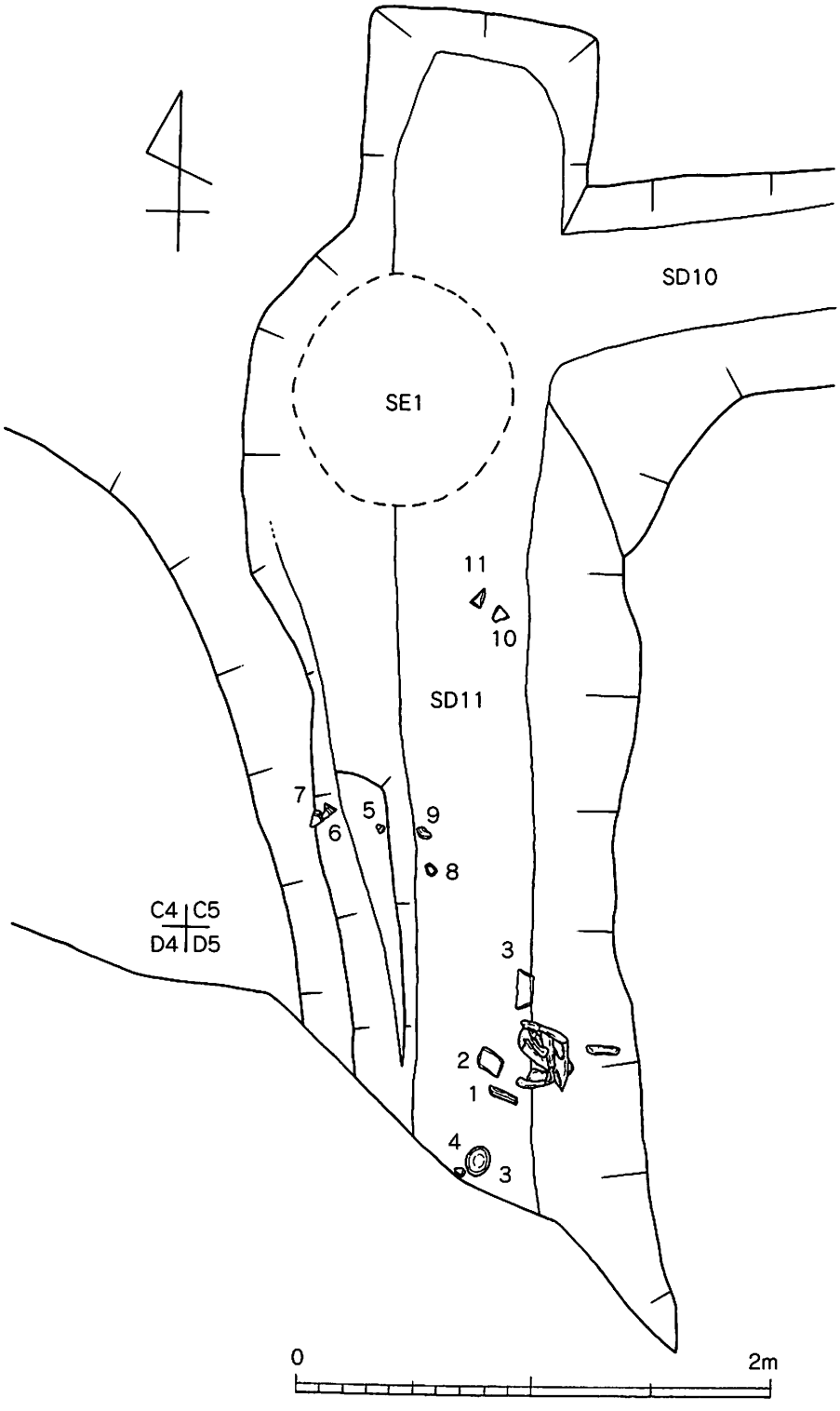
燧石　５は備前焼甕。１６は黄褐色の石材で、一部に自然面を残す燧石である。圭化木か。



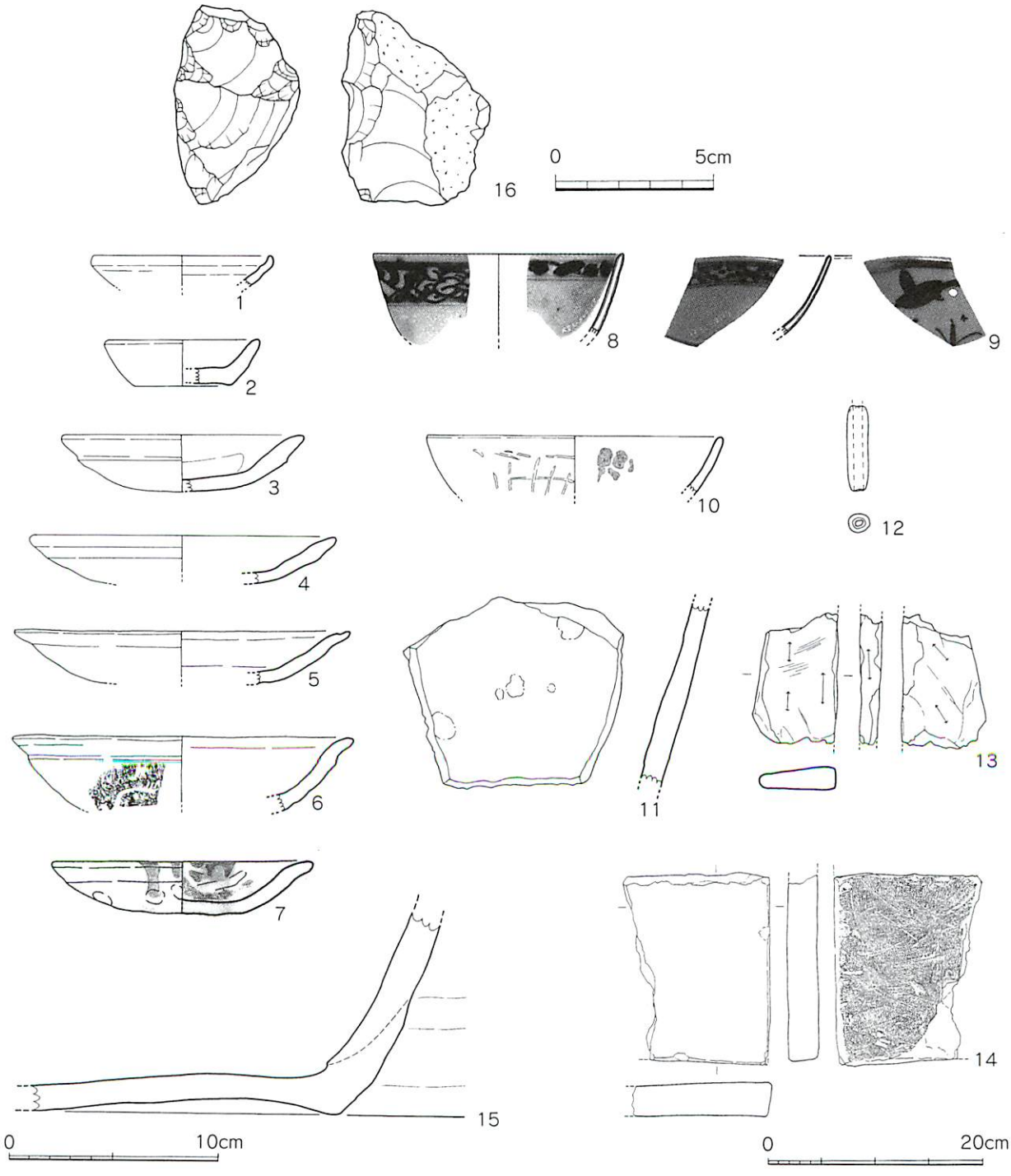
第49図　SD10出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



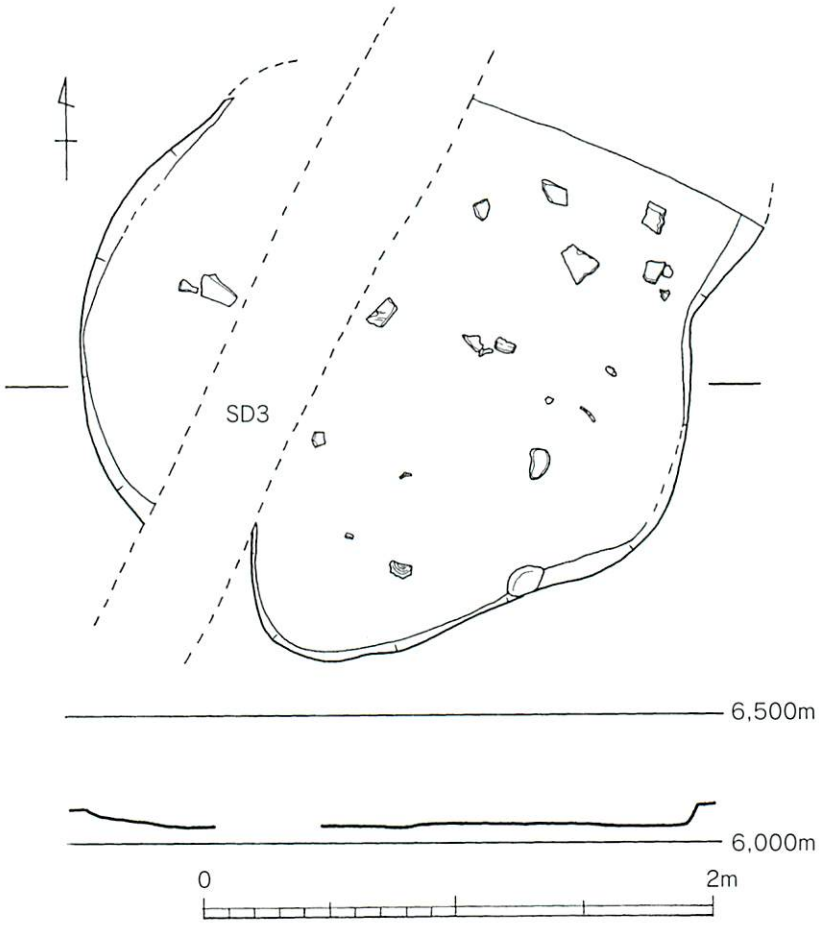
第50図　SD10出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



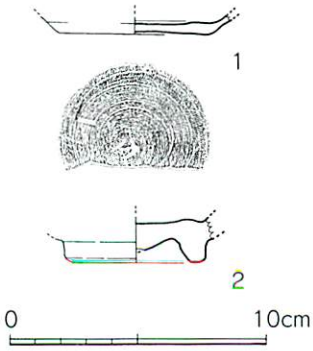
第51図　SD11遺構実測図（S=1/30）



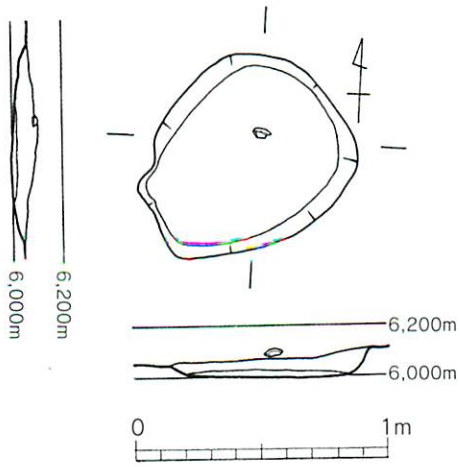
第52図　SD11出土遺物実測図（S=1/3　塼S=1/6）



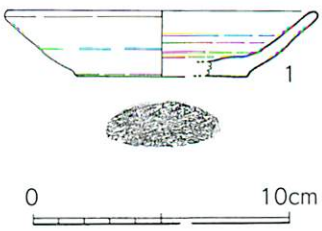
第53図　SK12遺構実測図（S=1/30）



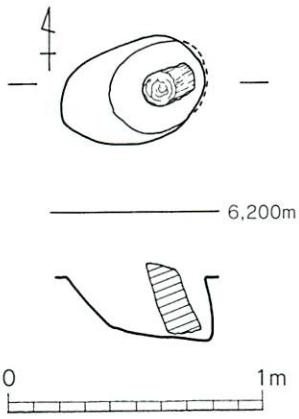
第54図　SK12出土遺物実測図（S=1/3）



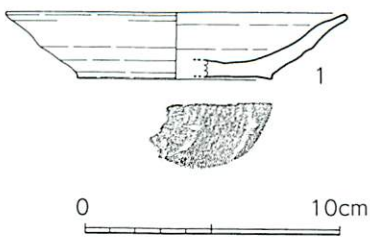
第55図　SK17遺構実測図（S=1/30）



第56図　SK17出土遺物実測図（S=1/3）



第57図　SP45実測図（S=1/30）



第58図　SP45出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＫ１２（第５３図）

１区のＦ９区・Ｇ９区に位置する浅い土坑である。ＳＫ１２を壊して掘り込まれ、ＳＤ３が後から重複している。

出土遺物（第５４図１・２）

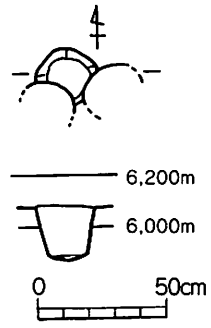
１は底部糸切り離しで、灰白色を呈する大内系土師器皿である。底部形、1cm。２は中国龍泉窯青磁碗で、内面のみ施釉している。

ＳＫ１７（第５５図）

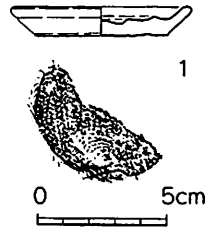
９Ｇ区に位置しＳＫ１２の下で確認した。検出標高は6,11ｍである。

出土遺物（第５６図１）

１は内面に段状のなで調整痕を残す在地系土師器である。底部はやや厚く、体部は直線的に外反する。底径6,7cm、口径12,3cm、器高、6cmで焼成は堅い。２は和泉型瓦器椀。外面は横方向のなで調整。口唇部から内面は横方向のへら磨きが主体。この他小片だが和泉型瓦器椀の破片が２点出土している。



第59図 SP78
遺構実測図(S=1/30)



第60図　SP78
出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＰ４５（第５７図）

Ｆ８区に位置し、ＳＤ８の下で検出した柱穴で、直径１０cm強の柱が残っていた。検出面の標高は6,11ｍである。

出土遺物（第５８図１）

１は糸切り底で体部が強く外反する在地系土師器皿である。口径13,4cm、底径7,8cm、器高2,6cmを計る。１５世紀後葉に比定する。

ＳＰ７８（第５９図）

１区東部のＩ１１区にあり、ＳＤ２４の東南外に位置する。周辺は多数の柱穴が密集する場所である。

出土遺物（第６０図１）

１は内面に段状のなで調整痕をもつ在地系土師器皿である。

６．１区下層の遺構と遺物

（１）分布状態　ほぼ１５世紀後葉以前をまとめて掲載する。

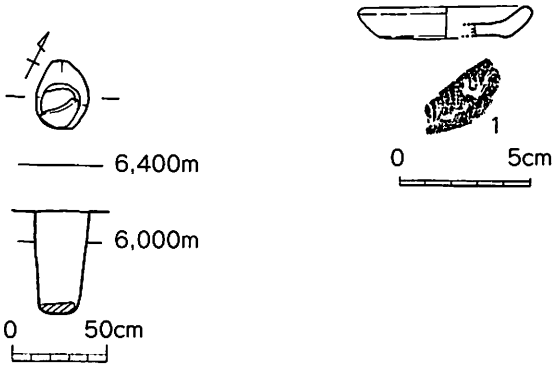
（２）遺構と遺物

SP35（第61図）

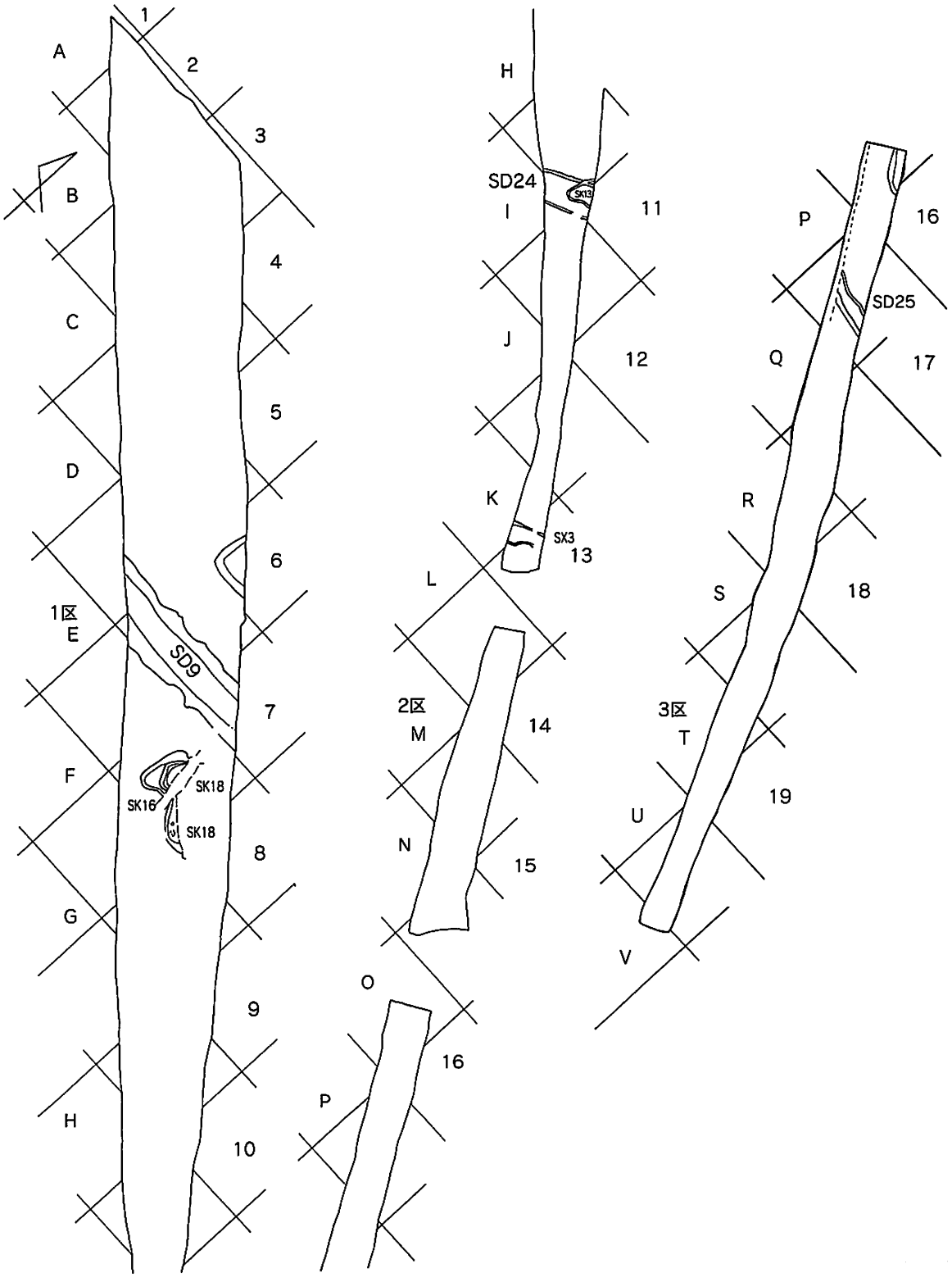
I11区の柱穴である。土師器皿が1点出土された。(第61図)

ＳＤ９（第６３図）

Ｄ６区を中心に東西方向に走る溝状遺構で、平面的な検出標高は南部で6,15m、北部で5,98m前後である。東北側の壁土層では6,2m付近から下



第61図　SP35出土遺物実測図（S=1/3）



第62図　下層遺構分布図

に確認できる。確認面の幅は約2,6mで、北東部をＳＫ１１とＳＤ２０・ＳＤ２１に切られていた。

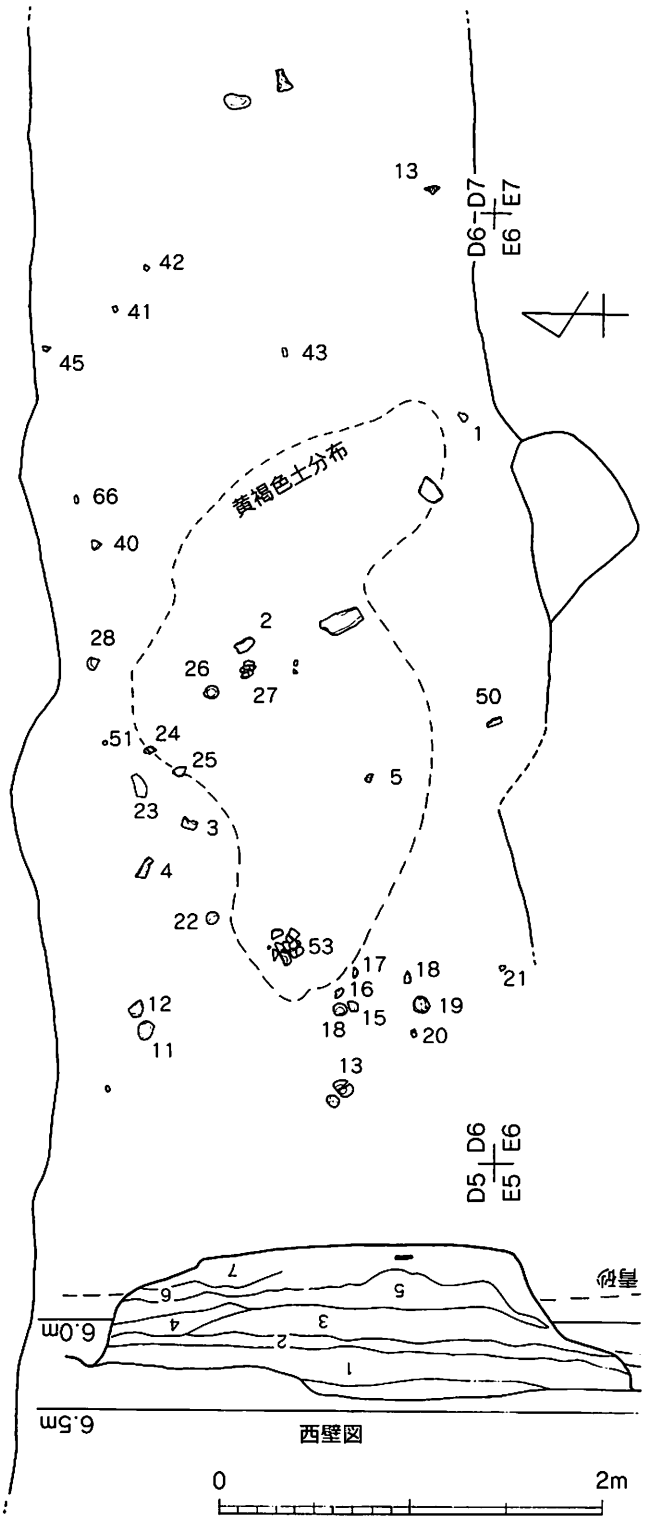
層序は東北側壁土層では、１層：黄褐色粘土層・２層：黒褐色土層・３層：褐色混じりの土層・４層：１層に類似・５層：２層に類似・６層：木製品を含む黒色土層・７層：青灰色細砂混じりの土層・８層：黒褐色砂質土層・９層：砂層・10層：黒色粘質土層である。遺構外は上半部が黄褐色砂質土層、下半部が青褐色砂質土層である。南部壁土層では、１層：黄褐色粘土層・２層：硬く黄味をもつ褐色土層・３層：茶褐色土層であり、黄褐色の硬い砂の塊斑を含む・４層：黒褐色土層・５層：砂質土層である。地山の青色砂を含む・６層：青色砂層・７層：やや土を含む砂層。遺構外は東北部壁にはなかった下層である青砂層も現れている。南北壁とも上半部は土層（北は１～５層、南は１～４層）、下半部は砂層である。下層には常に水が湧き出ており、土師器類の他に下部の砂層から板や自然木、背骨が一繋がりになったクロマグロの骨が出土した。食膳具と食器と食料が揃って出土したわけである。

第６３図はＳＤ９を検出した段階の遺物分布状態である。また、第６７図は埋土下部で出土した主な遺物の分布状況である。東北側壁土層の７層上面にクロマグロの背骨が連結した状態で二列出土し、付近にも尾鰭の部分の骨が出土した（第５８図）。背骨が連なった状態からみて、個体を長さ４０cm位に分断していたものと思われる。ＳＤ９最下層は14世紀初頭である。下層の主な遺物の分布状態を第７０図に示す。

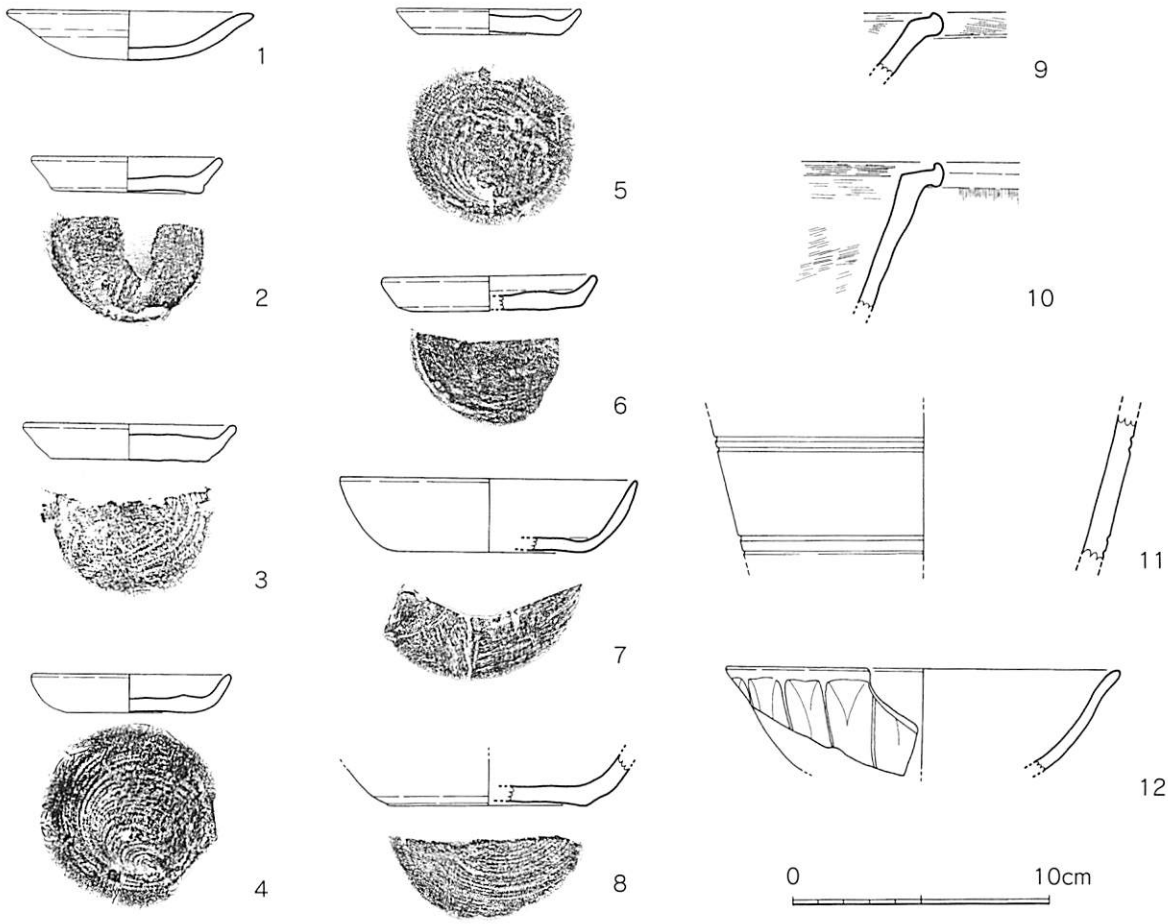
クロマグロ

出土遺物（第６４図１～１２・第６５図１～７・第６６図１・第６８図１～２２・第６９図１～２３・第７１図１～６・第７２図１～４・第７３図１～６・第７４図１～３）

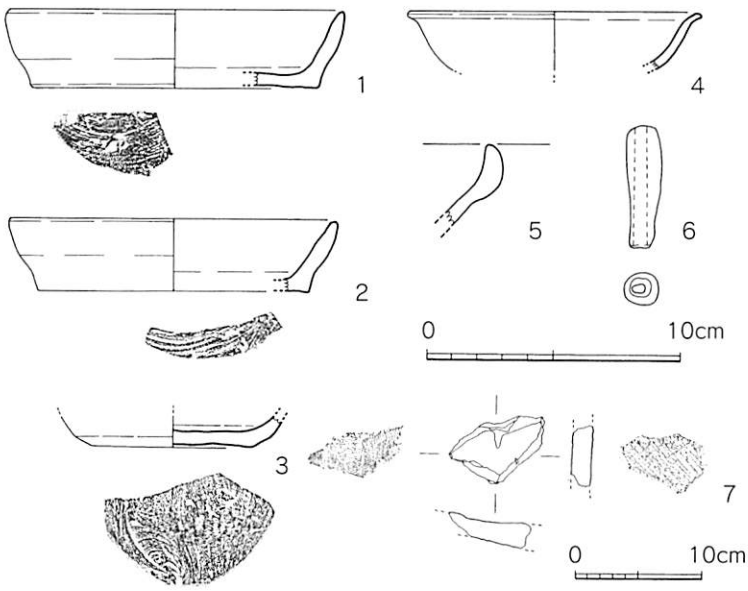
第６４図１～８は土師器で、１だけが京都系土師器。１・２は検出面で出土した最上層の遺物であり、３～１２は下層よりも上の中間の層から出土した。６は口径8,6cm、底部が厚く短く薄い体部が外反する。７は口径12,8cm。９・１０は瓦質土器の鍋である（山本哲也氏2004では鍋Ｂ類－１４世紀前半）。１１は備前焼鉢。



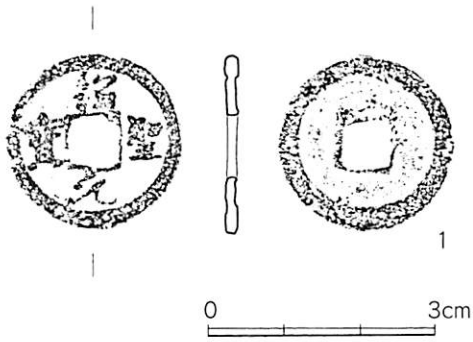
第63図　SD9検出面遺物分布図



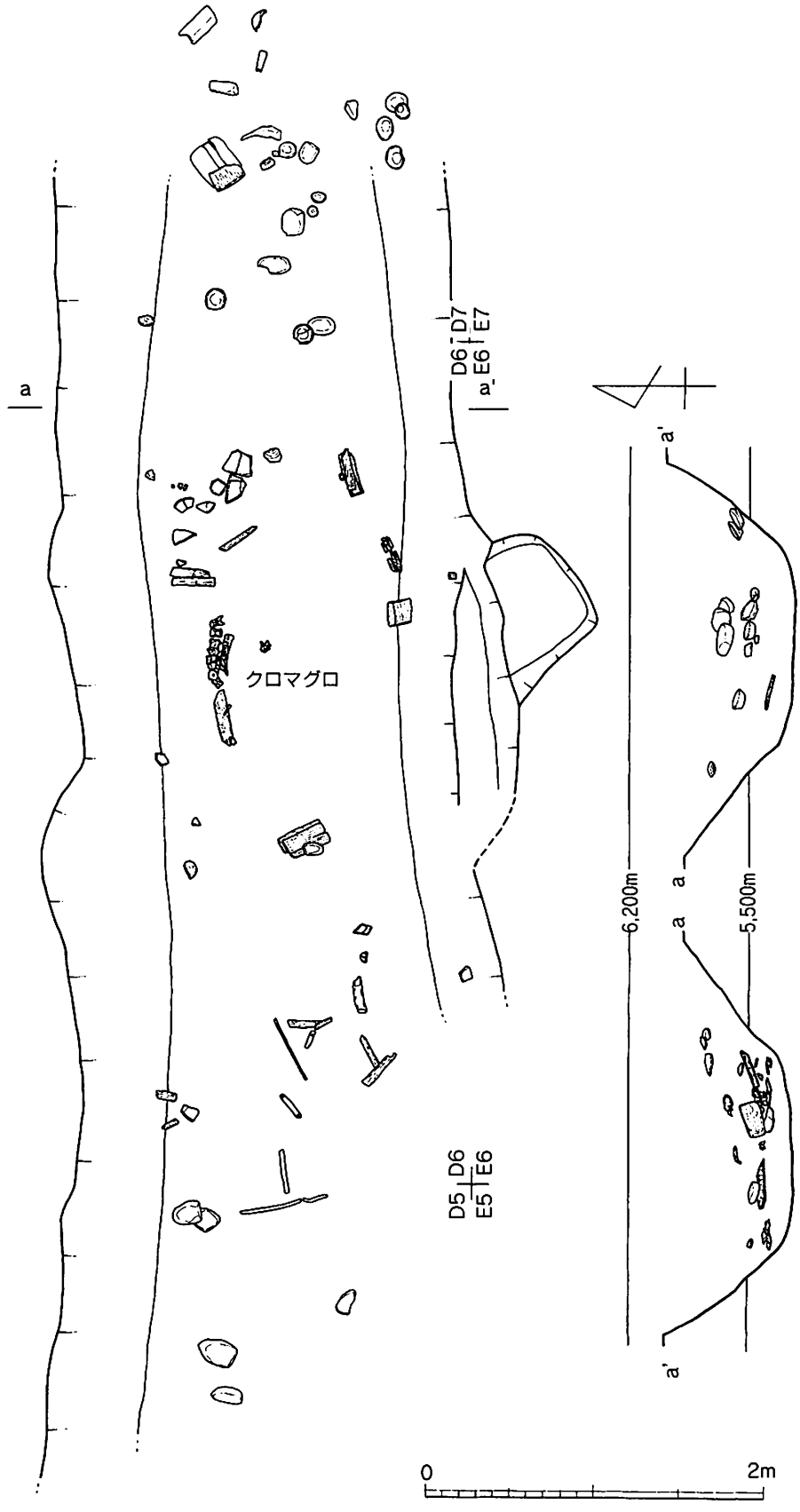
第64図　SD9上部･5層出土遺物実測図（S=1/3）



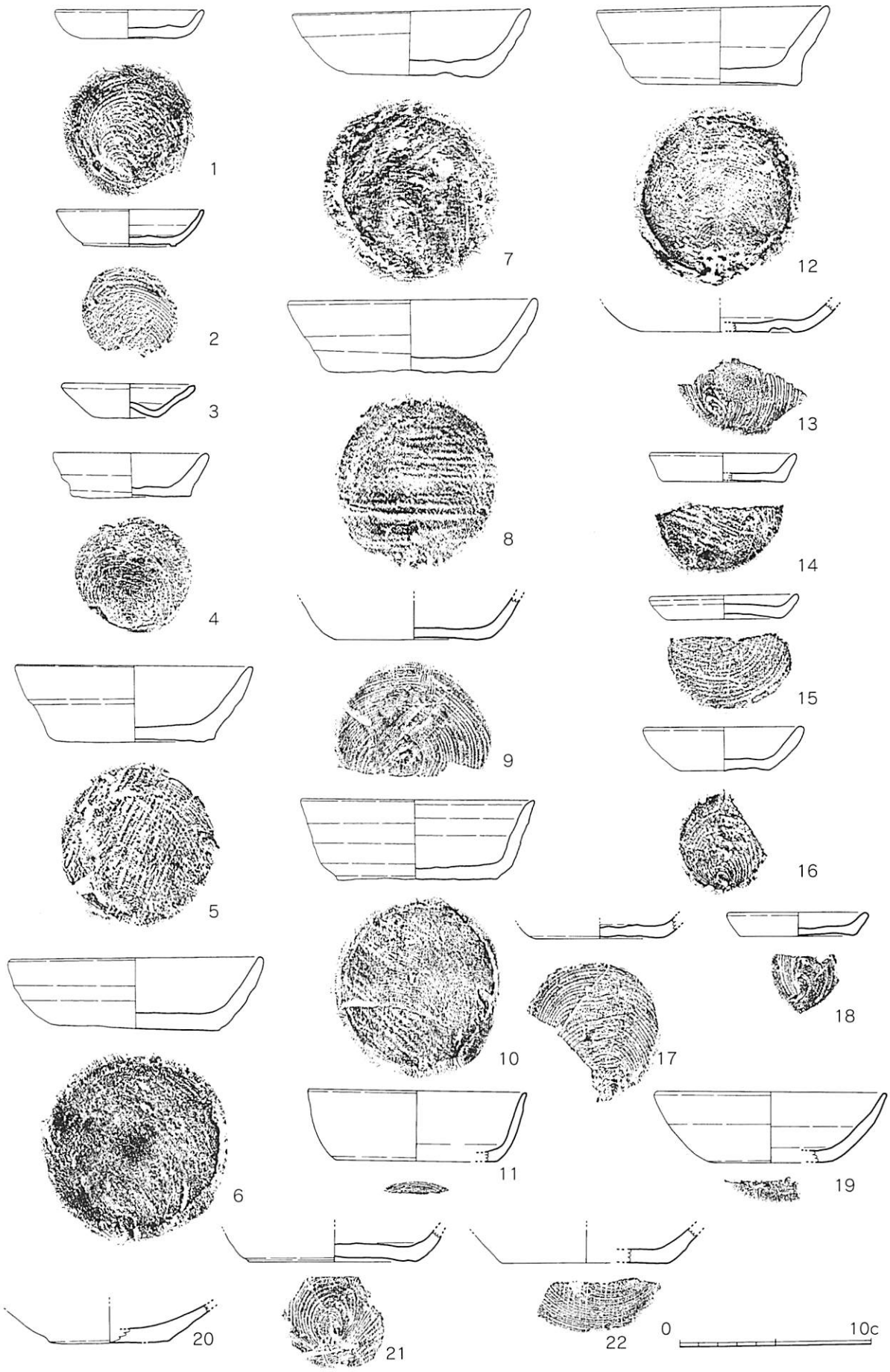
第65図　SD9出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



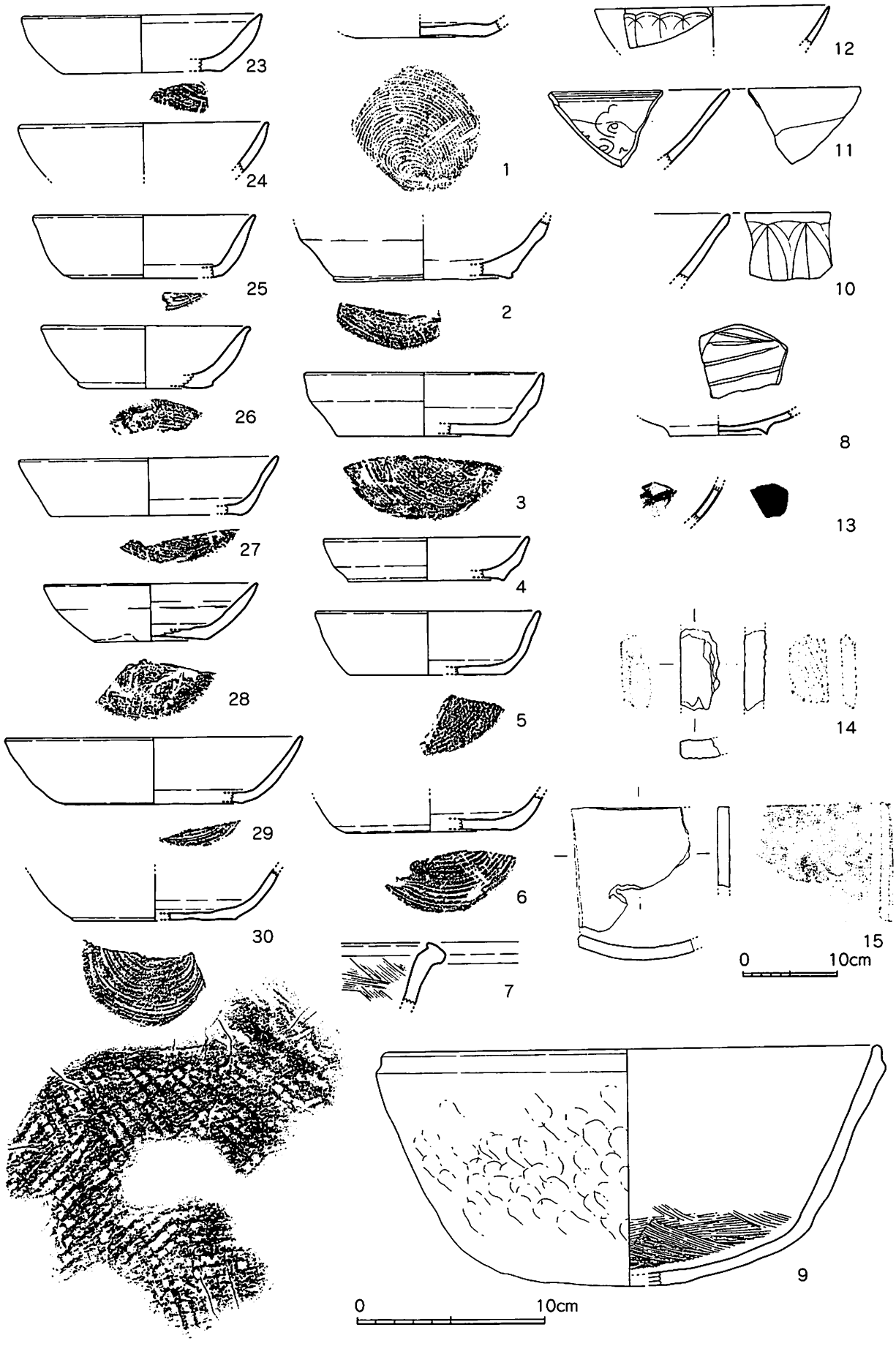
第66図　SD9出土銭実測図（S=1/1）



第67図　SD9下層遺物出土状況実測図（S=1/40）



第68図　SD9出土遺物実測図（S=1/3）



第69図　SD9出土遺物実測図（S=1/3）（瓦S=1/6）

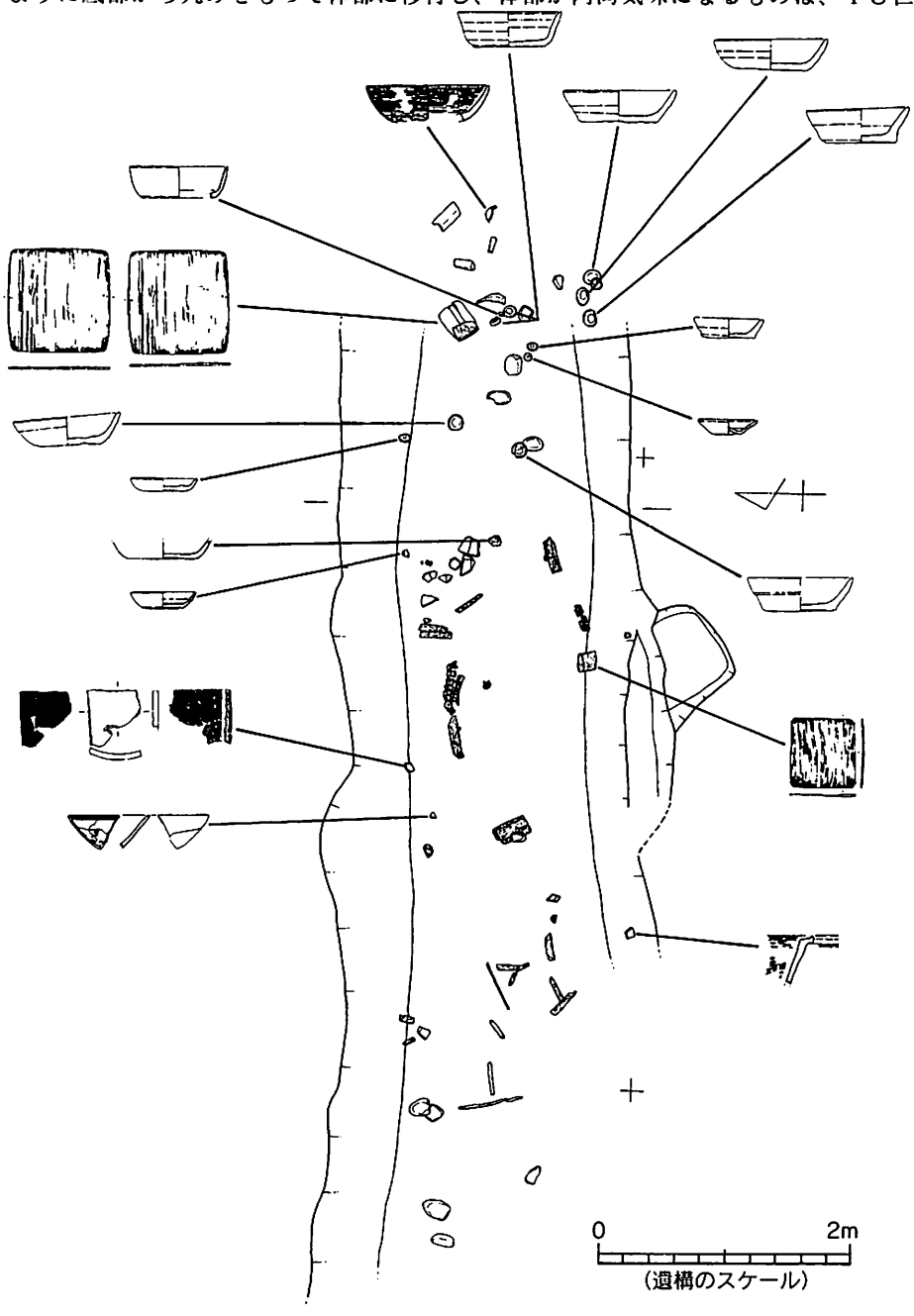
ヘソ皿　　１２は１３世紀中頃から１４世紀初頭の龍泉窯系青磁。

第６５図１～３は土師器である。１は１４世紀初頭。４は中国製白磁碗で口径11，6cm。５は瓦質土器の鉢。６は土錘。７は格子目叩きのある古代平瓦。

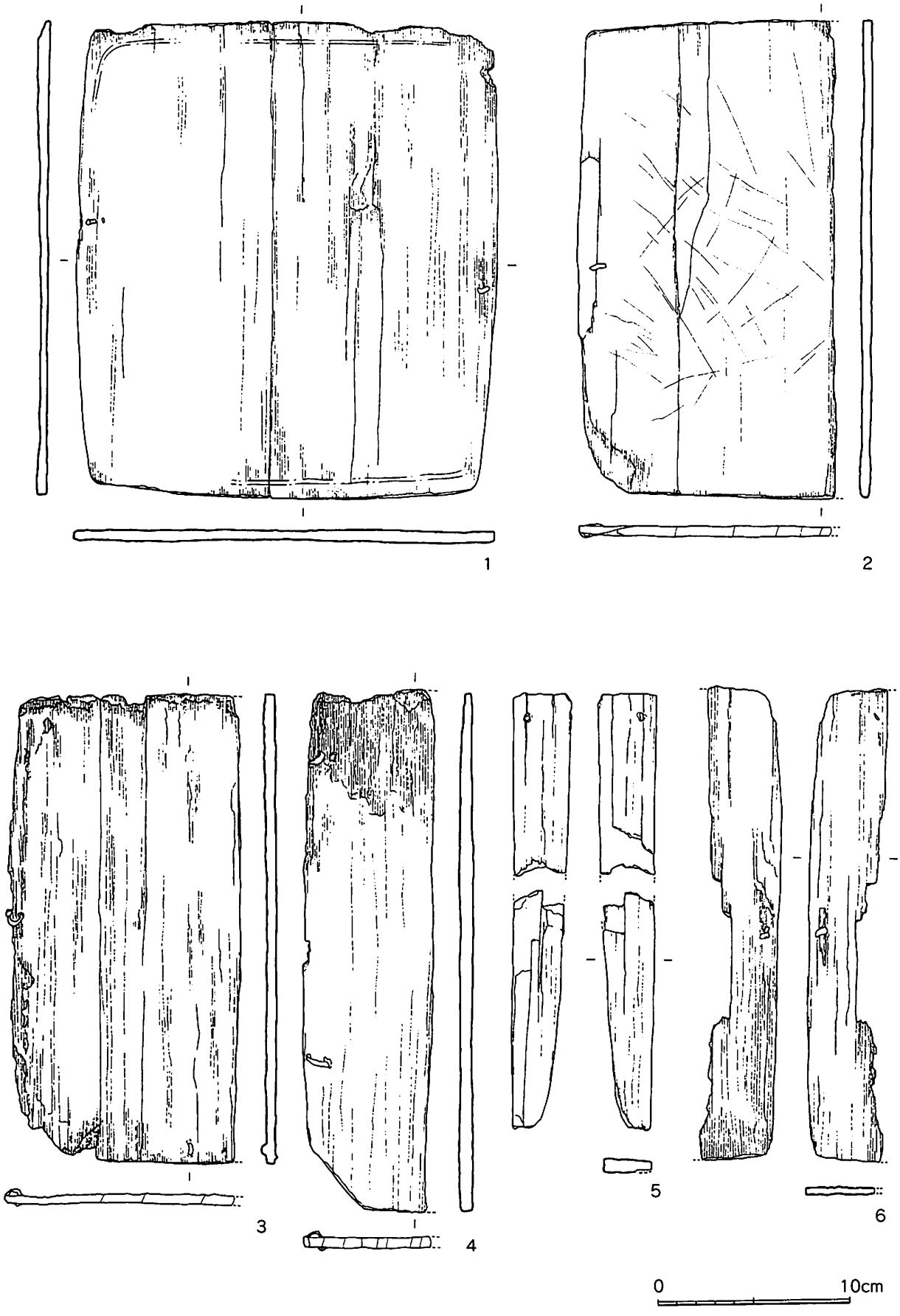
第６６図１は北宋銭の紹聖元宝。

第６８図１～２２は下層（主に６層）から出土した土師器皿である。２・１２・１７・１９は胎土に金色の雲母を含む。２は口径7,7cm。３は京都系土師器の搬入品である。口径7,0cm、高さ1,8cm。ヘソ皿と呼ばれる京都製土師器である。底面は底から押し上げられて上に突き出ている。２・５・８・９・１０・１４・１９・２２は外底面に板状圧痕のついたものである。１１は口径11,6cm。１８は口径7,5cm。１９は口径12,2cm。

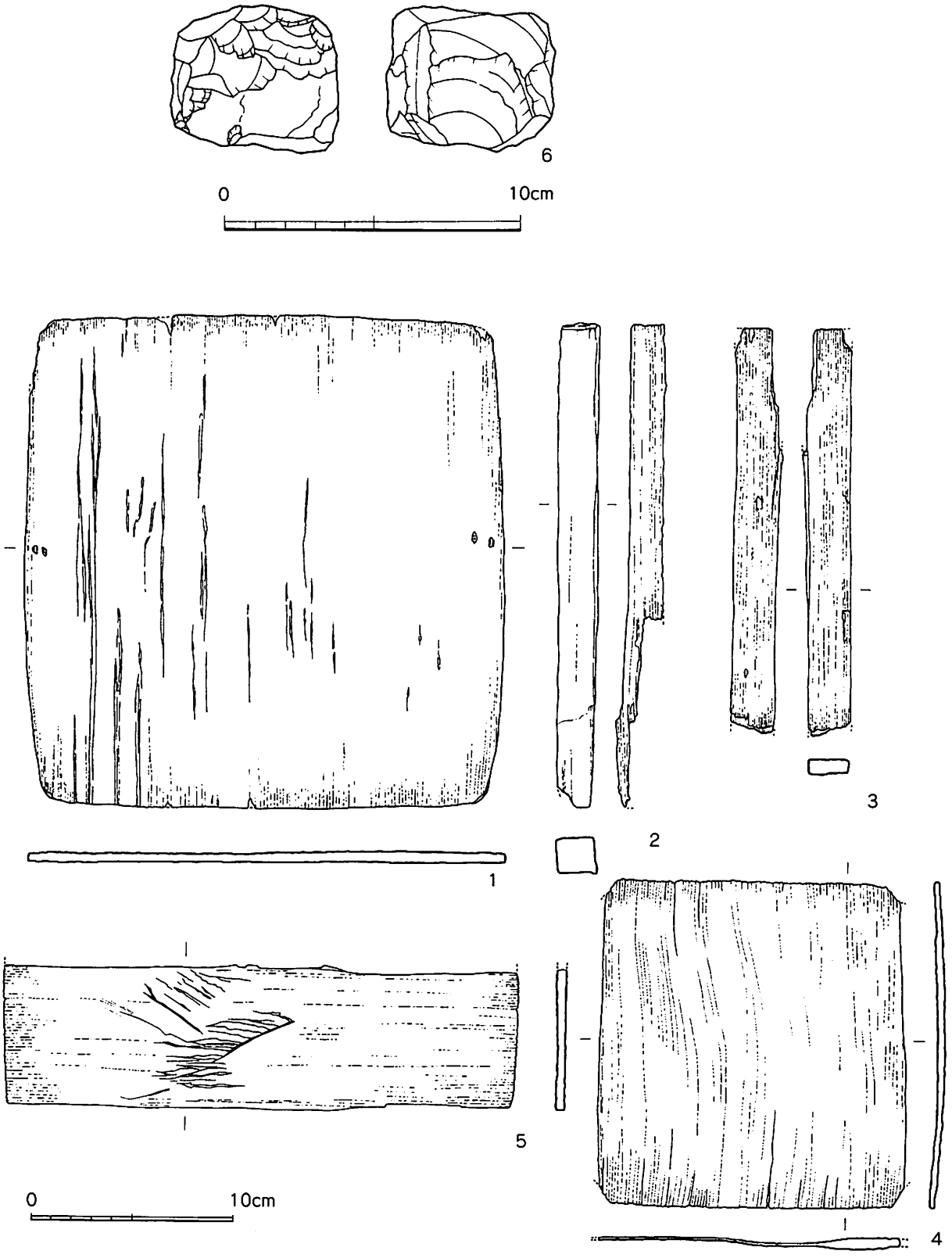
第６９図１～２３は下層出土で、１～１４は土師器で、３・４・６・７・１２～１４は胎土に金色の雲母を含む。３は口径11,8cm。４は口径11,3cm。６・１４には板状圧痕がつく。６・７のように底部から丸みをもって体部に移行し、体部が内湾気味になるものは、１３世紀後葉頃。



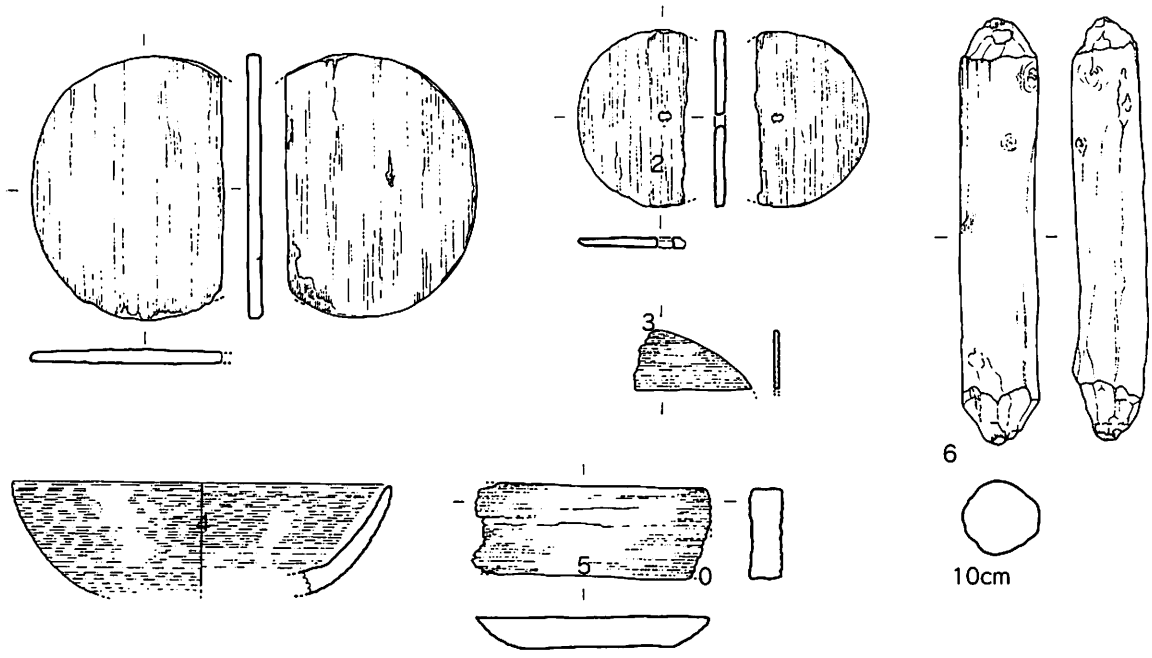
第70図　SD9下層遺物分布図



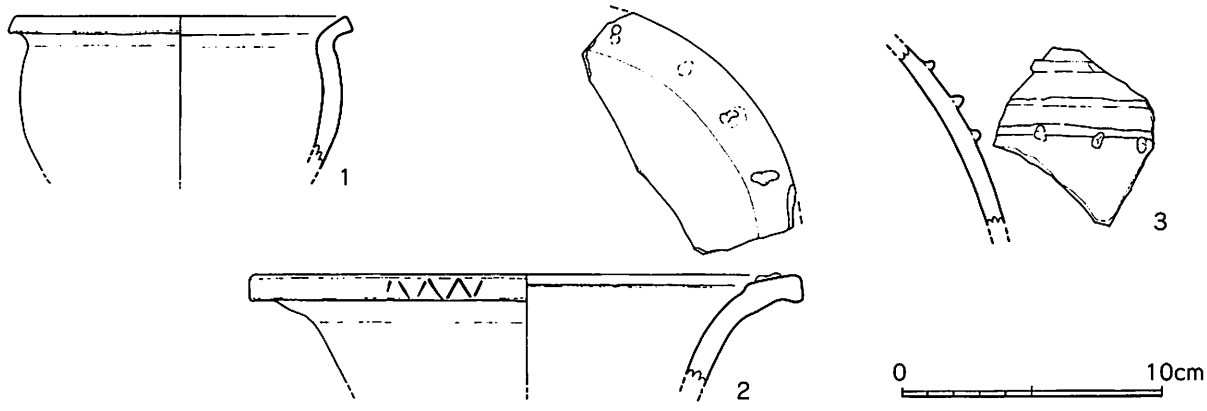
第71図　SD9下層出土木製品実測図（S=1/3）



第72図　SD9下層出土木製品・燧石実測図（S=1/3）



第73図　SD9出土木製品実測図（S=1/3）



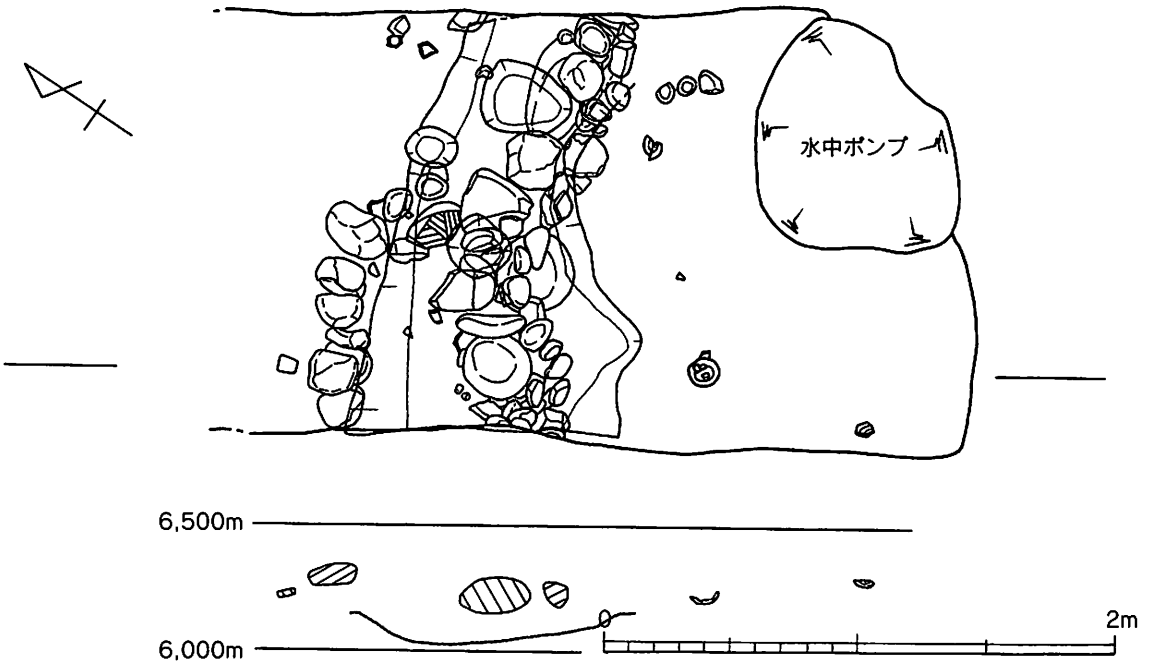
第74図　SD9出土弥生式土器実測図（S=1/3）

７は口径15,8cm、胎土に金色の雲母を含む。１２は体下部で屈折し口径11,0cm。１４のように体部の中位が厚いものは１４世紀前葉の特徴である。１５・１７は瓦質土器。１５は内面を刷毛目調整し、外面はなで調整した鍋である。胎土に石英を含む。１７は突帯が退化し、口縁部上端が薄く、少し下が厚くなったもので１４世紀代の鍋である。底部と体部は屈曲点で区別できるが、外底面は格子目叩きである。１６は内面に幅２mm程度の線状の磨きを紋様として加え、断面三角の高台を貼り付けた１２世紀後半の和泉型瓦器椀である。外面はなで調整のままで灰黒色、内面は灰色を呈する。この溝からは和泉型瓦器椀は他にも破片が５層から１点、最下層から２点出土している。１８は１３世紀前半の、１９は１２世紀中頃から後半の、２０は１４世紀の龍泉窯系青磁碗である。２２は古代の平瓦。

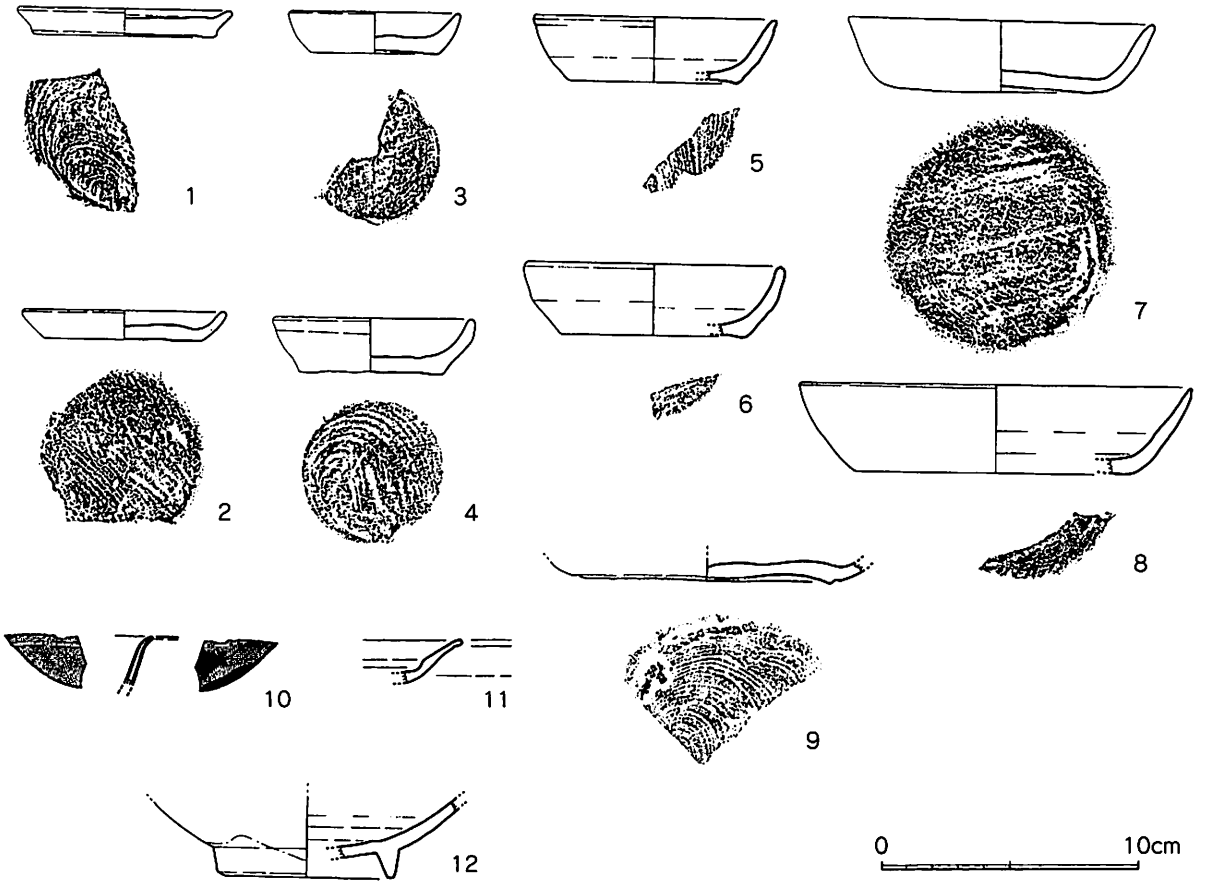
瓦器椀

木製品

第７１～７３図は下層出土の木製品である。第７１図１～６・第７２図１～５は折敷である。一見、杉材らしい。１は長さ25,1cm、幅22,2cmで正方形に近い。出土時には二側面の部材が残っていた。表面に痕跡が認められるが、外周よりやや内側に側面痕がある。隅部は屈曲しており、折り曲げたらしい。両端の二カ所に桜の皮が巻き付けられており、これで側面を固定したらしい。



第75図　SX3遺構実測図（S=1/30）



第76図　SX3出土遺物実測図（S=1/3）

桜の皮については第７１図２・４・６、第７２図１にも認められる。２には切り傷が外周以外にまとまって存在する。第７３図１～３は円形の木製品で用途は蓋か。２は中央部に穿孔がある。４は容器、５は板材である。６は両端を尖らせた棒。第７４図１～３は弥生式土器で、中期後葉の２世紀ころのもの。

第７２図６は燧石である。28.2g。長さ2.9cm、幅2.6cm。厚さ2.2cm。図の左面右下に自然面を残し、六面体に打ち欠けている。白色部と褐色部がまだらなチャートのような石材で、大分県杵築市山香の六太郎産と思われる。

ＳＸ３（第７５図）

１区東端で調査区幅一杯に幅1,70cmにわたり検出した円礫の石列である。南西部では「く」の字状に石列が分岐している。湧水のためにはっきりしないが地山面の上に乗っている状態のようであった。石積みというには高さが無く、ほとんどの部分は一段である。石のなかには石臼のかけらもあったが、再利用であろう。土師器類が石列の前面、東側から出土した。石を撤去した下から石列と同一方向でほぼ同じ位置に溝状遺構を検出した。遺物は出土しなかった。東側で礫の詰まった柱穴一個を検出した。この直上で遺物第７６図９が出土しており、９は穴の中にあったようだ。

出土遺物（第７６図１～１２・第７７図１）

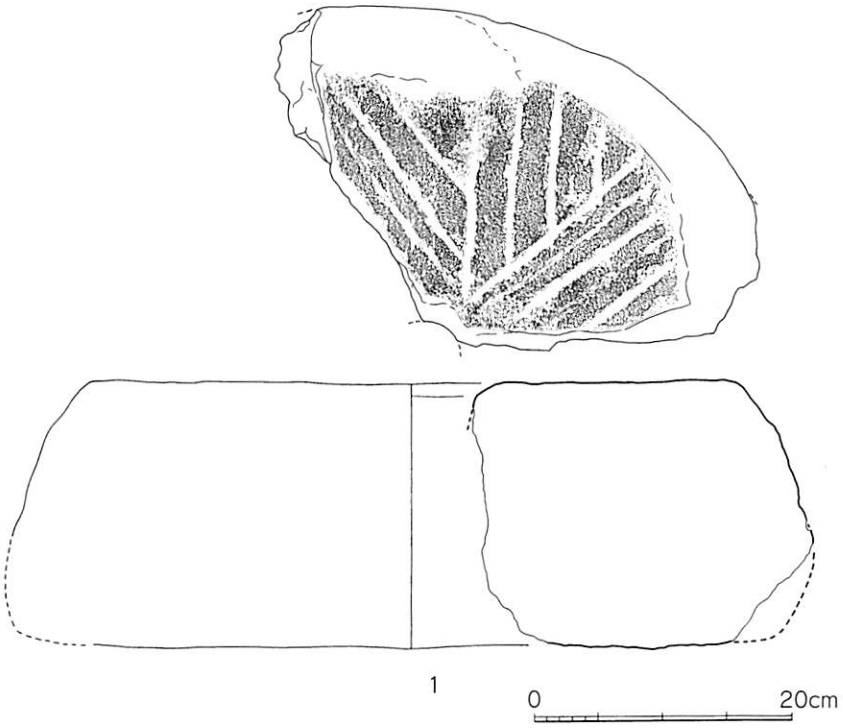
１～４は土師器小皿。１は底部に比して薄く短い口縁部が直線的に外反するもの。２はやや薄手の体部が内湾気味に立つ。３は体部と底部との境が厚く、口縁部上端は尖る。４・６は体部上位で内側に屈折する。口径は４と６が10,2cm。５・７の体部は丸く立ち上がるが、５は糸切り底で口径9,6cm。１～４・７には板状圧痕がある。８は口径15,3cm。９は７に類似する。10は景徳鎮窯の青花碗。口縁端部は外湾し外面に草花紋がある11は同安窯の青磁皿。全面に施釉している。12は白磁碗。見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台周辺は無釉で高台径は6,9cm。１１世紀から１２世紀のものか。第７７図１は石臼。

ＳＫ１３（第７８図）

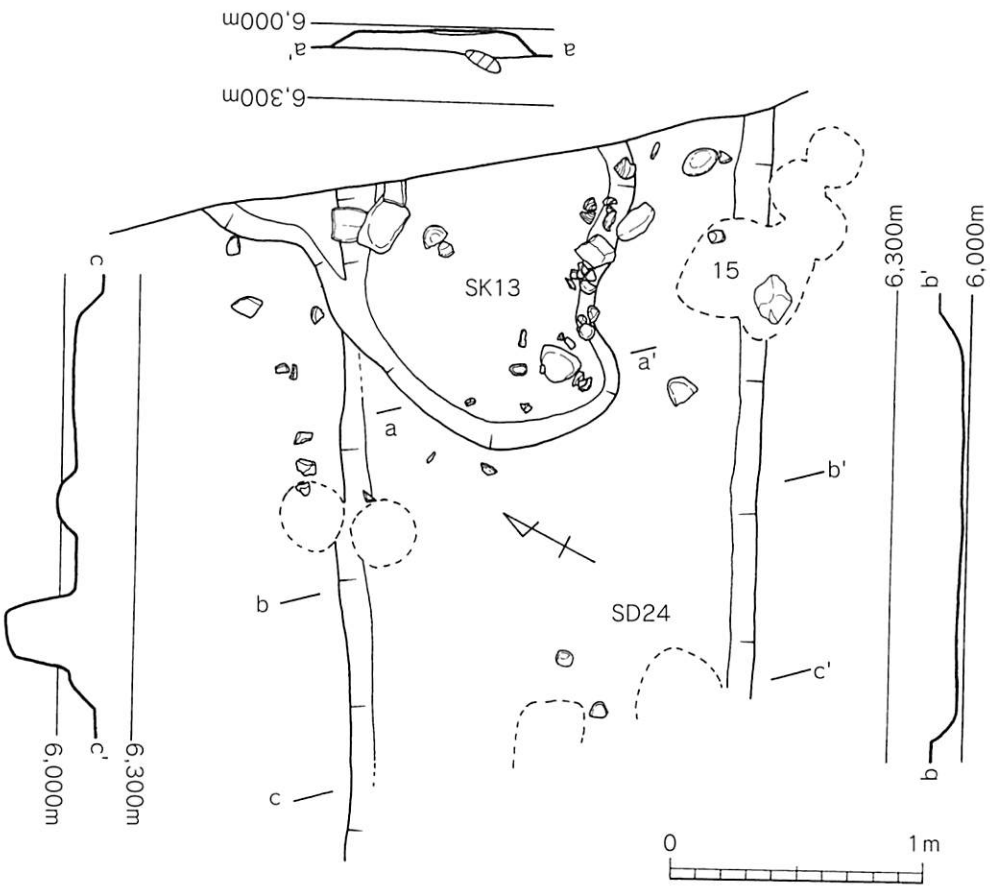
Ｈ１０区・Ｈ１１区にあり、ＳＤ２７と重複する浅い土坑である。

出土遺物（第７９図１～１６）

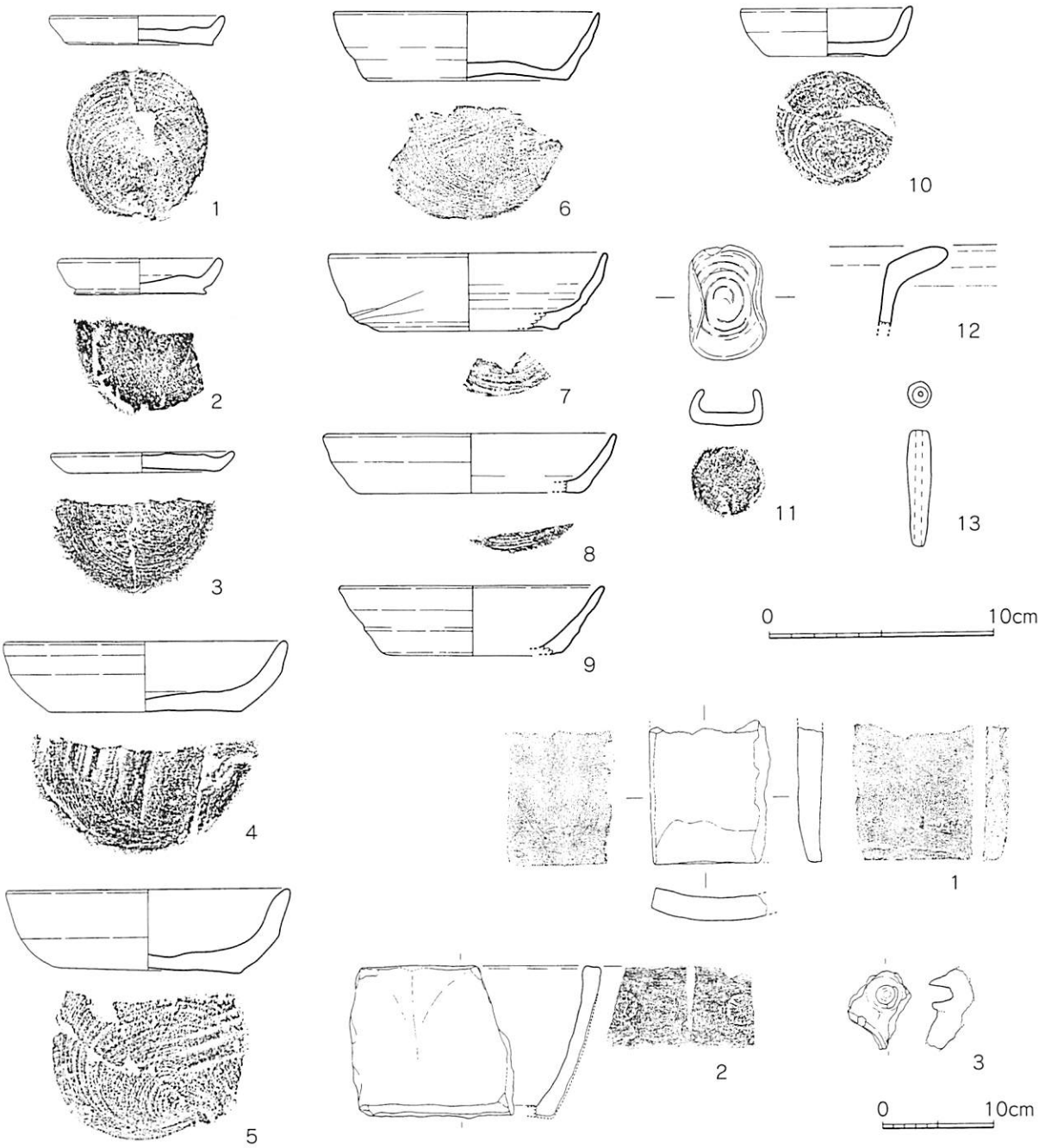
１～３・１１は土師器小皿。２は反転復元しているため底部がくびれているように見えるが、糸切りの糸が絡んだ片側だけの状態である。４～９は土師器皿。４・５はやや厚手で体部上位で屈折する。６～９は４・５よりも薄手で体部中位が窪むように横方向になでられている。４～６の外底面には糸切り離し後に板状の圧痕がつく。１０は内面に段状のなで痕跡をもつ土師器耳皿である。１２は瓦質土器鍋。口縁部が厚く表面は横方向のなで調整である。１３は土錘。１４は瓦質土器の火鉢。体部には蓮弁状凹凸がある。菊花紋の刻印が二箇所ある。１５は平瓦の上半部分で、窪んだ面の端部を削って薄くしている。１６は鬼瓦。目の部分らしい。



第77図　SX3出土石臼実測図（S=1/6）



第78図　SK13・SD24遺構実測図（S=1/30）



第79図　SK13出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）

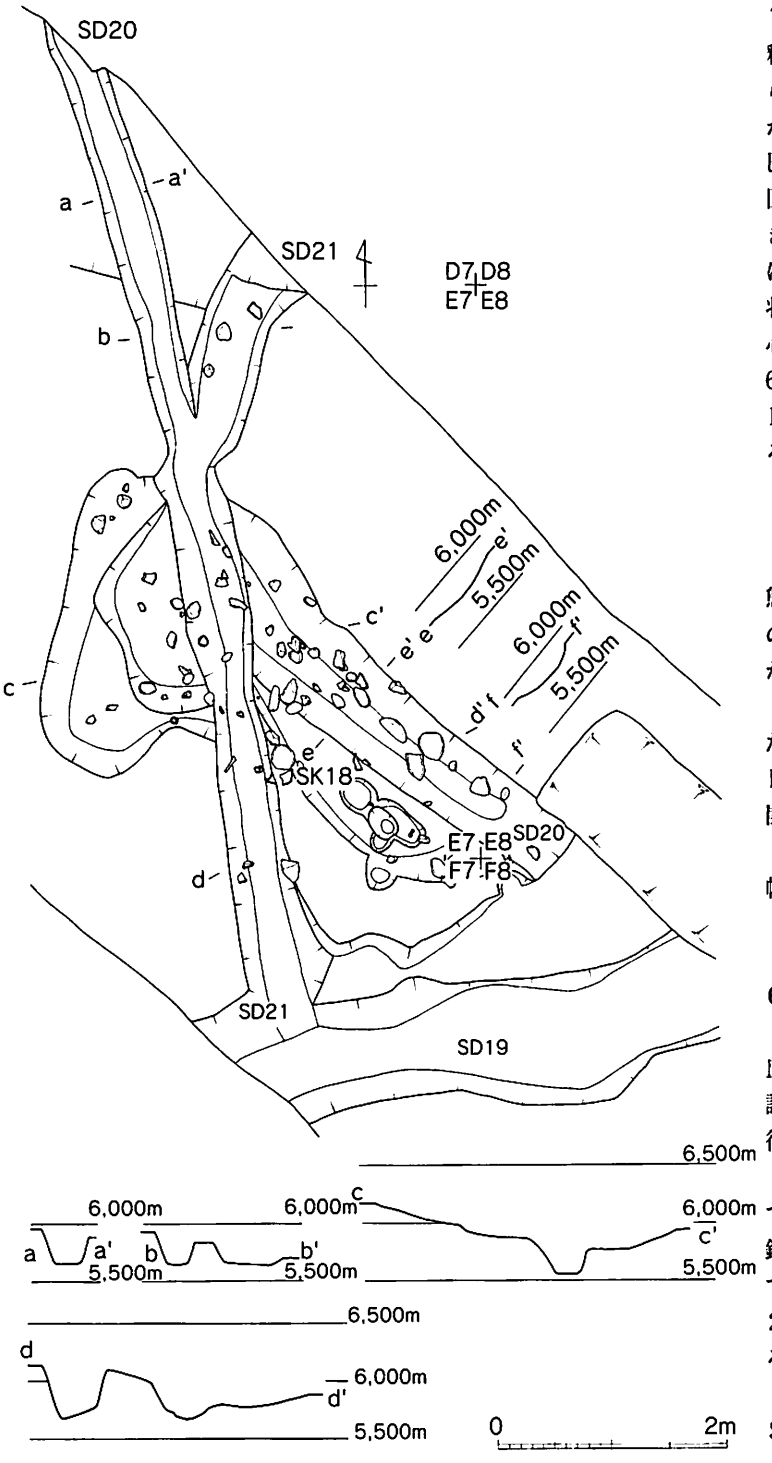
ＳＤ２０・ＳＤ２１・ＳＫ１７・ＳＫ１８等のＥ７区付近の遺構については、すでに述べたが遺構の重複関係の認定・遺構毎の遺物の採上げに一部混乱があった。確実にどの遺構に属すか分かるのは第８１図に示した遺物だけである。

ＳＤ２０（第８０図）

７Ｄ区から７Ｆ区に続く直線的な溝状遺構である。南端で溝状遺構ＳＤ１９とぶつかる。ＳＤ１９上部の焼土層がＳＤ２０には見られないので、ＳＤ１９のほうが新しい。

出土遺物（第８２図１～８・１０）

１は瓦器椀で口径18,6cm。２は在地系土師器で体部が直線的に外反し、口径14,3cm。胎土に金色の雲母を含む。４は瓦質土器の鉢である。４は白磁碗。５は中国製天目碗。６は同安窯系青磁。



第80図　SD20・SD21・SK16・SK18遺構実測図（S=1/60）

７は中国製白磁碗で、施釉は見込み部だけに認められる。８は巴紋と珠紋からなる中世の軒丸瓦。巴紋は中心に向かって左回転する。９は格子目叩きの古代の軒平瓦。１０は木製品で、板材を円盤状に加工したもので、中心に穿孔がある。外径6,8cm、中心孔の径1,0cm、厚さ0,9cmである。

ＳＫ１６（第８０図）

ＳＤ２０と重複した状態で検出した。掘り下げの進行に伴い床面の一部が深くなったので、ＳＫ１８として区別した。したがって、遺構からはＳＫ１６とＳＫ１８の新旧関係は不明である。ＳＫ１６の規模は長さ4,6m、幅約2,5mである。

出土遺物（第８３図１６～２１）

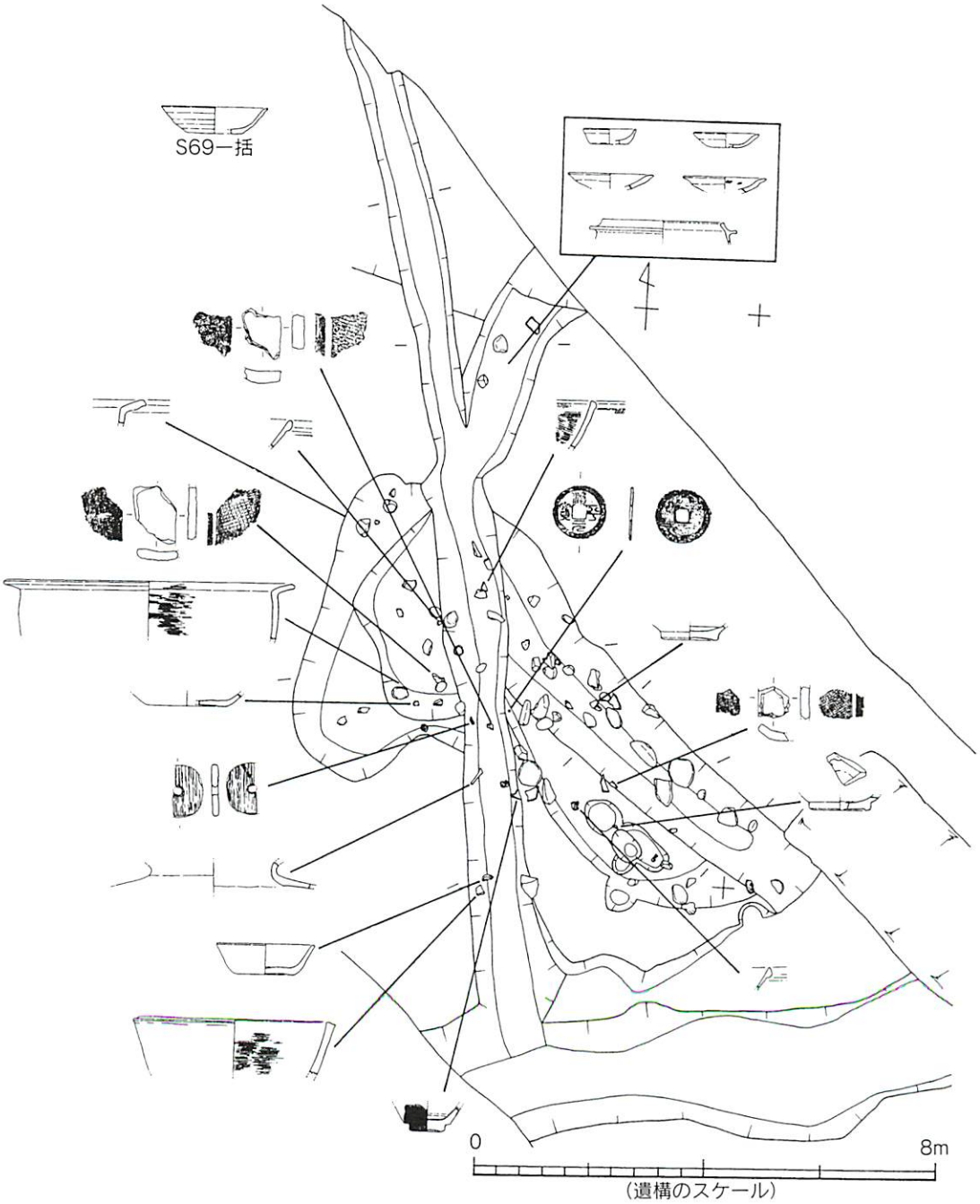
１６・１７は土師器皿。１８は瓦器椀。器面調整は内外面ともなでの後、横方向のへら磨き。１９・２０は瓦質土器で、それぞれ異なる型の鍋である。２１は白磁碗で、１１世紀後半から１２世紀前半のものである。

ＳＫ１８（第８０図）

７Ｅ区にあり、ＳＤ２０・ＳＫ１６と重複している。ＳＫ１６を掘り下げ終えて検出したので、ＳＫ１６の床よりも下から出土した遺物だけをＳＫ１８とした。

出土遺物（第８３図１５・２２～２９）

１５は中国製白磁碗。２２は底部に糸切り離しがあるかどうか不明の土師器皿。体部は内湾気味に広がり、端部で外湾する。口径13,8cm、底径6,9cm、器高3,5cm。２３は糸切り底土師器。胎土に石英を含む。１５・２４は玉縁口縁部の白磁碗。２５はその底部である。の内面には段状の削りがあり、内面全体に施釉、外面には釉がない。５の類の底部である。２６は瓦質土器の鍋で、口縁部内外面は横方向のなで調整。体部内面は刷毛目調整、外面は赤変して剥落している。

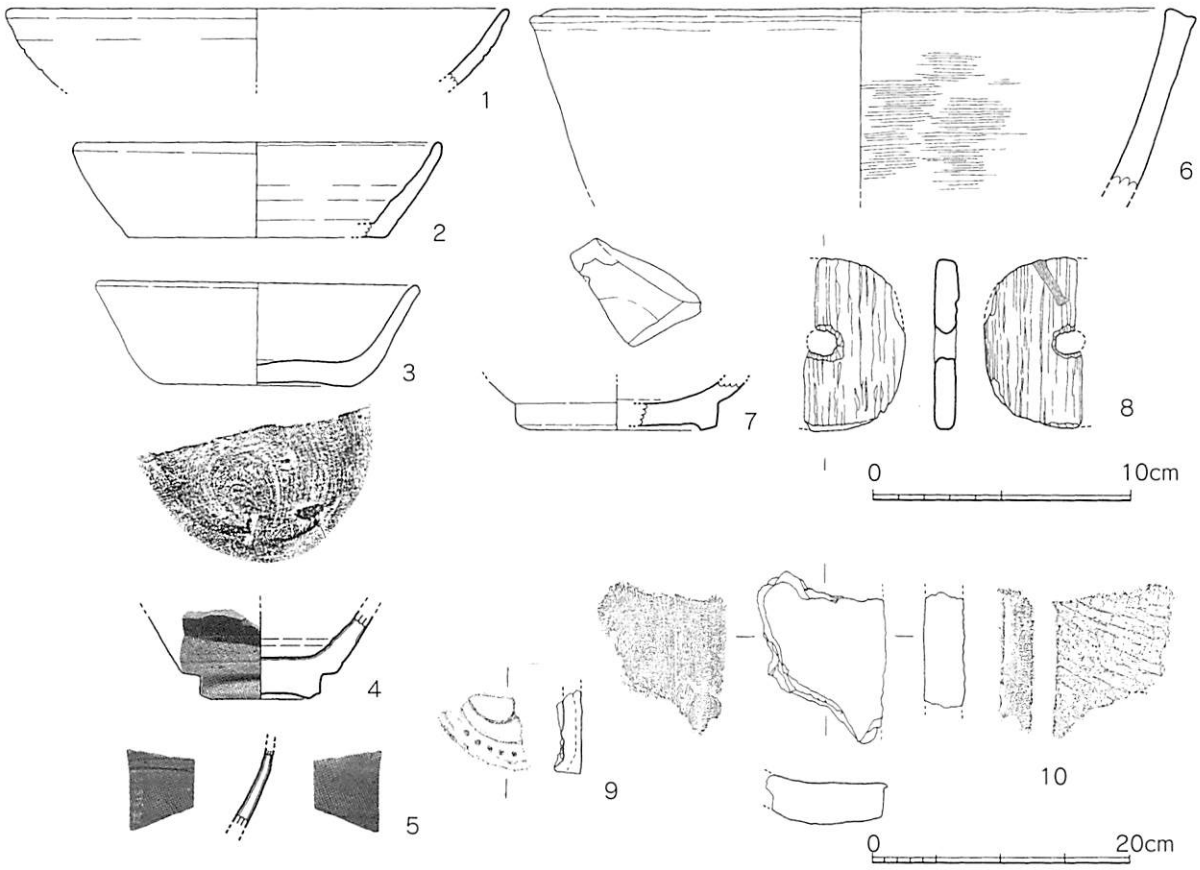


第81図　SD20・SD21・SK16・SK18遺物分布図

口径34,4cm。胎土に石英を含む。２７・２８は格子目叩きの古代の平瓦。２９は中国銭の治平元宝（北宋：初鋳年1064年）。

ＳＤ２１（第８０図）

大部分はＤ７区・Ｅ７区に位置し、一部Ｅ８区にかかる「く」の字に屈折した溝状遺構である。この付近の遺構（ＳＤ２０・ＳＤ２１・ＳＫ１６・ＳＫ１８）はＳＤ１９・ＳＤ２３の溝状遺構を掘り下げた後で検出した。平面的に遺構の前後関係を把握できないまま掘り下げた結果、当初ＳＫ６７と考えていた部分の一部床面に別の土坑を発見したり（ＳＫ１８）、ＳＤ２０は屈曲すると考えていたのに一直線だったりして、遺物の前後関係と遺構別の採上げがうまくいかなかった。ＳＤ２１とした遺物の時期は二つあり、採り上げ時の混乱を反映しているらしい。別の溝状遺構２基とすべきかもしれない。ＳＤ２０の下にＳＤ９が現れた。



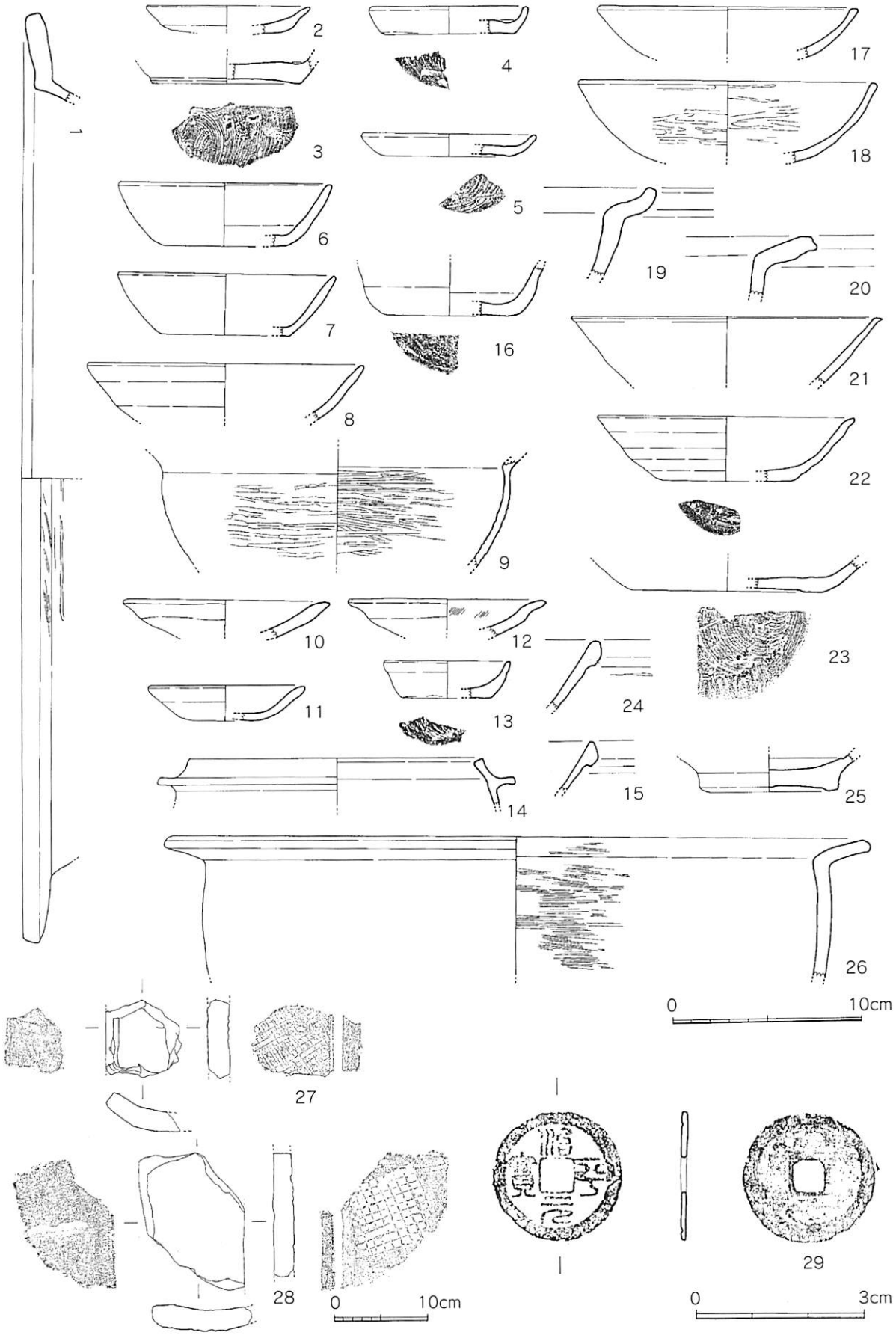
第82図　SD20・SK18出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）

出土遺物（第８３図１～１４）

２～８・１０～１３は土師器皿。３は底部が厚く、体部との境が明瞭である。４は底部が厚く、短い体部が内湾している。口径8,6cm。５は底部から体部に掛けて緩やかに移行し、口径9,4cm。胎土に金色の雲母を多量含む。６は体部が底部から円味をもって外湾気味に立つ。胎土に金色の雲母を多量含む７は直線的に外反する体部の中位が厚く、口径11,6cm。胎土に金色の雲母を多量含む。８は胎土に金色の雲母を含み口径14,7cm。１０～１２は手捏ねの京都系土師器である。１２は口径10,6cm。１３は底部が厚く、体部は先端にむかって細くなる。胎土に石英を含む。口径6,9cm。１・９・１４は瓦質土器の鍋である。１は体部と口縁部の角度が120度以上あり、外面は斜め方向のへら磨き、他はなで調整している。口径49,2cm。１２世紀に属すものである。９は外面頸部と内面屈折部の上をなで調整し、その他を横方向にへら磨きしている。胴部最大径は18,6cm。14は外面頸部と内面の屈折部より上をなで調整、他を横方向のへら磨きしている。外面には煤が付着する。口縁部最大径は15,7cm、鍔部径は19,0cm。１０～１３はＳＤ２０との重複部の東側、東北部の壁際部分の溝から出土した。

ＳＤ２４（第７８図）

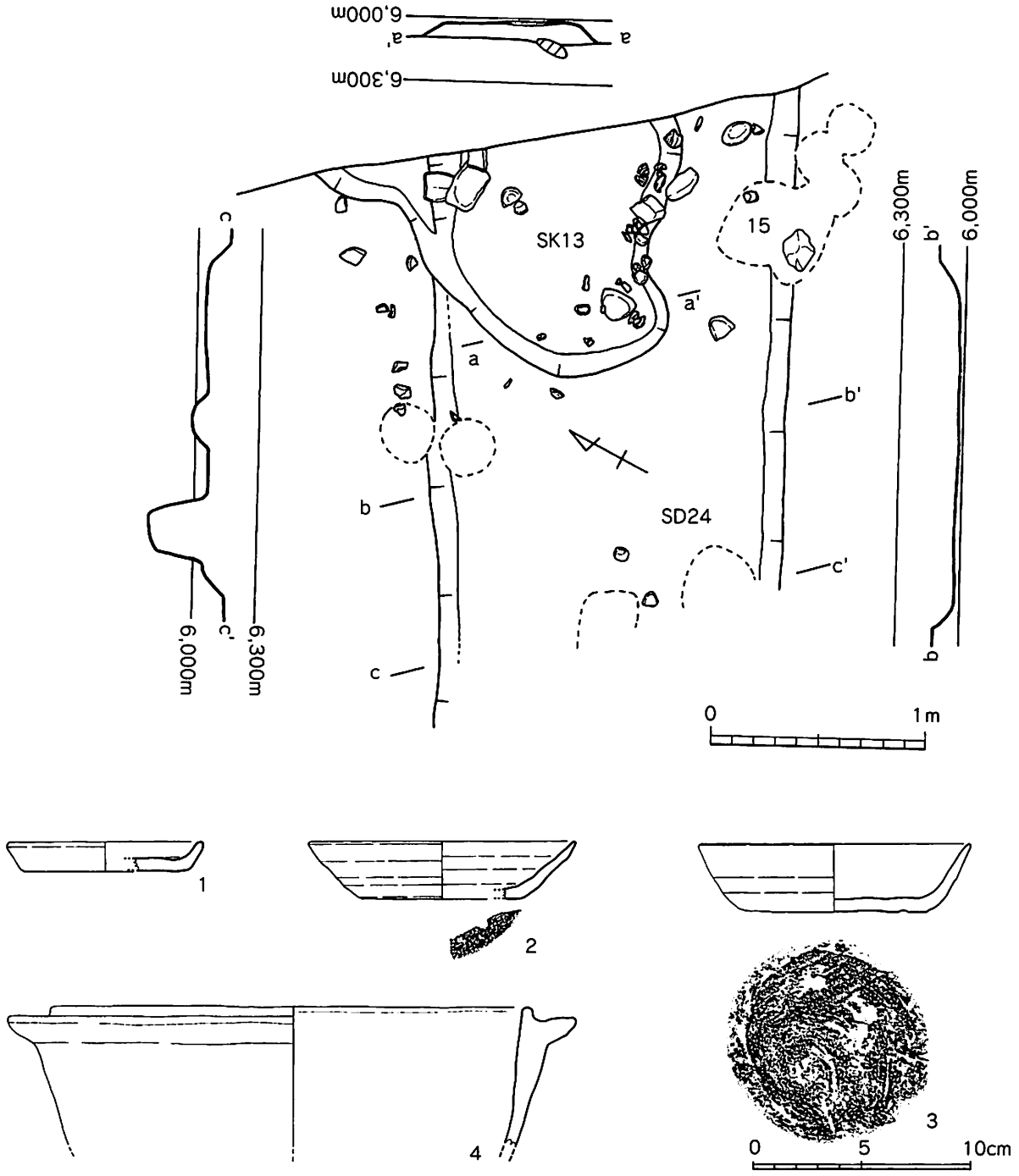
１区の東部、Ｈ１１区に位置し、南北方向に走る溝状遺構である。検出した標高は6,23ｍ～5,89ｍである。上面幅65㎝、深さは24㎝程度あり全長142㎝を検出したが、北部は土坑ＳＫ１３が重複しており消滅している。時期の分かる遺物は１３世紀である。



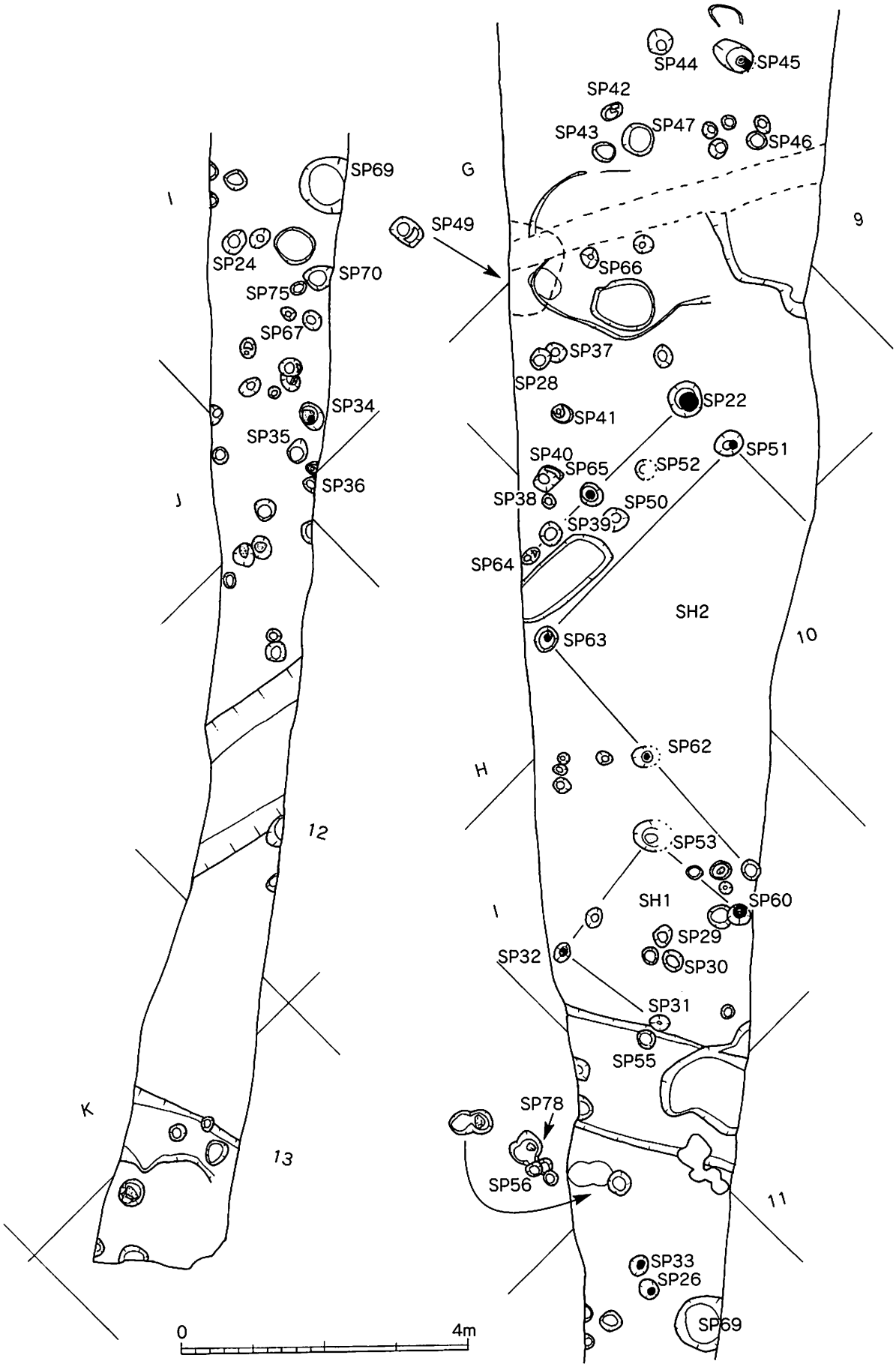
第83図　SD20・SD21・SK16・SK18出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6　銭S=1/1）

出土遺物（第８４図１～４）

１～３は土師器である。１は底部が厚く、短い体部が直線的に開く。口径9,0cm。提携7,7cm。２は口径12,4cm、底径7,8cmで、体部が大きく外湾し、体部の中位が内側に窪む。３は外底部に板状圧痕をもつ。４は瓦質土器の鍋で、口縁上部に鍔状の突帯を廻らす。これらは１３世紀に属す。



第84図　SD24の位置と出土遺物実測図（S=1/3）



第85図　1区掘立柱建物跡・柱穴群位置図

7．1区の掘立柱建物跡

1区中央部から少し東、SD23から東側には多数の柱穴が存在した。調査中、排水ポンプが不可欠だったように水気の多い場所であることを反映し、木の柱基部を残す柱穴が少なからずあった。調査区の幅が狭かったため、調査中には掘立柱建物跡を復元できなかったが、整理段階で
2基 2基を想定することができた（SH1・SH2）。柱穴（一部土坑を含む）の断面図を第90図に掲載する。

SH1（第85図・第86図）

H10区に位置する掘立柱建物跡で、長軸はやや南に傾いている。4個の柱穴がある。3個に柱が残っていた。すべて円柱である。柱の間隔はSP60とSP53が2,20m、SP53とSP68が2,63m、SP63と東側の柱穴が2,23mである。

SH2（第88図）

G9区・H9区・G10区・H10区に位置するほぼ東西方向に長軸をもつ掘立柱建物跡である。判明した範囲では4個の柱穴からなり、3個に柱が残っていた。どれも円柱である。外側にはこの建物の短辺に平行に並ぶ柱列が認められる。柱の間隔はSP60とSP53が2,20m、SP53とSP32が2,63m、SP32と東側の柱穴が2,23mである。

柱（第87図1・2・第89図）

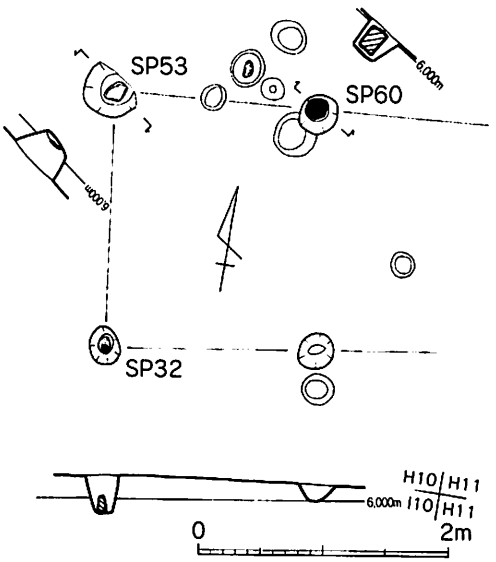
1は基部を水平に鋸引きし、断面形は歪な木の状態をそのまま利用している。直径は2は鉈状のもので下部を整形しただけで、側面は木をそのまま使っているようである。直径10,4cm～11,4cm、長さ22,0cmである。第89図はSP68の柱である。皮がないだけの円柱で、下部はおそらく鋸で切断整形している。直径10,8cm～12,2cm、長さ21,8cmである。

8．1区包含層の遺物

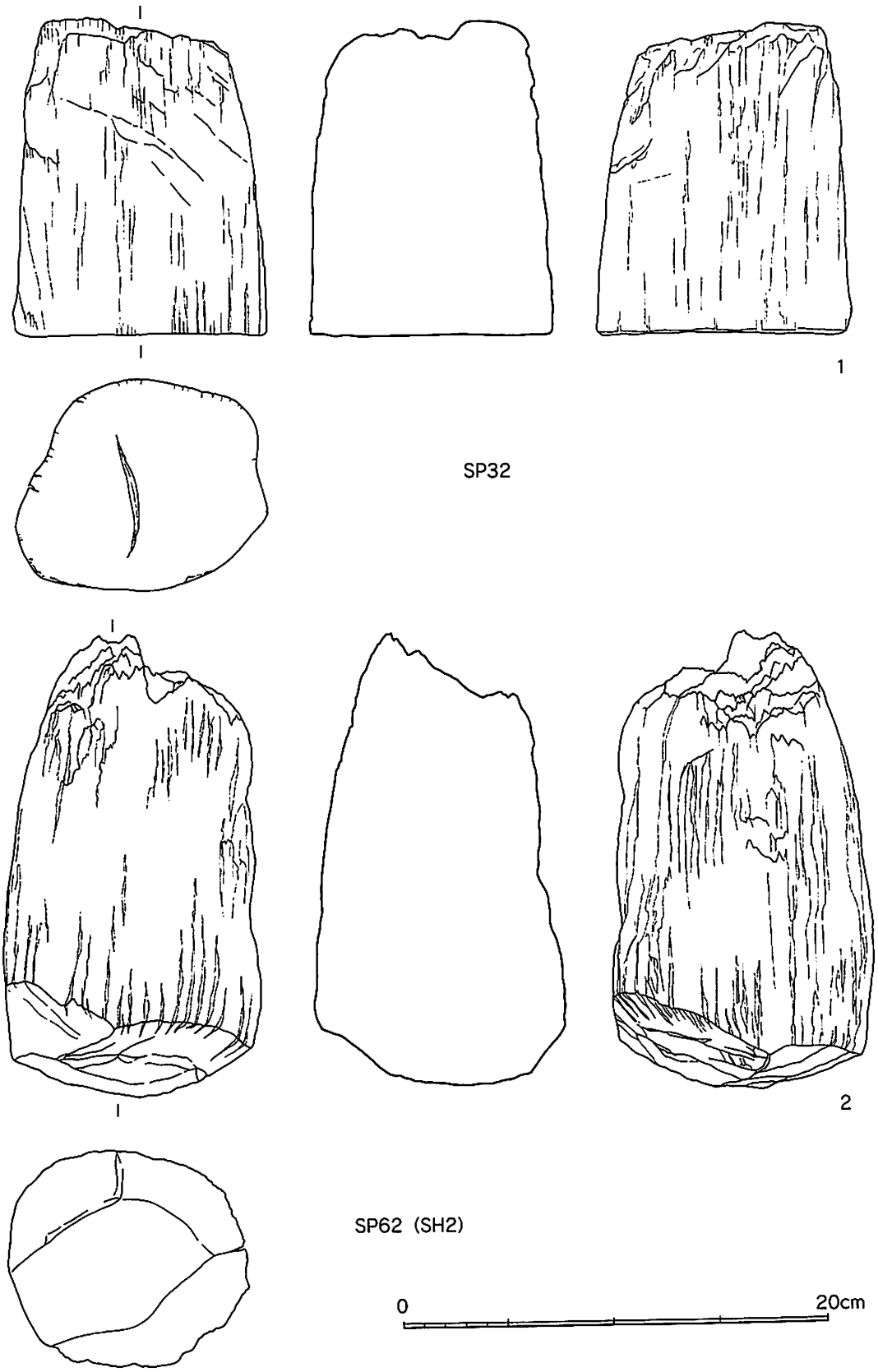
遺構外の包含層から出土した遺物をここで説明する。

第91図1～28は京都系土師器皿で、器壁が厚い1～6、9・11・14等は塩地編年の第3期に該当し、器壁が薄い8・24・26等は2期に比定される。口径は9cm～10cm、10cm～11cm、12、13cmが主体で、少量15cm以上がある。

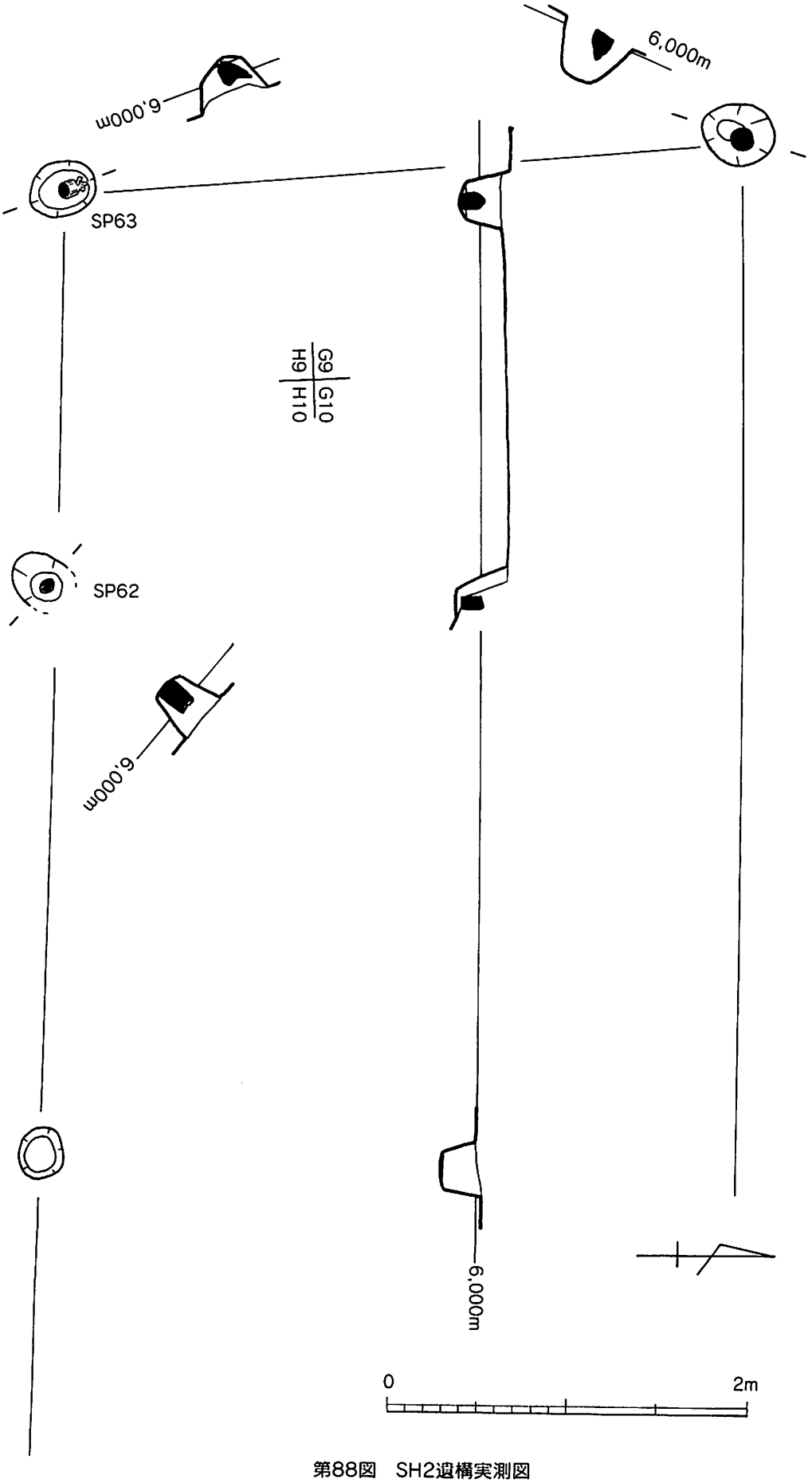
第92図1～25は在地系土師器皿で、すべて糸切り離しの痕跡を残す。3・20・23・25



第86図　SH1遺構実測図（S=1/30）



第87図　1区柱穴出土の木柱（S=1/3）



第88図　SH2遺構実測図

の外底面には板状圧痕がつく。１・２は底面から体部への移行に丸みを帯び、４は長めの体部が内湾気味に立つ。１４世紀初頭前後に比定する。３・５・６・８は体部断面が三角形状をなす短いもの。底部の厚さと体部の厚さに差が無く、１４世紀前葉から中葉に比定する。７・９・１２・１５は短い体部が外湾するもの、１０・１２は直線的に外反するものでどちらも１４世紀前葉に比定する。２１・２４は板状圧痕をもつ。２５は灰白色を呈する薄手の皿で、底部外面に板状圧痕がつく。大内系土師器の搬入品である。１６世紀前葉に比定する。１６・１７は直線的に体部が外反し、内面に段状のなで調整を残す。

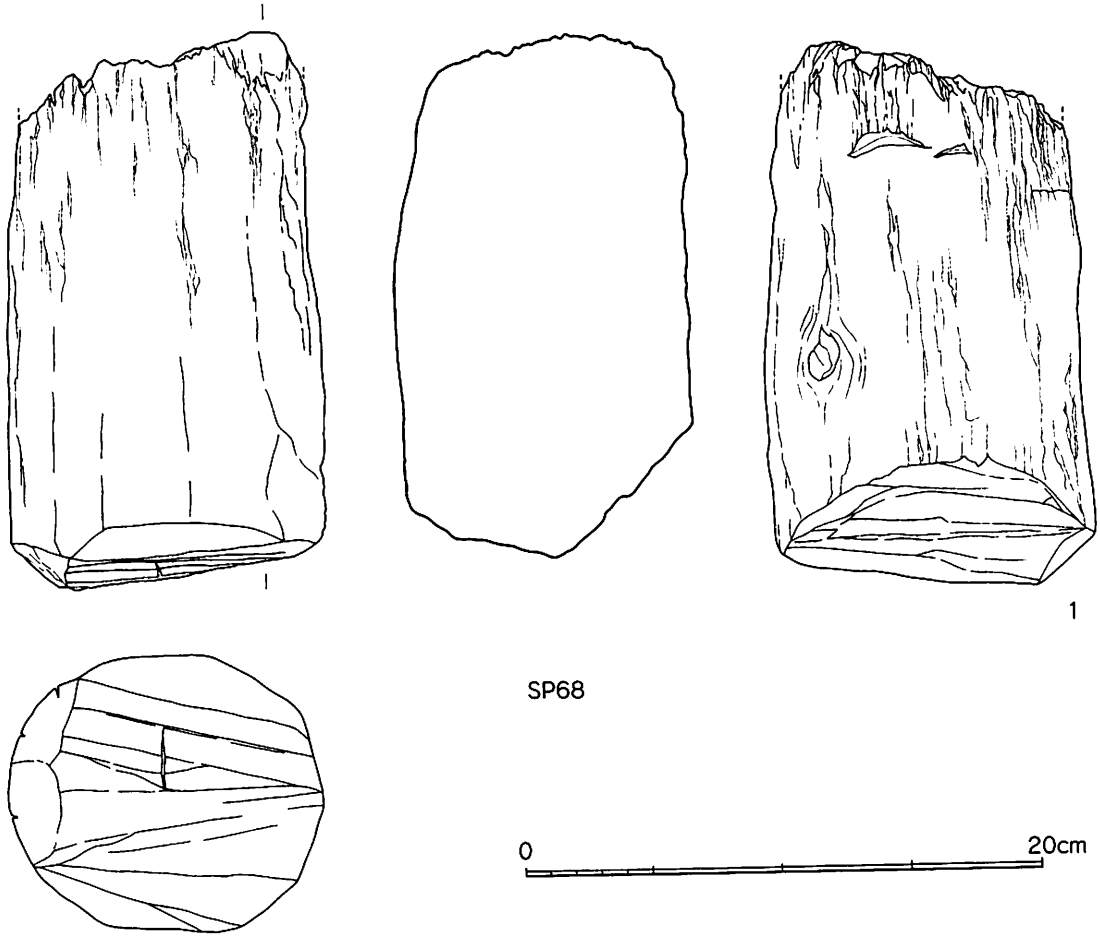
第９３図１～１１は在地系土師器で、２の底部には板状圧痕がつく。これらは１４世紀から１５世紀前葉に比定されるものである。１２・１４～２１は中国景徳鎮窯系青花碗である。１３は中国漳洲窯系青花皿で、内外面の上下に直線を入れ、中間に唐草紋がみられる。１９は１６世紀後半の饅頭心型の碗である。２２・２３は碁笥底型の中国漳洲窯系青花皿である。

第９４図９は中国漳洲窯系青花皿で内面に直線紋、外面に直線紋の上位に列点紋を描く。

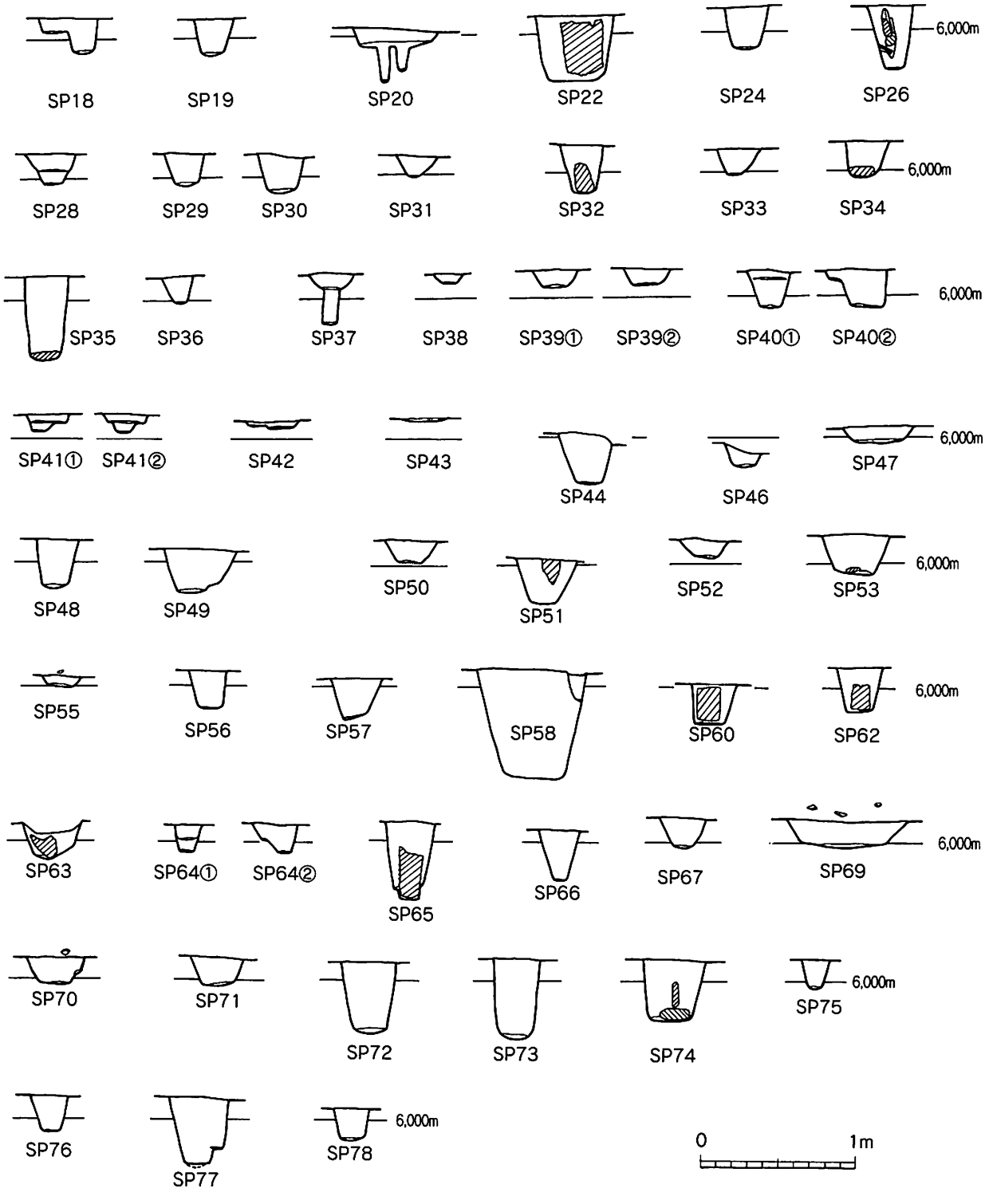
第９７図１～１８

１１～１６は備前焼で、１１は１４世紀後半、１２は１３は厚く折り返した口縁部外面に３，４条の凹線をいれたもので、1570年代以降とされるもの。１４は１４世紀後半。１５は１６世紀後半。

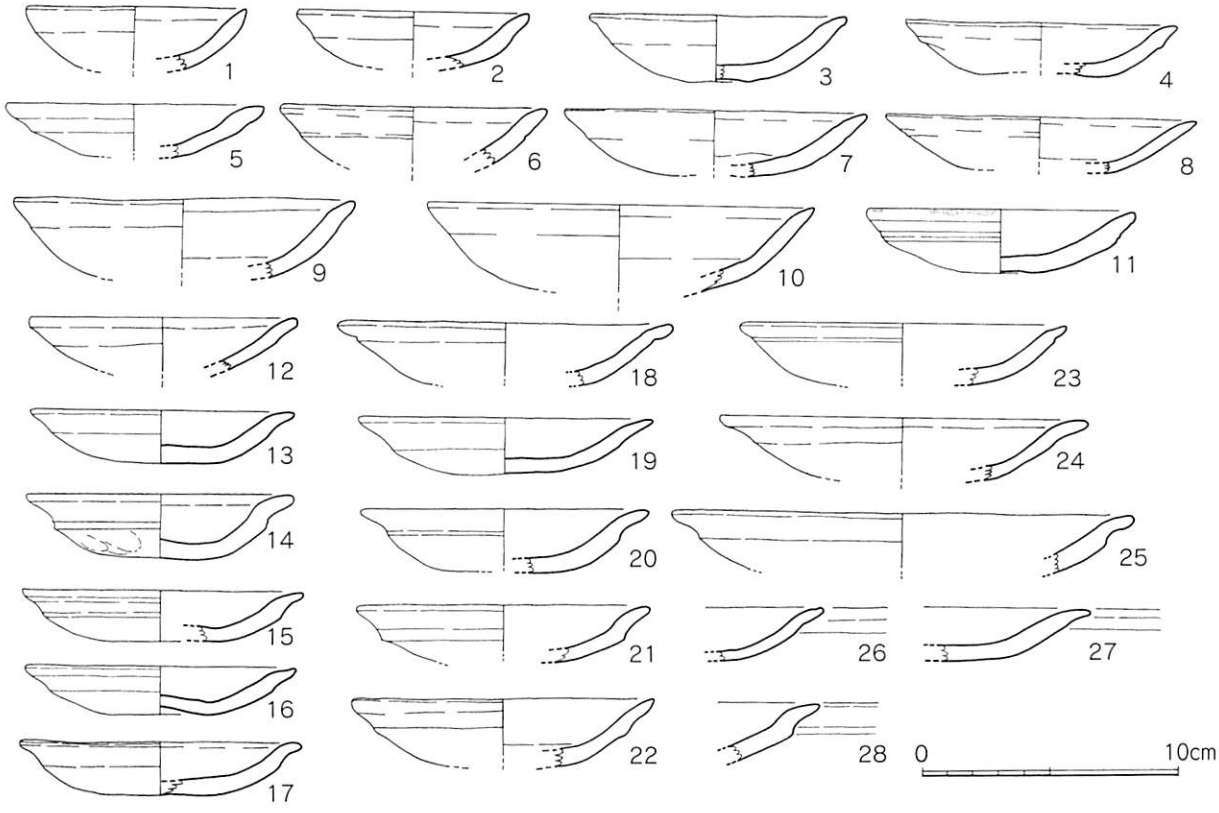
玉砂利　その他、遺構や包含層から玉砂利が少なからず出土した（巻末写真）。石材は佐賀関半島先端部の海岸線で採集できる蛇紋岩及び佐賀関周辺で採集できる石英である。この両者は古代（竜王畑遺跡）以来、豊後地域で玉砂利として多用されている。



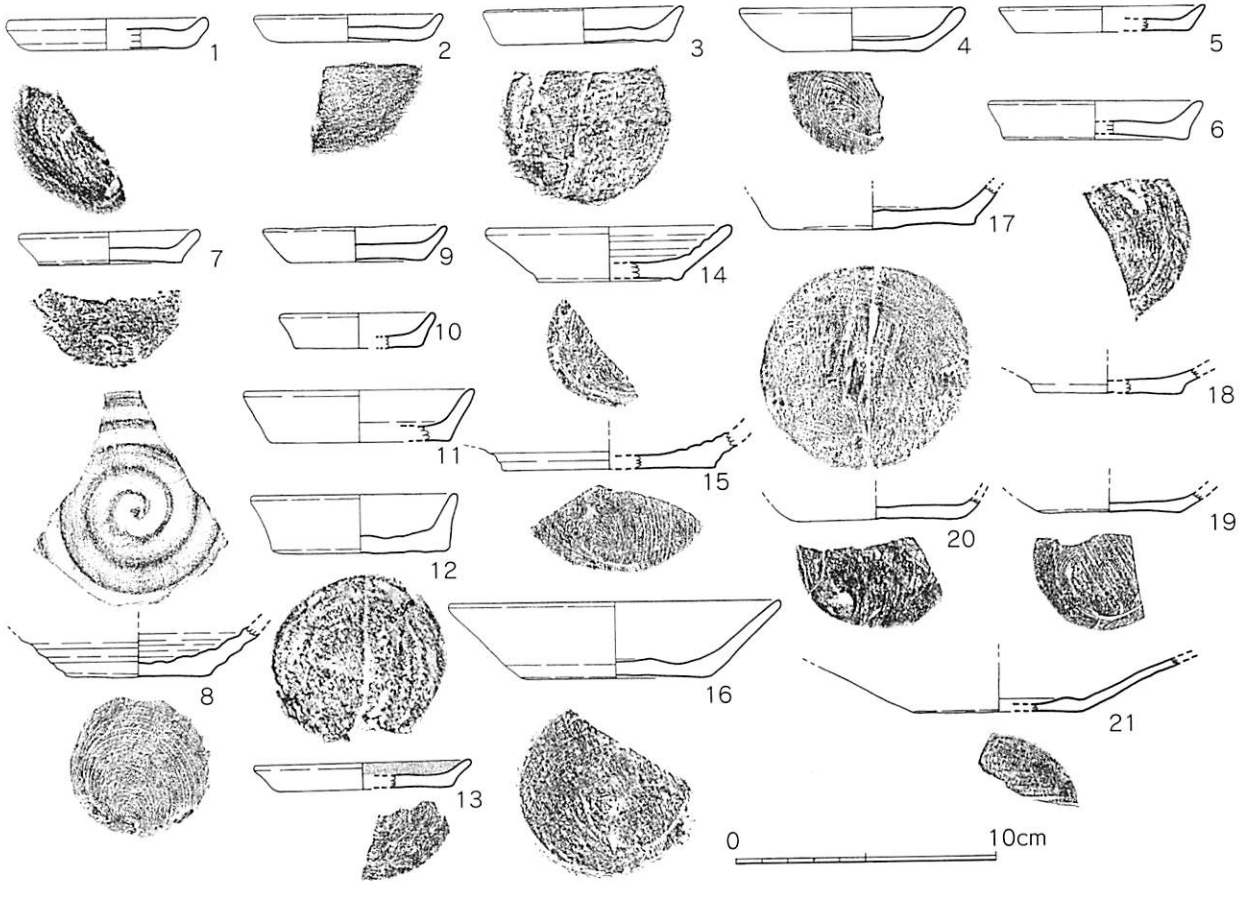
第89図　1区柱穴出土の木柱（S=1/3）



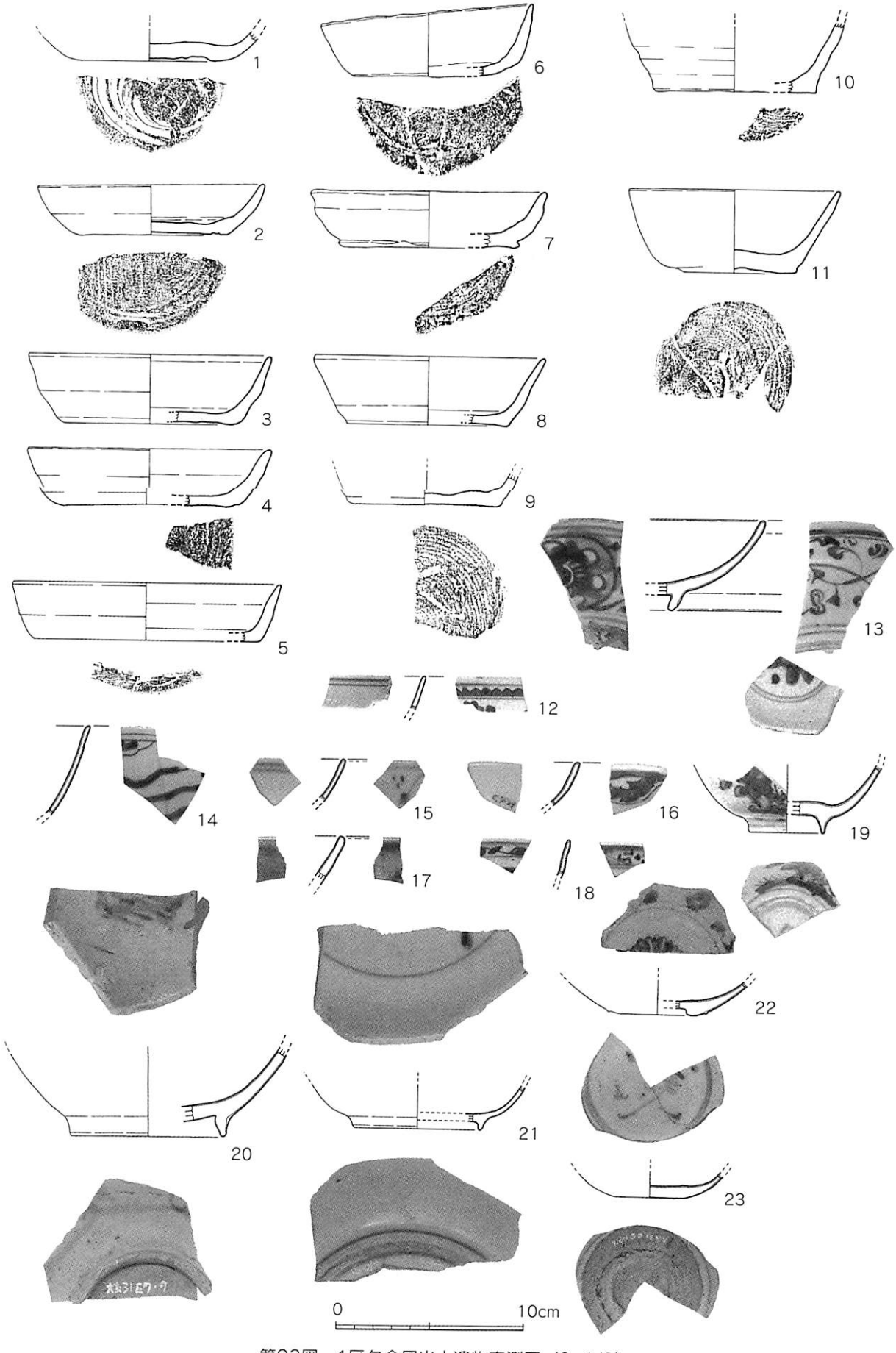
第90図　1区柱穴断面実測図集成（S=1/40）



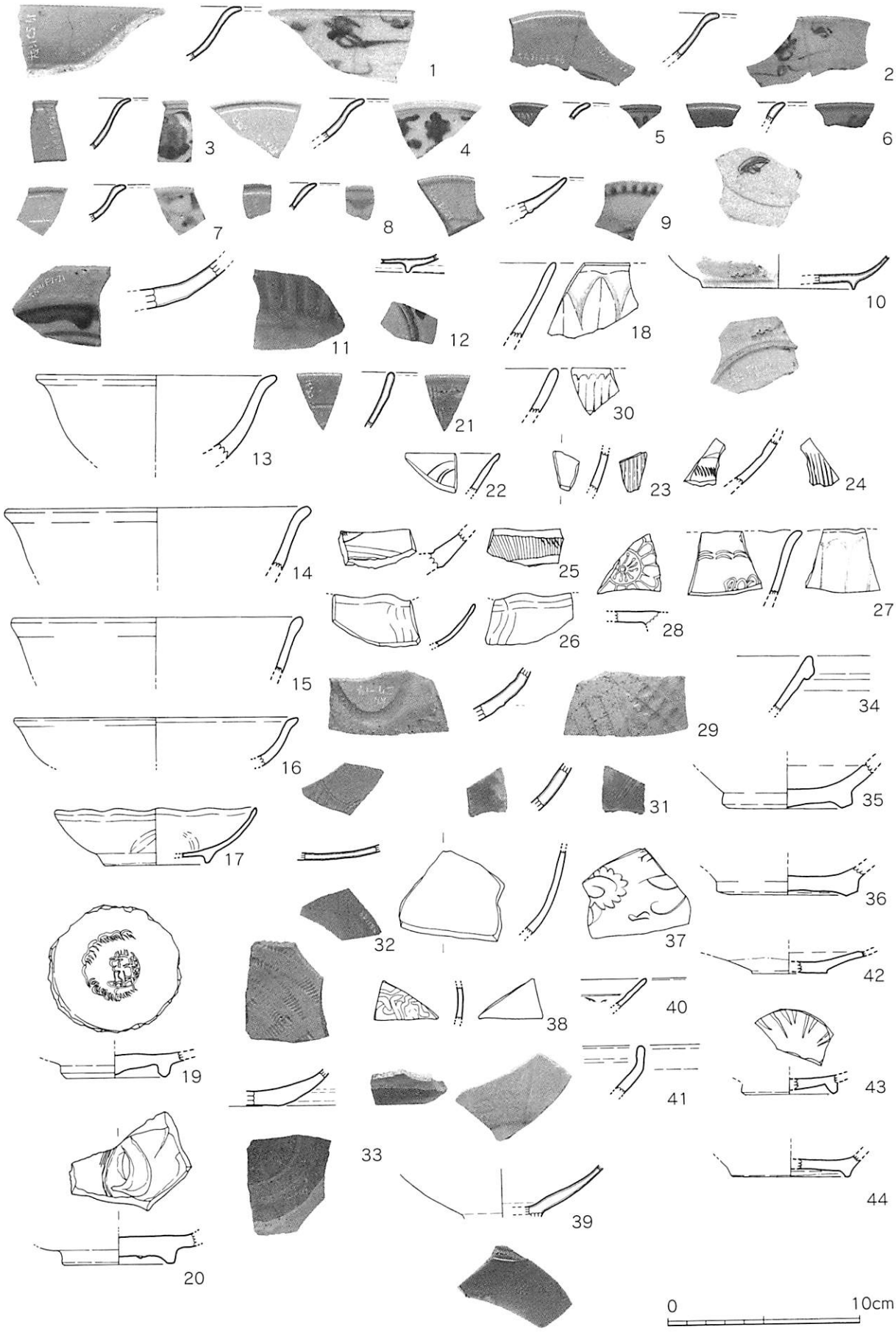
第91図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3）



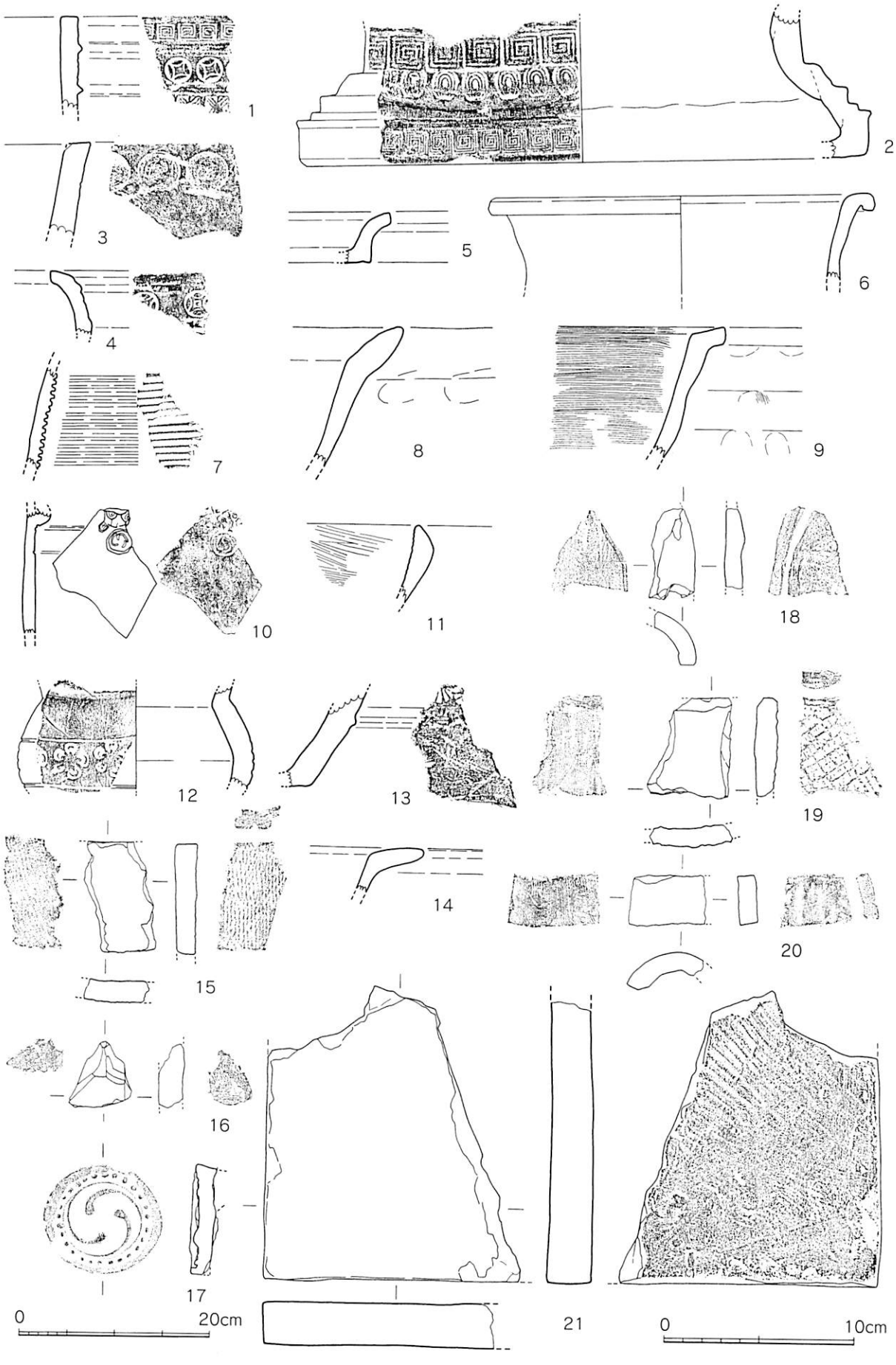
第92図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3）



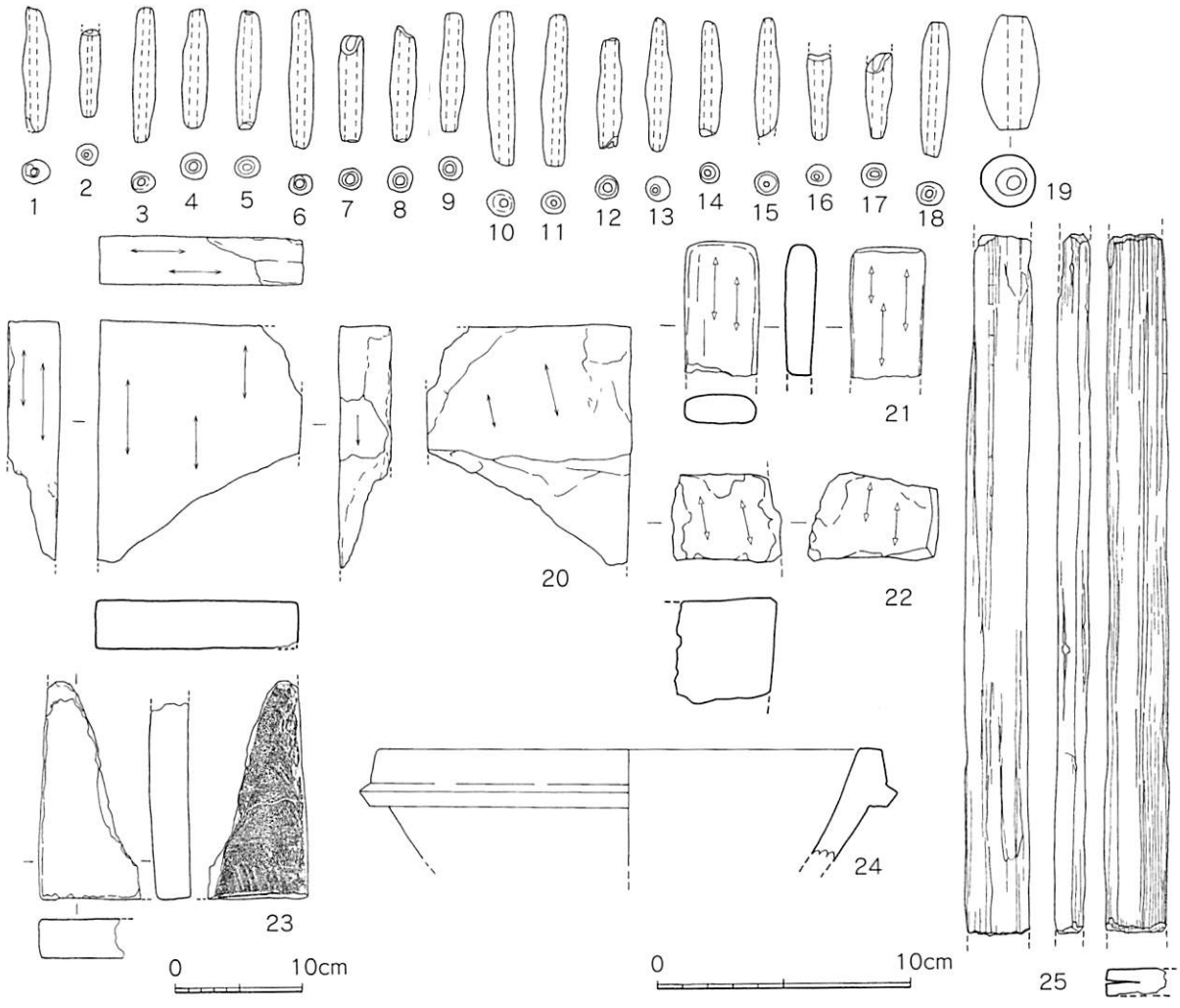
第93図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3）



第94図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3）



第95図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



第96図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）

９．１区その他の遺構

時期の明らかな遺物が出土せず、所属時期の不明確な遺構をここで扱う。

ＳＫ２０（第９８図）

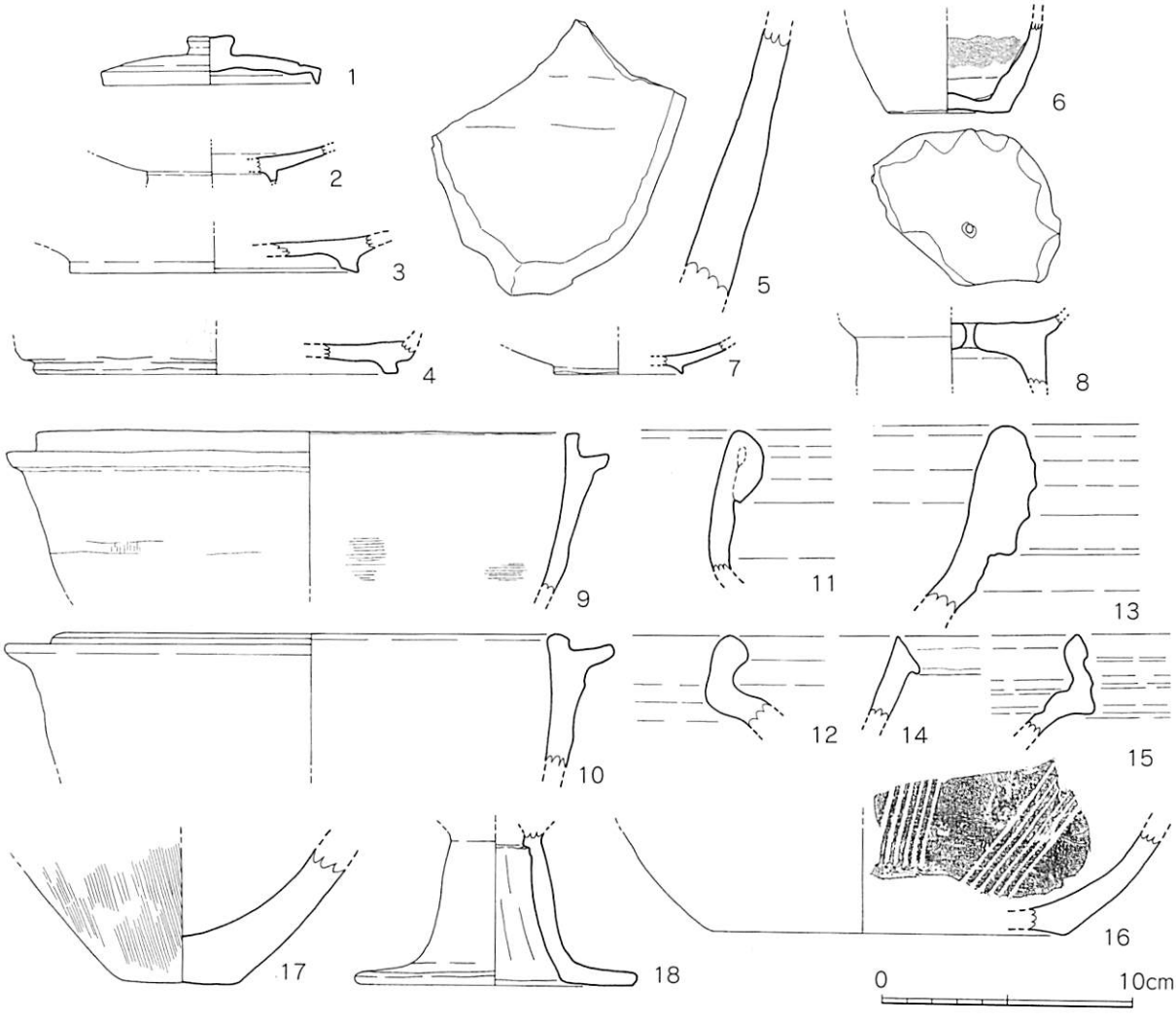
Ｃ６区に位置し、半分くらいは調査区外に出ていると思われる平面方形の土坑である。ＳＤ１０の溝本体部分とは重複関係にないが、溝上部の広がった部分の掘り上げ終了後に確認したので、それよりも古い遺構だと考えられるが、遺物がほとんど全くなく、時期は分からない。１区東北壁のこの部分の層序図を再掲する。埋土は細かな砂層を主体としていた。

ＳＫ１５（第９９図）

Ｄ５区にある。検出面の標高は6,25mで、ＳＤ１１南部と同じ面で検出した幅86cmの土坑である。長楕円形の平面形をし、長軸は南北方向にあり、床面は平坦で深さは約40cmある。ＳＤ１１と同じ面で検出したことから、１６世紀代の遺構だと考える。

ＳＤ２２（第１００図）

Ｆ８区に位置し、南側は調査区外に延び、北側はＳＤ２０と重複している幅60cm、深さ22cmの溝状遺構である。ＳＤ２０との重複部分にＳＤ２２を確認できていないが、この付近に１６世紀末以降の同様の溝状遺構が多いことから、ＳＤ２２も同様のものである可能性がある。



第97図　1区包含層出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＫ２１（第１０１図）

大部分はＨ９区に、一部分がＧ区にあり、現状で長さ1,6ｍ、幅0,7ｍ、深さ20㎝の楕円形の土坑である。検出標高は6,197ｍで、周辺の柱穴類と変わらない。長軸は南北方向である。

出土遺物（第１０２図6）

中国製白磁壺で、頸上部が外側に屈曲した後、短い口縁部が上方に屈折する。乳白色の厚めの釉が内外面全体にかかる。口縁部最大径は8,7cm。

ＳＰ２５（ＳＤ１１のうち、ＳＥ１よりも北側部分）

ＳＥ１がＳＤ１１の屈折部分に重なっていたので、南北方向の溝と東西方向の溝の時期的関係が不明である。床面の高さは同じなのでおそらく同一の遺構と思われるが、南北方向の溝が屈折部から飛び出ているのが疑問である。当初この突出部を区別するため別番号を付けたので、ここで遺物を報告する。

出土遺物（第１０２図１・７）

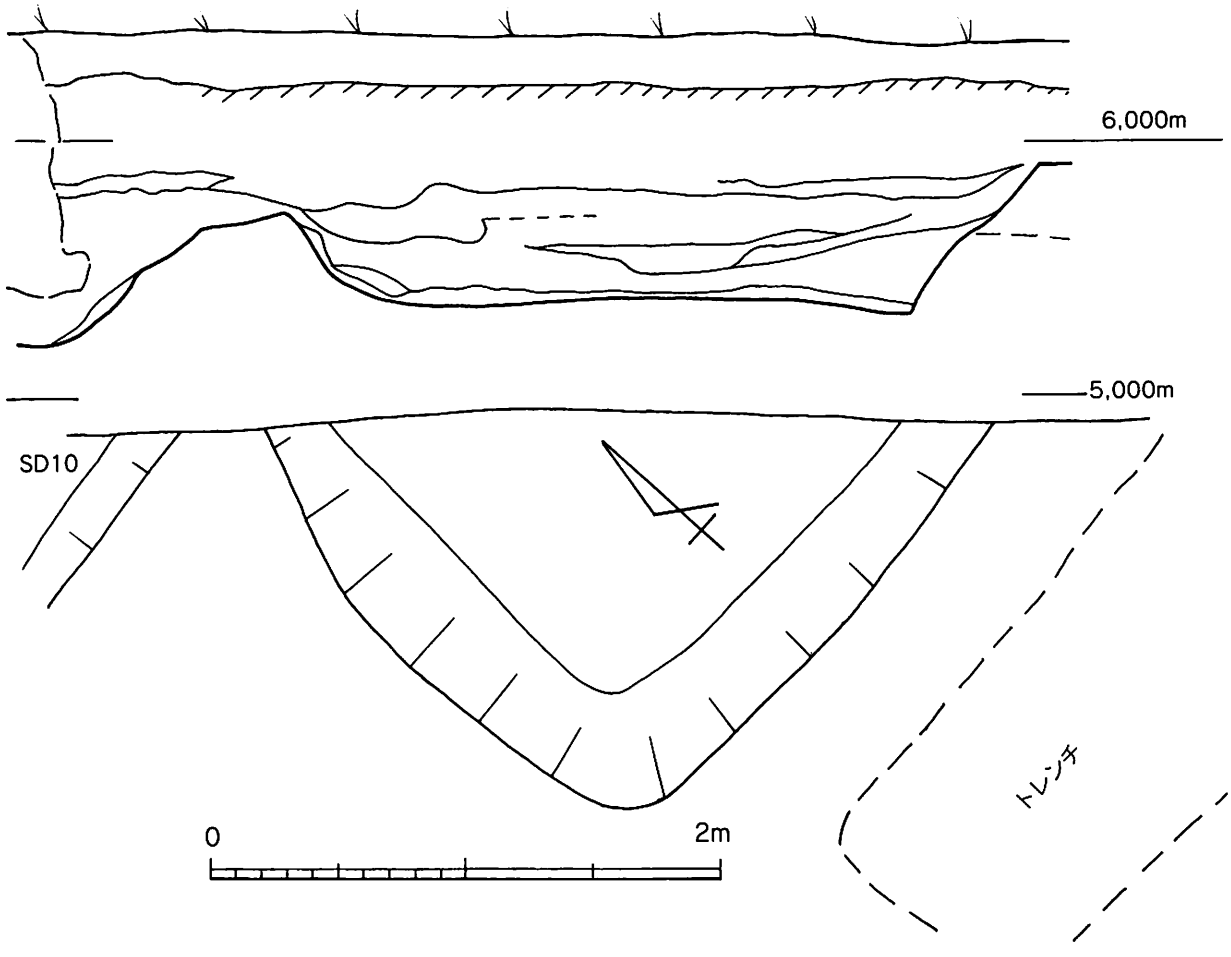
２は塼瓦で、３片が接合した（ＳＰ２５＋ＳＥ１＋ＳＤ１１南部）。胎土に石英を含む。コビキ痕を板状具でなで消した部分がある。７は朝鮮通宝で、メッキされてるのか表面が金色に輝く。

ＳＰ２６（第90図）
Ｉ１１区にある柱穴である。

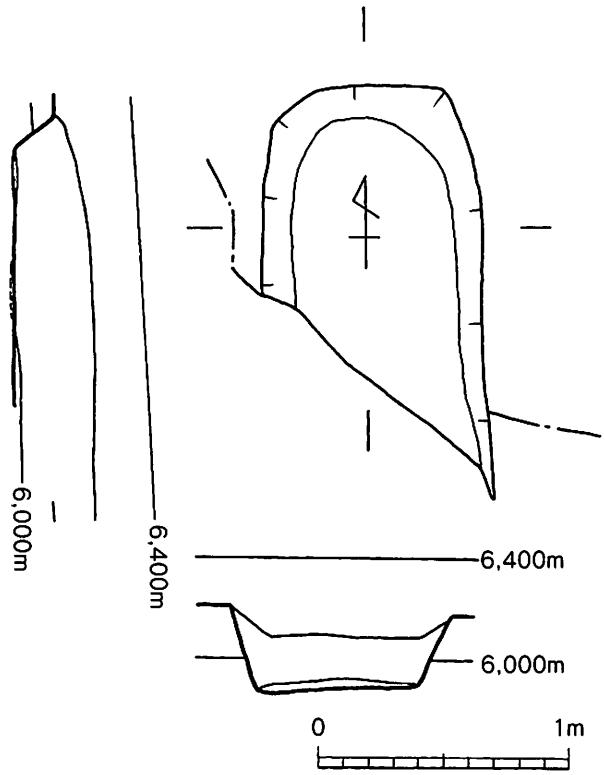
出土遺物（第１０２図１）
塼瓦である。裏面はコビキ痕を部分的に板状具でなで消す。胎土に石英を含む。

ＳＰ５１（第９０図）
Ｇ９区にある柱穴である。検出標高は6,046ｍ。

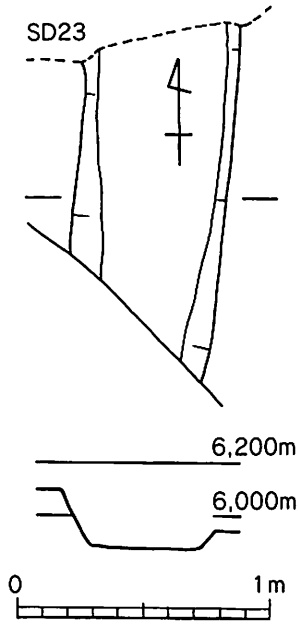
出土遺物（第１０２図４）
中国製白磁皿で、口縁端部は釉剥ぎし茶色の上薬を掛けている。



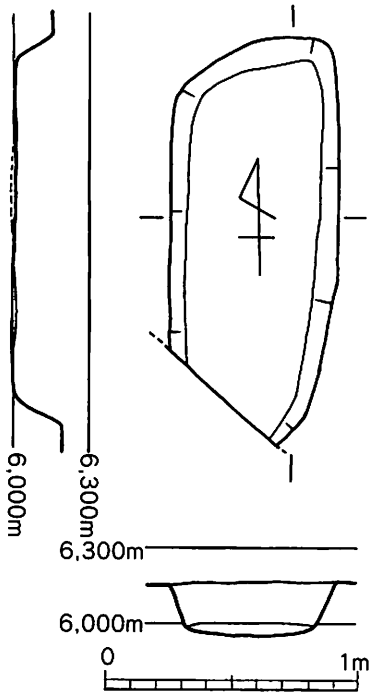
第98図　SK20遺構実測図（S=1/30）



第99図　SK15遺構実測図（S=1/30）



第100図　SD22遺構実測図（S=1/30）



第101図　SK49
遺構実測図

１０．２区の調査

最上層の攪乱・遺構

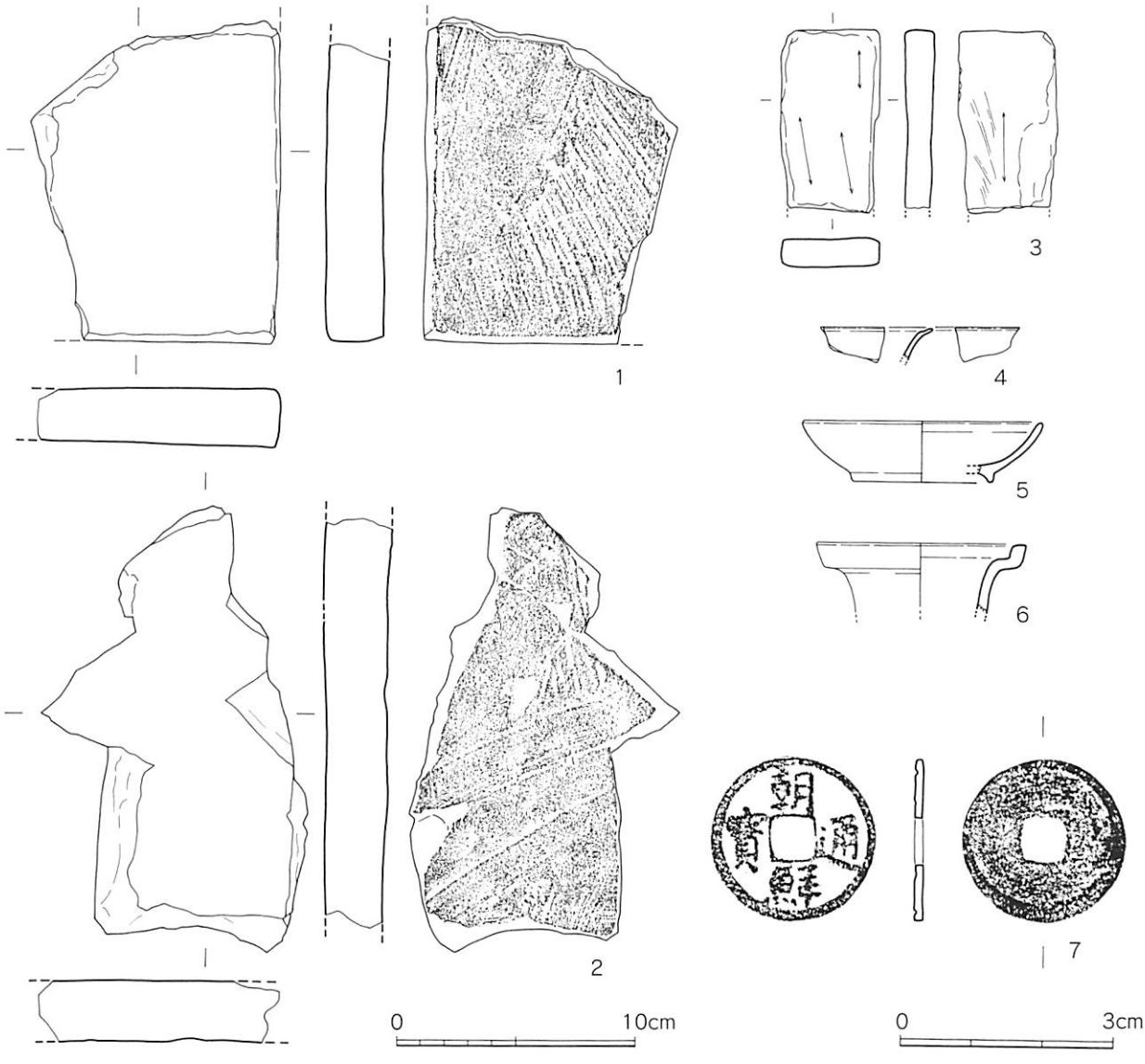
（1）分布状態

試掘時のトレンチがＬ１４区からＭ１４区に一カ所ある他、Ｍ１４区、Ｎ１４区に攪乱の穴がある。Ｌ１３区には南西から北東に向かって土管が埋設されていた。この土管は大正９年に鉄道が開設された際、南西側の水田から線路敷きを潜って配水するために埋設したものである。土管は接合部がやや開くもので、端部には連結のための溝が廻らされている。採り上げたが個別の実測図は作成していない。攪乱層を除去し、初めに検出したのが溝状遺構二条（ＳＤ２７・ＳＤ２８）である。石以外に出土物がないため遺構の時期は不明だが、検出標高が高く、１区の近世の溝状遺構に類似するのでこれも近世の所産としておきたい。

１１．２区上層の遺構と遺物

（1）分布状態

掘下げを行い攪乱・トレンチを除去した段階で土坑・柱穴・礫の集中箇所・瓦の集中箇所を検出した。時期を遺物からは１区の上層と比較できない。



第102図　1区時期不詳遺構出土遺物実測図（S=1/3　銭S=1/1）

（2） 遺構と遺物

ＳＸ４（第１０５図）

２区南東部では瓦を含んだ焼土が縦３ｍ×横1,6ｍの範囲に平面的に廃棄された状態で出土した。これをＳＸ４とする。分布は調査区外に広がっており、厚いところで標高6,5ｍから6,2ｍまでの厚さ30㎝堆積していた。２区の東壁でみると水田床土上面付近から掘り込まれている。

出土遺物（第１０６図１～６・第１０７図１～６・第１０８図１～１４・第１０９図１～４・第１１０図１～３）

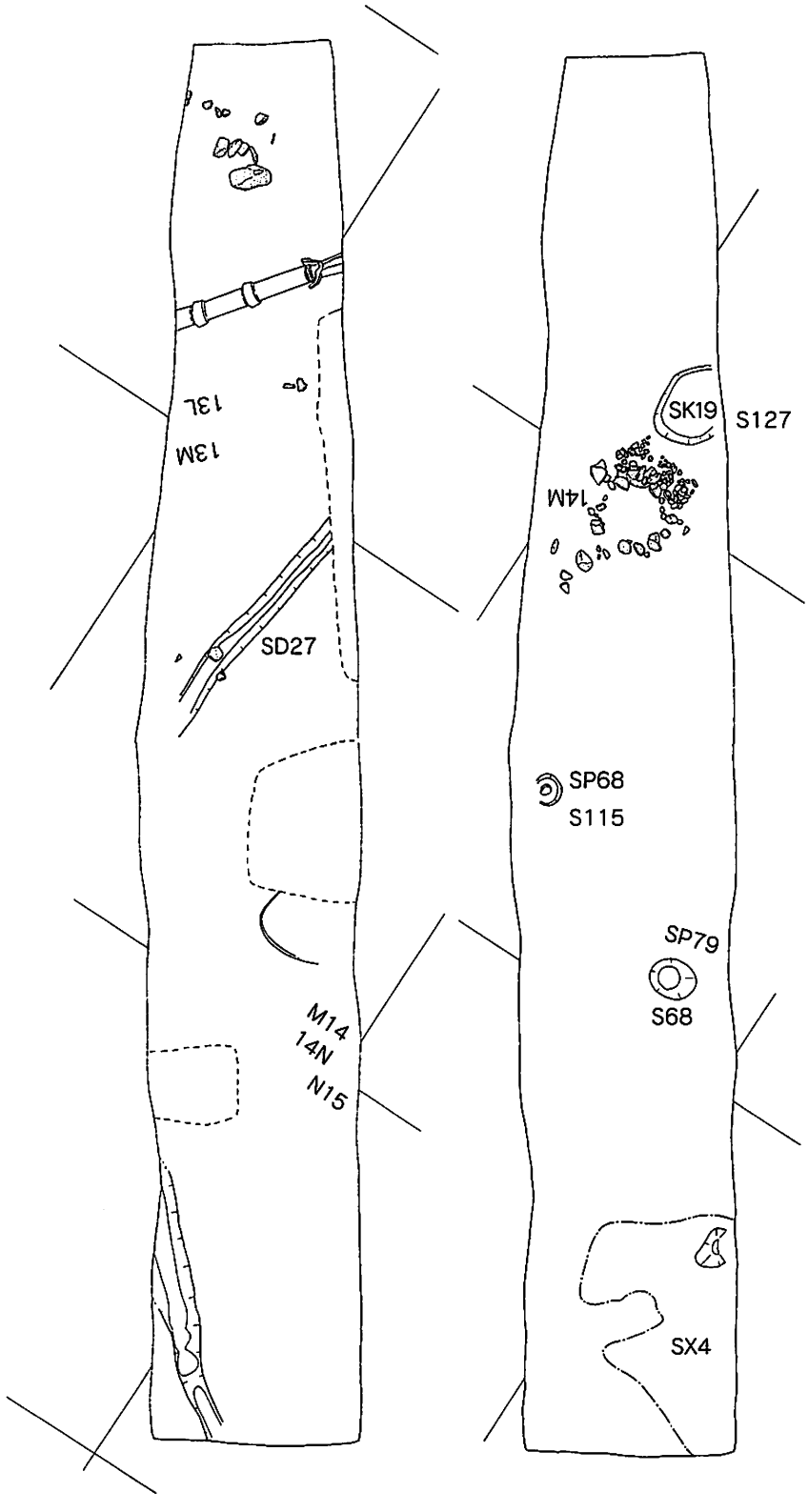
大部分は瓦類である。

第１０６図１は在地系土師器皿で、口径7,8㎝、底径5,4㎝。回転糸切り。２は古代の土師器皿で、高台径8,3㎝。器面はなで調整。３は土錘で、下端一部欠。４～６は壁土。４右面に竹圧痕があり藁縄を斜めに掛けた泥の圧痕がある。反対面は壁表面。厚さ３㎝。５は左面が表面で、その直角面および裏面に竹圧痕がある。６の左面が表面。裏側には藁圧痕。

壁土

第１０８図１～１２は平瓦。１３・１４は塼瓦。１３は本遺跡で唯一縦横の規模が判明した塼

瓦であり、横27,0cm、縦26,7cmとほぼ正方形である。表面はなで調整しているが、裏面は紐で粘土塊から切り離しており（コビキ痕）、側面は裏面に向かって斜めに削いでいるので、断面形状は台形気味になる。



第103図　2図遺構全体図

第１０９図も塼瓦で、２・３の裏面は一部をへらでなで消す。

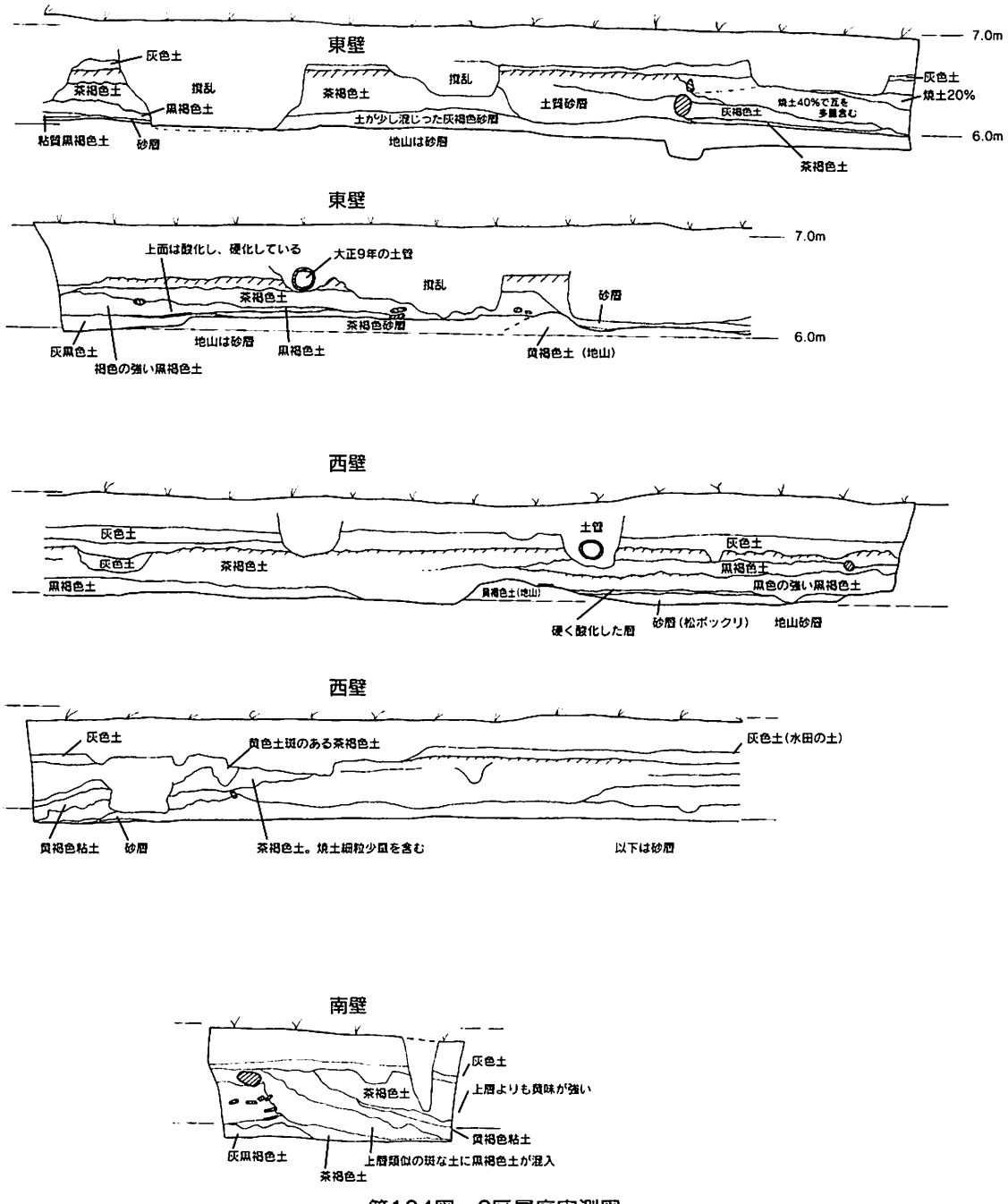
第１１２図１・２も塼瓦。３は鬼瓦の口の部分である。喉と口の左端、歯の左右の一部に表面が残るが、大部分は表面が剥落している。焼成は悪く、黄褐色を呈する。横14,4cm、高さ8,5cm。

ＳＫ１９（第１０３図）

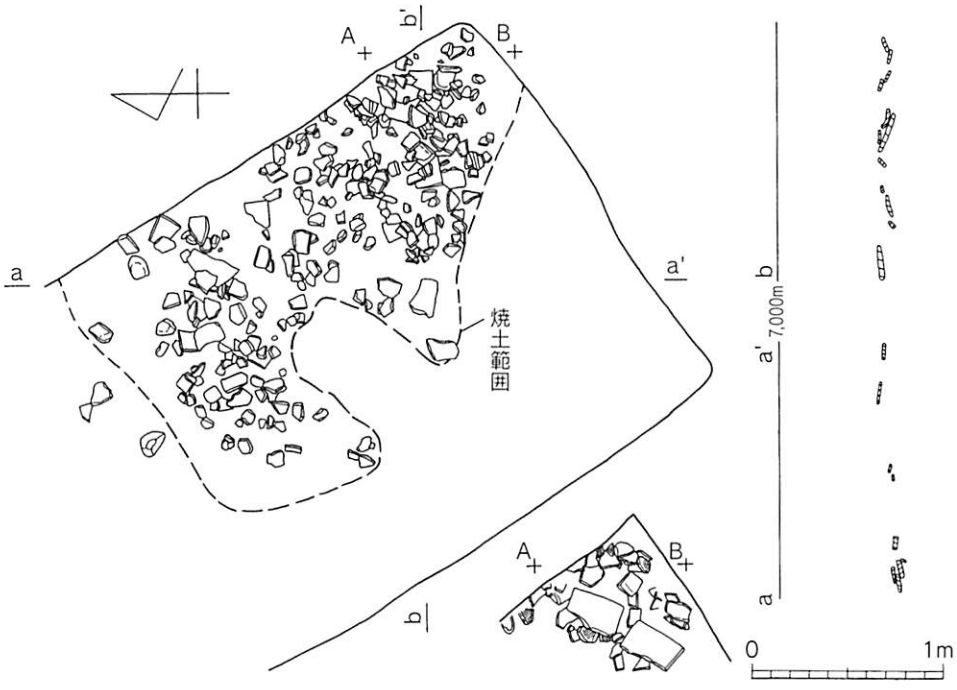
２区の北東部に位置し、検出標高は6,186ｍであり、地山直上に堆積する茶褐色砂層中から掘り込まれている。規模は平面形が88cm×約70cmの楕円形で、深さは最大12cmである。南側に小礫の集中する部分があったが、遺物の混入はみられず、自然にできた風倒木痕の可能性がある。

ＳＰ６８（第１０３図）

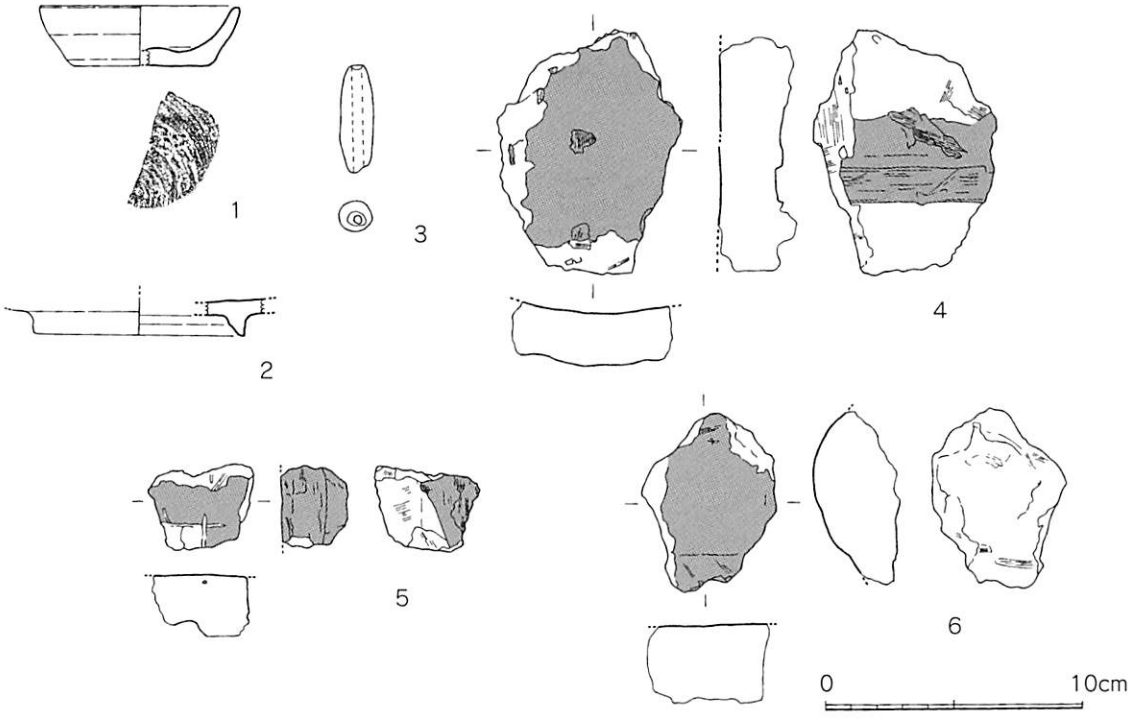
Ｇ９区に直径10cmの断面の円い柱痕が残る。検出標高は6,086ｍ。地山直上の黒褐色土中から掘り込まれている。



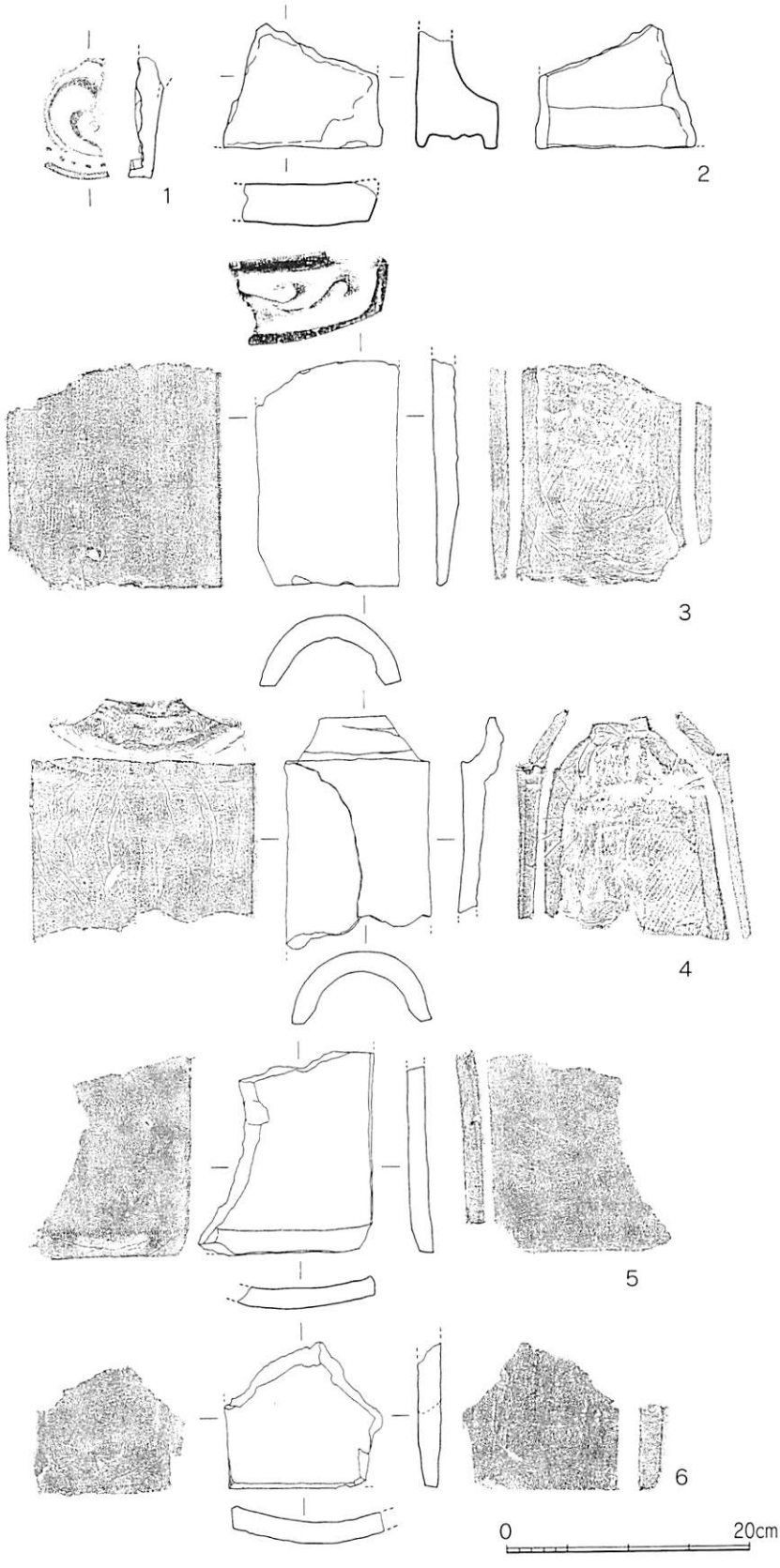
第104図　2区層序実測図



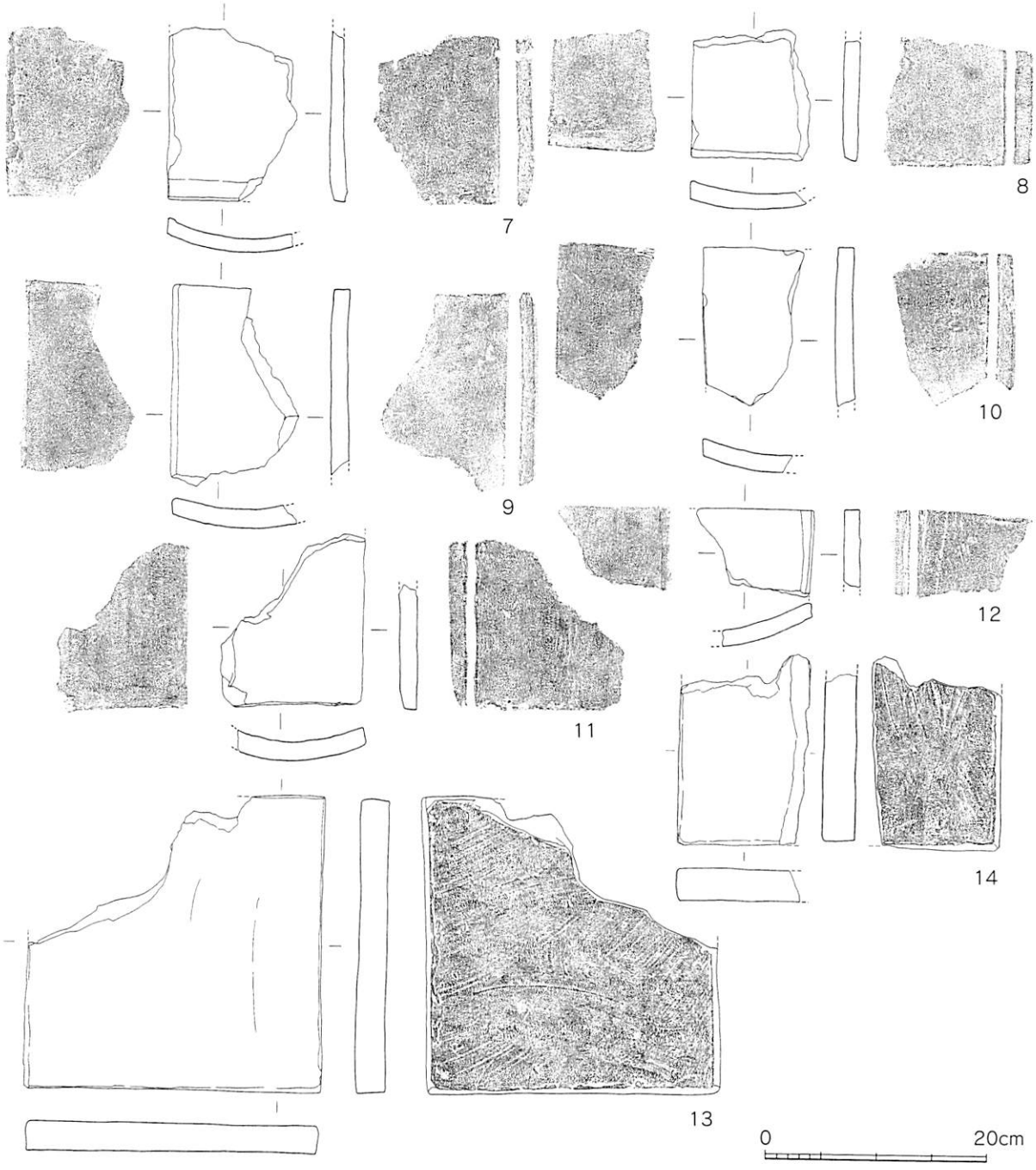
第105図　SX4遺構実測図（S=1/40）



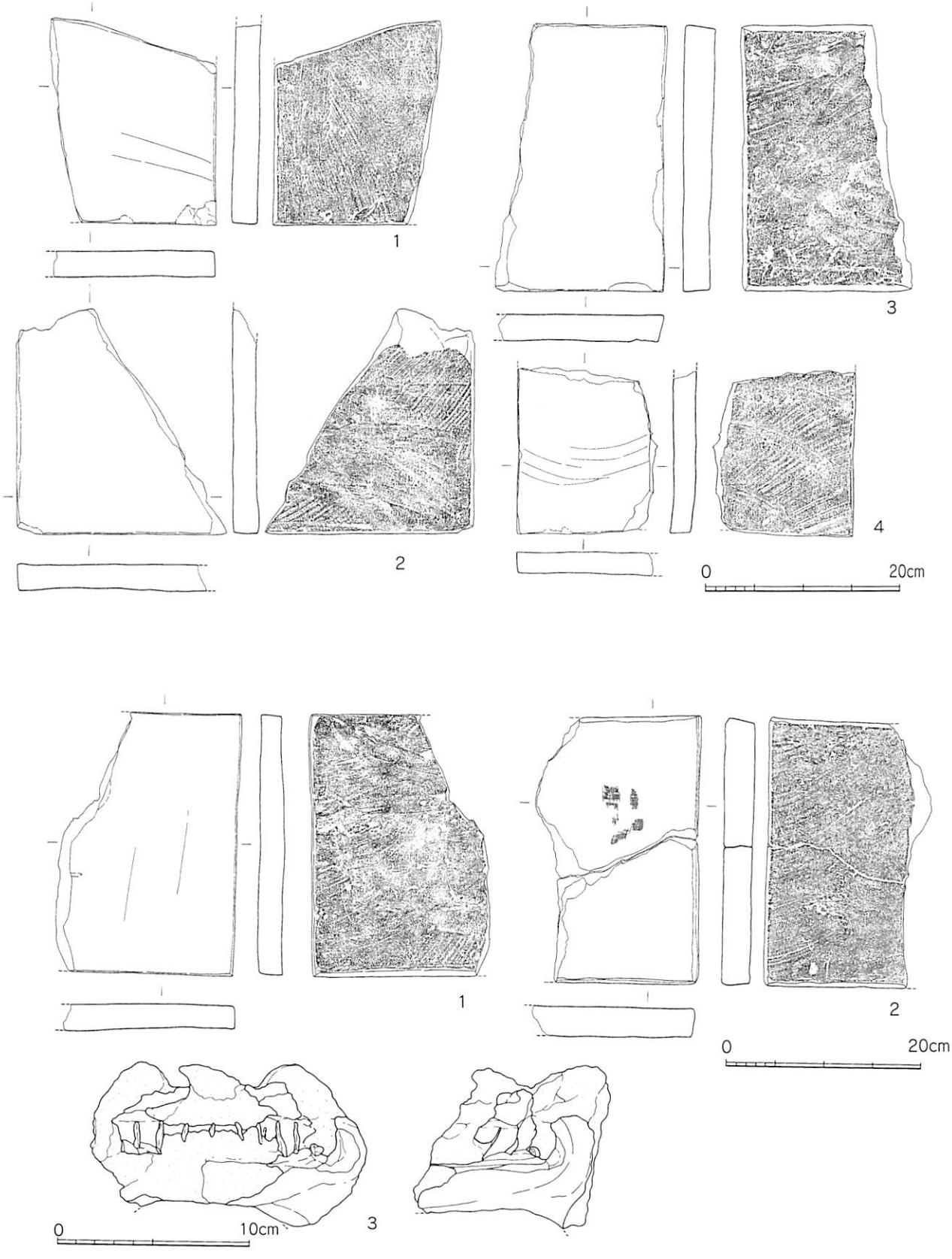
第106図　SX4出土遺物実測図（S=1/3）



第107図　SX4出土瓦実測図（S=1/6）



第108図　SX4出土塼瓦・瓦実測図（S=1/6）



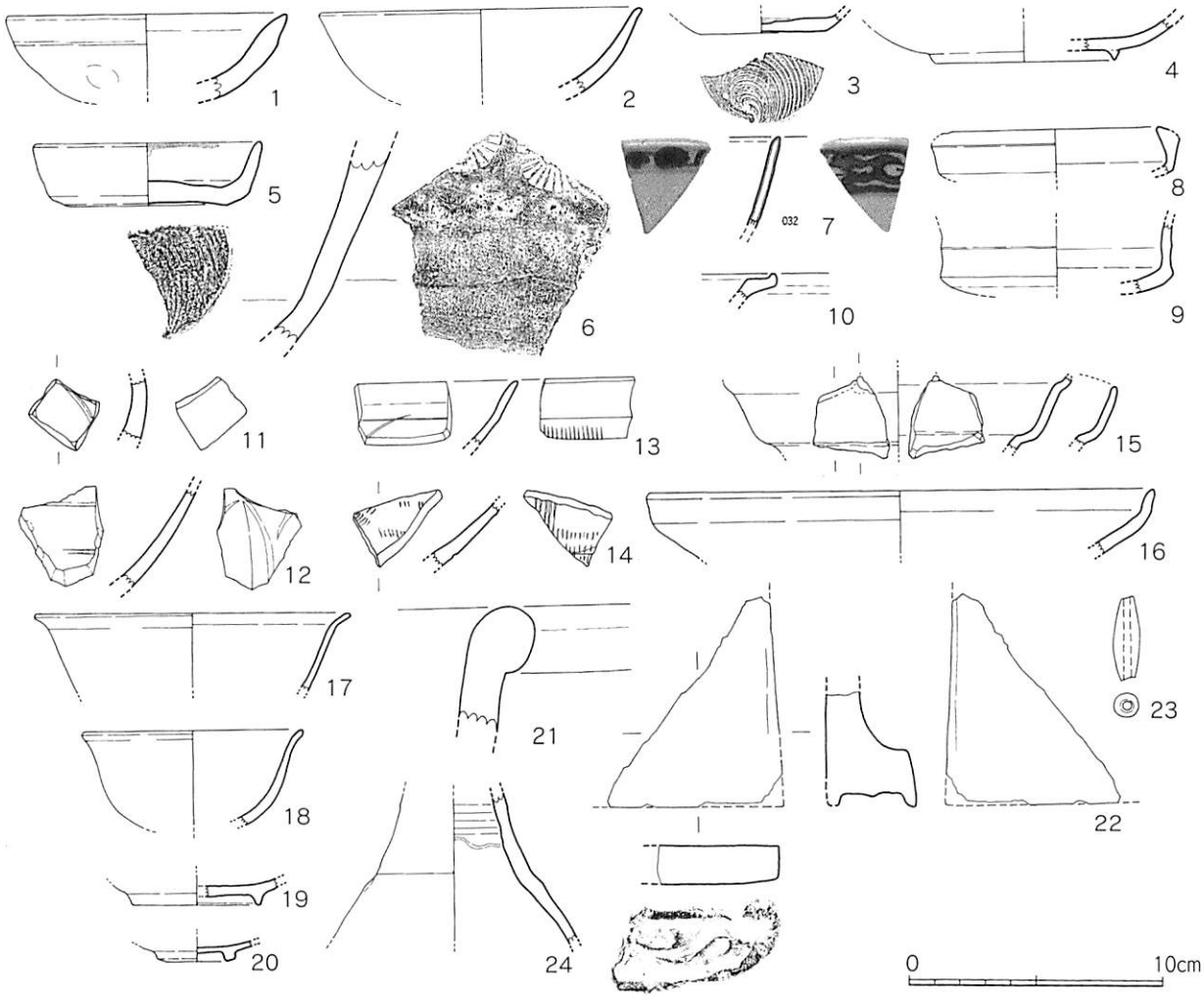
第110図　SX4出土塼瓦・鬼瓦実測図（S=1/6　鬼瓦S=1/3）

１２．２区包含層の遺物

遺構外の包含層から出土した遺物をここで示す。

出土遺物（第１１１図１～２４）

１は京都系土師器皿で口径11,2cm、厚さ0,9cmと厚手。２は土師器皿。金色の雲母を含む。３は大内系土師器皿で灰白色。底径5,0cm。４は瓦器椀で高台径7,1cm。５は在地系土師器皿で口径12,9cm。６は瓦質土器火鉢で灰色を呈す。菊花紋を刻印している。７は中国龍泉窯系青花碗。８・９は青磁香炉。８は暗緑灰色、９は灰緑色を呈する。１０は龍泉窯系青磁坏で１３世紀中頃から１４世紀初頭前後のもの。１１は同安窯系青磁で両目施釉、外面に沈線紋。１２は龍泉窯青磁碗で鎬蓮弁紋を外面にめぐらすもの。１３は同安窯系青磁皿で櫛描き紋をもち全面に緑灰釉がかかる。１４は同安窯系青磁碗で両面に櫛描き紋をもち、１２世紀前半頃のもの。１５は淡褐色を呈する白磁。１６は白磁で口径20,0cmとやや大きく、口縁部が内湾している。１６世紀？の盤か。１７は口径12,5cmの白磁碗。１８は白磁碗。内外面に貫入が入る。１９は白磁碗。畳付き以外は灰色の釉薬がかかる。２０は白磁。底部最大径は３cm、内面に灰緑色の釉薬がかかる。鋭く削りだした高台は１２世紀頃の特徴か。２１は備前焼甕。２２は軒平瓦。唐草紋がある。２３は土錘。２４は朝鮮陶器の舟徳利。



第111図　2区包含層出土遺物実測図（S=1/3）

１３．３区の調査

（１）層序

３区も最近の客土によりかさ上げされていた。特に東部では厚さ1,5mほどあり、その下層に旧表土が西部の９ｍくらいを除いて広がっていた。この層の下には水田床土が分布し、３区中央から東部には水田があったことが分かる。水田の分布する部分では、下層から近世の遺物を含みつつ中世の遺物が出土した。これは水気の多い土層で、湿地に堆積した土層であった。この範囲が古くは池とされていた場所と考えられた。池の床まで遺構検出面は認められなかった。池の西側にあたると考えられる場所では少し標高の低い位置に水田層なのか酸化して赤茶色に変色硬化した層が分布した。

（２）遺構と遺物

ＳＤ２５（第１１２図）

３区西部で検出した4,8mほどの溝状遺構である。調査区の幅が狭いのではっきりしないが、東西方向を主軸とするようである。第１１３図の層序図（最下段）にあるように、ＳＤ２５は３区の西端では地山に掘り込んだ状態であり、東部では地山の黄褐色土に掘り込んでいる（層序図下から二番目）。北西部の遺構検出面の高さは北西部では標高6,04m、東部で6,05m、床面は北西部で5,95m、中央部で5,9m、東部で5,74mである。時期は出土遺物から15世紀後葉以前である。幅４ｍ程度の溝状遺構のようである。

出土遺物（第１１２図１～３）

１・２は在地系土師器である。特徴は糸切り底であること、２点の立ち上がり角度が異なること、の特徴から１４世紀から１６世紀以前としか時期比定できない。３は平瓦で凸面には格子目叩きを、凹面には布目痕もつ古代の瓦である。

出土遺物（第１１４～１１６図）

３区の近世以降の層から出土した遺物である、

出土遺物（第１１４図～１１６図）

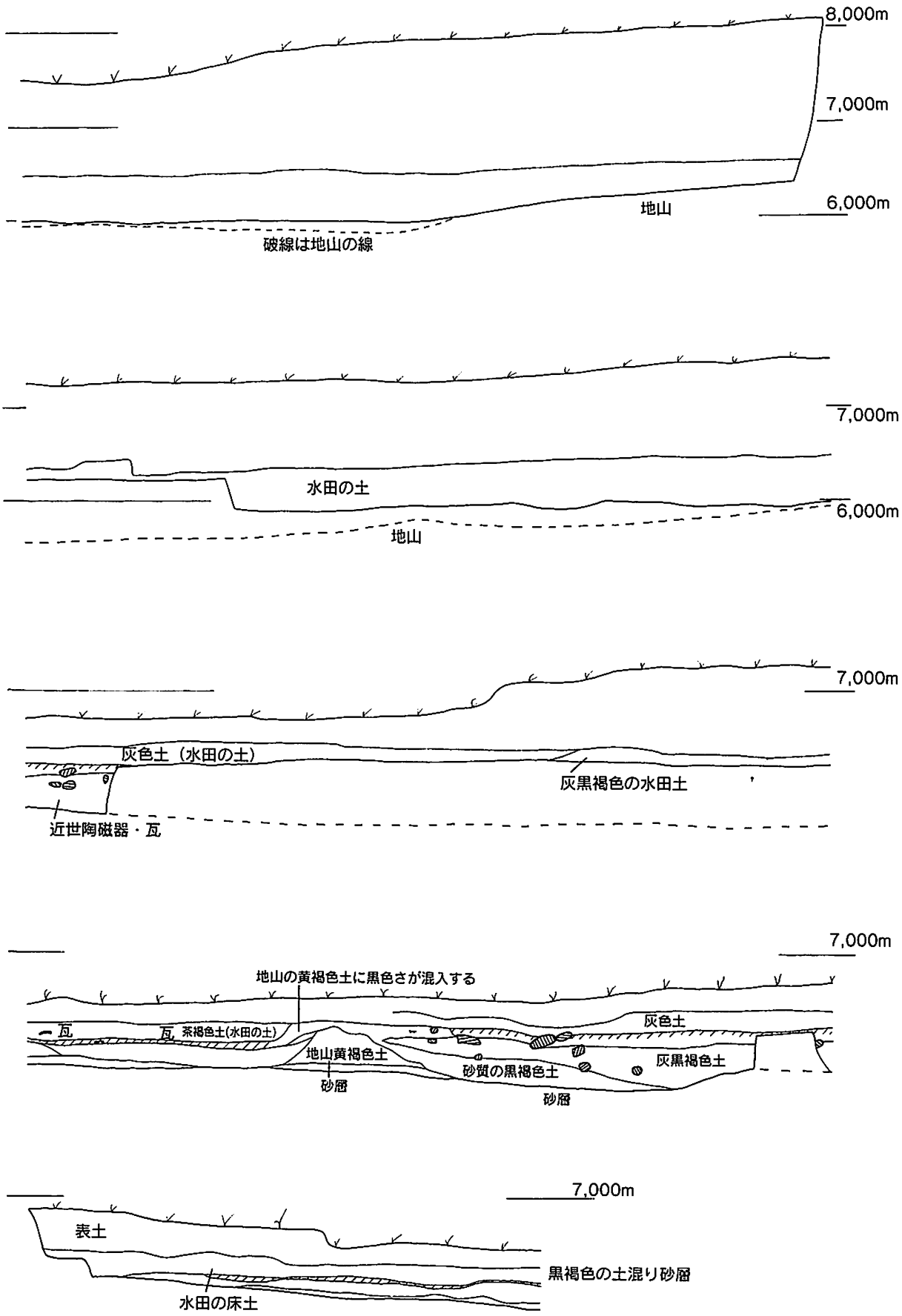
３区の近世以降の層から出土した遺物である。

石列（第１１４図）

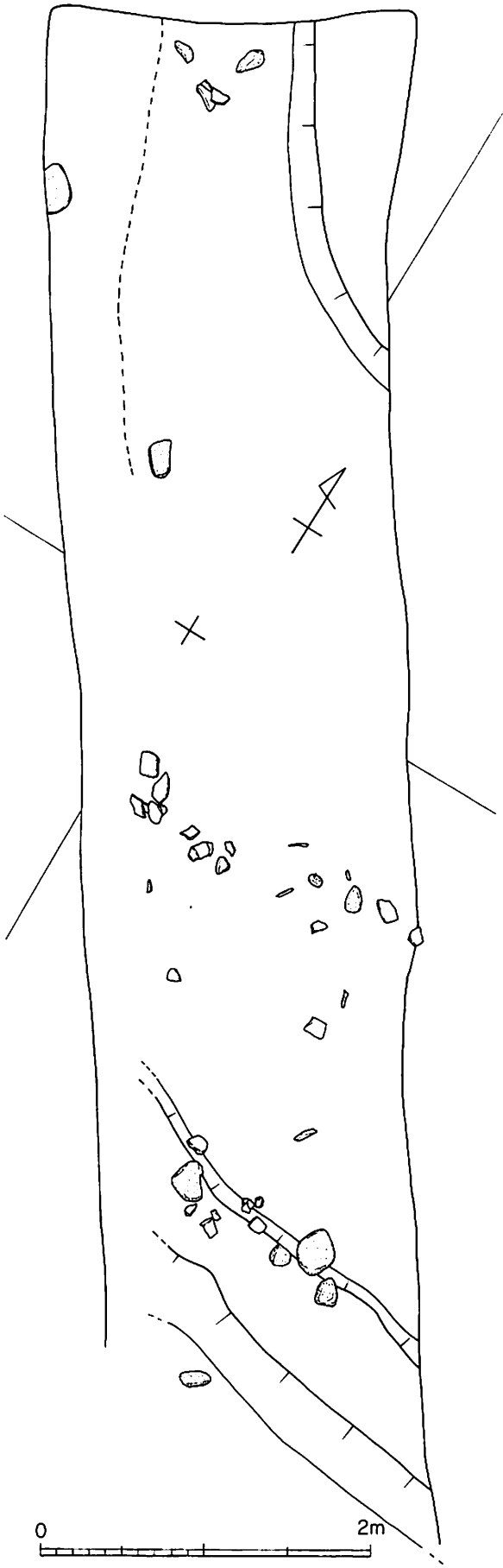
ＳＤ２５の東側、ＳＤ２５の東部土手より高い位置で検出した石列である。東西方向に五輪塔部材４個を並べ、端部に直角に立方体の石２個を組み合わせている。東部水田分布域にあり、近世の造成に関わるものであろう。

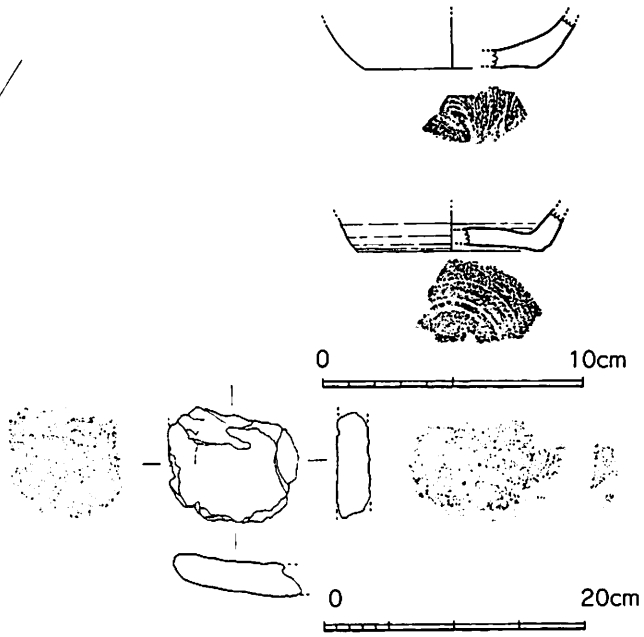
第１１５図１～５は在地系土師器で、１は底部が厚く、短い体部が直線的に外反し、１５世紀末から１６世紀前葉に比定する。２も底部が厚く、同じ頃であろう。３は体部が途中で屈折するもので、１４世紀中葉から後葉に比定する。４は体部下部で屈折し、口縁端部が尖りつつ外反し、１４世紀中葉から後葉に比定する。５は口縁と底部の径の差が少なく、体部端部が外湾するもので内面に刷毛目がある。１６世紀前半に比定する。６は中国製青磁瓶。全体に施釉している。７は中国製褐釉陶器の壺である。８は中国製白磁碗。見込みに蛇の目状釉剥ぎがあり、中心部は施釉している。９は中国龍泉窯系青磁碗である。内面に片切り彫りの紋様がある。１０は白磁で外面は体部上部だけ施釉、内面に一条沈線がある。１は瓦質土器の鉢で、口縁端部が少し厚い段状をなす。内面の器面調整は刷毛目である。１２は瓦質土器で、内面は刷毛目状の調整、外面には型押しのススキのような紋様をもつ。１３～１５は軒丸瓦で、珠紋・巴紋をもつが、巴紋の方向は１３だけが逆である。１６～１８は丸瓦。１９は軒平瓦で、本調査区出土の他の瓦とは異なる。石英を多く含む。２０は鬼瓦の一部と思われるが不詳で、眉毛の可能性がある。

第１１６図１～８は丸瓦、９・１０は軒平瓦である。９は軒平部分の厚さが１０に比べて薄いが、紋様は同じようであり、個体差であろう。これらの軒平瓦は、紋様部と直角をなす下側を向く面は横方向のなで調整、平瓦につづく屈曲部は強く縦方向になでている。

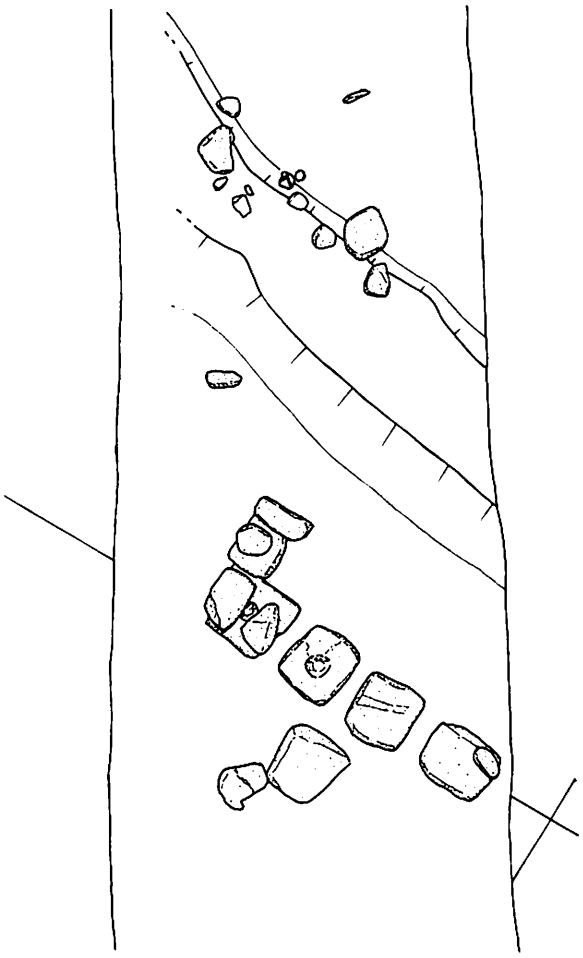


第112図　3区東北壁実測図

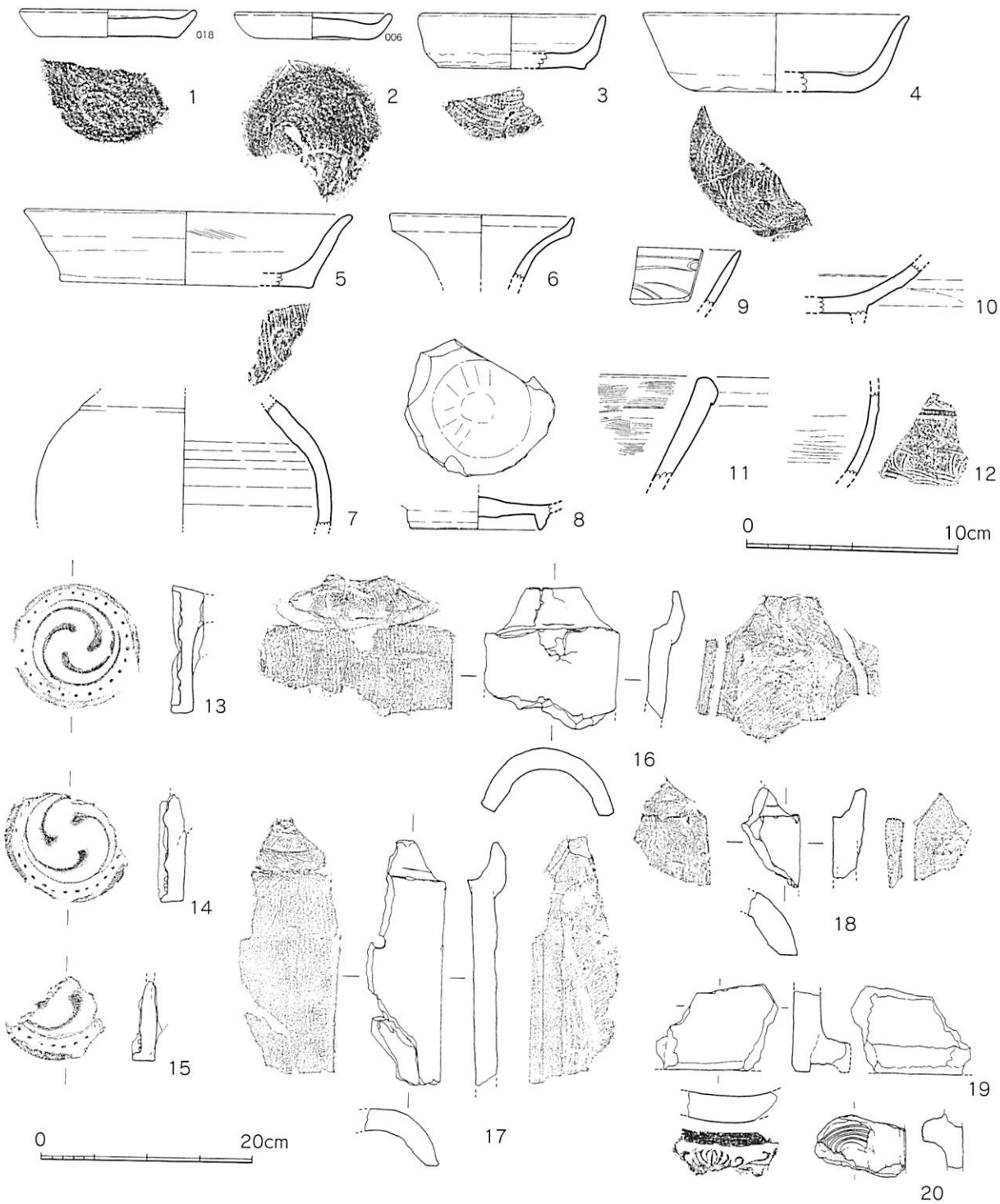




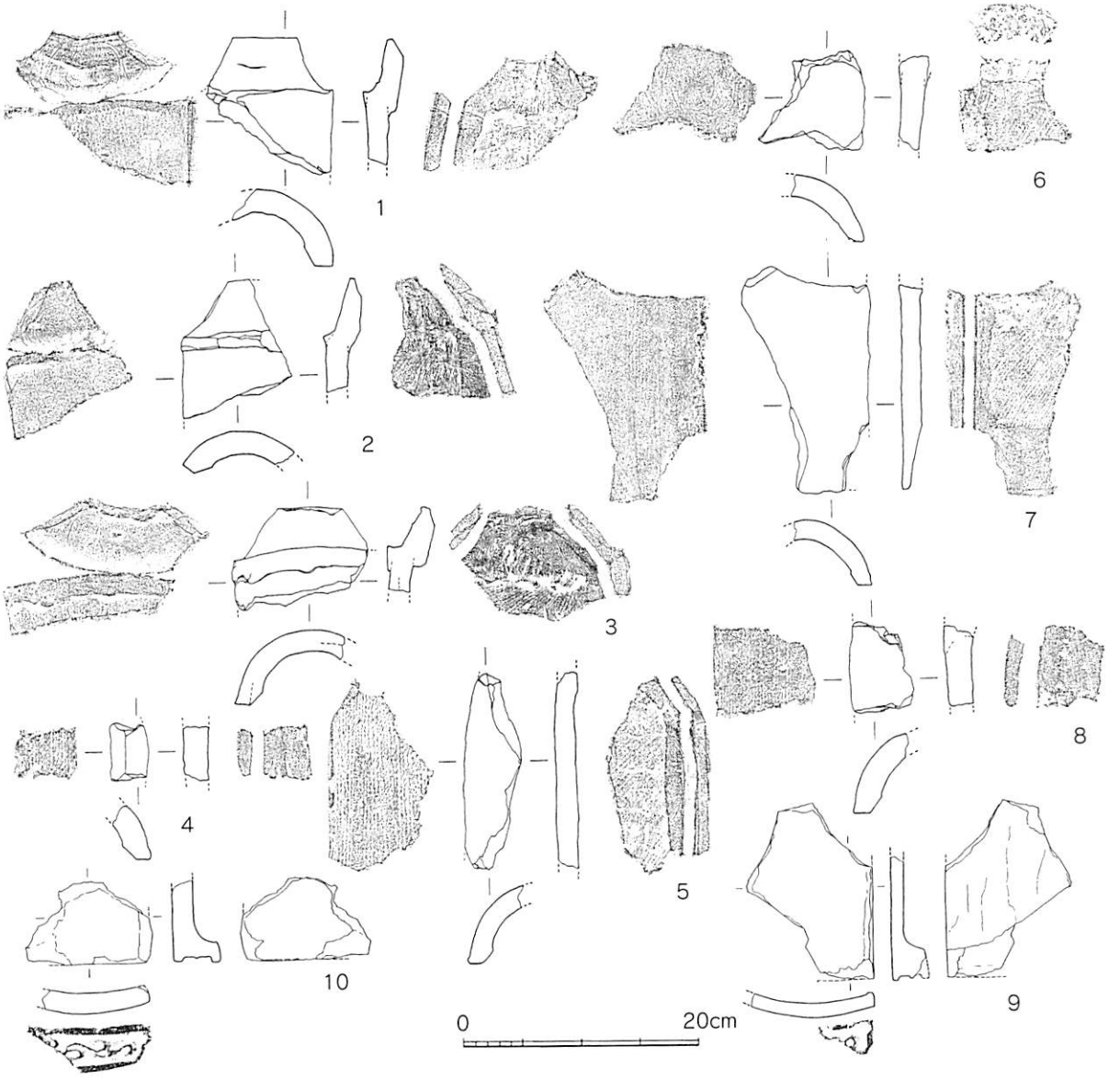
第114図　SD25出土遺物実測図



第113図　SD25遺構実測図



第115図　3区出土遺物実測図（S=1/3　瓦S=1/6）



第116図　3区出土遺物実測図（S=1/6）

第３章　中世大友府内町跡第31次調査区出土の動物遺体

西　本　豊　弘

中世大友府内町跡３１次調査区からマグロ・イヌ・シカ・ウマなどの動物骨が少量発掘された。その内容は以下の表に示したとおりである。それらについて簡単に説明する。

表　動物遺体一覧表

No	動　物　名	部　位	出土遺構	時　期	備考
1	マグロ類	下半部	ＳＤ９	１４世紀	
2	シカ	左側肩甲骨	ＳＤ１９	１６世紀後葉	イヌがかじった跡
3	イノシシ	左側大腿骨	ＳＤ２３	１６世紀前葉	
4	イヌ	右側寛骨	ＳＤ９	１４世紀	解体痕
5	ウマ	中手骨	ＳＤ９最下層	１４世紀	

１．マグロ類

大きなマグロの椎骨が１５点出土している。すべてが同一個体かどうか分からないが、それらが連結して一括して出土している部分があること、中央部から尾椎まであり、大きさの矛盾がないので、同一個体の下半部が一括して捨てられていたのであろう。おそらく、長さ４０cm前後の切り身にして運ばれていたものと思われる。椎骨の大きさから見て、体長３メートル近くの大きなクロマグロである。

体長３メートル

２．シカ

左側肩甲骨の関節部分の破片が１点のみである。成獣個体であり、ニホンジカとしては小柄である。写真に示したように、関節部分にイヌがかじったと思われる傷跡が多数見られた。

３．イノシシ

左側大腿骨が１点出土している。中間部分と遠位部の二片に分かれているが接合する。成獣個体であり、解体痕は見られなかった。

４．イヌ

右側寛骨１点がみられた。恥骨と腸骨の一部を欠くが、寛骨臼部分から座骨部分はよく残っている。大きさは現生のスピッツと同じくらいの小型犬であろう。Ｙ字状軟骨が骨化していることから成獣である。寛骨臼のすぐ上と下の部分に切痕と思われる傷がある。寛骨臼の下の切り傷を拡大した写真で示したが、おそらく解体痕であろう。

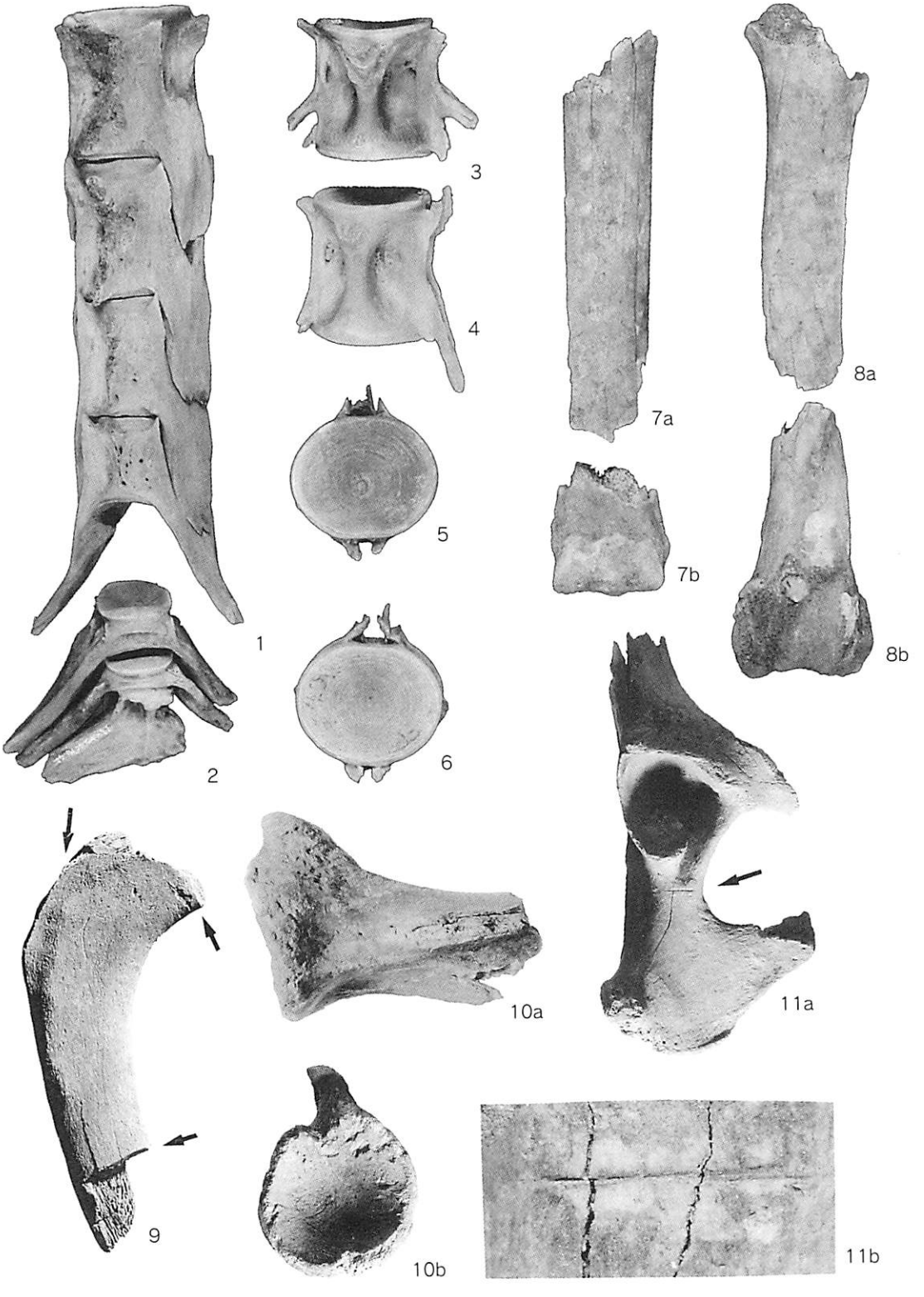
解体痕

５．ウマ

中手骨の破片が２点見られた。それらは中間部と遠位部であり、接合すると思われる。左右は不明である。破片の大きさからみると小型のウマである。この他にウマと思われる肋骨が１点採集されていた。この肋骨には三ヶ所に鋭利な切断痕が見られた。

切断痕

以上、動物骨の内容を紹介したが、大きなクロマグロと野生動物のシカ・イノシシがあり、さらに家畜のイヌとウマがあるなど、内容は多様であった。また、解体痕やイヌの噛み痕などが明瞭に残っており、中世中頃の食料を推測するよい材料と言える。



写真図版
1～6.マグロ椎骨　7.ウマ中手骨　8.イノシシ左側大腿骨　9.ウマ？助骨
10.シカ左側肩甲骨（イヌの噛み痕あり）
11.イヌ左側寛骨（bは解体痕の拡大したもの）。矢印は解体痕の位置を示す。縮尺不同。

第4章　まとめ

今回の中世大友府内町跡第３１次調査区の発掘調査では弥生時代や古代（平安時代）の遺物も出土したが、出土遺物の量的な主体は中世に属すものであった。特に１４世紀中頃から１６世紀末までの遺構が１区・２区に集中的に分布していることが分かった。事前の確認調査で１区の西側には遺跡が存在しないと把握したわけだが、本調査でも調査区西端部（１区の西端部）に低台地の端を確認し、その外側は居住に不適な湿度の多い沖積層であった。同様に、東端部の３区でも低台地と沖積地との境が現れた。

瑞光寺について

３１次調査区で最も古い遺構は古代末期のものであるが、量的に主体となる遺構は中世１４世紀以降のものである。西部調査区である１区には東西方向に走る溝状遺構（ＳＤ９・ＳＤ１０）、直交する南北方向の溝状遺構（ＳＤ１１）や１区中央部から東部に柱穴が多い傾向が認められた。調査区の幅が狭かったこともあり、細長い調査区だったため建物の規模を確認することはできなかったが、溝状遺構に平行に建つ２基の掘立柱建物跡を復元することができた。柱痕の残るものもあり、確実に建物がこの付近に建っていたはずである。また、中世大友府内町跡としては比較的多数の瓦が出土した。塼の出土量が顕著である点も東北側に位置した万寿寺と似ており、出土遺物から考えて本調査区（３１次調査区）には中世寺院があった可能性がある。

中世寺院

現在、３区とは市道を隔てて北側に小さい池がある。草に埋もれて水面があるのかないのかわからない状態だが、かつてこの付近にあった白蓮池の痕跡である。３区の途中から東・北側に広がる低地部分はかつての白蓮池の一部であろう。ただ、それを埋めていた水分の多い土層からは近世の遺物も混在しており、現在のように池が小さくなったのは比較的新しい時期であろう。

今回の調査区付近の地籍図を現地と照らし合わせたのが、第１１７図である。西部調査区（１区）を包んで東西方向に細長い一画（幅約４０m、長さ約１４０m）が存在し、北側の宅地や南側の耕作地の区画と同一の方向性をもっている。東部では全長約４０mにわたって南部に幅狭くなっている。

瑞光寺

今回調査した中世大友府内町跡第31次調査区付近は中世段階に瑞光寺が存在したと考えられる場所である。瑞光寺について史料では以下のことが判明する。

「豊府聞書」及び「豊府雑誌」の伝えるところによれば、開基は貞治年中（1362～1367）不肖正受禅師（貞治５年没）であって、同禅師は初め府内万寿寺の開山直翁（仏印）禅師に学び、のち京都の東福寺に住して学徳世に高かったのを、大友親世が迎えて禅法の師とし、万寿寺の西境に精舎を営んで若干の食邑を寄せ始祖したという。ところが「豊後国志」は、開山は同じ不肖正受禅師としているが、大友氏時（親世の父）の創建としている。また、「豊府紀聞」は妙観寺（東大分牧）、吉祥寺（大分村三吉）の二寺とともに歴応４（1341）年の創建としている（「大分市史」下巻　1956年発行による）。

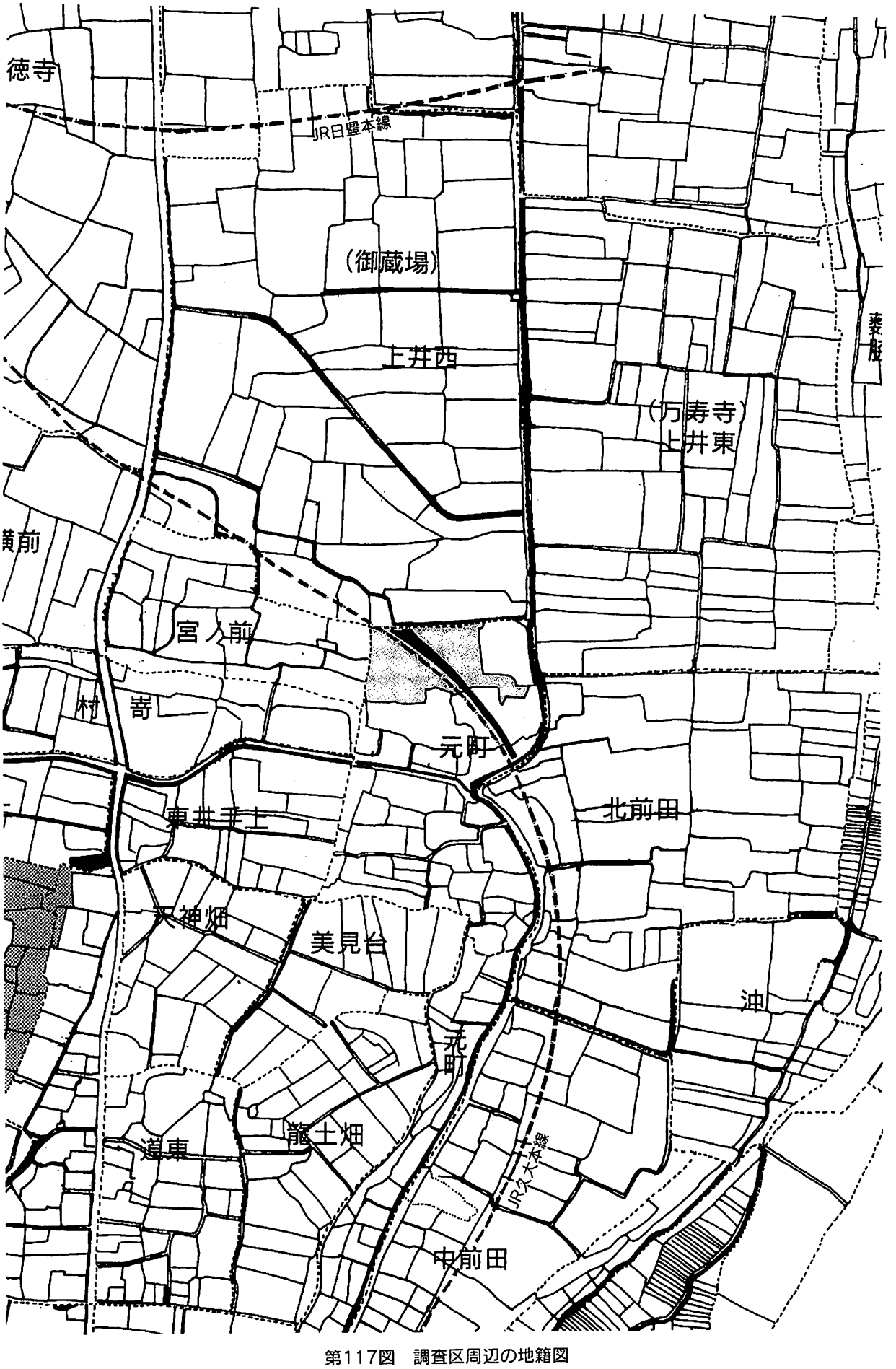
このように創建年代は一致しないが、不肖正受禅師を開山とする点では一致している。

一遍上人

時宗の一遍上人は伊予の生まれで、1276年別府の上人ヶ浜から豊後に上陸し、そこに地名を残している。「一遍上人年譜略」によると上人が豊後に来た頃、瑞光寺に真教上人という人が住んでいて専ら浄土教を説いていた。一遍の来遊を知ると彼を訪ねた。宗派の異なる二人の問答は七日七夜に及んだ。しかし、ついに真教が「閉口」し、一遍に帰依した。弟子になった真教は他阿弥陀仏と号したが、これが時宗第二の祖であると記している。真教は嘉禎３（1237）年、京都の生まれで、姓は古河、父は藤原左大臣頼実卿、母は柳原前大納言之原娘と伝える。経歴等についても初め浄土宗鎮西派の弁西に学び、豊後瑞光寺の高僧であったという外ははっきりしない（安田元久編「鎌倉・室町人名事典」1985）。この時、豊後国守護の大友頼泰も一遍上人に帰依している。

13世紀後葉

以上の諸記録から、１３世紀後葉に既に瑞光寺が存在したことは確かであろう、同じ場所にあったかどうかはともかく。兵庫県尼崎市の長遠寺に現存する雲版に「豊後州瑞光寺□徳住山明室置之」の陽鋳銘があるが、年代は室町中期以降である。天正14（1586）年の島津軍豊後侵入の際、兵火に罹ったらしいが、「豊府聞書」によれば慶長７（1602）年には旧地に草屋ながら再興された。その後、1671（寛文十一）年朔日触書中に「新報山瑞光寺」という言葉が残されている。



第117図　調査区周辺の地籍図

「雉城雑言志」では、瑞光寺は万寿寺住僧の退休の地となり、境内の弁財天を安置した白蓮池は万寿寺中十景の随一に数えられ、盛夏池中に開く白蓮は府民の眼を喜ばせたという。しかし、今は一堂も留めず僅かに住宅地と国道10号とに挟まれた狭い場所に草むした小池とその一角に立つ大友親世の墓碑（近世建造の五輪塔）が残っているだけである。

文字史料から瑞光寺は１３世紀後葉から１７世紀まで存続した寺であったことがわかる。江戸初期に中世末の府内を描いた「府内古図」には、万寿寺の西南側に南北道路（第２南北街路と呼んでいるもの）を挟んで南北に四つの寺院（北から瑞光寺、真光寺、比丘尼寺、極楽寺）が並んで描かれている（第３図参照)。瑞光寺は一番北に位置し、西側には「若宮」すなわち若宮八幡が描かれているが、現実には若宮と瑞光寺との間には相当の空間がある。地図が簡略すぎておよその位置関係しか想像できない。本調査区では明確に１３世紀に遡る遺構は少ないが、１４世紀中頃から後葉になると比較的大規模な溝状遺構が現れており、この時点では瑞光寺がここに存在したと考えられる。地籍図で示されるものが寺域の総てか否かは不明である。３区の途中から始まる白蓮池の一部らしい低地の存在を寺域との関連でどう解釈できるのか、現時点では判断できないが地籍図にみられる東南部の細長い部分は出入り口部であろう。

四つの寺院

遺物について

主体となる遺構は１４世紀代からのものであるが、さらに遡ると思われるものが存在する。後藤一重氏は大分県北東部の国東半島を中心とした地域における平安時代から江戸時代初期までの土器編年を行っている。その中で、煮炊き具である土鍋について分析し、１１世紀から１６世紀の土鍋を次のように形態分類し、それぞれ時期を細分している。今回調査した３１次調査区出土の土鍋の時期を考える上で参考にしたい。

土鍋Ａ：口縁がくの字状に折れ、底部は丸底状を呈する一群。古代の甕の系譜に連なる。時間的変化の傾向としては、①口縁部の短小化、②折れが強くなる、③体部調整がなでから刷毛目へ、⑤長胴から半球形へ、などである。１４世紀中頃前後で消えるという。第３１次調査区のＳＫ１８例（第８３図２６）がそれで、口縁部がＬ字形に強く折れた特徴は１２世紀に比定される八坂本庄例と類似する。共伴した遺物は底部から体部へ丸く移行し体部が広がる土師器皿１・２も本調査区の中では古い特徴を示す。中世大友府内城下町跡近くでは、大分市下郡遺跡群３１次の遺構ＳＥＯ１に類例がある（坪根1999)。土鍋Ａは他にもＳＤ２１（第８３図１・９)、ＳＤ８（第１４図２)、１区包含層（第９６図９）やＳＫ１３（第７９図１２）等で出土している。ＳＤ２１例は口縁部が長く、体部から強く折れ曲がること、共伴したの（第８３図１４）が土鍋Ｂ（口縁部外面に鍔状の突帯が付され、基本的に脚をもつ。古代からあり、１４世紀中頃から後半に消滅する。①鍔の低平化、②鍔の位置の上昇、③なで調整から刷毛目調整へ、④長胴から半球形へ、などの変化をみせる。）の中でも古い特徴をもつと思われるが、他の遺物に京都系土師器が少なからずあり、古い遺物が混入したのであろうか。１区包含層（第96図９）は口縁部が短く、折れ方が弱く、１３世紀か１４世紀のものである。ＳＤ９（第９５図）はさらに新しく１４世紀の特徴をもつ。土鍋ＢはＳＤ２１の他、ＳＥ１（第３２図１４)、ＳＤ９（第６９図１７)、ＳＤ２４（第８４図４）で出土した。

土鍋Ｂで最も古い特徴をもつＳＤ２１（第８３図１４）である。体部が内傾し、長い鍔が低い位置に付く。S101－３は鍔の位置が上昇し、体部は鍔付近から下位が厚くなっている。S101の場合、共伴した土師器皿２は強く外に開く体部をもち、３はやや新しいがこれも１２世紀に遡る特徴がある。S40(第60図９)は土鍋Bである。破片は揃ってないが脚の存在は疑わしい。体部下半は叩き調整、鍔は痕跡的に変化し、鍔から下位はやや厚い。

クロマグロ

１４世紀代の溝状遺構ＳＤ９からは、クロマグロが出土した。尾を含む部分の骨格が連続的に出土しており（すぐ近くにも散乱していたが)、廃棄された時にブツ切り状態だったことを示すものだった。西本豊弘氏によれば、推定長２ｍ以上、200kg以上の個体である。一匹のままでは流通・運搬に不便であるため寸断して持ち込まれたのであろうか、あるいは料理の際に解体したのであろうか。同時、あるいは近い時期に捨てられたと考えられる折敷は白木のものである。火事によって使用不能になったものを廃棄したようには見えないので、儀式の際の宴会で使ったものを土師器皿の壊れてないのを使い捨てするように惜しげもなく廃棄したものかもしれない。

1586年に府内の町は島津の侵攻によって焼かれてしまう。瑞光寺も焼かれたようであり、そう

であれば、焼土、炭化物、焼けた木材等で上部が埋まった溝状遺構S55があり、この時のものである可能性がある。井戸ＳＥ１も同様である。S61からは焼けた漆器椀、五輪塔、石臼等の火事場の後片付け品と共に中国製青磁器台のかけら（第27図20）が出土した。時代的にはこの時点より二、三百年古い元代の製品であり、国内の類例を捜すのが簡単でない優品である。仏前に飾った花瓶の器台、瑞光寺の貴重品であったものであろう（写真は中国の龍泉博物館蔵品。第３１次調査区ではこの器台の透かし部分が出土した)。青磁器台の寺院跡出土例としては津久見市門前遺跡がある。15世紀前半を中心とする寺院跡（朝日寺）であるが、無紋の青磁器台が出土している。ＳＥ１からは１１～１２世紀に作られた中国製白磁も出土した。これも貴重品として１６世紀後葉まで伝わってきたものであろう。溝状遺構ＳＤ９埋土下部の黒色土層からは他の土師器皿類とともに地元製ではない土師器皿が一点出土した（第６８図３)。薄手の作りで、器表面は白色系である。口縁部最大径は7.0cm、器高は1.8cm、手づくねで作られており、外底面を底から押し上げられ、内面に向かって突出している。おそらく、京都で作られ大分に持ち込まれた土師器である。府内での出土例は２点あり、現在、府内町跡第３０次調査区Ｓ１０９遺構のものが報告済みである。Ｓ１０９は大型の土坑で、中位に一括廃棄された遺物群中に混じっていた。口径7,3cm、器高1,5cmである。この手の遺物は小森俊寛・村上憲章によれば、１４世紀中頃に定型化し、１５世紀末まで見られる白色系薄手のヘソ皿である。外底面の押し上げに爪痕ののこるものは１５世紀初頭前後（Ⅷ期新）からみられるというが、今回の第３１次例は爪痕らしきものが認められるようだが、確実ではない。

青磁器台

土師器皿・坏類を在地系と京都系に分類したが、在地系の中には胎土に石英を含むものとそうでないものがみられた。生産地の相違を反映していると思うが、準備もないことから指摘するに留める。

おわりに

近世初頭に描かれた府内古図の隅に出ている瑞光寺は発掘調査が行われたことがなかったが、今回の中世大友城下町跡第３１次調査区で初めて確かに寺院らしきものが存在した事が分かった。塼瓦・瓦が少なからずみられること、珍しい元青磁器台は仏前に供える花瓶のためと考えられること、比較的大きな溝状遺構が存在し内部に建物が存在したこと、等である。寺院名を特定するような遺物は出土してないものの、史料に出てくる１３世紀中頃に創建されたという記録と出土遺物の年代は一致する。トレンチ状の調査区だったため、不明の部分が多かったが、１６世紀後葉までは存続し、その後は小規模の溝状遺構が繰り返し作られているので、水田化したようである。

引用・参考文献

坂本嘉弘　「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」『豊後府内２』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第２集　2005

小柳和宏編　「大分の中世城館」第四巻総論編　大分県教育委員会　2004

坪根伸也・塩地潤一　「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大友土器研究会　2000

後藤一重　「八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について」『八坂の遺跡』Ⅲ大分県文化財調査報告書第150輯大分県教育委員会　2003

鋤柄俊夫　「各地の瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世時研究会　真陽社　1995

小森俊寛・村上憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996

小野正敏　「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易当時研究』No.2 日本貿易当時研究会　1982

小柳和宏　「津久見門前遺跡」『津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第３集　2005

伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登　「中世陶器の物流―備前焼を中心にして―」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』　2004

山本哲也　「大分県における中世前期の煮炊具の様相について」九州古文化研究会第132回例会資料　2004.11.14

山本信夫　「陶磁器分類」『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会　2000

観　察　表

第１表　遺構一覧表①

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項
SK 1	S1	土坑	A3・B3	２０世紀	撹乱
SK 2	S2	土坑	C4	２０世紀	撹乱・検出標高6，18m
SK 3	S3	土坑	C4	２０世紀	撹乱・検出標高6，135m
SK 4	S4	土坑	B4	２０世紀	撹乱
SK 5	S5	土坑	C4	２０世紀	撹乱・検出標高6，13m
SK 6	S6	土坑	C4・C5	２０世紀	撹乱・検出標高6，175m
SK 7	S7	土坑	C4	２０世紀	撹乱・検出標高6，115m
SP 1	S8	ピット	C5	２０世紀	撹乱・検出標高6，20m
SP 2	S9	ピット	Ｃ５	２０世紀	撹乱
SP 3	S10	ピット	C5	２０世紀	撹乱・ここから北側に配水管が延びる
SP 4	S11	ピット	C5・D5	２０世紀	撹乱・検出標高6，189m
SP 5	S12	ピット	D6	２０世紀	撹乱・検出標高6，219m
SP 6	S13	ピット	D6	２０世紀	撹乱・検出標高6，229m
SP 7	S14	ピット	D6	２０世紀	撹乱・検出標高6，109m
SK 8	S15	土坑	D7・E7	２０世紀	撹乱・検出標高6，198m
SP 8	S16	ピット	E7		撹乱・検出標高6，268m
SP 9	S17	ピット	F7・F8	２０世紀	撹乱・検出標高6，252m
SP10	S18	ピット	E7	２０世紀	撹乱・検出標高6，235m
SP11	S19	ピット	F7	２０世紀	撹乱・検出標高6，196m
SP12	S20	ピット	F7・F8	２０世紀	撹乱・検出標高6，192m
SP13	S21	ピット	E6	２０世紀	撹乱・検出標高6，067m
SP14	S22	ピット	E6・E7	２０世紀	撹乱・検出標高6，075m
SP15	S23	ピット	D6	２０世紀	撹乱・検出標高6，034m
SP16	S24	ピット	E7・E8	２０世紀	撹乱・検出標高6，171m・ビニール
SK 9	S25	土坑	D7・E7		撹乱・検出標高6，205m
SP17	S26	ピット	G8・G9		検出標高6，249m
SK 9	S27	土坑	G8・G9	２０世紀	撹乱・検出標高6，248m
SK10	S28	土坑	G8G9F9	２０世紀	撹乱
SD 1	S29	溝状遺構	B3・B4	近世	検出標高6，130m
SX 1	S30	段状遺構	A4・B4	近世	水田の端部？
SD 2	S31	溝状遺構	B3・B4	近世	
SD 3	S32	溝状遺構	G8G9F9		
SD 4	S33	溝状遺構	F7・F8	近世	S35に分岐？
SD 5	S34	溝状遺構	E8	近世	S36の延長部
SD 6	S35	溝状遺構	E8	近世	S33と接続？
SD 7	S36	溝状遺構	F8	近世	検出標高6，197m
SD 8	S37	溝状遺構	F8・G8		検出標高6，236m
SP18	S38	ピット	B4		検出標高6，156m
SP19	S39	ピット	B4		検出標高6，136m
SD 9	S40	溝状遺構	D6	14～15世紀	クロマグロ
SD10	S41	溝状遺構	C5	１６世紀前葉	
SX 2	S42	瓦溜まり	H10	16世紀後葉	浅い土坑に廃棄した状態で出土
SP20	S43	ピット	C5		検出標高6，028m
SD11	S44	溝状遺構	H9	16世紀中葉～後葉	
SD12	S45	溝状遺構	I11		土師器溜まり・検出標高6，227m
SD13	S46	溝状遺構	I11		
SD14	S47	溝状遺構	I11		
SD15	S48	溝状遺構	I11・I12		
SK11	S49	土坑	D6・D7	16世紀末葉？	浅い長方形気味の土坑
SD16	S50	溝状遺構		16世紀末葉？	胥磁香炉片・玉緑白磁片
SD17	S51	溝状遺構		１６世紀前葉？	S51・52下層N0.5は段々土師器
SD18	S52	溝状遺構			S5・152元祐通宝あり
SK21	S53	土坑	D6	１４世紀？	土採り穴？
SK12	S54	土坑	G9	16世紀前葉	検出標高6，194m
SD19	S55	溝状遺構		16世紀末葉	焼土廃棄・下駄・漆器椀
SX 3	S56	石積み		１４世紀中葉～後葉	
SK13	S57	土坑	H10H11	１４世紀中葉～１５世紀末	標高6，1m～6，2m
SP22	S58	ピット	G9	１６世紀前葉？	木柱あり
SP23	S59	ピット？			
SP24	S60	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，181m
SE 1	S61	井戸		16世紀後葉	朝鮮通宝・漆器椀・ビルマ土器
SP25	S62	ピット？			
SK14	S63	土坑	F9・G9	16世紀後葉～末葉？	S54と重複

第２表　遺構一覧表②

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項
SK15	S64	土坑	D5		検出標高6，226m
SD20	S65	溝状遺構	E7・E8		古代の平瓦・軒丸瓦
SD21	S66	溝状遺構	D7・E7	１４世紀～16世紀中葉	南北方向に走る
SK16	S67	土坑	E7	１４世紀中葉？	S69・S65等と重複する
SK17	S68	土坑	G9	１６世紀前葉？	検出標高5,953m･埋土は新しそうな砂利･重複
SK18	S69	土坑	E7	１４世紀	S65・S67と重複。二つの土坑？
SP26	S70	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，157m
SP28	S71	ピット	G9	１６世紀前葉？	検出標高6，169m・柱の抜き取り跡
SK21	S72	土坑	G9H9		検出標高6，197m
SP29	S73	ピット	H10		検出標高6，171m
SP30	S74	ピット	H10		検出標高6，159m
SP31	S75	ピット	H10		検出標高6，136m
SP32	S76	ピット	H10		検出標高6，188m
SP33	S77	ピット	I11	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，165m・木柱あり
SP34	S78	ピット	I11		検出標高6，190m
SP35	S79	ピット	I11	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，190m
SP36	S80	ピット	I12	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，176m
SP37	S81	ピット	G9		検出標高6，175m
SX 4	S82	瓦溜まり	N20		軒瓦・軒平瓦・軒丸瓦
SP38	S83	ピット	G9H9		検出標高6，149m
SP39	S84	ピット	H9		検出標高6，157m
SP40	S85	ピット	G9	１６世紀前葉？	検出標高6，178m・木柱あり
SP41	S86	ピット	G9		検出標高6，176m
SD22	S87	溝状遺構	F8		検出標高6，233m・S55に壊される
SP42	S88	ピット	G8		検出標高6，147m
SP43	S89	ピット	G8		検出標高6，158m
SP44	S90	ピット			
SP45	S91	ピット	F8	１６世紀前葉	検出標高6，11m・在地系土師器
SP46	S92	ピット	F9		
SP47	S93	ピット	G8		検出標高6，101m
SD23	S94	溝状遺構		１６世紀前葉	S55の下部で検出
SP48	S95	ピット	I11		検出標高6，156m
SP49	S96	ピット	G9		検出標高6，069m
SP50	S97	ピット	G9		
SP51	S98	ピット	G9	１６世紀前葉？	検出標高6，046m・木柱あり
SP52	S99	ピット	G9		検出標高6，160m
SP53	S100	ピット			
SP54	S101A	ピット	H10	１４世紀初頭	青磁鎬蓮弁紋碗破片・別に溝あり（I11）
SD24	S101B	溝状遺構	I11		
SP55	S102	ピット	H10		
SP56	S103	ピット	I11		検出標高6，10m
SP57	S104	ピット	I10		
SP58	S105	ピット			
SP59	S106	ピット			
SP60	S107	ピット	H10		検出標高6，012m・木柱あり
SP61	S108	ピット	H10		検出標高6，156m
SP62	S109	ピット	H10		検出標高6，146m・木柱あり
SP63	S110	ピット	H9	１６世紀前葉？	検出標高6，181m・木柱あり
SP64	S111	ピット	H9		検出標高6，125m
SP65	S112	ピット	G9	１６世紀前葉？	検出標高6，122m・木柱あり
SP66	S113	ピット	G9		検出標高6，073m
SP67	S114	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，161m
SP68	S115	ピット	M14		木柱あり。検出標高6，086m
SD25	S116	溝状遺構	O15周辺		古代の平瓦
SP69	S117	ピット	Ｉ１１	１４世紀	検出標高6，161m
SP70	S118	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，151m
SP71	S119	ピット	I10・I11		検出標高6，143m
SP72	S120	ピット	I11		検出標高6，121m
SP73	S121	ピット	I11		検出標高6，155m
SP74	S122	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，134m
SP75	S123	ピット	Ｉ１１	１４世紀・１５世紀？	検出標高6，149m
SD26	S124	溝状遺構		16世紀末葉？	
SP76	S125	ピット？			
SP77	S126	ピット？			
SK19	S127	土坑	L14		検出標高6，203m
SP78	S128	ピット	I11	１４世紀	検出標高6，066m
SK20	S129	土坑	Ｃ６	１４世紀	検出標高m
SD27		溝状遺構	L13	近世	検出標高6，265m
SP79		ピット	M14		検出標高5，953m。埋土は砂。
SD28		溝状遺構	N14・N15	近世	検出標高6，458m
SH 1	-	掘立柱建物	L14	１４世紀？	
SH 2	-	掘立柱建物	L14	１４世紀？	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器①）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第12図1	瓦質土器	口縁部	日本	-	-	-	SD1	NO.29
第12図2	青花	碗	中国	-	-	-	SX1	
第12図3	青花	皿	中国	-	-	-	SD2	
第12図4	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	SD2	NO.2
第13図2	陶器	甕	備前	-	-	-	SD3	
第13図3	青磁	碗	中国	-	-	-	SD3	脚部
第13図4	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD3	
第14図1	青磁	碗	中国（越州窯）	-	(7,2)	-	SD7	
第14図2	土師器	瓶	在地	-	-	-	SD8	
第14図3	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD8	
第14図4	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD8	
第16図1	青花	碗	中国	-	-	-		
第16図2	白磁	碗	中国	-	-	-		
第16図3	陶器			-	-	-		
第16図4	土師器	皿	在地	-	-	-		
第16図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-		
第16図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-		
第16図7	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-		
第22図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK11	
第22図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK11	
第22図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK11	
第25図1	京都系土師器	皿	在地	(10,2)	-	-	SD19	
第25図2	京都系土師器	皿	在地	(10,2)	-	-	SD19	
第25図3	京都系土師器	皿	在地	(10,2)	-	-	SD19	
第25図4	京都系土師器	皿	在地	(10,2)	-	-	SD19	
第25図5	京都系土師器	皿	在地	(9,6)	-	-	SD19	
第25図6	京都系土師器	皿	在地	(10,4)	-	-	SD19	
第25図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図8	京都系土師器	皿	在地	(11,6)	-	-	SD19	
第25図9	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	下層出土
第25図10	京都系土師器	皿	在地	(12,0)	-	-	SD19	
第25図11	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図12	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図13	京都系土師器	皿	在地	(12,3)	-	-	SD19	
第25図14	京都系土師器	皿	在地	(12,4)	-	-	SD19	
第25図15	京都系土師器	碗	在地	(12,4)	-	-	SD19	
第25図16	京都系土師器	皿	在地	(12,8)	-	-	SD19	
第25図17	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図18	京都系土師器	皿	在地	(13,0)	-	-	SD19	
第25図19	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図20	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD19	
第25図21	京都系土師器	皿	在地	(14,0)	-	-	SD19	
第25図22	京都系土師器	皿	在地	(14,4)	-	-	SD19	
第25図23	京都系土師器	皿	在地	(16,2)	-	-	SD19	
第25図24	京都系土師器	皿	在地	(16,4)	-	-	SD19	
第25図25	土師質土器	皿	在地	(11,9)	(6,9)	2,6	SD19	
第25図26	土師質土器	皿	在地	-	(6,4)	-	SD19	
第25図27	土師質土器	皿	在地	(11,0)	(5,6)	3,0	SD19	下層出土
第25図28	土師質土器	皿	在地	(7,2)	(5,7)	1,2	SD19	下層出土
第25図29	土師質土器	皿	在地	(8,0)	(4,6)	2,8	SD19	
第25図30	土師質土器	皿	在地	(13,2)	(11,5)	3,0	SD19	下層出土
第25図31	瓦質土器	火鉢	在地	(32,6)	-	-	SD19	最大径。外面中央部に帯状に本来の地
第25図32	瓦質土器	鉢	日本	-	-	-	SD19	肌が残る
第26図1	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SD19	石英を含む
第26図2	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SD19	
第26図3	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(11,8)	-	-	SD19	
第26図4	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD19	
第26図5	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD19	
第26図6	青磁	皿	中国(龍泉窯)	(13,2)	-	-	SD19	
第26図7	白磁	皿	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SD19	
第26図8	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD19	
第26図9	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD19	
第26図10	白磁	皿	中国南部	10,4	5,1	3,0	SD19	
第26図11	白磁	碗	中国	-	-	-	SD19	NO.5
第26図12	白磁	碗	中国	-	-	-	SD19	玉縁
第26図13	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	玉縁
第26図14	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	１３～２２は同一個体か？
第26図15	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図16	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図17	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図18	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図19	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器②）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第26図20	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図21	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図22	白磁	皿	中国	-	-	-	SD19	
第26図23	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD19	
第26図24	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD19	
第26図25	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD19	
第26図26	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD19	
第27図1	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	SD19	
第27図2	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	SD19	
第22図3	陶器	擂鉢	備前	-	(12,0)	-	SD19	
第27図4	陶器	壷	備前	-	-	-	SD19	
第27図5	陶器	舟徳利	備前？	-	-	-	SD19	
第28図1	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD19	
第28図2	瓦質土器	鉢	備前	-	-	-	SD19	
第28図3	瓦質土器	鉢	備前	-	-	-	SD19	
第28図4	瓦質土器	不明	在地	-	-	-	SD19	
第28図5	瓦質土器		在地	-	-	-	SD19	
第28図6	瓦質土器		在地	-	-	-	SD19	外面はへら磨き
第30図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図5	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図6	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第30図7	土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第32図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第32図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD23	
第32図3	土師器	皿	在地	-	(5,4)	-	SD23	N0.13
第32図4	土師器	皿	在地	-	(5,6)	-	SD23	
第32図5	土師器	皿	在地	-	(8,0)	-	SD23	
第32図6	土師器	皿	在地	(12,4)	(7,6)	3,6	SD23	
第32図7	土師器	皿	在地	-	(8,3)	-	SD23	
第32図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図2	京都系土師器	皿	在地	8,6	-	2,2	SE1	内面に厚く付着物あり
第32図3	京都系土師器	皿	在地	(11,6)	-	2,7	SE1	
第32図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図8	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE1	
第32図9	土師器	皿	在地	-	7,6	-	SE1	外底面に板状圧痕
第32図10	瑠花	皿	中国（景徳鎮窯）	(12,2)	(6,9)	2,5	SE1	
第32図11	瓦質土器	火鉢	中国（ 洲窯）	-	-	-	SE1	
第32図12	瑠磁	皿	中国	(14,2)	(7,2)	4,0	SE1	
第32図13	白磁	皿	中国	(15,5)	-	1,8	SE1	
第32図14	瓦質土器	鉢	在地	(22,2)	-	-	SE1	
第32図15	褐釉陶器	壺	中国南部	-	12,0	-	SE1	
第32図16	褐釉陶器	壺	中国南部	-	13,2	-	SE1	
第32図17	褐釉陶器	壺	中国	-	-	-	SE1	茶色釉
第32図18	陶器	鉢	備前	(13,3)	-	-	SE1	
第32図19	瓦質土器	鉢	在地	(15,8)	-	-	SE1	
第32図20	瑠磁	器台	中国（龍泉窯）	-	-	-	SE1	
第34図1	陶器	擂鉢	備前	(28,8)	-	-	SE1	
第34図2	陶器	擂鉢	備前	(31,8)	-	-	SE1	櫛目あり。器高15，6″＋α
第34図3	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	SE1	
第34図4	陶器	瓶	備前	38,8	-	-	SE1	D5-No.1、C5-No.18と接合
第34図5	陶器	瓶	備前	-	10,2	-	SE1	
第34図6	陶器	瓶	備前	-	(11,2)	-	SE1	
第34図7	陶器	瓶	備前	-	37,2	-	SE1	
第34図8	陶器	瓶	備前	-	-	-	SE1	
第34図9	陶器	瓶	備前	-	-	-	SE1	
第34図10	陶器	瓶	備前	-	17,2	-	SE1	
第34図11	陶器	瓶	備前	-	20,6	-	SE1	
第34図12	陶器	壺	備前	-	-	-	SE1	最大径19，0cm
第34図13	土器	壺	タイ	-	-	-	SE1	肩部外面に叩き痕
第39図1	京都系土師器	皿	在地	(11,5)	-	-	SD26	
第39図2	京都系土師器	皿	在地	(12,0)	-	-	SD26	
第47図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
第47図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
第47図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
第47図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
第47図5	土師器	皿	在地	13.0	8,8	3,95	SK14	
第47図6	褐釉陶器	壺	中国南部	14,0	-	-	SK14	第33図7と同一個体・口径覧は最大径
第47図7	褐釉陶器	壺	中国南部	-	9,6	-	SK14	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器③）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第47図8	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK14	双頭蕨手飛雲紋
第47図9	青花	碗	中国	-	-	-	SK14	
第47図10	土師器	皿	在地	-	-	-	SK14	
第49図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD10	
第49図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD10	
第49図7	土師器	皿	在地	-	-	-	SD10	
第49図8	土師器	皿	在地	-	-	-	SD10	
第49図9	土師器	皿	在地	-	(7,9)	-	SD10	下層
第49図10	土師器	皿	在地	-	(5,1)	-	SD10	中層
第49図11	土師器	皿	在地	-	-	-	SD10	N0.59石英を含む
第49図12	土師器	皿	在地	-	5,0	-	SD10	N0.113
第49図13	大内系土師器	皿	在地	(12,3)	(5,2)	2,3	SD10	N0.118。金色の雲母を含む
第50図1	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SD10	
第50図2	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SD10	
第50図3	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SD10	
第50図4	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SD10	
第50図5	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	SD10	
第50図6	青磁	碗	中国（同安窯）	-	-	-	SD10	
第50図7	白磁	碗	中国	-	-	-	SD10	内面に施紋。口唇部周辺は釉なし
第50図8	青磁	皿	中国（龍泉窯）	-	(8,8)	-	SD10	N0.30
第50図9	青磁	碗	中国（龍泉窯）	(14,6)	-	-	SD10	N0.78
第50図10	白磁	皿	中国	(9,4)	-	-	SD10	
第50図11	白磁	碗	中国	-	(3,2)	-	SD10	N0.115
第50図12	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	SD10	
第50図13	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD10	N0.85
第50図14	陶器	天目碗	中国	-	-	-	SD10	
第50図15	陶器	天目碗	中国	-	-	-	SD10	
第50図16	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD10	
第50図17	陶器	船徳利		-	-	-	SD10	N0.37
第50図18	陶器	壺	備前	-	-	-	SD10	N0.12
第50図19	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD10	N0.57。石英を含む
第36図20	焼締陶器	甕	備前	-	-	-	SD10	
第36図21	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36図22	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36図23	焼締陶器	鉢	備前	-	-	-	SD10	
第36図24	瓦質土器	擂鉢	在地	-	-	-	SD10	
第52図1	土師器	皿	在地	(8,6)	-	-	SD11	
第52図2	土師器	皿	在地	(7,5)	(4,7)	2,2	SD11	口唇部に煤付着
第52図3	京都系土師器	火鉢	在地	-	-	-	SD11	
第52図4	京都系土師器	火鉢	在地	-	-	-	SD11	
第52図5	京都系土師器	火鉢	在地	-	-	-	SD11	
第52図6	京都系土師器	火鉢	在地	(15,8)	-	-	SD11	
第52図7	京都系土師器	火鉢	在地	(16,2)	-	-	SD11	N0.6
第52図8	京都系土師器	火鉢	在地	12,3	-	-	SD11	N0.13。内外面とも煤付着。
第52図9	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SD11	
第52図10	青磁	碗	中国（龍泉窯）	(13,8)	-	-	SD11	
第52図11	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	SD11	
第52図15	陶器	甕	備前	-	-	-	SD11	
第39図16	陶器	大甕	備前	-	-	-	SD11	N0.2
第54図1	土師器	皿	大内系土師器	-	6,1	-	SK12	N0.1。石英を含む
第54図2	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	(5,4)	-	SK12	No.5
第56図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SK17	
第58図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SP45	
第41図3	青花	碗	中国（ 洲窯）	-	-	-	SD11	
第41図2	白磁	碗	中国	-	-	-	SD11	
第41図3	陶器	鉢	備前	-	-	-	SD11	
第41図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD11	
第41図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD11	
第41図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD11	
第43図1	土師器	皿	在地	(6,9)	(4,8)	2,0	SD21	石英を含む
第43図2	土師器	皿	在地	(8,6)	(7,0)	1,5	SD21	
第43図3	土師器	皿	在地	(9,4)	(6,5)	1,2	SD21	金色の雲母が多い
第43図4	土師器	皿	在地	(11,3)	(6,5)	3,4	SD21	金色の雲母が多い
第43図5	土師器	皿	在地	(11,6)	(6,9)	3,3	SD21	金色の雲母が多い
第43図6	土師器	皿	在地	(14,7)	-	-	SD21	金色の雲母が多い
第43図7	土師器	皿	在地	-	(8,0)	-	SD21	
第43図8	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD21	
第43図9	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD21	
第43図10	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD21	
第43図11	京都系土師器	皿	在地	(10,6)	-	-	SD21	北側の落ち込み
第43図12	瓦質土器	鉢	在地	(15,7)	-	-	SD21	北側の落ち込み
第43図13	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD21	胴部最大径18,6cm・外面に煤付着
第43図14	白磁	碗	中国	-	-	-	SD21	
第44図1	瓦質土器	鉢	在地	49,2	-	-	SD21	
第45図1	土師器	皿	在地	(12.3)	(6.7)	2.6	SK17	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器④）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第48図1	土師器	皿	在地	(13,4)	(7,8)	2,6	SP45	
第39図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD26	
第39図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD26	
第60図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SP78	
第64図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図2	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図5	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図6	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図7	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図8	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第64図9	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	SD9	
第64図10	瓦質土器	鍋		-	-	-	SD9	
第64図11	陶器	鉢	備前	(16,3)	-	-	SD9	最大径
第64図12	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	最大径
第65図1	土師器	皿	在地	13,2	11,1	3,1	SD9	5層
第65図2	土師器	皿	在地	12,8	10,6	2,3	SD9	5層
第65図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	東北壁6・7層
第65図4	白磁	碗	中国	(11,6)	-	-	SD9	一括
第65図5	瓦質土器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図2	土師器	皿	在地	(7,7)	4,8	2,0	SD9	N0.24。金色の雲母を含む
第68図3	京都産土師器	皿	京都	7,0	3,2	1,8	SD9	N0.17。砂粒なし。
第68図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図5	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図6	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図7	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図8	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図9	土師器	皿	在地	-	(8,3)	-	SD9	N0.26
第68図10	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図11	土師器	皿	在地	(11,6)	(8,6)	-	SD9	N0.21。石英を含む
第68図12	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図13	土師器	皿	在地	(7,5)	(6,0)	1,3	SD9	北壁6・7層
第68図14	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図15	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図16	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第68図17	土師器	皿	在地	-	7,2	-	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第68図18	土師器	皿	在地	-	(8,4)	-	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第68図19	土師器	皿	在地	(12,2)	(6,5)	3,7	SD9	砂層。金色の雲母を含む
第68図20	土師器	皿	在地	-	(8,9)	-	SD9	最下層
第68図21	土師器	皿	在地	-	(8,9)	-	SD9	最下層
第68図22	土師器	皿	在地	-	(8,9)	-	SD9	最下層
第69図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第69図2	土師器	皿	在地	(13,3)	-	-	SD9	北部9層
第69図3	土師器	皿	在地	(11,3)	(7,3)	3,3	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第69図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SD9	
第69図5	土師器	皿	在地	(13,8)	(10,1)	3,1	SD9	
第69図7	土師器	皿	在地	(11,4)	(6,4)	3,1	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第69図8	土師器	皿	在地	(15,8)	(9,6)	3,5	SD9	最下層（黒色土層のこと）。金色の雲母を含む
第69図9	土師器	皿	在地	-	(8,8)	-	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第69図10	土師器	皿	在地	-	7,0	-	SD9	最下層
第69図11	土師器	皿	在地	-	(9,6)	-	SD9	南砂層
第69図12	土師器	皿	在地	(12,8)	(9,2)	3,4	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第69図13	土師器	皿	在地	(11,0~	(8,4)	2,3	SD9	最下層
第69図14	土師器	皿	在地	(12,0)	(8,3)	3,4	SD9	最下層。金色の雲母を含む
第69図15	瓦質土器	瓶	在地	-	-	-	SD9	最下層。和泉型瓦器椀
第69図16	瓦器椀	碗	在地	-	(5,2)	-	SD9	砂層
第69図17	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD9	叩き
第69図18	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	N0.50
第69図19	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD9	N0.56
第69図20	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(12,4)	-	-	SD9	南砂層
第69図21	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SD9	
第74図1	弥生式土器	瓶	在地	13,3	-	-	SD9	弥生中期末
第74図2	弥生式土器	壺	在地	21,4	-	-	SD9	弥生中期末
第74図3	弥生式土器	壺	在地	-	-	-	SD9	弥生中期末
第41図1	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SX2	
第76図1	土師器	皿	大内系土師器	-	-	-	SX3	白色で薄手。搬入品か？
第76図2	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SX3	
第76図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SX3	
第76図2	土師器	皿	在地	-	-	-	SX3	
第76図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SX3	
第76図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SX3	
第76図5	土師器	皿	在地	(9,6)	(6,8)	2,55	SX3	金色雲母
第76図6	土師器	皿	在地	10,2	(7,3)	2,85	SX3	
第76図7	土師器	皿	在地	-	-	-	SX3	
第76図8	土師器	皿	在地	15,3	(10,8)	3,4	SX3	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑤）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第76図9	土師器	皿	在地	-	10,2	(o,9)	SX3	
第76図10	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	SX3	
第76図11	青磁	皿		-	-	-	SX3	
第76図12	白磁	椀		-	(6,9)	(2,3)	SX3	
第79図1	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図2	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図4	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図5	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図6	土師器	皿	在地	(12,0)	)9,2)	3,1	SK13	N0.17
第79図7	土師器	皿	在地	(12,6)	(8,2)	3,5	SK13	N0.10。金色の雲母を含む
第79図8	土師器	皿	在地	(13,3)	(10,0)	2,7	SK13	
第79図9	土師器	皿	在地	(12,0)	(8,1)	3,1	SK13	N0.23
第79図10	土師器	耳皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図11	土師器	皿	在地	-	-	-	SK13	
第79図14	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	13,5	SK13	N0.13
第78図1	土師器	皿	在地	(14,3)	(10,1)	3,7	SD20	金色の雲母多い
第78図2	瓦質土器	鉢	在地	19,4	-	(3,2)	SD20	
第78図3	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD20	
第78図4	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	SD20	
第78図5	陶器	天目碗	中国	-	-	-	SD20	
第79図1	弥生式土器	鉢	在地	-	-	-	SK16	
第79図2	弥生式土器	瓶形	在地	-	9,0	-	SK16	N0.1
第79図3	弥生式土器	高坏	在地	-	-	-	S66・67	
第79図4	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	S66・67	石英を含む
第79図5	土師器	皿	在地	-	(7,2)	-	SK16	
第79図6	瓦質土器		在地	-	-	-	S66・67	
第79図7	瓦質土器	鉢	在地	(15,9)	-	-	SK16	石英多い
第79図8	土師器	椀	在地	(13,8)	-	-	SK16	
第79図9	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	SK16	金色の雲母多い
第79図10	白磁	碗	中国	(16,5)	-	-	SK16	
第80図1	土師器	皿	在地	13,8	(6,9)	3,5	SK18	
第80図2	土師器	皿	在地	-	(10,4)	-	SK18	石英を含む
第80図3	土師器	皿	在地？	-	-	-	SK18	
第80図4	瓦質土器	鉢	在地	(18,7)	-	-	SK18	石英を含む
第80図5	白磁	碗	中国	-	-	-	SK18	
第80図6	白磁	碗	中国	-	(6,2)	-	SK18	内面のみ施釉
第80図7	白磁	碗	中国	-	(7,8)	(1,9)	SK18	内面のみ施釉
第80図9	陶器	壺	備前	-	-	-	SK18	N0.8。頸部最小径16，0″
第82図1	土師器	皿	在地	(6,7)	(5,2)	1,2	SP35	
第83図1	土師器	皿	在地	(9,0)	(7,7)	1,3	SD24	
第83図2	土師器	皿	在地	(12,4)	(7,8)	2,7	SD24	
第83図3	土師器	皿	在地	-	-	-	SD24	
第83図4	瓦質土器	鉢	在地	(26,2)	-	-	SD24	
第84図1	土師器	皿	大内系	-	-	-	SP59	石英を含む。灰白色
第86図1	土師器	皿	在地	(9,1)	(7,7)	1,2	SP69	
第91図1	京都系土師器	皿	在地	(8,6)	-	-	1区包含層	G10
第91図2	京都系土師器	皿	在地	(9,1)	-	-	1区包含層	
第91図3	京都系土師器	皿	在地	(10,0)	-	2,6	1区包含層	C5-N0.56
第91図4	京都系土師器	皿	在地	(10,6)	-	2,1	1区包含層	G9
第91図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図6	京都系土師器	皿	在地	(10,4)	-	-	1区包含層	H10-N0.10
第91図7	京都系土師器	皿	在地	(11,6)	-	2,55	1区包含層	G9検出面
第91図8	京都系土師器	皿	在地	(12,0)	-	2,1	1区包含層	G9
第91図9	京都系土師器	皿	在地	(13,4)	-	-	1区包含層	G8
第91図10	京都系土師器	皿	在地	(15,1)	-	-	1区包含層	F9-N0.14
第91図11	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図12	京都系土師器	皿	在地	(10,5)	-	-	1区包含層	C4-N0.28
第91図13	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図14	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図15	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図16	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図17	京都系土師器	皿	在地	(11,0)	-	2,1	1区包含層	F8-N0.10
第91図18	京都系土師器	皿	在地	(13,2)	-	-	1区包含層	C5 検出面
第91図19	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図20	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図21	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図22	京都系土師器	皿	在地	(11,9)	-	2,7	1区包含層	F7-No.4
第91図23	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第91図24	京都系土師器	皿	在地	(14,3)	-	-	1区包含層	C4-N0.12
第91図25	京都系土師器	皿	在地	(18,0)	-	-	1区包含層	C5-N0.112
第92図1	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑥）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第92図2	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図3	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図4	土師器	皿	在地	(8,7)	(5,3)	2,2	1区包含層	M14-N0.6
第92図5	土師器	皿	在地	7,7	5,2	2,2	1区包含層	I10+S57-N0.32。金色の雲母を含む
第92図6	土師器	皿	在地	(8,0)	(6,6)	1,0	1区包含層	I10
第92図7	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図8	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図9	土師器	皿	在地	(7,1)	(5,3)	1,3	1区包含層	E8
第92図10	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図11	土師器	皿	在地	(9,0)	(7,0)	2,0	1区包含層	M14
第92図12	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図13	土師器	皿	在地	(8,3)	(7,0)	1,1	1区包含層	M14。内面に煤付着
第92図14	土師器	皿	在地	(9,6)	(5,6)	2,1	1区包含層	F9-N0.12
第92図15	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図16	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第92図17	土師器	皿	在地	-	(5,6)	-	1区包含層	F9-No.20
第92図18	土師器	皿	在地	-	7,8	-	1区包含層	D6-N0.19
第92図19	土師器	皿	在地	-	(5,6)	-	1区包含層	J19。石英を含む
第92図20	土師器	皿	在地	-	(5,6)	-	1区包含層	E8
第92図21	土師器	皿	在地	-	(6,6)	-	1区包含層	I11-N0.21
第92図22	土師器	皿	在地	-	(6,6)	-	1区包含層	E7
第93図1	土師器	皿	在地	-	(7,0)	-	1区包含層	I10。金色の雲母を含む
第93図2	土師器	皿	在地	(12,0)	(8,0)	2,7	1区包含層	H10-N0.5。外底面に板圧痕
第93図3	土師器	皿	在地	(12,8)	(8,7)	3,7	1区包含層	D7-N0.52
第93図4	土師器	皿	在地	(12,9)	(9,0)	3,0	1区包含層	E8-N0.16。石英を含む
第93図5	土師器	皿	在地	(14,2)	(11,6)	3,1	1区包含層	H10-N0.5
第93図6	土師器	皿	在地	(11,4)	(8,2)	3,9	1区包含層	E8-No.14
第93図7	土師器	皿	在地	(12,7)	(9,8)	3,0	1区包含層	E8-No.11
第93図8	土師器	皿	在地	(12,4)	(8,7)	3,6	1区包含層	
第93図9	土師器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	
第93図10	土師器	皿	在地	(11,6)	(8,6)	3,7	1区包含層	F8
第93図11	土師器	皿	在地	(11,2)	7,0	4,4	1区包含層	C5-N0.42
第93図12	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図13	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図14	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図15	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図16	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図17	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図18	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図19	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図20	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図21	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第93図22	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	F8-64
第93図23	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	C5-N0.16
第94図1	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図2	青花	皿	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図3	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図4	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図5	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図6	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図7	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図8	青花	皿		-	(5,2)	-	1区包含層	F9-N0.16
第94図9	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図10	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図11	青花	碗	中国（景徳鎮窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図12	青磁	碗	中国（龍泉窯）	(12,6)	-	-	1区包含層	F8-No.50
第94図13	青磁	碗	中国（龍泉窯）	(16,2)	-	-	1区包含層	
第94図14	青磁	碗	中国（龍泉窯）	(15,0)	-	-	1区包含層	E8
第94図15	青磁	皿	中国（龍泉窯）	(15,8)	-	-	1区包含層	C5-N0.87
第94図16	青磁	皿	中国（龍泉窯）	(10,6)	(5,4)	(3,0)	1区包含層	D5-N0.35・46。稜花皿
第94図17	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	G9-N0.24
第94図18	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図19	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	(5,6)	-	1区包含層	C5-N0.12
第94図20	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図21	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図22	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図23	青磁	碗	中国（同安窯）	-	-	-	1区包含層	櫛描き
第94図24	青磁	碗	中国（同安窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図25	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	C5-N0.24、100
第94図26	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	G9-No.34
第94図27	青磁	皿	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	D6-N0.56
第94図28	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	
第94図29	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	G9
第94図30	青磁	碗	中国（龍泉窯）	-	-	-	1区包含層	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑦）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第 94図31	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	1区包含層	
第 94図32	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	1区包含層	櫛描き
第 94図33	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	C5-N0.55
第 94図34	白磁	碗	中国	-	(6,8)	-	1区包含層	H9-N0.10
第 94図35	白磁	碗	中国	-	(7,4)	-	1区包含層	F8-No.45
第 94図36	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	C5-N0.41。毛彫り
第 94図37	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	D5。型押し
第 94図38	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	
第 94図39	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	C5。毛彫り
第 94図40	白磁	碗	中国	-	-	-	1区包含層	A3
第 94図41	白磁	碗	中国	-	(3,9)	-	1区包含層	G9
第 94図42	白磁	碗	中国	-	(5,0)	-	1区包含層	G9-No.10
第 94図43	白磁	皿	中国	-	(6,0)	-	1区包含層	F7-No.1
第 94図44	白磁	皿	中国	-	-	-	1区包含層	
第 95図 1	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	1区包含層	F8-No.53
第 95図 2	瓦質土器	火鉢	在地	-	30,0	-	1区包含層	C5-N0.73、93
第 95図 3	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	1区包含層	C4-N0.10
第 95図 4	瓦質土器	皿	在地	-	-	-	1区包含層	D6-N0.55
第 95図 5	瓦質土器	蓋	在地	-	-	-	1区包含層	D6-N0.50
第 95図 6	瓦質土器	蓋	在地	(20,3)	-	-	1区包含層	N14
第 95図 7	瓦質土器	蓋		-	-	-	1区包含層	F8
第 95図 8	瓦質土器	土鍋	在地	-	-	-	1区包含層	E7-No.15
第 95図 9	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	1区包含層	M14-N0.8。石英を含む
第 95図10	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	1区包含層	N14
第 95図11	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	1区包含層	E7
第 95図12	瓦質土器	壺	在地	-	-	-	1区包含層	D6-N0.54。最大径12,4″
第 95図13	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	1区包含層	D6-No.31
第 95図14	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	1区包含層	L13
第 97図 1	須恵器	蓋	日本	(8,8)	-	2,0	1区包含層	G9-No.9。古代
第 97図 2	緑釉陶器	皿	日本	-	-	-	1区包含層	古代
第 97図 3	土師器	皿	日本	-	(11,5)	-	1区包含層	F7-N0.32。古代
第 97図 4	土師器	皿	日本	-	-	-	1区包含層	古代
第 97図 5	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	1区包含層	C4-N0.31
第 97図 6	陶器	壺	備前	-	4,9	-	1区包含層	C4-N0.33。最大径8,0″
第 97図 7	瓦器碗	皿	在地	-	(5,3)	-	1区包含層	C4-N0.38
第 97図 8	土師器	燭台	在地	-	-	-	1区包含層	C5-N0.77
第 97図 9	瓦質土器	鉢	在地	20,5	-	-	1区包含層	E8-12。20,5は口縁部内径、最大径は24,2
第 97図10	瓦質土器	鉢	在地	18,8	-	-	1区包含層	18,8は口縁部内径、最大径は24,4
第 97図11	陶器	瓶	備前	-	-	-	1区包含層	G9-N0.32
第 97図12	陶器	瓶	備前	-	-	-	1区包含層	D5-N0.40
第 97図13	陶器	瓶	備前	-	-	-	1区包含層	H9-N0.6
第 97図14	陶器	鉢	在地	-	-	-	1区包含層	
第 97図15	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	1区包含層	F9-N0.17
第 97図16	陶器	擂鉢	備前	-	-	-	1区包含層	H10-N0.14
第 97図17	弥生式土器	壺	在地	-	4,8	-	1区包含層	G9
第 97図18	弥生式土器	高坏	在地	-	11,4	-	1区包含層	G9-36
第 99図 4	白磁	皿	中国	-	-	-	S51・51	口縁部内面鉄錆(茶色)
第 99図 5	白磁	皿	中国	(10,0)	(5,8)	2,55	SD26	
第 99図 6	白磁	壺		(8,7)	-	-	SK19	
第105図 1	土師器	皿	在地	-	-	-	SK17	
第107図 1	土師器	皿	在地	(7,8)	(5,4)	2,4	SX4	
第107図 2	土師器	皿	在地	-	8,3	-	SX4	古代
第101図 1	土師器	皿	在地	-	-	-	SX4	
第111図 1	京都系土師器	皿	在地	(11,2)	-	-	2区3層	石英を含む
第111図 2	土師器	皿	在地	(12,9)	-	-	2区3層	金色の雲母を含む
第111図 3	土師器	皿	在地	-	(5,0)	-	2区3層	SX4より下層
第111図 4	瓦器椀	皿	在地	-	7,1	-	2区3層	
第111図 5	土師器	皿	在地	-	-	-	2区3層	
第111図 6	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	2区3層	灰色
第111図 7	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	2区	
第111図 8	青磁	碗？	中国(龍泉窯)	(8,2)	-	-	2区包含層	
第111図 9	青磁	香炉？	中国(龍泉窯)	(9,2)	-	-	2区3層	
第111図10	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	-	-	-	2区3層	碗？
第111図11	青磁	碗	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層	
第111図12	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	2区3層	
第111図13	青磁	碗	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層	櫛描き
第111図14	青磁	皿	中国(同安窯)	-	-	-	2区3層	櫛描き
第111図15	白磁	碗		(13,7)	-	-	2区3層	
第111図16	白磁	皿		(20,0)	-	-	2区3層	
第111図17	白磁	碗		(13,5)	-	-	2区3層	19と同一個体か？
第111図18	白磁	碗		(8,8)	-	(4,2)	2区3層	
第111図19	白磁	碗		-	(5,1)	-	2区3層	
第111図20	白磁	碗	中国(景徳鎮窯)	-	(3,0)	-	2区3層	

31次調査区遺物観察表（土器・陶磁器⑧）

挿図No.	器種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備考
				口径	底径	器高		
第112図21	陶器	瓶	備前	-	-	-	2区3層	瓦集積(S82)よりも下層出土
第114図 1	土師器	皿	在地	-	(6,6)	-	SD25	
第114図 2	土師器	皿	在地	-	(7,2)	-	SD25	
第115図 1	土師器	皿	在地	-	-	-	P16	
第115図 2	土師器	皿	在地	-	-	-	P16	
第115図 3	土師器	皿	在地	(9,0)	(7,2)	2,6	P16	
第115図 4	土師器	皿	在地	(12,7)	(7,6)	3,7	P16	
第115図 5	土師器	皿	在地	(15,6)	(12,0)	3,6	O15	
第115図 6	青磁	瓶	中国	(8,8)	-	-	P16	
第115図 7	褐釉陶器	壺	中国南部	-	-	-	3区近世層	
第115図 8	白磁	碗	中国	-	(6,3)	-	P16	N0.26。蛇の目釉剥ぎ
第115図 9	青磁	椀	中国	-	-	-	Q16	内面に片切り彫り
第115図10	白磁	皿	中国	-	-	-	Q16	
第115図11	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	P16	
第115図12	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	Q16	

31次調査区遺物観察表（土製品）

挿図No.	品種	材質	寸法（単位cm）							重量(g)	遺構名	備考
			部位									
第 16図 6	土錘	土師質	-	長さ	5,5	径	1,1	孔径	0,3	4,2	SK11	N0.9
第 28図10	土錘	土師質	-	長さ	4,3	径	1,2	孔径	0,5	5,9	SD19	
第 28図11	土錘	土師質	-	長さ	5,0	径	0,9	孔径	0,2	4,3	SD19	
第 32図21	土錘	土師質	-	長さ	6,8	径	1,4	孔径	0,5	12,3	SE1	
第 32図22	土錘	土師質	-	長さ	6,4	径	1,3	孔径	0,5	11,2	SE1	
第 36図19	土錘	土師質	-	長さ	6,5	径	1,3	孔径	0,4	10,4	S41	N0.17
第 22図 4	土錘	土師質	-	長さ	4,0	径	0,9	孔径	0,3	2,9	SK11	下層
第 52図12	土錘	土師質	-	長さ	4,2	径	1,0	孔径	0,4	3,8	SD11	
第 50図20	土錘	土師質	-	長さ	6,6	径	1,3	孔径	0,4	10,4	SD10	
第 50図21	土錘	土師質	-	長さ	4,0	径	0,8	孔径	0,3	2,9	SD10	
第 65図 6	土錘	土師質	-	長さ	4,8	径	1,5	孔径	0,4	7,6	SD9	5層
第 79図13	土錘	土師質	-	長さ	5,3	径	1,1	孔径	0,2	6,9	SK13	N0.2
第 96図 1	土錘	土師質	-	長さ	4,9	径	1,1	孔径	0,3	5,7	1区包含層	C5-N0.2
第 96図 2	土錘	土師質	-	長さ	(3,4)	径	0,9	孔径	0,2	3,0	1区包含層	C5-N0.3
第 96図 3	土錘	土師質	-	長さ	5,4	径	1,0	孔径	0,3	4,6	1区包含層	C5-N0.6
第 96図 4	土錘	土師質	-	長さ	4,7	径	1,0	孔径	0,4	6,0	1区包含層	C5-N0.7
第 96図 5	土錘	土師質	-	長さ	4,7	径	1,0	孔径	0,3	4,6	1区包含層	C4-N0.16
第 96図 6	土錘	土師質	-	長さ	5,5	径	1,0	孔径	0,3	5,0	1区包含層	C5-No.60
第 96図 7	土錘	土師質	-	長さ	(4,2)	径	1,0	孔径	0,4	3,5	1区包含層	C5-No.74
第 96図 8	土錘	土師質	-	長さ	(4,5)	径	1,1	孔径	0,4	4,7	1区包含層	C5-N0.106
第 96図 9	土錘	土師質	-	長さ	4,7	径	0,9	孔径	0,3	3,9	1区包含層	D5-N0.10
第 96図10	土錘	土師質	-	長さ	6,0	径	1,0	孔径	0,2	5,4	1区包含層	D5-N0.20
第 96図11	土錘	土師質	-	長さ	6,1	径	1,1	孔径	0,3	8,0	1区包含層	D5-N0.21
第 96図12	土錘	土師質	-	長さ	4,3	径	0,9	孔径	0,4	3,6	1区包含層	D5-N0.23
第 96図13	土錘	土師質	-	長さ	5,3	径	1,0	孔径	1,0	5,3	1区包含層	D5-N0.25
第 96図14	土錘	土師質	-	長さ	4,5	径	0,9	孔径	0,2	3,4	1区包含層	D5-N0.26
第 96図15	土錘	土師質	-	長さ	(4,8)	径	1,0	孔径	0,2	4,4	1区包含層	
第 96図16	土錘	土師質	-	長さ	(3,5)	径	1,0	孔径	0,2	2,6	1区包含層	
第 96図17	土錘	土師質	-	長さ	(3,5)	径	1,0	孔径	0,3	3,1	1区包含層	
第 96図18	土錘	土師質	-	長さ	5,4	径	1,1	孔径	0,3	6,3	1区包含層	F7-N0.5
第 96図19	土錘	土師質	-	長さ	4,6	径	2,2	孔径	0,5	21,4	1区包含層	G10
第107図 3	土錘	土師質	-	長さ	4,2	径	1,3	孔径	0,3	7,6	SX4	下部
第112図23	土錘	土師質	-	長さ	3,4	径	1,0	孔径	0,3	2,9	2区3層	

31次調査区遺物観察表（石製品）

挿図No.	品種	材質	部位	寸法（単位cm）						重量(g)	遺構名	備考
第 20図 1	硯	赤間石	-	長さ	13,3	幅	7,2	厚さ	2,5	326,1	SD15	N0.3
第 35図 1	砥石	白色砂岩	-	長さ	7,1	幅	4,8	厚さ	2,4	76,5	SE1	
第 35図 2	砥石	石	-	長さ	7,8	幅	5,4	厚さ	4,0	245,1	SE1	
第 35図 3	砥石	粘板岩	-	長さ	12,2	幅	4,1	厚さ	3,0	251,9	SE1	
第 35図 4	砥石	白色砂岩	-	長さ	10,7	幅	4,5	厚さ	1,9	112,4	SE1	
第 35図 5	石臼	石	-	長さ	37,8	最大	-	最大	11,4	-	SE1	
第 36図 1	石臼	-	上臼	最大	38,8	幅	-	厚	20,4	-	SE1	
第 37図 1	五輪	凝灰岩	水輪	長	29,4	最大	29,4	厚さ	17,4	-	SE1	
第 37図 2	五輪	凝灰岩	地輪	長さ	32,4	幅	21,8	厚さ	21,0	-	SE1	
第 37図 3	五輪	凝灰岩	地輪	長さ	33,6	幅	33,8	厚さ	12,0	-	SE1	
第 37図 4	五輪	凝灰岩	地輪	長さ	31,4	幅	31,2	厚さ	24,4	-	SE1	
第 37図 5	五輪	凝灰岩	地輪	長さ	39,2	幅	30,2	厚さ	14,0	-	SE1	
第 37図 6	五輪	凝灰岩	地輪	長さ	20,6	幅	25,8	厚さ	18,4	-	SE1	
第 52図13	砥石	桂化木	-	長さ	6,2	幅	4,0	厚さ	1,0	-	SD11	
第 52図16	燧石	圭化木？	-	長さ	3,1	幅	2,4	厚さ	1,9	14,3	SD11	
第 72図 6	燧石	六太郎石	-	長さ	2,9	幅	2,6	厚さ	2,2	28,2	SD9	
第 77図 1	石臼	石	下臼	長さ	20,7	幅	12,6	厚さ	10,5	-	SX3	上面の復元直径は25,2″
第 96図20	砥石	赤間石	-	長さ	9,5	幅	8,0	厚さ	2,0	234,6	1区包含層	C5-N0.8
第 96図21	砥石	粘板岩	-	長さ	5,3	幅	3,0	厚さ	1,2	41,9	1区包含層	G9。欠損
第 96図22	砥石	砂岩	-	長さ	4,8	幅	3,5	厚さ	4,2	95,0	1区包含層	G10。欠損
第 96図24	石鍋	滑石	-	長さ	(20,2)	幅	-	厚さ	-	-	1区包含層	M14
第 99図 3	砥石	粘板岩	-	口径	7,5	幅	4,0	厚さ	1,3	75,2	SP73	

３１次調査区遺物観察表（金属製品）

挿図No.	品種	材質	部位	寸法（単位cm）						重量(g)	遺構名	備考
第 17図 2	煙管	真鍮	-	長さ	-	幅	-	-	-	-	SD17	
第 33図 5	包丁？	鉄	-	長さ	20,6	幅	6,1	厚さ	0,4	158,8	SE1	

３１次調査区遺物観察表（瓦・塼瓦）①

挿図No.	品種	部位	寸法（単位cm）						遺構名	備考
第 10図 2	煙管		長さ		幅		厚さ		SK5	
第 13図 1	銅製金具		長さ		幅		厚さ		SD3	
第 28図 1	包丁？軒丸瓦		長さ	14,3	幅	20,6	厚さ	3,1	SE1	石英を含む
第 33図 1	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SE1	
第 33図 1	_瓦		長さ		幅	13,1	厚さ		SE1	石英を含む
第 49図 1	丸瓦		長さ	18,6	幅		厚さ	2,7	SD10	N0.125
第 49図 2	_瓦		長さ	17,2	幅		厚さ	2,6	SD10	N0.106
第 49図 3	_瓦		長さ	16,1	幅	18,2	厚さ	3,0	SD10	N0.61
第 49図21	_瓦		長さ		幅	17,5	厚さ		SD10	巴紋
第 36図22	_瓦		長さ		幅	14,6	厚さ		SD10	
第 36図23	_瓦		長さ		幅		厚さ		SD10	
第 36図24	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SD10	
第 65図 7	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SD9	3層
第 52図14	平瓦		長さ	18,2	幅		厚さ	3,3	SD11	
第 69図22	平瓦		長さ		幅		厚さ		SD9	古代
第 69図23	_瓦		長さ		幅	13,8	厚さ		SD9	
第 42図 1	平瓦		長さ	23,9	幅		厚さ	4,0	SX2	N0.10
第 42図 2	平瓦		長さ	15,8	幅		厚さ	3,7	SX2	N0.9
第 42図 3	軒平瓦		長さ	22,1	幅	20,1	厚さ	4,0	SX2	N0.61
第 42図 4	軒平瓦		長さ	16,2	幅	19,5	厚さ	4,0	SX2	N0.38
第 42図 5	軒平瓦		長さ	9,4	幅	19,6	厚さ	3,7	SX2	N0.20
第 42図 6	軒平瓦		長さ	11,5	幅	12,8	厚さ	3,8	SX2	N0.15+32
第 43図 1	軒平瓦		長さ	14,3	幅	15,3	厚さ	1,3	SX2	N0.56
第 43図 2	軒平瓦		長さ		幅	19,4	厚さ		SX2	
第 43図 3	平瓦		長さ		幅	19,4	厚さ		SX2	
第 43図 4	平瓦		長さ	13,5	幅		厚さ	2,8	SX2	N0.60
第 43図 5	平瓦		長さ	13,7	幅		厚さ	2,7	SX2	N0.53
第 50図22	_瓦		長さ		幅	12,0	厚さ		SD10	
第 50図23	_瓦		長さ		幅	12,3	厚さ		SD10	
第 50図24	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ		SD10	
第 50図25	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SD10	
第 79図15	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SK13	
第 79図16	平瓦	目？	長さ	7,0	幅		厚さ	3,9	SK13	N0.27
第 78図 6	平瓦		長さ		幅		厚さ		SD20	
第 78図 7	鬼瓦		長さ		幅	5,9	厚さ		SD20	古代
第 78図 8	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ		SD20	古代
第 80図 8	平瓦		長さ		幅		厚さ		SK18	
第 95図15	平瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	
第 95図16	平瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	
第 95図17	平瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	巴紋
第 95図18	平瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	
第 95図19	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	古代
第 95図20	丸瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	
第 95図21	平瓦		長さ	15,7	幅		厚さ	2,3	1区包含層	C5-N0.31。石英を含む
第 96図20	面戸瓦		長さ		幅		厚さ		1区包含層	
第 96図23	_瓦		長さ	17,2	幅	13,6	厚さ	3,1	1区包含層	L13
第 99図 1	_瓦		長さ	(13,6)	幅		厚さ	2,4	SP26	石英を含む
第 99図 2	_瓦		長さ	18,8	幅	8,0	厚さ	2,5		S44南部+S61+S62
第 99図 3	_瓦		長さ		幅	(10,5)	厚さ		SP73	
第108図 1	_瓦		長さ		幅	11,2	厚さ		SX4	
第108図 2	_瓦		長さ	5,2	幅		厚さ	3,4	SX4	石英を含む
第108図 3	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第108図 4	軒平瓦		長さ		幅	6,6	厚さ		SX4	
第108図 5	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第108図 6	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 1	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 2	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 3	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 4	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 5	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 6	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 7	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 8	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図 9	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図10	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図11	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図12	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第109図12	平瓦		長さ		幅		厚さ		SX4	
第108図13	平瓦		長さ	26,7	幅		厚さ	2,8	SX4	No.209+210。石英を含む
第108図14	平瓦		長さ	20,4	幅		厚さ	2,9	SX4	下部

３１次調査区遺物観察表（瓦・塼瓦）②

挿図 No.	品種	部位	寸法（単位cm）							遺構名	備考
第109図 1	_瓦		長さ	21,3	幅	12,4	厚さ	2,5		SX4	N0.194。石英を含む
第109図 2	_瓦		長さ	23,1	幅	21,7	厚さ	2,7		SX4	N0.65。石英を含む
第109図 3	_瓦		長さ	27,6	幅	17,6	厚さ	2,7		SX4	N0.271。石英を含む
第109図 4	_瓦		長さ	17,2	幅	14,4	厚さ	2,3		SX4	N0.67。石英を含む
第110図 1	_瓦		長さ	27,2	幅	19,0	厚さ	2,5		SX4	N0.275。石英を含む
第110図 2	_瓦		長さ	27,8	幅	16,9	厚さ	2,9		SX4	N0.29。石英を含む
第110図 3	鬼瓦	口・喉	長さ		幅		厚さ			SX4	
第111図22	軒丸瓦		長さ	8,4	幅	7,0	厚さ	3,6		2区西3層	
第114図 3	平瓦		長さ		幅		厚さ			SD25	古代
第115図13	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	巴紋
第115図14	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ			O15	巴紋
第115図15	軒丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	巴紋
第115図16	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第115図17	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第115図18	丸瓦		長さ		幅		厚さ			P16	
第115図19	軒平瓦		長さ	8,2	幅	11,5	厚さ	5,1		Q16	
第115図20	鬼瓦	眉	長さ	8,8	幅	6,0	厚さ	4,0		O15	
第116図 1	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第116図 2	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第116図 3	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第116図 4	丸瓦		長さ		幅		厚さ			P16	
第116図 5	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第116図 6	丸瓦		長さ		幅		厚さ			Q16	
第116図 7	丸瓦		長さ		幅		厚さ			P16	
第116図 8	丸瓦		長さ		幅		厚さ			P16	
第116図 9	軒平瓦		長さ	15,2	幅	8,5	厚さ	3,0		Q16	
第116図10	軒平瓦		長さ	10,9	幅	7,1	厚さ	4,0		P16	N0.5

31次調査区遺物観察表（その他）

挿図 No.	品種	材　質	部位	寸法（単位cm）						重量 (g)	遺構名	備考
第 28図 8	壁土	土		長さ	12,1	幅	8,7	厚さ	5,0		SD19	N0.17
第 28図 9	壁土	土		長さ	9,4	幅	9,4	厚さ	8,5		SD19	
第107図 4	壁土	土		長さ	9,5	幅	7,3	厚さ	2,8		SX4	N0.3
第107図 5	壁土	土		長さ	4,1	幅	3,4	厚さ	2,6		SX4	下部
第107図 6	壁土	土		長さ	7,1	幅	5,2	厚さ	3,2		SX4	下部

31次調査区遺物観察表（銅銭）

挿図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考
第 10図 2	通寶		北宋				SK5	
第 17図 1	通寶		北宋				SD17・18	
第 41図 1	元祐通寶	1086		2，1			SD17・18	
第 66図 1	紹聖元寶	1094	北宋				SD9	
第 83図29	治平元寶	1064	北宋			篆書	SK18	
第 99図 4	元祐通寶	1086	北宋			行書	SD17・18	
第102図 7	朝鮮通宝	1423	朝鮮	3，5		楷書	SD11	
第 81図 1	治平元寶	1064	北宋	2，5			SK18	
第 72図14	聖宋元寶	1101	北宋			行書		
第 66図 1	紹聖元寶	1094	北宋				SD9	

３１次調査区遺物観察表（木製品）

挿図No.	品種	部位	寸法（単位cm）							遺構名	備考
第 29図 1	漆器椀		口径	14	底径	6,5	高さ	10,1		SD19	N0.21。最大径は14,2″
第 29図 2	椀		長さ		幅		厚さ			SD19	内外面黒漆塗り
第 29図 3	下駄	足	長さ	9,6	幅	9,7	厚さ	1,6		SD19	
第 29図 4	板		長さ	9,3	幅	7,0	厚さ	0,4		SD19	一部に墨書
第 29図 5	下駄		長さ	13,9	幅	8,7	厚さ	3,6		SD19	
第 29図 6	下駄	足	長さ	9,3	幅	8,6	厚さ	1,2		SD19	
第 29図 7	下駄	足	長さ	9,4	幅	8,0	厚さ	1,3		D19	
第 30図 8	杭		長さ	21,4	幅	5,2	厚さ	5,2		SD19	N0.17。焼け残り
第 33図 3	漆器椀		口径	14,8	底径	8,2	高さ	6,4		SE1	底径は底部最大外径・赤漆
第 33図 4	漆器椀		長さ	12,1	幅	4,1	厚さ	4,7		SE1	外面黒漆塗り、内面赤漆塗り
第43図15	紡錘社？		長さ	6,8	中心	1,0	厚さ	0,9		SE1	墨書
第 71図 1	折敷		長さ	25,1	径	22,2	厚さ	0,7		SD9	N0.28+30+31
第 71図 2	折敷		長さ	25,5	幅	13,5	厚さ	0,5		SD9	N0.46
第 71図 3	折敷		長さ	25,1	幅	12,2	厚さ	0,6		SD9	N0.53+54
第 71図 4	折敷		長さ	28,0	幅	6,8	厚さ	0,7		SD9	N0.43
第 71図 5	折敷		長さ	23,0	幅	3,1	厚さ	0,8		SD9	
第 71図 6	折敷		長さ	25,0	幅	4,0	厚さ	0,4		SD9	
第 72図 1	折敷		長さ	24,6	幅	24,5	厚さ	0,6		SD9	N0.63
第 72図 2	折敷		長さ	24,0	幅	2,1	厚さ	1,8		SD9	
第 72図 3	折敷		長さ		幅		厚さ			SD9	
第 72図 4	折敷		長さ	16,5	幅	15,2	厚さ	0,6		SD9	N0.62
第 72図 5	折敷		長さ	25,5	幅	7,2	厚さ	0,5		SD9	No.55
第 73図 1	円盤		長さ	10,2	幅	7,4	厚さ	0,5		SD9	N0.47
第 73図 2	円盤		長さ	6,9	幅	4,4	厚さ	0,4		SD9	N0.45
第 73図 3	円盤		長さ	4,5	幅	2,3	厚さ	0,2		SD9	下部黒色土層
第 73図 4	椀		口径	14,6	幅		高さ	4,3		SD9	No.64
第 73図 5	板		長さ	9,1	底径	3,5	厚さ	1,1		SD9	5層
第 73図 6	折敷		長さ	25,5	幅	7,2	厚さ	0,5		SD9	No.55
第 64図 8	棒		長さ	16,5	幅		厚さ	2,9		SD9	両端を尖らす
第 88図 1	柱根		長さ	15,0	幅	12,0	厚さ	9,9		SP32	下端は西端に切断
第 88図 2	柱根		長さ	22,0	幅	11,4	厚さ	10,4		SP62	下端に斧による調整痕
第 92図 1	柱根		長さ	21,8	幅	12,2	厚さ	10,8		SP68	下端に斧による調整痕
第 96図25	折敷		長さ	28,0	幅	2,5	厚さ	1,4		E8	側面の部材。釘穴一カ所

写　真　図　版

1区東北壁

近世初め頃の溝状遺構（SD3周辺）

SE1の推積層

SD23東北壁付近の完土掘状態

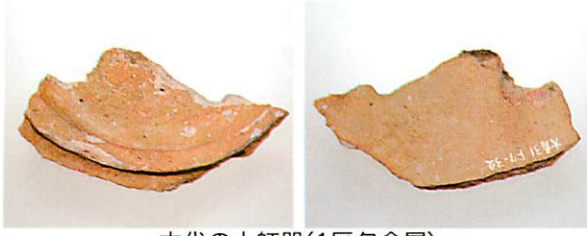
前頁下の漆器椀出土状態

同左

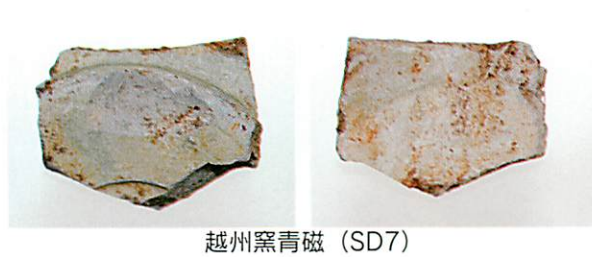
SD9南北層序

SD9遺物出土状態

瓦集中部（SX2）



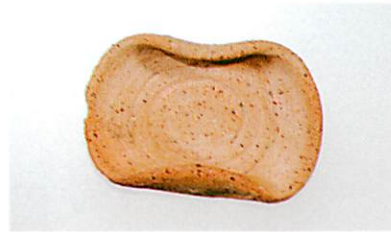
古代の土師器(1区包含層)



越州窯青磁（SD7）

(SK11)

IV14区



(SD23)

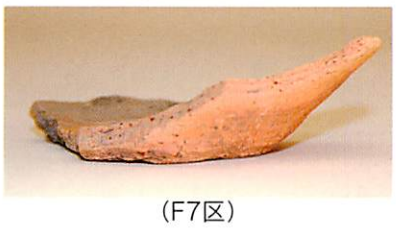
IV14区

(SK13)

(SD23)

(SD23)

大内系土器（SD11）

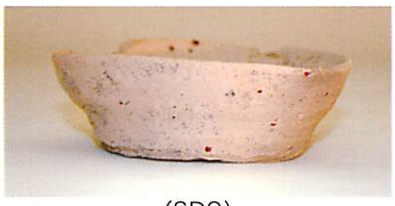


（F7区）

（SD9）

（SD9）

（SD9）



（SD9）

（SD9）

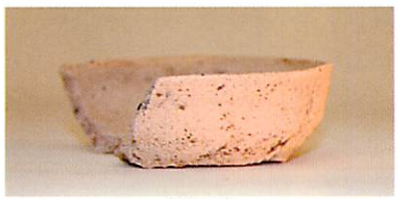
（SK13）

（SK18）

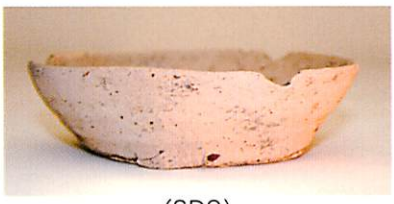
（SX3）

（SD9）

（SD9）



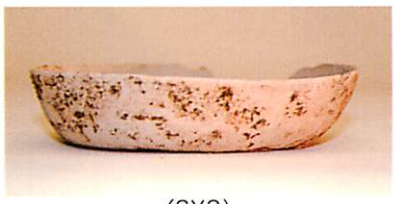
（SD9）



（SD9）

（SK13）

（SD24）



（SX3）

（SK13）

（SD9）

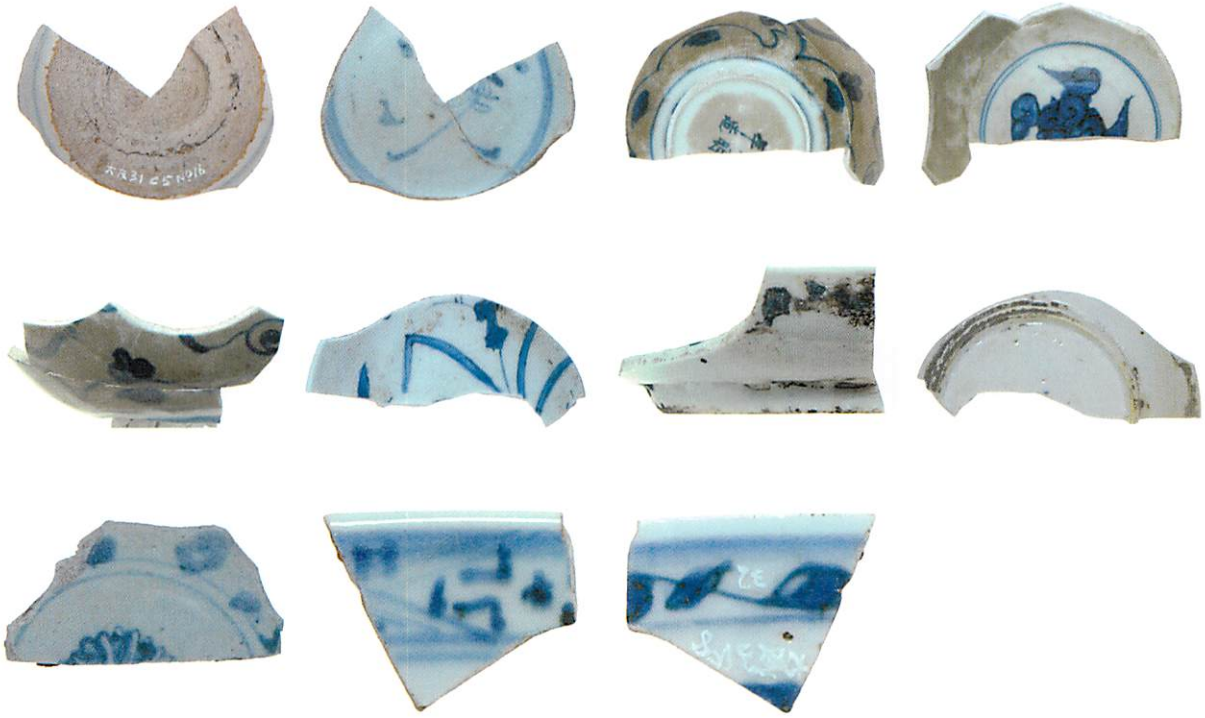
（SD9）土師器皿類

京都性ヘソ皿（SD9）

青花（中国製染付）

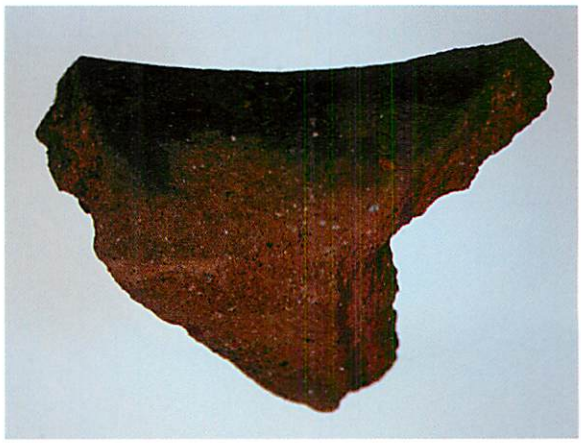
玉砂利（蛇紋岩・石英）

壁土（SX4）



青花（中国製染付）

SE1青磁器台片
（左「龍泉窯青磁」より）



タイ製ハンネラ土器（SE1）

燧石（左：SD11　右:SD9）

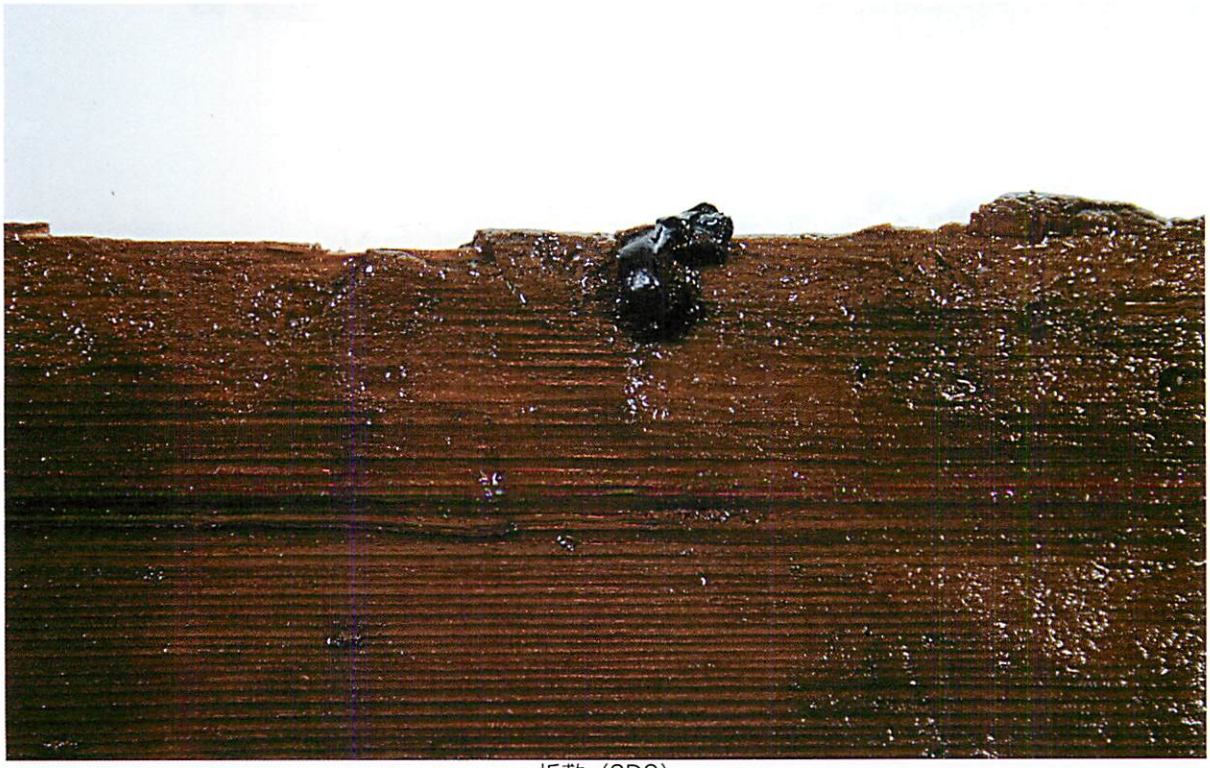
同左

SE1出土砥石

軒平瓦（3区包含層）

鬼瓦（SX4）

砥石



折敷（SD9）

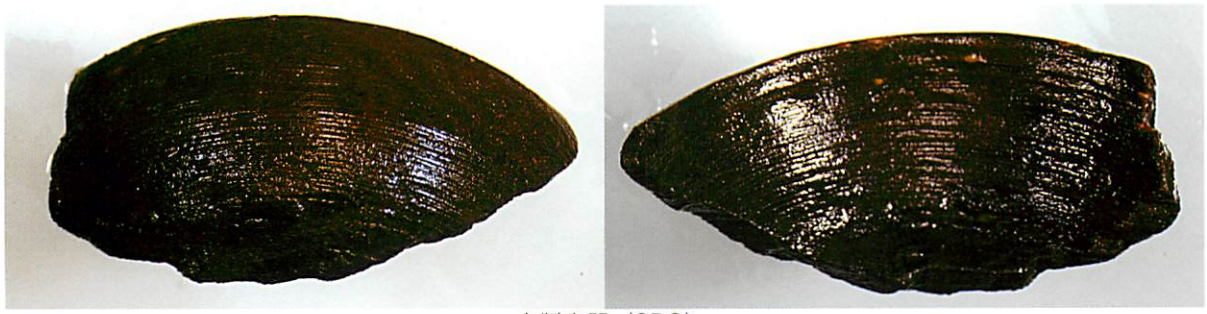
折敷（SD9）

折敷（SD9）

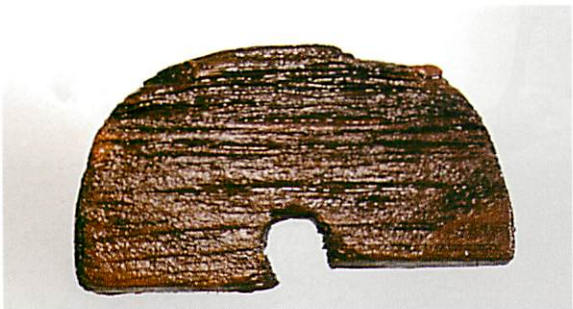
木柱（SP68）

木柱（SP62）

木柱（SP32）



木製容器（SD9）



円盤状木製品（SD20）

円盤状木製品（SD9）

折敷（SD9）

調査風景（1区）

1区西端

同左低地部

1区

1区上層部調査状況

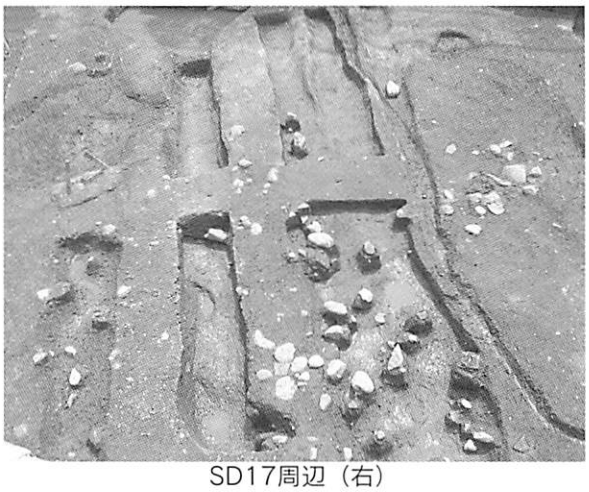
ＳＤ３

近世初め頃の溝状遺構

SD4周辺

近世初め頃の溝状遺構（SD12～15）

その調査状況（左）



SD17周辺（右）

SD12～15

3区

SD9検出状態

同上

SD10完堀状況

SD11土層

SD11上部（上）

SE1

SD9調査状況

SX2出土状態

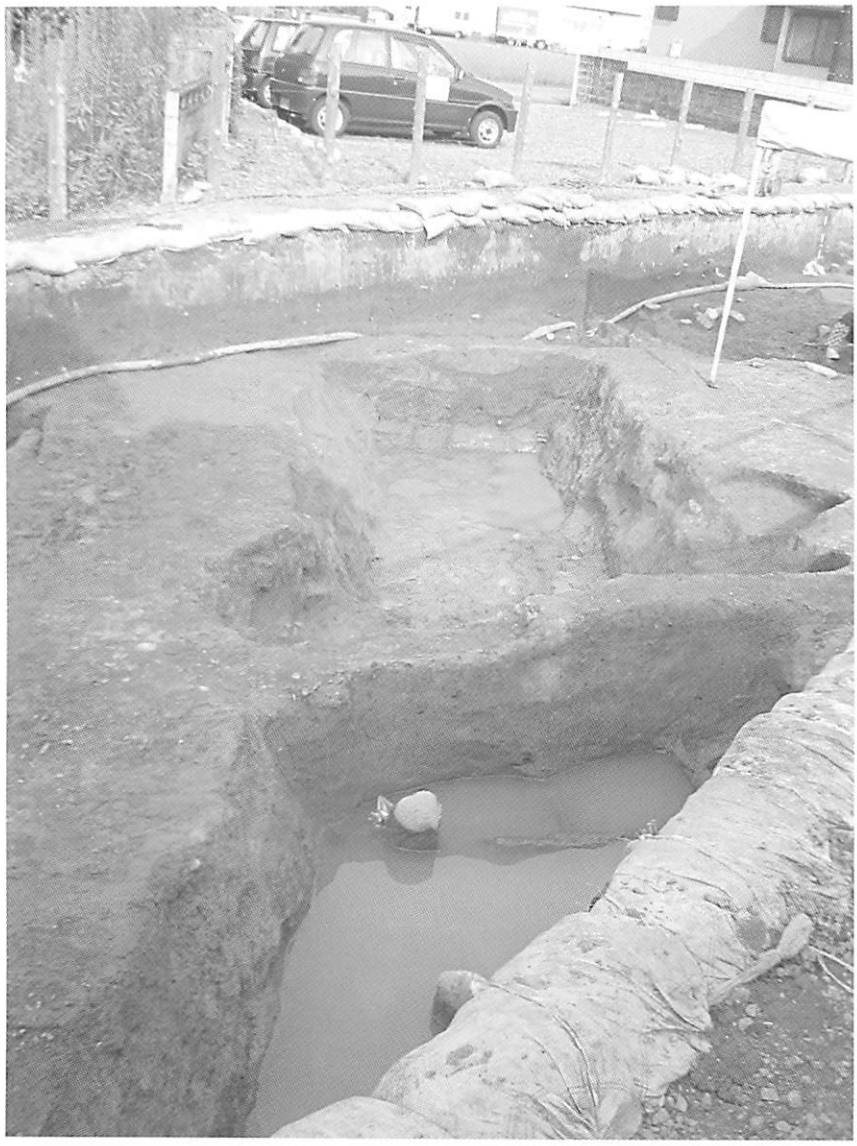
SK13・SD24完掘状態

1区東部

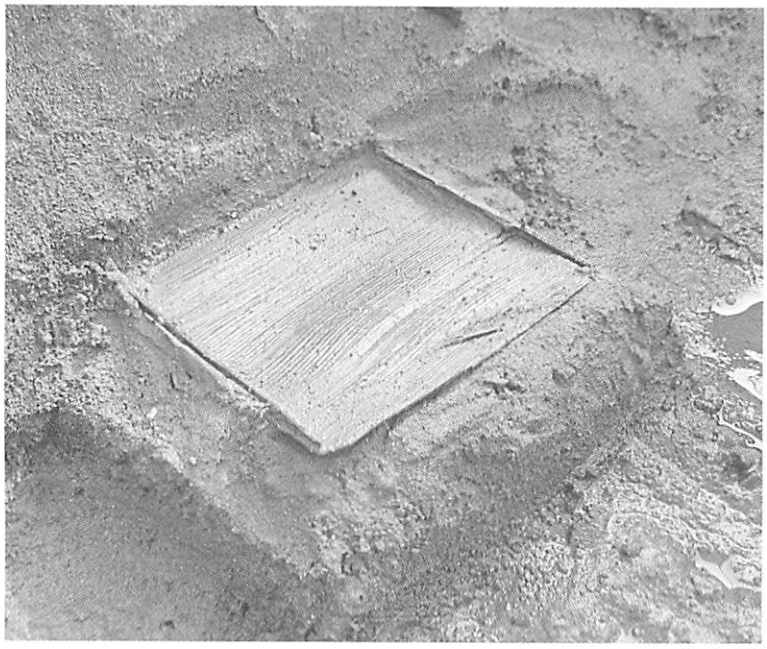
SD24西側柱穴群

SD24

SK20



SD9全景



折敷（SD9）

SK18周辺

同上

遺物出土状況

1区東部から2区・3区を見る

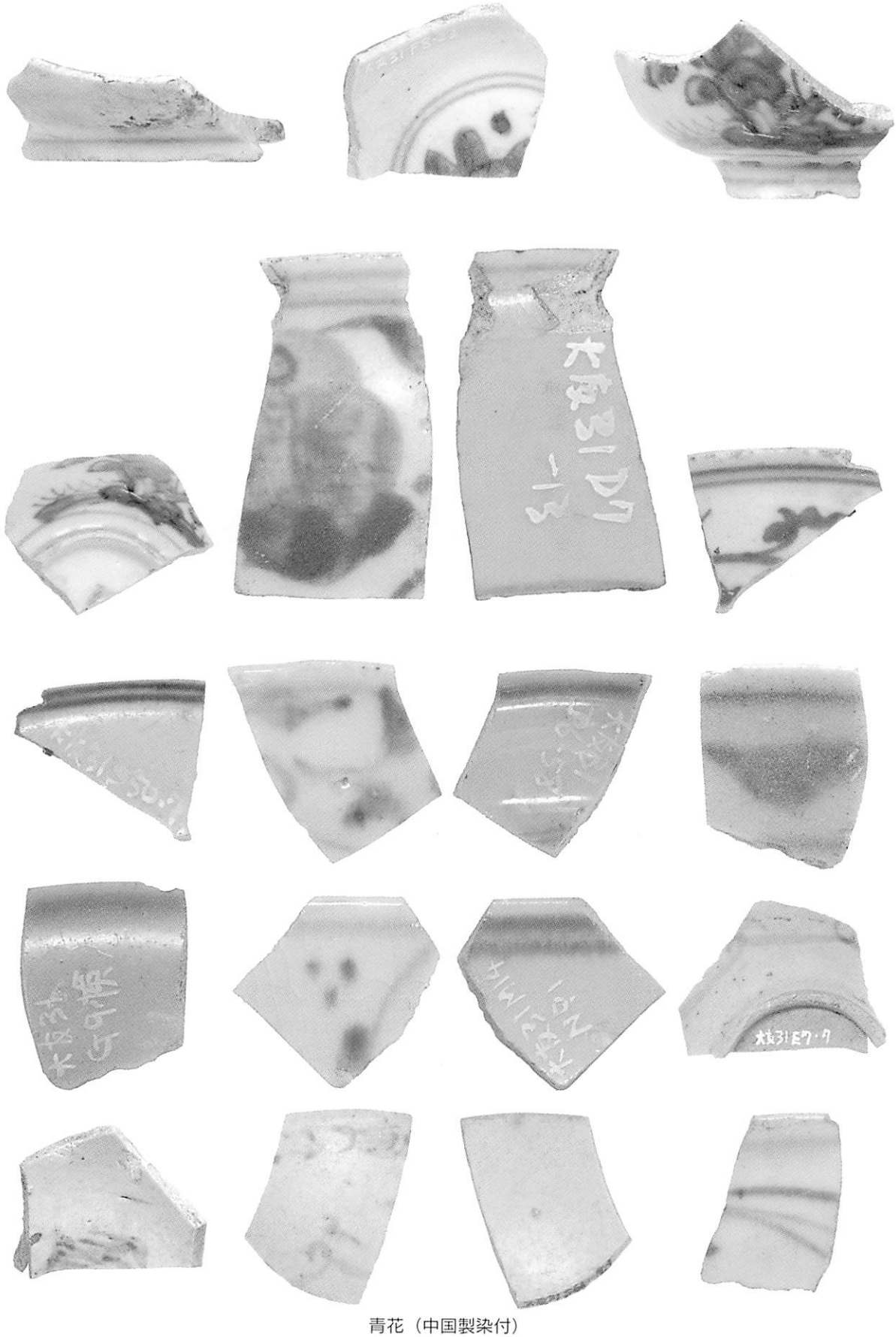
SX4（2区）

SX4

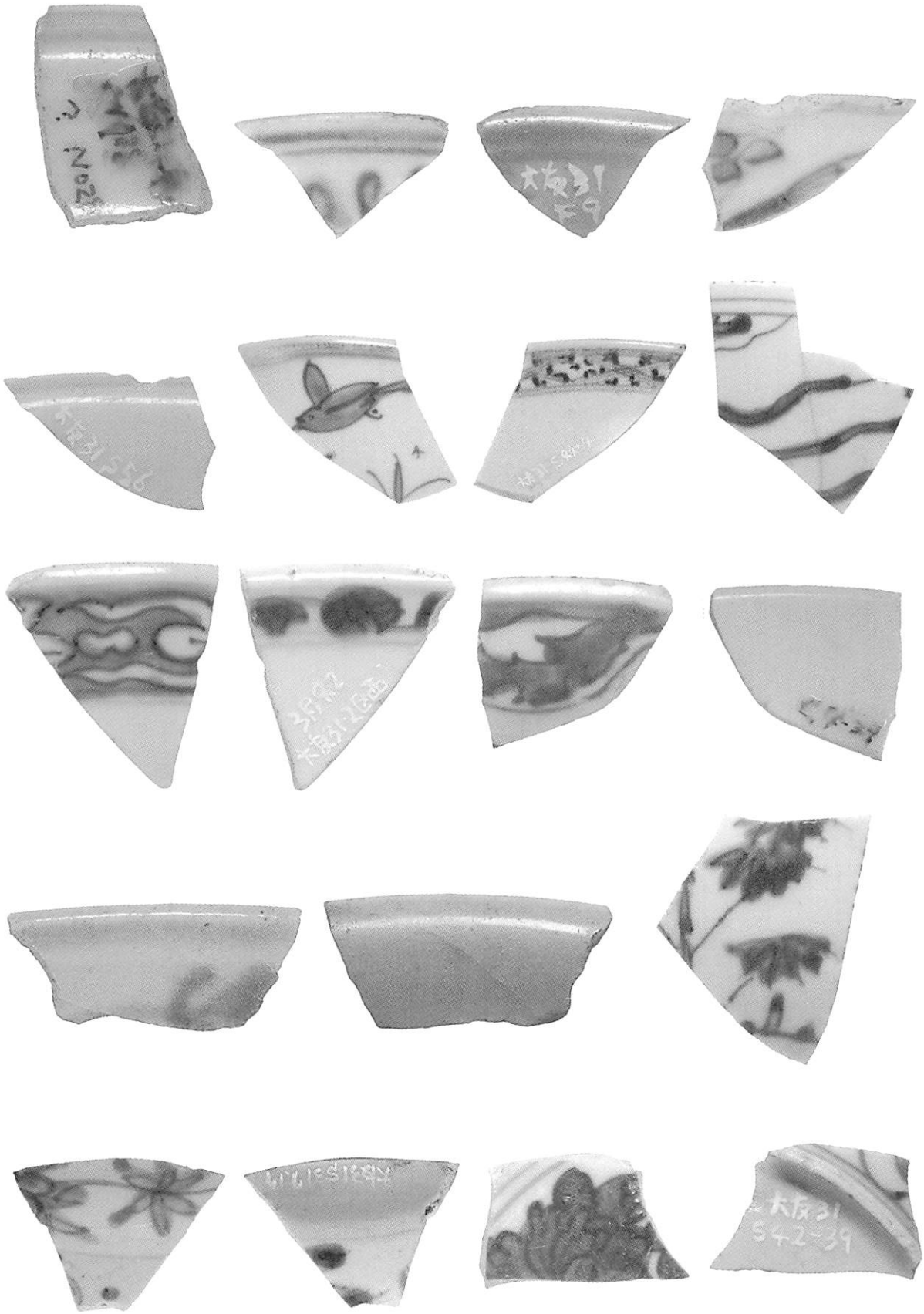
2区柱穴

3区礫出土状況

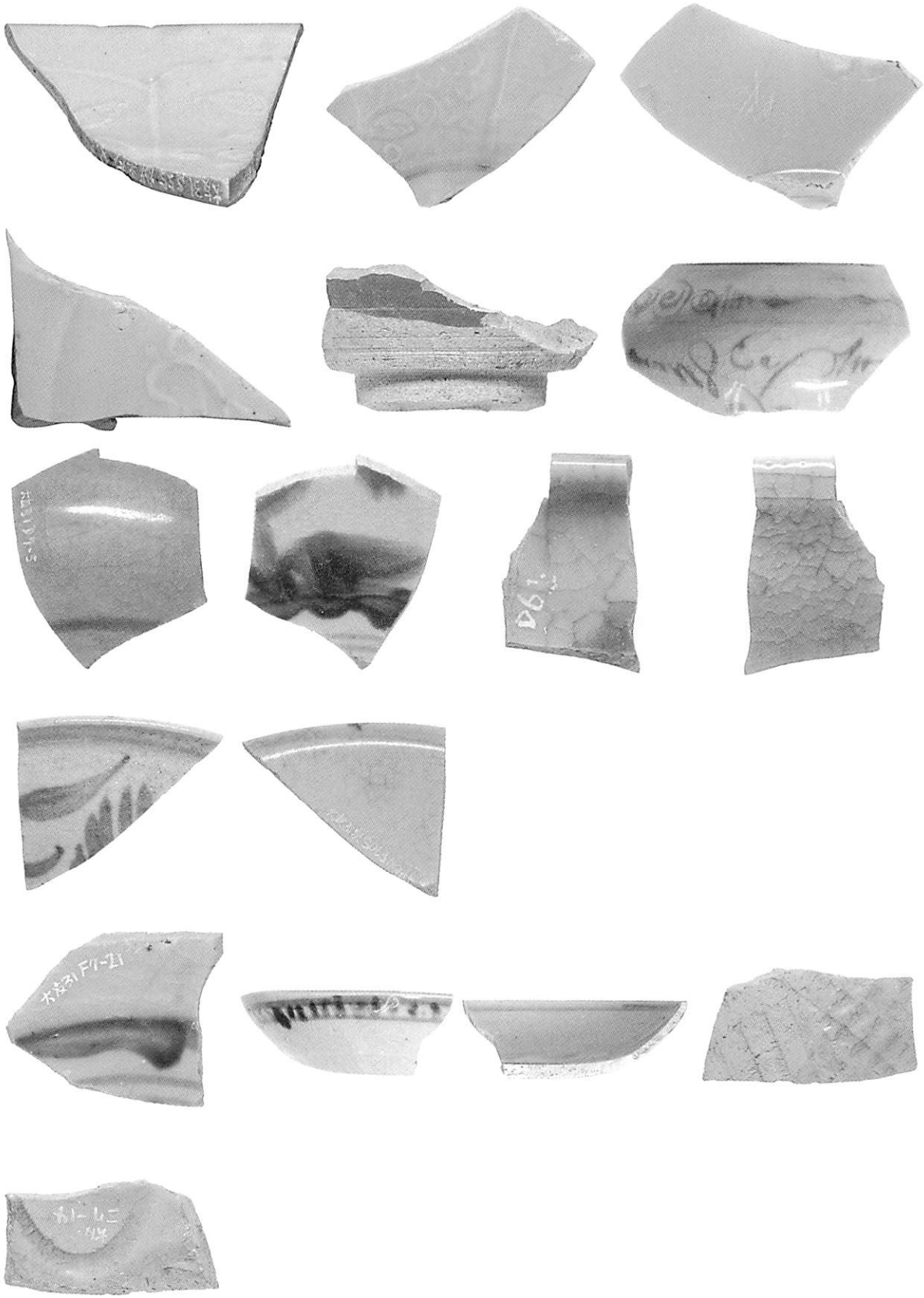
3区調査状況



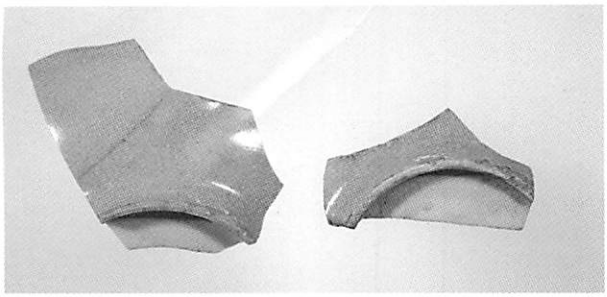
青花（中国製染付）



青花（中国製染付）



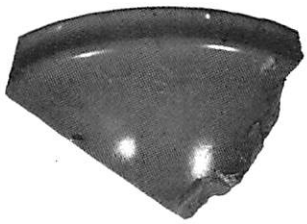
白磁・青花・青磁



青磁（1区包含層）

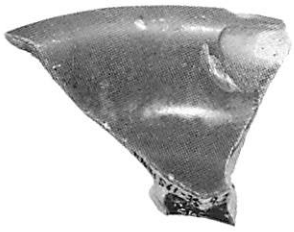
青磁（S41-78）

青磁（S50-6）

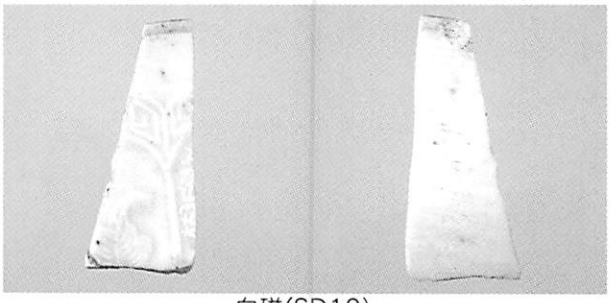


青磁（1区包含層）

（P-16一括）

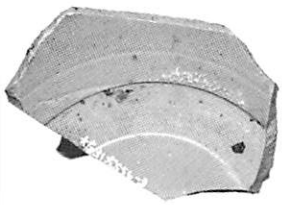


青磁（SE1）

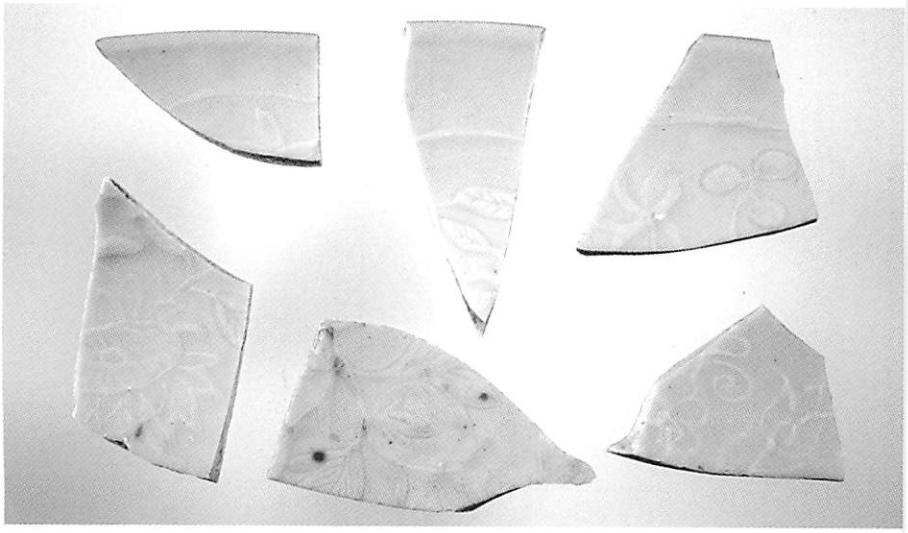


白磁(SD10)

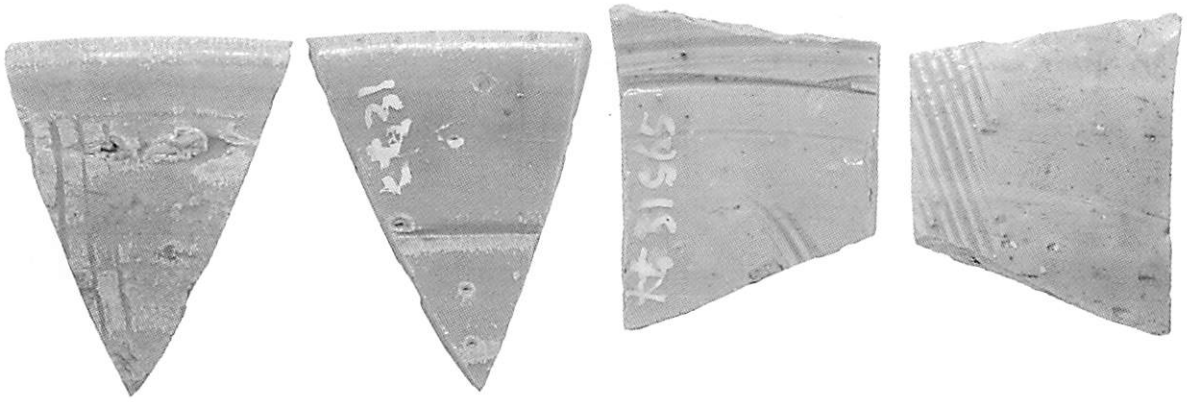
白磁（SD10付近）

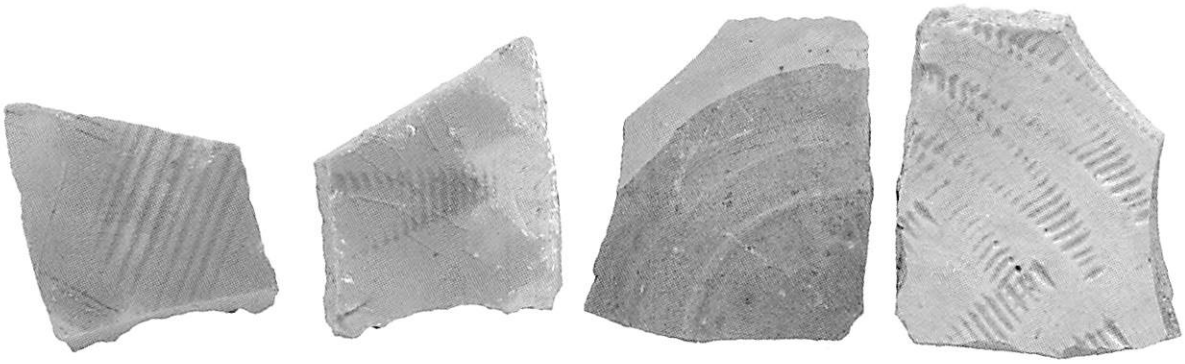


白磁(SX3)



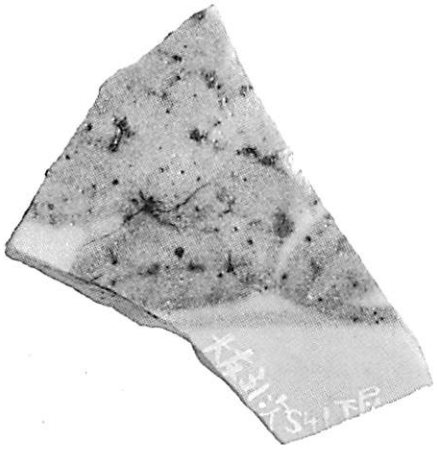
白磁(SD19)



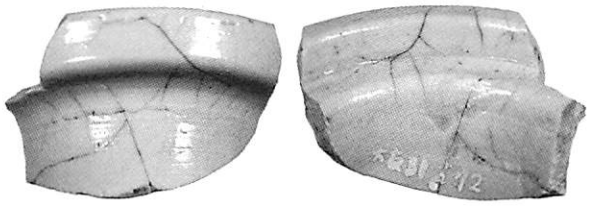


青磁

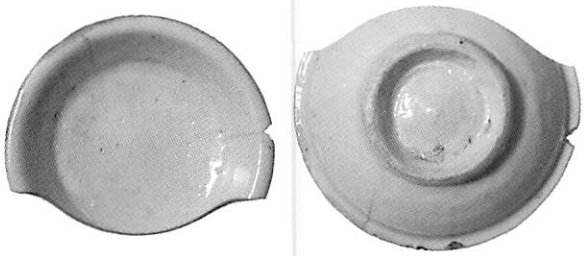
（1区包含層）



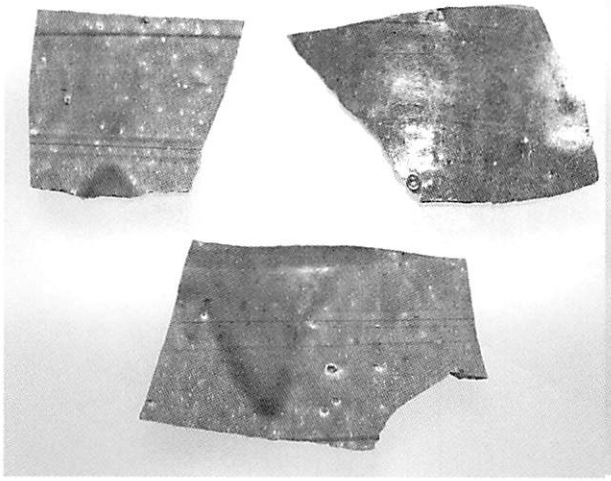
青花

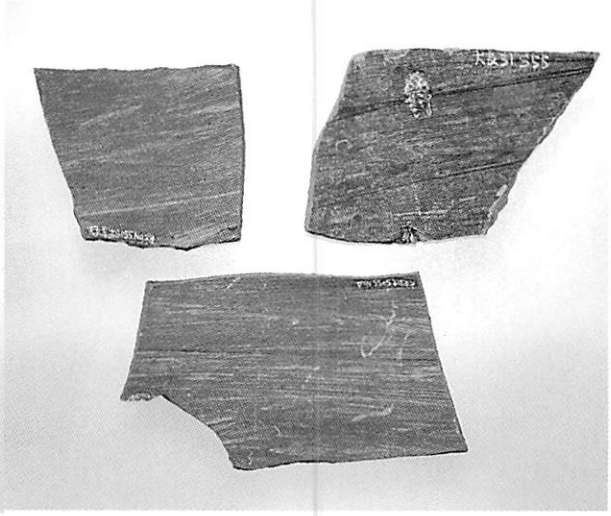


白磁（S72）

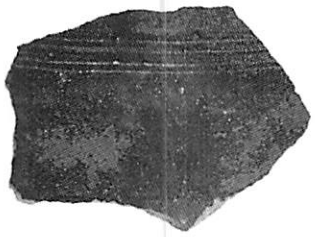


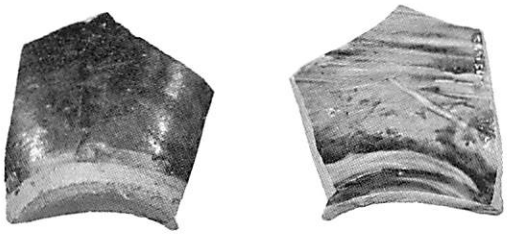
白磁（SD23）



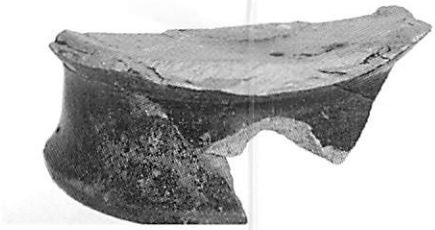


福釉陶器（SD23）

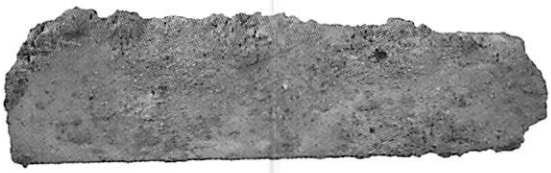




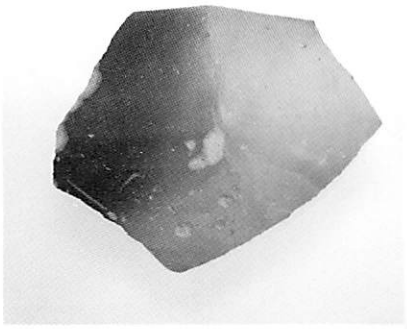
福釉陶器（SE1）



福釉陶器（上:表採　SK14）



鉄製品（SE1）

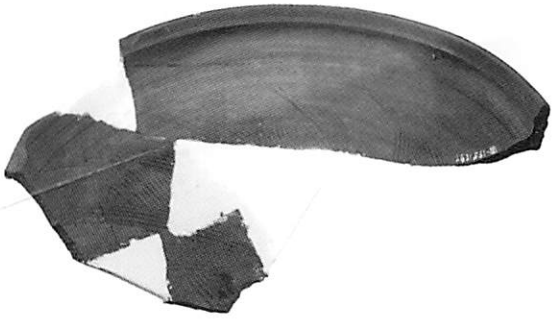


瓦質土器火鉢（SD23）

瓦質土器火鉢（SD19）

備前焼（SE1）

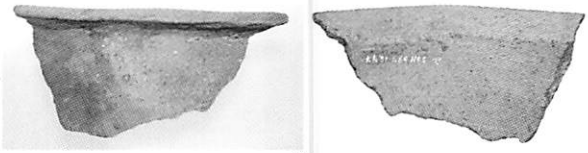
備前焼壺（3区包含層）



備前焼擂鉢（SE1）

青磁（1区包含層）

鍋

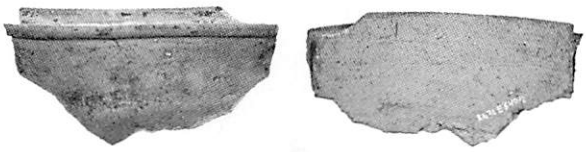


鍋

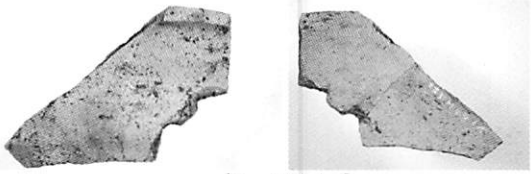
火鉢

鍋

火鉢



E8-12　鍋



鍋　M14-8

(SK16)

鍋(SD9)

瓦質土器

(S48)

(SD15)

(3区)

鬼瓦

(SK13)

(S57)

軒平瓦（SX2）

同上

報告書抄録

ふりがな	ぶんごふない５　ちゅうせいおおともふないまちあとだい31じちょうさく
書名	豊後府内５　中世大友府内町跡第31次調査区
副書名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（4）
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	高橋信武・西本豊弘
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113　大分市中判田1977
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ちゅうせいおおともふないまちあとだい31じちょうさ第31次調査	おおいたし大分市ろくぼうみなみまち六坊南町	322	051	33°13′20″	131°37′11″	2003年5月27日～2003年9月30日	500㎡	大分駅周辺連続立体交差事業

豊後府内５

中世大友府内町跡第31次調査区（瑞光寺周辺）

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第10集

平成１８年３月３１日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市中判田１９７７番地
TEL　097-597-5675

印　　刷　丸徳印刷会社
〒870-0911
大分市新貝4-50
TEL097-558-7737